

SB28 図版134

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成され、須恵器は混入であろう。土師器は杯AⅡ(1・2)、椀、皿AⅡ(3)、盤BⅠ(7)があり、黒色土器Aは椀(5・6)、小椀(4)がある。灰釉陶器椀(8~11)はいずれも漬掛けで、8・11は体部外面のヘラ削りが体部下半まで及んでいる。丸石2号窯式である。煮炊具は甕A・甕B・甕C・小型甕D(12)・羽釜Aがあるが、小型甕D・羽釜A以外は混入であろう。土師器杯AⅡの口径9.5cm前後・器高2cm前後の形態は14期の様相である。

SB29 図版135、PL49

1は土師器杯Eで体部外面下半を手持ちヘラ削りし、外面上半と内面を横方向にヘラ磨きする。2は杯Fで体部に稜をもち口縁部は内湾する。内面にはヘラ磨きは認められない。3は須恵器の短頸壺で胎土は緻密、底部を回転ヘラ削りする。4は土師器小型甕A、5は甕Aである。6は須恵器のフラスコ形瓶である。1期の土器群である。

SB30 図版135

食器は須恵器が主体である。1・2は杯Aで回転糸切り、3・4は杯蓋Bで口縁部を断面三角形に折り曲げる。4は口径20cmの大形で美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕B・小型甕C(5)・小型甕Dがある。甕Bは14個体が識別できるが、そのうち6個体は内面にもハケ調整を施している。6の小型甕Cは台付きである。4~5期の土器様相である。

SB31 第111図、第10表、図版136、PL49

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが、量的には須恵器が多い。黒色土器A杯Aは杯AⅡ(1)と杯AⅠ(2~6)の2法量があり、両者はほぼ同量である。この時期、一般には杯AⅡが多く杯AⅠは少ないことが多いので、杯AⅠの多いあり方はこの住居址の特徴である。6は底面と底部外周を回転ヘラ削りしている。黒色土器Aの椀・皿類はない。須恵器は杯A(7~18)、杯BⅥ(19)、Ⅳ(20)、Ⅱ(21)と杯蓋Bがある。杯Aは回転糸切り未調整が多いが、8は回転糸切り後底面を手持ちヘラ削りしている。煮炊具は土師器甕B(24・25)、甕C(23)、小型甕D(22)があり、甕Bでは口縁部がやや肥厚をはじめ、甕Cでは口縁の外反が「コ」字状になっている。26・27は須恵器横瓶で、須恵器の貯蔵具にはこのほかに長頸壺、甕A、甕E、瓶類の口縁(26)がある。美濃須衛窯産製品には杯蓋B・甕の破片がある。6期の土器様相である。

SB32 図版136

食器は土師器と黒色土器A、須恵器があるが、土師器杯A(1)は混入の可能性が高い。主体は黒色土器Aである。黒色土器Aには杯AⅠ(5)、Ⅱ(2~4)、皿B(6)、鉢A(7)がある。須恵器は杯A(8~11)の

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯AⅠ	5	675	11 26%	2~6
	杯AⅡ	6	340		1
須恵器	杯A	20	1,465	31 74%	7~18
	杯BⅡ	1	90		21
	杯BⅣ	4	185		20
	杯BⅥ	1	20		19
	杯蓋B	5	120		

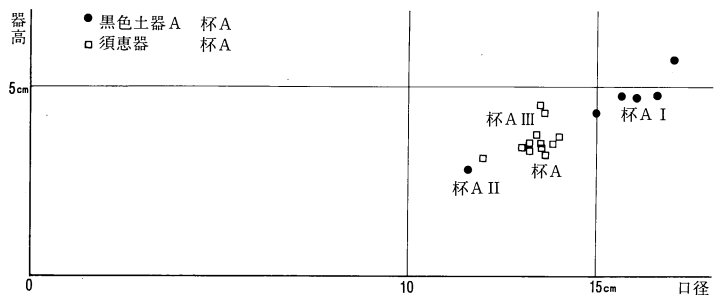
煮炊具

土師器	甕A	1	60	18 26%	
	甕B	9	3,940		24・25
	甕C	1	720		23
	小型甕C	1			
	小型甕D	6	610		22
	不明		550		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	1	160	9 13%	
	甕E	1	45		
	甕	6	225		
	横瓶	1	165		27
	不明	1	15		26

第10表 SB31 出土土器構成表



第111図 SB31出土土器法量分布図

みで杯B・杯蓋Bはない。杯Aは底径の小さな体部の外傾の強い形態である。土師器甕C(12)は口縁部が「コ」字状に開く。14は小形の須恵器平瓶の胴部天井で、竹管で刺突する文様を施している。7期の土器様相である。

### SB33 図版137

竪穴住居址の重複により遺物の混入がかなりある。SB33に付属する遺物は1・2・7・8・9で、3・4の黒色土器A、5の須恵器、6の灰釉陶器は混入と考えられる。土師器杯Aの様相より13期の土器様相である。

### SB34 図版137

食器は黒色土器A(1・2)と須恵器(3)によって構成されるが、量的には須恵器が黒色土器Aをうわまわる。須恵器杯Aは、回転糸切りで底径は小さく体部の外傾が強い形態である。土師器甕B(4～6)は薄手・硬質の焼きで、口縁部は肥厚させつつ強く「く」字に外反する。6期の土器様相である。

### SB35

遺構の重複によりSB36・SB37の土器との混在が予想される。食器は須恵器と土師器杯C、煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・甕Fがある。甕A・甕FはSB36の土器の混入と思われる。本址の土器は4～5期の土器様相か。

### SB36 図版137

竪穴住居址の重複により混入が多く、確実に本址に属すると考えられるもので、図示できたのは1～3のみである。1は土師器杯Eで外面へうろ削り内面はへら磨きを施す。2は土師器高杯で、杯部から脚部にかけてへら磨きを行ない脚部内面はへら削りする。3は須恵器の蓋と考えられるが、身の部分が杯類かあるいは壺類か判断できない。以下は混入と考えられる。4・5は須恵器杯Aで回転糸切り。6は杯BⅢ、7は土師器小型甕Aで本址に着く可能性もある。8は土師器甕Cである。SB36の土器様相は1～2期と考えられ、混入と考えられる土器は4期のものと考えられる。6は、4期のSB19のピット内遺物と接合した。

### SB37 図版137

図示できたのは土師器・須恵器の甕類であるが、遺構の重複でSB36で図示した須恵器の食器類は本址に帰属する可能性が高い。また図示していないが美濃須衛窯産の杯Bがある。煮炊具は土師器甕A、甕B、甕C(3)、小型甕A(1)、小型甕B(4)、小型甕D(2)がある。4期の土器様相である。

### SB38 図版138

羽釜A(2)と灰釉陶器段皿(1)が図示できるのみである。土師器杯Aは小型化した杯AⅡが4個体分あるが法量は計測できない。13～14期の土器様相であろう。

### SB39 図版138

須恵器杯A(1)と土師器甕B(2)が図示できる。他には土師器甕Aがあるのみで4～5期の様相と考えられる。

### SB40 図版138

食器は土師器と灰釉陶器で構成されている。1は土師器皿AⅡ、2は杯AⅢで3は盤BⅠである。14期の土器様相である。

### SB41 図版138

灰釉陶器椀(1)が図示できるのみである。他に図示できないが、土師器皿AⅡがある。14期の土器様相である。

SB42 第11表、図版138、PL49

食器は黒色土器A・Bと須恵器で構成されており、量的には須恵器を黒色土器がうわまわる。土師器と灰釉陶器は混入と考えられる。1は黒色土器A杯A I、2は皿Bである。3・4は黒色土器Bで、3は口径19.5cmを測る托と称すべきもので、口縁部を波状にし、内面に高さ1.5cmの立ち上がりをもっている。高台は欠損しているが、二重に高台貼り付けのあとが観察できる。底面は手持ちヘラ削り、その他は全面をヘラ磨きしている。4は皿Bで口径14.8cmを測る。底面を除いて内外面を丁寧に磨き上げ、底面には回転ヘラ削り後ヘラ描きによる記号がある。5は須恵器杯Aで底部回転糸切り。煮炊具は甕Bのみで、6・7のように口縁部をやや肥厚させている。7期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	2	25	} 2 11%	1
	杯A I	2	220		
黒色土器A	碗	1	50	} 4 22%	2
	皿B	1	60		
黒色土器B	皿B	1	160	} 2 11%	4
	托	1	310		
須恵器	杯A	6	85	} 9 50%	5
	杯B IV	1	10		
	杯蓋B	1	5		
	不明	1	10		
灰釉陶器	碗	1	5	} 1 6%	

煮炊具

土師器	甕B	4	1,540	} 4 15%	6・7
-----	----	---	-------	------------	-----

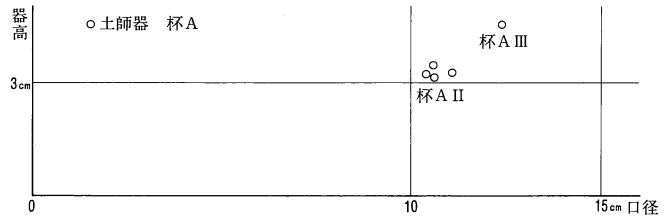
貯蔵具

須恵器	長頸壺A	1	10	} 4 15%	
	甕	3	30		

第11表 SB42 出土土器構成表

SB43 第112図、第12表、図版139、PL50

食器は土師器と黒色土器A、灰釉陶器で構成されている。土師器杯AはⅡ(1~5)とⅢ(6・7)の2法量があり、杯AⅡは口径10.4~11.1cm・器高3.1~3.4cmである。杯AⅢは6は口径12.4cm・器高4.5cmを測る。黒色土器Aは小碗(10~12)と碗(13・14)である。灰釉陶器は碗



第112図 SB43出土土器法量分布図

(16~23)、(24)、段皿(25~28)でいずれも漬掛け、24の底面に糸切り痕が観察できるほかは、底面から体部下半にかけて回転ヘラ削りを行なっている。碗には16~18のように体部が比較的浅めで、高台も三日月形に近い形態を有するものと、19~23のように体部が深く高台の高いものの2形態がある。19・20・23が丸石2号窯式、他は虎溪山1号窯式である。煮炊具としては羽釜A(32・33)、甕D(34)、小型甕D(30・31)があり、貯蔵具は黒色土器B長頸壺(35)がある。35は無台の長頸壺で内外面をロクロナデ後横ヘラ磨き、底部外周を手持ちヘラ削りする。底面の調整は不明である。須恵器の壺、甕の破片があるが5片のみで混入と考えられる。15の須恵器杯Dは1期の土器の混入である。12期の土器様相と考えられる。

SB44 図版139

黒色土器A碗(1)が図示できるのみである。1は比較的体部の浅い碗である。13~14期の土器であろうか。

SB45 図版140

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されているが、量的には須恵器が黒色土器Aをうわまわっている。黒色土器Aは杯Aと皿Bが、須恵器は杯Aと杯BⅡ(7)と杯BⅢ(6)がある。杯A(4・5)は底径の小さな外傾の強い形状である。煮炊具は土師器甕B(11~13)、甕C(9・10)、小型甕D(8)がある。貯蔵具は須恵器の甕・壺類があるが、量的には少ない。6期の土器様相である。

SB46 図版140

1・2は明褐色の緻密な胎土で土師器杯Cの胎土に共通している。1はロクロナデ、2は高台を付するもので、内面は粗い横ヘラ磨き、外面は縦ヘラ磨きを施す。3は黒色土器A杯AⅡである。須恵器杯Aは

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 C	1	5	22 42%	1~5 6・7 8・9 29
	杯 A II	8	265		
	杯 A III	6	260		
	碗	4	65		
	盤 B I	2	170		
	盤 A	1	210		
	不明		280		
黒色土器A	杯 A II	1	25	6 11%	13・14 10~12
	碗	2	215		
	小碗	3	210		
	不明		130		
黒色土器B	小碗	2	50	2 4%	
須恵器	杯 A	3	30	7 13%	15 16~23 24 25~28
	杯 B IV	2	15		
	杯蓋 B	1	5		
	杯 D	1	5		
灰釉陶器	碗	9	1,280	16 30%	16~23 24 25~28
	皿	1	135		
	段皿	6	405		
	不明		30		

煮炊具

土師器	甕 B	5	135	15 21%	30・31 32・33 34
	小型甕D	4	135		
	羽釜 A	5	2,420		
	瓶 D	1	120		

貯蔵具

黒色土器B	長頸壺	1	720	1 20%	5 7%	35
須恵器	壺	1	15			
	甕 D	1	15			
	甕	2	35			

第12表 SB43 出土土器構成表

SB49 第113図、図版142

食器は土師器(1)、黒色土器A(2~9)、軟質須恵器(10・11)、灰釉陶器(12)で構成され、主体となる器種は杯Aである。杯Aは黒色土器Aで杯A I(6)とII(2~5)の2法量がある。土師器と軟質須恵器は黒色土器Aの杯A IIにあたる口径13cm前後・器高3.5~4cmの1法量である。12の灰釉陶器碗はハケ塗りで施釉する

光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(16~20)と小型甕D(13~15)が中心で甕Cが1片あった。甕Bは口縁部が外反弱く直立気味に伸びる形態で、全体の形状の知れる20で見ると、口径22.1cm・器高30.1cmとズングリした印象の形態で、胴部上半にたてハケ後ヨコナデを施し、底部外周は手持ちヘラ削りしている。15は小型甕Dとしたが体部の開きの大きい、鉢に近い形状である。8期の土器様相である。

SB50 図版141

食器は黒色土器A主体である。黒色土器A杯AはII(1~6)のみでIはない。8の須恵器杯Aは、回転糸切り未調整で器壁は薄く、体部の開きが強い形態である。煮炊具は土師器甕B(12)、「コ」字状口縁の甕C、小型甕D(9・10)である。11は大形の須恵器長頸壺Aである。7期の土器様相である。

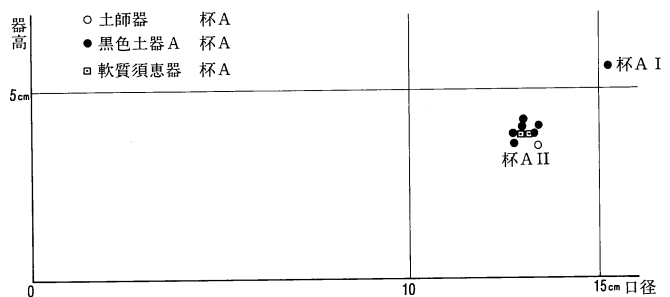
回転ヘラ切り(4)と回転糸切り(5)の両者があるが、量的には回転ヘラ切り2個体に対し回転糸切り6個体と回転糸切りのほうが多い。杯BはIV(8)、III(10)、II(9)の各法量がある。杯蓋B(7)も口縁端部が外に開きぎみに屈曲する古い形状である。6の杯蓋Aは1期の土器の混入であろう。煮炊具は土師器甕A・甕B(13~15)・甕C・小型甕Dがあるが、主体は甕Bで48個体を識別できた。このうち内面にもハケ調整を施すのが6個体あった。貯蔵具は壺(11)・甕C(16)・横瓶(12)などがあるが、11の短頸壺は美濃須衛窯産の可能性はある。このほかに美濃須衛窯産は杯B・甕など5個体分がある。4期の土器様相である。

SB47 図版141

食器は黒色土器A(2)、須恵器(1)、軟質須恵器がある。2の黒色土器A杯A Iは底部外周を手持ちヘラ削りしている。煮炊具は甕B(3~4)・小型甕Dである。7期の土器様相である。

SB48 図版141

食器は土師器、黒色土器A(1・2・6)、須恵器(3~5)、軟質須恵器があるが、主体は黒色土器Aと須恵器で、両者の量はほぼ拮抗している。煮炊具は甕B(8・9)、甕C(7)、小型甕Dで構成されている。6~7期の土器様相である。



第113図 SB49出土土器法量分布図

SB51 図版144

土器の量は少ない。食器は土師器、黒色土器A(1)、須恵器、軟質須恵器(3)、灰釉陶器(3)がある。8期の土器様相である。

SB52 図版143

食器は土師器杯A(1・2)、黒色土器A杯AⅡ(3~6)・杯AⅠ(7~11)・椀(12~14)・皿B(15・16)・鉢A(24・25)、須恵器杯A・杯BⅣ・杯蓋B、軟質須恵器(17~21)、灰釉陶器椀・皿(22・23)がある。軟質須恵器はいずれも内外面に黒斑が観察できる。灰釉陶器(22・23)は光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は土師器甕B(30~33)・小型甕D(26~29)と甕Cがある。貯蔵具は須恵器短頸壺C(34~36)・甕A・甕D、灰釉陶器小瓶・長頸壺がある。須恵器短頸壺C(35・36)は体部をタタキ調整後ロクロナデで仕上げている。37は円筒形土器である。8期の土器様相である。

SB53 図版144

遺物は少なく、土師器甕A(1)・内面にもハケ目調整する甕B・甕Cと須恵器杯Aがある。須恵器杯Aは小片で切り離し方法等は不明である。煮炊具の構成は4期を前後する段階の様相である。

SB54 図版144

食器は黒色土器A(1~3)と須恵器(4~7)が主体である。7は須恵器杯BⅢであろう。土師器甕B(11~13)は口縁部が強く「く」字に外反する形態で、体部のハケ目は底部にまで及んでいる。14の甕Cは口縁部を「コ」字に折り曲げる形態である。15は円筒形土器である。6期の土器様相である。

SB55 図版144

食器は黒色土器A(1)・須恵器・軟質須恵器(2・3)・灰釉陶器(4)で構成されている。煮炊具は土師器甕Bと小型甕D(5)である。7期の土器様相である。

SB56 図版144

土器は少ない。1は須恵器杯Aで回転糸切り、2は杯蓋Bである。食器が須恵器のみで構成される5期の土器である。

SB57 図版145

遺物は少なく、黒色土器A杯AⅡ(2)、須恵器杯A(1)、土師器甕B(4)、小型甕D(3)、須恵器甕のみの出土である。6期の土器様相である。

SB58 図版145

1は土師器杯Eで内外面を横へら磨きする。2は須恵器杯Aで底部には回転糸切り痕が残るが、底径の大きな体部の外傾の弱い形態である。回転へら切りのものはない。杯Bは杯BⅤ(3)とⅣ(4)がある。5・6は土師器甕Cの底部である。このほか土師器甕は甕Bと小型甕Dがあるが、甕Bは内面にハケを掛けるもの、体部上半を横ナデするもの等がある。4~5期の土器様相である。

SB59 図版144

遺物は少ない。食器は黒色土器Aと須恵器がある。須恵器杯A(2)は器高の低い外傾の強い形状である。6~7期の土器様相である。

SB60 図版145

食器は須恵器が主体で他に土師器杯Cが1点ある。須恵器杯A(1)は回転糸切りである。4は土師器小型甕Dで底部回転糸切り、5は土師器小型甕Bで底部周辺を手持ちへら削りしている。5期の土器様相である。

SB61 図版145・146

食器は須恵器のみで杯Aは回転へら切り(2)と回転糸切りの二者がある。それぞれの量は回転へら切

り9個体に回転糸切り2個体で回転ヘラ切りの割合が高い。杯BはIV(4・5)とⅢ(6)があり6の形態は5期以降には存在しない。杯蓋B(3)は美濃須衛窯産である。煮炊具では土師器甕Bと甕C、小型甕B(7)・小型甕D(8・9)があるが、8は底面に切り離し痕を残さない。10～12は須恵器甕Eで、10は体部タタキ調整、11と12は同一個体の可能性があり、胴部上半はロクロナデ、下半には内外両面にハケ目調整を施している。須恵器のうち美濃須衛窯産と思われるものが比較的多くあり、杯A1個体・杯蓋B2個体・鉢B1個体・壺1個体・甕2個体である。3期の土器様相である。

#### SB62 図版145

食器は須恵器が主体で黒色土器Aが2点ある。黒色土器A杯Aは1が杯AⅠ、2が杯AⅡで両者ともに、底面から底部周辺にかけて手持ちヘラ削りを施す。内面のヘラ磨きは丁寧である。須恵器杯Aは回転ヘラ切り5個体(4・5)と、回転糸切り1個体(3)の二者がある。また杯Aには美濃須衛窯産が1点含まれている。10は湾曲して立ち上がる椀Bの体部で2条の沈線が巡らされている。11は須恵器鉢Aで底面に回転糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕A・甕B(17～19)・甕C(20・21)・小型甕B(12～15)・小型甕D(16)と多様である。15の底面には木葉痕が残る。尚、1・14・17～19・20は出土状況よりSB63に帰属する可能性がある。4期の土器様相である。

#### SB63 図版146

食器は須恵器のみである。1・2が回転糸切り、3は回転ヘラ切りである。6は美濃須衛窯産の須恵器甕の口縁部と考えられる。煮炊具では、7は小型甕D、8は底部に木葉痕を残す甕A、9は小型甕B、10は胴部上半に横方向のナデを入れる甕Bである。4期の土器様相である。

#### SB64 図版146

食器は須恵器を主体に土師器杯E(1)が1点ある。須恵器杯A(2～5)はほとんどが底部回転ヘラ切り未調整であるが、杯A18個体中回転糸切りが1点含まれている。回転ヘラ切りのなかには美濃須衛窯産(6)が3個体ある。9は土師器小型甕B。10は美濃須衛窯産の可能性の高い平瓶の体部で肩に稜のある形態である。11は須恵器甕Eで体部をタタキ調整、底部周辺は手持ちヘラ削りを施す。2～3期の土器様相である。

#### SB65 図版146

食器は須恵器と非ロクロ調整の土師器杯1点がある。須恵器杯Aは回転ヘラ切り未調整(1・2)3点、切り離し不明1点である。3は美濃須衛窯産の杯蓋Bで口径21.3cmを測る。煮炊具は土師器甕A・甕B(4)・甕Cで主体は甕Bである。貯蔵具は須恵器甕Eがほとんどで壺類の体部が1点ある。2～3期の土器様相である。

#### SB66 図版146・147

食器は須恵器のみである。杯A(1・2)は回転ヘラ切りで、1は酸化焰焼成で明褐色を呈する。3は高杯で脚部に切り込み状の透かしが3方向に施される。4・5の杯蓋Bは美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A(8)・甕B(7)・甕F・甕G(9)・小型甕A(6)・小型甕Bと多様である。1はSB63と、5はSB67のカマド出土資料と接合した。2～3期の土器様相である。

#### SB67 図版147

食器は須恵器(1～4)のみ、灰釉陶器(5)は混入である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕D(6)がある。貯蔵具は須恵器で長頸壺・甕がある。5期の土器様相である。

#### SB68 図版147

食器は須恵器のみである。杯Aは7個体中回転ヘラ切りと確認できるものは1の1個体のみで、回転糸切りのほうが多い。杯Bは3が杯BⅤ、4・5が杯BⅣである。土師器甕は甕Bと小型甕D(7～10)があ

る。7・8の底部調整ははっきりしない。4期の土器様相である。

SB69

小片で図示できるものはない。食器は須恵器のみ。煮炊具は土師器甕Bで、5期の土器様相である。

SB70 図版147

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが、量的には黒色土器Aのほうが多い。須恵器杯A(1・2)は底径4.8cm・5.8cmと小さく、薄手で体部の開きが強い形状である。黒色土器A杯AはⅡ(2~6)とⅠ(7)の2法量がある。6は内面に漆が付着している。また底面には「井」字状のへら描きがある。煮炊具は土師器甕B(8)が1点のみである。7期の土器様相である。

SB71

土師器甕B1片のみである。

SB72 第13表、図版148、PL51

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成される。土師器は杯AⅡ(1~3)・杯AⅢ(4・5)・皿AⅡ(6・7)・皿AⅠ(8)・椀・小椀(9)・盤BⅡ(10)・盤BⅠ(11)・盤A(12)がある。10は灯火器として使用されており内外両面に炭化物が付着している。黒色土器Aは椀のみで椀(14)と小椀(13)である。灰釉陶器は段皿(15)と小椀(16)・椀(17~23)がある。灰釉陶器はすべて漬掛けで18・21・23は底面に糸切り痕が残る。丸石2号窯式である。土師器小型甕E(24)は指オサエによる調整で指頭圧痕が残る。25は小型甕Dでロクロ調整である。14期の土器様相である。

SB73 図版150

1・2は土師器杯AⅡで、1の法量は口径8.8cm・器高2.1cmである。3は土師器杯AⅢ。4・5は灰釉陶器。6は土師器盤Aと思われる。7は甕Dである。14期の土器様相である。

SB74 図版150

遺物は少なく、混入したと思われる遺物がほとんどである。1の土師器杯AⅡは口径10cm・器高2cm小形扁平である。2は羽釜Aで口径は16cmと小形である。14期の土器様相である。

SB75 第14表、図版148・149、PL51・52・53

食器は土師器(1・2)、黒色土器A(3~18)、須恵器(19~23)、灰釉陶器椀がある。最も量が多いのは黒色土器Aである。煮炊具は土師器甕B(26~29)・小型甕D(24・25)の構成で、甕Bは口縁が屈曲弱く直線的に伸びる形状である。貯蔵具は須恵器のみで長頸壺(30)・甕D(31)・甕A(32)がある。31は口縁を欠くが他は完形、32はほぼ完形である。31は断面三角形の凸帯がまわりますが耳は貼付されていない。体部はタキ調整を施し体部下半には回転へら削りを施している。7期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	1	5	41 61%	
	杯AⅡ	12	170		1~3
	杯AⅢ	5	240		4・5
	椀	2	25		
	小椀	2	40		9
	皿AⅠ	5	225		8
	皿AⅡ	4	120		6・7
	盤BⅠ	5	200		11
	盤BⅡ	2	10		10
	盤A	1	210		12
	鉢	1	70		
	他	1	40		
	黒色土器A	椀	4		95
小椀		5	105	13	
須恵器	杯A	2	55	3 5%	
	杯BⅣ	1	5		
灰釉陶器	不明		40	13 20%	
	椀	10	1,020		17~23
	小椀	1	25		16
	段皿	2	10		15

煮炊具

土師器	甕B	1	80	5 7%	
	小型甕	1	60		24
	小型甕D	1	150		25
	羽釜	2	355		
	不明		300		

貯蔵具

須恵器	壺	1	5	2 67%	3 4%
	甕	1	5		
灰釉陶器	広口瓶	1	40	1 33%	

第13表 SB72 出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量 g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 C	1	40	4 8%	1・2
	杯 A II	3	40		
黒色土器A	杯 A II	16	1,260	23 43%	3~12
	椀	5	970		
	皿 B	2	140		
須恵器	杯 A	14	830	24 45%	18
	杯 B IV	3	55		
	杯蓋 B	5	60		
	鉢 A	2	30		
灰釉陶器	椀	2	10	2 4%	19~23

煮炊具

土師器	甕 A	1	185	11 15%	26~29
	甕 B	6	5,960		
	小型甕D	4	605		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	790	9 12%	30
	甕	1	345		
	甕 B	1	3,000		31
	甕 A	5	8,940		

第14表 SB75 出土土器構成表

段も弱く皿に近い形態である。9は4か所を指でつまむ輪花である。底面の調整は、5・7~10に糸切り痕が観察でき、2・3・6は指ナデである。5・6が丸石2号窯式、他は大原10号窯段階にあたる。14期の土器様相である。

SB78 図版150・151

食器は黒色土器A(2~6・10・11)が最も多く、次いで須恵器(7~9)が主体で土師器(1)が若干それに加わる。9は須恵器鉢Aであろう。煮炊具は土師器甕B(13~15)と小型甕D(12)で構成されている。貯蔵具は須恵器甕類がほとんどで壺類は胴部破片が3片あるに過ぎない。7期の土器様相である。

SB79 図版151

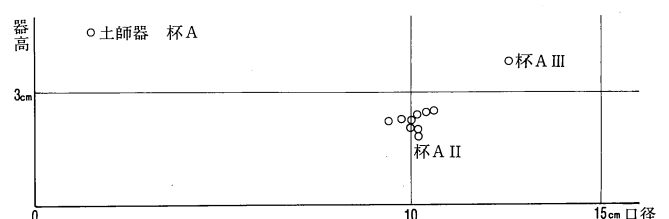
食器は須恵器が主体で黒色土器Aが1片混じるに過ぎない。須恵器杯A(1~3)は底径が大きく体部の外傾の弱い形態である。5は杯BVIである。煮炊具は土師器甕B(9)・甕C(10~12)・小型甕D(7・8)で、8には底部に糸切り痕が残る。貯蔵具は須恵器で長頸壺A・甕A・甕C(13)・甕E(14)がある。美濃須衛窯産甕も1片ある。5期の土器様相である。

SB80

土師器甕Bと須恵器甕の破片が1片ずつある。土師器甕Bは器壁が薄く、5~7期に属するものと思われる。

SB81 第114図、第15表、図版151・152、PL53

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成される。土師器杯AはII(1~9)とIII(10・11)の2法量があり、杯AIIは口径9.4~10.4cm・器高1.8~2.4cmの小形である。皿もA I(13・14)、A II(12)の2法量がある。黒色土器Aは椀(15)と小椀である。灰釉陶器は椀(16~21)



第114図 SB81出土土器法量分布図

SB76 図版150

食器は須恵器が主体で黒色土器Aと土師器杯Cがある。須恵器杯A(2・3)は体部の開きの大きな形態で、杯B(4)は4個体識別できるがいずれも杯B IIあるいはIIIの法量である。煮炊具は土師器甕B(6)・甕C(8)・小型甕B(7)・小型甕D(5)で構成されており、6は「く」字に屈曲し、8は「コ」字に折れる口縁部形態である。6期の土器様相である。

SB77 図版150

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成されているが、灰釉陶器が量的に最も多い。土師器は杯が底部破片で5個体識別できるが、法量・形態を知れるものはない。灰釉陶器は椀(2~6)・小椀(7・8)・段皿(9・10)である。釉はいずれも薄く4・6・9以外は施釉範囲もはっきりしない。椀の高台は貼り付け面が広く外に強く開く形状のものが多い。段皿は10では口径8.6cmと非常に小形であり、内面の



と段皿(22)・稜皿(23)で、いずれも施釉は漬掛け、16・17を除いて体部にヘラ削りは認められない。20は底面ヘラ削り、19・21・22は底面に糸切り痕が残る。すべて丸石2号窯式である。煮炊具は小型甕D(24)と足釜(25・26)がある。24は底部回転糸切り。25・26は脚の体部への貼り付け部で、破片の状況から体部から斜めに断面楕円形の脚が伸びる形状がわかる。27・28は灰釉陶器広口瓶である。14期の土器様相である。

SB82 図版152

食器は黒色土器A(1)と須恵器(2~4)がある。4は須恵器杯BⅢであろう。5・6は土師器小型甕Dで糸切り痕が見える。7は須恵器甕か。混入であろう。8の土師器甕Bは口縁部が短く外反する形状である。6期の土器様相である。

SB83 図版152・153

食器は土師器(1)・黒色土器A(2~4)・須恵器・軟質須恵器(6~8)・灰釉陶器(8・9)で構成されている。煮炊具は土師器甕B(10)と小型甕Dである。

10は口縁部が厚く作られ外反せずに直立気味の形態で、端部を面取りしている。須恵器甕D(11)は体部をタタキでなく縦ハケで調整しており、内面には縦方向のナデアゲ痕が残る。また、体部外面下部には手持ちヘラ削りが施されており、これらの手法は、8期の土師器甕Bに一般的に見られる技法であり、須恵器と土師器の製作技法の関連の面から注目すべき資料である。8期の土器様相である。

SB84 図版152

須恵器が食器の主体を占める。3は須恵器壺蓋Aであろう。天井部全面を回転ヘラ削りする。灰白色を呈する緻密な胎土で搬入品と考えられるが、産地は不明である。4は土師器甕C、口縁部は緩く「く」字に外反する。5は甕Bで口縁部の外反は強い。5期の土器様相である。

SB85 図版153

土師器(1・2)・黒色土器A(3)・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器(4・5)で食器が構成されている。煮炊具は図示できないが、土師器甕Bと小型甕Dがある。6は須恵器甕C、7は短頸壺Cである。8期の土器様相である。

SB86 図版153

食器は黒色土器A(1)と須恵器(2)で構成されている。須恵器杯Aは回転糸切りで底径の大きな形状である。土師器甕は甕B(3)と甕Cがある。5期の土器様相である。

SB87 図版153

食器は須恵器主体で黒色土器Aが少量ある。黒色土器Aは杯AⅡ(1)と鉢A(9)がある。須恵器杯Aは回転ヘラ削り(4)9個体、回転糸切り(2・3)9個体の割合で共伴している。杯BはⅡ・Ⅲ(8)・Ⅳ(7)の法量があり、杯蓋Bのうち6は美濃須衛窯産である。10は口縁部を屈曲させ端面を平坦に作る須恵器甕で美濃須衛窯産である。美濃須衛窯産製品は他に杯Aがある。煮炊具は甕B(14・15)・甕C・小型甕A(11)・小型甕B(12)・小型甕D(13)からなる。4期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯AⅡ	16	650	30 63%	1~9
	杯AⅢ	6	265		10・11
	碗	3	40		
	皿AⅠ	3	160		13・14
	皿AⅡ	1	5		12
	盤A	1	385		
	不明		95		
黒色土器A	碗	3	125	4 8%	15
	小碗	1	5		
須恵器	杯A	2	165	4 8%	
	杯蓋B	2	10		
灰釉陶器	碗	7	855	10 21%	16~21
	段皿	2	40		22
	稜皿	1	10		23

煮炊具

土師器	甕A	1	130	5 9%	
	甕B	1	30		
	小型甕D	1	40		24
	足釜	2	125		25・26

貯蔵具

須恵器	壺	2	30	4 80%	6 9%	
	甕	2	35			
灰釉陶器	広口瓶	2	905	2 20%		27・28

第15表 SB81 出土土器構成表

## SB88 図版154

土師器杯AはⅡ(1)とⅢ(2)に法量分化している。椀も小椀(3)と椀(4)の2法量がある。5は黒色土器A椀と思われるが体部が浅い器形となっている。6は灰釉陶器椀、7は広口瓶である。14期の土器様相である。

## SB89 図版154

須恵器・黒色土器A等に混入が見られる。1は土師器杯AⅢ、2は黒色土器B椀である。3～6は灰釉陶器で施釉は漬掛け、5・6は回転糸切り後指ナデを底面に施している。6の高台は貼り付け面の広い断面三角形で外に強く開いている。6が大原10号窯段階、他は丸石2号窯式である。7は羽釜Aである。14期の土器様相である。

## SB90 図版154

土師器と須恵器で食器が構成されているが主体は須恵器である。1は土師器杯である。須恵器杯A(2～4)は7個体識別できるが、そのうち5個体が回転ヘラ切り、2個体が回転糸切りである。杯BはⅤ(6)・Ⅳ(7)・Ⅱ(8)の各法量がある。煮炊具は土師器甕A・甕B(9)・甕C・甕Fがあるが主体は甕Bである。貯蔵具のうち壺類は少なく、須恵器甕Eが主体を占めている。3期の土器様相である。

## SB91 図版154

遺物が少なく様相の把握は難しい。食器は須恵器のみ。煮炊具は土師器甕A・甕B・小型甕A。貯蔵具は須恵器甕Eが多く、美濃須衛窯産製品もあることを考えれば、3期を前後する段階の土器様相と考えられる。

## SB92 図版154

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成され、須恵器は混入と考えられる。土師器杯AⅢは確認できないが、杯AⅡ(1～3)は口径10cm前後・器高1.8～2.5cmである。皿もAⅠ(5)とAⅡ(4)の2法量がある。6は土師器椀。7・8は黒色土器Aの小椀と椀で、体部の浅い形態である。9は灰釉陶器椀で体部下半までの長い指ナデの輪花が施されている。14期の土器様相である。

## SB93 図版154

1～3は土師器杯AⅡで、器高は2～2.5cm・口径は10cmをわずかに切る法量である。4・5は灰釉陶器椀で漬掛け、体部へのヘラ削りは行なわれず、4は底部回転糸切り後指ナデを施している14期の土器様相である。

## SB94 図版155

食器は須恵器がほとんどで、他に非ロクロ調整の土師器杯が1点あるのみである。須恵器杯Aは、回転ヘラ切り(1～3)が14個体、回転糸切り(4・5)が5個体の割合で相伴している。杯BはⅡ(15)・Ⅲ(13・14)・Ⅳ(10～12)・Ⅴ(8・9)の各法量がある。25は須恵器鉢Aである。煮炊具は土師器甕B(20～24)が主体で、識別できた甕B9個体中5個体の内面にハケ調整がなされている。また、胴部上半を横撫でするもの(21)、底部周辺を手持ちヘラ削り(23・24)するもの、底面まで横方向のハケ調整を行なうもの(22)などがある。(17～19)はロクロ調整を施す。小型甕Dであるが、18は体部にハケ調整を行なった後ロクロナデを施す19の底面には回転糸切り痕が残る。貯蔵具は須恵器で、長頸壺A(26)・短頸壺・壺蓋A・甕E(28)・甕(27)である。須恵器のうち美濃須衛窯産製品は杯A・杯B・杯蓋B・長頸壺・甕・甕Eがある。4期の土器様相である。

## SB95 図版156

食器は土師器と須恵器で構成されているが、須恵器が主体である。1・2は非ロクロ調整の土師器杯、3は高杯である。4～12は須恵器杯Aで底部の観察できるものはすべて回転ヘラ切り未調整である。杯

蓋B (13~15) は口径14.4~18.6cmの幅がある。杯Bは16が杯B V、17・18が杯B IVである。煮炊具は量的には甕A (20・21) が最も多く、次いで甕B (22)・小型甕A (19)・甕Cがある。貯蔵具では23が壺、24が甕E、25は甕Aである。須恵器のうち美濃須衛窯産は杯A (12)・杯B (16)・長頸壺B・壺 (23)・甕A (25) がある。2期の土器様相である。

SB96 図版155

食器の主体は須恵器が占め、黒色土器Aが1点ある。須恵器杯A (1・2) は底径の大きな形態で、体部の外傾は弱い。煮炊具は土師器甕B (5・6) が主体である。甕Aは小片である。3は須恵器短頸壺C、4は須恵器鉢Aである。5期の土器様相である。

SB97 図版156

食器は黒色土器Aと須恵器がある。1は黒色土器A杯A I、2は椀である。3・4は須恵器杯Aで、4は底部回転ヘラ切りでヘラ記号がある。5は須恵器盤の口縁部と思われる。煮炊具は甕B・甕C・小型甕D (6) がある。回転ヘラ切りの須恵器杯Aがある一方で、黒色土器A椀があるなど遺物の混入があり、にわかに土器様相を把握し難いが、2~3期・6~7期の土器様相が混在しているものと思われる。

SB98 図版156・157

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されるが主体は須恵器である。3~9は須恵器杯Aで器壁は薄くロクロ目も強く出るものも多い。杯BはⅢ (12)・Ⅳ・Ⅴ (13) がある。煮炊具は土師器甕B (18~20)・甕C (16・17)・小型甕D (14・15) で構成されている。5期の土器様相である。

SB99 図版157

食器は須恵器がほとんどで土師器杯Cが1点ある。須恵器杯Aは10個体が識別できるが回転ヘラ切りが2個体、回転糸切りが8個体 (1~4) がある。5は土師器甕Cで口縁部は緩く「く」字に開く形態である。4期の土器様相である。

SB100 第16表、図版157・158、PL54

食器は黒色土器Aと須恵器で構成されているが、量的には須恵器が黒色土器Aをうまわまっている。黒色土器Aは杯A II (1~4)・杯A I・椀 (5)・皿B (6)・鉢Aがある。須恵器は杯A (7~19)・杯蓋B (20・21)・杯B III (22・23)・杯B IV・鉢Aがある。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・小型甕Dがあるが、甕Aは1期あるいは2期の遺物の混入であろう。貯蔵具は須恵器のみで、24は小型壺、25は短頸壺Cで底面に糸切り痕が残る。他に、長頸壺・短頸壺・甕A・甕D・横瓶など多様な器種がある。6期の土器様相である。

SB102 図版158

食器は土師器と黒色土器A・灰粘陶器である。1は土師器杯A IIで口径8.8cm・器高2cmである。2は杯A IIIか。14期の土器様相である。

SB103 図版158

食器は須恵器主体である。須恵器杯Aは識別できた4個体すべてが回転ヘラ切りである。4は黒色土

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯A I	1	45	14 25%	1~4 5 6
	杯A II	10	660		
	椀	1	70		
	皿B	1	75		
	鉢B	1	35		
須恵器	杯A	27	1,660	43 75%	7~19 22・23 20・21
	杯B III	3	100		
	杯B IV	3	45		
	杯蓋B	7	170		
	鉢A	2	75		
	不明	1	10		

煮炊具

土師器	甕A	1	120	11 13%	11 13%
	甕B	4	1,510		
	甕C	1	145		
	小型甕D	5	470		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	165	14 17%	30 25 24・31 32 29
	短頸壺C	1	130		
	壺	4	975		
	甕A	2	1,000		
	甕D	3	1,615		
	甕	1	110		
	横瓶	1	140		

第16表 SB100 出土土器構成表

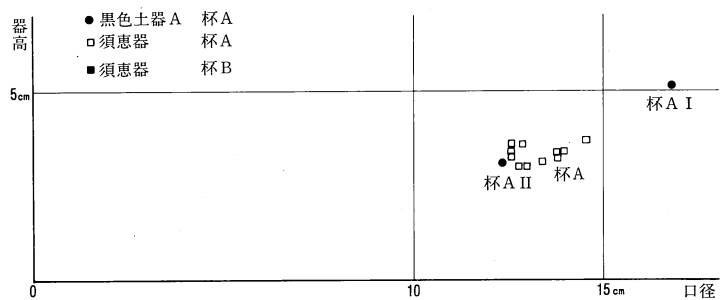
器A杯A Iで、底面は手持ちへら削り、内面は横方向のへら磨きが口縁部から中央部付近までかなり広範囲に施されている。3は須恵器の椀蓋でつまみは環状、天井部の3分の1をへら削りし途中から屈曲させ、口縁端部は「く」字に屈曲させて外反させる。いわゆる佐波理椀模倣の椀蓋である。6は口径30cmを測る土師器甕Gで内外面にハケ目調整を施している。7・8も内外両面にハケ目調整を施す甕Bである。9は須恵器短頸壺と考えられるが、胴部以下を回転へら削りするもので灰白色の胎土で搬入品である。4期の土器様相である。

SB104 図版158

食器類はない。1は体部をロクロナデする土師器小型甕Dで、底部は指ナデ調整する。2は外面を縦ハケ、内面を横ハケ調整する小型甕B、3は淡黄褐色軟質の焼成の須恵器鉢Aである。4期を前後する時期の土器様相である。

SB105 第115図、図版159

須恵器主体の食器構成である。1・2は黒色土器A杯A II・Iで底部回転糸切り。須恵器杯Aは、41個体中3個体が回転へら切りのほかはすべて回転糸切り未調整(3~14)である。いずれも器高が低く、体部の開きの大きい形態である。杯BはⅢ(19・20)、Ⅳ、Ⅴ(18)があり、17は厚手で法量不明である。煮炊具は土師器甕B(22)



第115図 SB105出土土器法量分布図

・甕C・小型甕D(21)で構成され、甕Bには、量は少ないが内面にハケ目調整を施すのものが含まれている。貯蔵具は須恵器で(25)は底部に糸切り痕が残る短頸壺Cである。5期の土器様相である。

SB106 第17表、図版159、PL54・55

食器は須恵器のみである。1は底部手持ちへら削り、2は回転へら切りの杯A。3は底部が屈曲して立ち上がる杯Cで底部を回転へら削りしている。煮炊具は土師器甕B(8・9)と小型甕B(6・7)で構成され、小型甕Dが2片ある。9は口径19.4cm・器高36cm・底径8cmを測る。貯蔵具は10の短頸壺Bと甕E(11)を図示した。11は口径35.8cm・器高22.5cm・底径18.4cmである。3期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
須恵器	杯A	3	200	} 6 30%	1・2
	杯C	1	130		3
	杯BⅡ	1	100		5
	杯蓋B	1	45		4

煮炊具

土師器	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	甕B	6	2,465	} 10 50%	8・9
	小型甕B	2	275		6・7
	小型甕D	2	50		

貯蔵具

須恵器	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
須恵器	短頸壺B	1	90	} 4 20%	10
	甕E	1	1,200		11
	甕	2	1,050		

第17表 SB106 出土土器構成表

SB107 図版160

食器は黒色土器Aと須恵器があるが、量的には黒色土器Aが多い。杯AはⅡ(1~6)とⅠ(7)があり、いずれも底部糸切り未調整である。8は黒色土器A蓋で天井部を回転へら削り、内面はへら磨きの後黒色処理する。煮炊具は土師器甕B(14)・甕C(15)・小型甕D(16)がある。6~7期の土器様相である。

SB108 図版160

食器は須恵器のみで、杯Aは回転へら切り11個体、糸切り(2)3個体が識別できる。1は美濃須衛窯産の鉢B、6は底部に回転糸切り痕を残す鉢Aである。煮炊具は土師器甕Bが最も多いが小片で図示できない。7は体部をタタキ調整の後回転へら削りする横瓶である。須恵器のなかで美濃須衛窯産が比較的多く、須恵器全個体数44のうち11個体は美濃須衛窯産である。3期の土器様相である。

SB109 巻頭図版3、図版160、PL67

食器は須恵器(3~8)が主体で、黒色土器A(1)と土師器(2)・灰釉陶器がある。2は脚台と思われるが器種は不明。須恵器杯Aは体部の開きが強い形態である。杯B(8)は体部が折れずに、高台の部分から丸く湾曲して立ち上がる形態である。煮炊具は土師器甕C(9)と小型甕D(10)を図示したが、9は口縁部が「コ」字に外反する形態で、10は底面に糸切り痕が残る。11は須恵器鉢A、12は小形の長頸壺Aである。13は白磁Ⅱ類碗で15期以降の遺物の混入であろう。6期の土器様相である。

SB110 図版160・161、PL55

土器全体のなかで土師器煮炊具の占める割合が高い遺構である。食器は(1~4)の4点が図示できたのみである。1は口縁端部外面に2条の沈線を巡らす非ロクロ調整の土師器碗で、内面はヘラ磨きの後黒色処理する。須恵器杯A(2・3)はすべて回転ヘラ切り。4は杯BⅡである。煮炊具は土師器甕A(7~9)・甕B(10・11)・甕F・小型甕A(5・6)・小型甕Bがあり、量的には甕Aと甕Bが圧倒的に多い。9は内外面を板状工具でナデ調整し、口縁は面取りしている。11は口縁部で30%・底部で75%の残存がある個体で、口径26cm・器高36.8cm・底径12.4cmを測る。外面と内面下半にはハケ目残り内面上半には指オサエ痕が残る。12は須恵器横瓶、13は体部の肩の部分が稜をなす長頸壺B、14はロクロナデ調整する鉢Aである。須恵器は全個体38中9個体が美濃須衛窯産で、内訳は杯A1、杯B1、杯蓋B2、壺3、甕2個体である。いずれも図示できない。2期の土器様相である。

SB111 第116図、第18表、

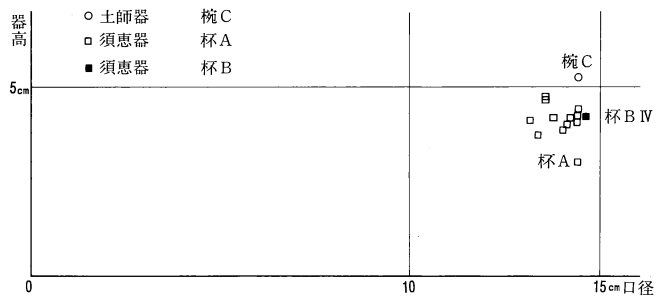
図版161・162、PL55

食器は須恵器を主体に構成されている。1は土師器碗Cで体部は内外面ともに横方向のヘラ磨き、底部は内面が放射状のヘラ磨き・外面は手持ちヘラ削りを施している。2~21は須恵器である。2・3は底径の大きな箱形の杯Aで、3は底部回転ヘラ切り未調整、2は底面を回転ヘラ削りしている。5~13は底部回転ヘラ切り未調整、14・15は糸切り未調整である。杯Aの切り離しは識別できた29個体のうち回転糸切りはこの2個体のみであった。煮炊具は土師器甕Bの量が最も多い。22~24とも口縁を短く外反させるもので、23・24は内面に斜め方向のハケを施す。25は口縁部が「く」字に開く形態の甕Cである。26の甕GはSB110のカマドの資料と接合しており、SB110の土器が混入したものと思われる。27はロクロナデ調整の須恵器鉢A、28・29は体部をタタキ調整する甕Eである。3期の土器様相である。

SB112 第117図、第19表、

図版163、PL56

食器は須恵器が主体である。杯Aは25個体中3個体が回転ヘラ切りで、残りはすべて回転糸切り未調整である。回転ヘラ切りのなかには美濃須衛窯産



第116図 SB111出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	碗C	2	80	4%	1
	杯A	29	1,780		2~15
須恵器	杯BⅡ	4	115	45% 96%	19・20
	杯BⅣ	4	100		18
	杯蓋B	6	110		16・17
	鉢A	1	215		27
	鉢B	1	55		21
	不明	1	5		

煮炊具

土師器	甕A	4	125	28% 32%	22~24
	甕B	16	6,505		
	甕C	2	335		25
	甕G	1	800		26
	小型甕B	3	80		
	小型甕D	2	90		

貯蔵具

須恵器	壺	1	40	12% 15%	28・29
	甕E	9	1,700		
	甕	1	30		
	甗	1	10		

第18表 SB111 出土土器構成表

が1点ある。7・15のように底面に段を持つものがある。24は盤の脚台と考えられる。28は鉢Cで口径17cm、器壁は厚手で口縁端部を外傾する端面に仕上げている。煮炊具は土師器甕B(27)・小型甕C(26)・小型甕D(25)で構成されている。貯蔵具は須恵器で、29は短頸壺C、30は甕Aである。4～5期の土器様相である。

SB113 図版163・164

土器のなかで、土師器煮炊具の占める割合が高い遺構である。1は非ロクロ調整で、内面には横方向のヘラ磨きが丁寧に施され、外面は底部周辺を手持ちヘラ削りしている。2は須恵器杯Aで、底部回転ヘラ切り、体部下半を手持ちヘラ削りしている。3は高杯である。煮炊具は土師器甕A・甕B(9)・甕F(10)・小型甕A(4・7・8)・小型甕B(5)と多様である。4は器表が荒れて観察しにくいがロクロ調整にも見え、小型甕Dの可能性もある。(7・8)の底面には木葉痕が観察できる。また、10は外面を横ヘラ磨き、内面を縦ヘラ磨きする。貯蔵具は須恵器壺体部片が1片、甕体部破片が7片のみで、甕の破片には美濃須衛窯産が2片ある。2期の土器様相である。

SB114 図版162

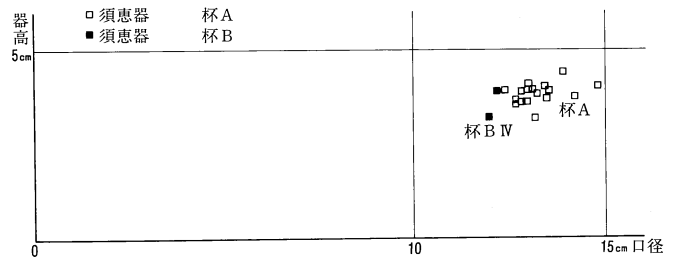
食器は須恵器のみである。杯Aは回転糸切りのみ、1は底径7cmを測る。杯BはⅢ(5)、Ⅳ(4)、Ⅴ(3)の各法量が観察できる。5期の土器様相である。

SB115 図版164

食器は須恵器主体である。1は土師器杯Cで、内面に放射状のヘラ磨きが施され、外面体部下半は手持ちヘラ削りしている。須恵器杯Aはすべて回転糸切りである。2・3ともに口径13.2cm・器高3.9cmと深めの形態である。杯BはⅣ(5～7)を図示したが、他にⅢの法量も1点ある。5～7はいずれも底面中央に糸切り痕が残る。10は須恵器甕の口頸部で、頸部をタタキ調整している。甕Dの可能性もある。5期の土器様相である。

SB117 第118図、第20表、図版164、P L 56・67

1～8は土師器杯AⅡで、小形化が著しく皿との区別が困難なものが多い。いずれもロクロ調整で底面には糸切り痕が残る。9・10は黒色土器Bの小椀。11は灰釉陶器の底部で接合部の広い三角高台が外に強く開く。12は輸入陶器の輪花椀で、口径9.4cmを計測できる。釉は青味のかかった透明釉で、細かい貫入が入る。13は土師器でロクロ調整の小型甕D。14は非ロクロ調整の小型甕Eである。15・16は羽釜Aで鏝は低い。口縁端部は15が丸く納め、16は面取りしている。15期



第117図 SB112出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯AⅡ	5	95	} 36 86% } 42 76%	1
須恵器	杯A	25	1,890		2～19
	杯BⅢ	1	50		23
	杯BⅣ	3	160		21・22
	杯BⅥ	1	5		
	杯蓋B	4	175		20
	盤	1	155		24
	鉢C	1	900		28
灰釉陶器	小椀	1	20	} 1 2%	

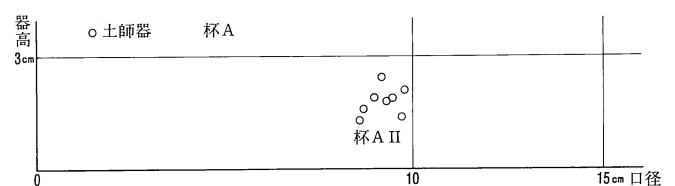
煮炊具

土師器	甕B	3	1,035	} 8 15%	27
	小型甕B	2	155		26
	小型甕C	1	190		25
	小型甕D	2	190		

貯蔵具

須恵器	短頸壺C	1	525	} 5 9%	29
	壺	2	120		
	甕A	1	1,325		30
	甕	1	20		

第19表 SB112 出土土器構成表



第118図 SB117出土土器法量分布図

の土器様相である。

SB118 図版164

食器は黒色土器Aと須恵器で構成され、個体数では須恵器が上回る。1は黒色土器A杯AⅠで底部回転糸切り、須恵器杯A(2)も回転糸切りである。4は盤であろう。煮炊具の土師器甕B(5・6)は口縁を短く外反させる形態だが、口縁はやや肥厚気味、また6では器高が30.5cmと低くなっている。5～6期の土器様相である。

SB119 図版65

土器の大部分を土師器甕A・Fが占めている。1は土師器杯Dで内面を横へら磨きする。2～4は須恵器杯Aで、4は美濃須衛窯産である。2期の土器様相である。

SB120 図版165

黒色土器Aを主体に食器は構成されているが、軟質須恵器も多い。黒色土器Aは杯AⅠ・Ⅱ(1～4)・碗(5～7)・皿B(8・9)・鉢Aと多様な器種があり、杯・碗の内面のへら磨きは丁寧に全面に及んでいる。10～16は軟質須恵器杯Aで底部回転糸切りである。灰釉陶器は17の1個体のみ、口縁端部は強く外反する形態で、釉はハケ塗りで施釉され、底部内面にもハケによる施釉がある。また、内面には重ね焼きの高台跡が残る。外面にも重ね焼きの釉着がある。釉は一部で青白色に発色している。胎土はやや黒味が強い。煮炊具は土師器甕B(19～21)・小型甕D(18)が中心で甕Cが1片ある。甕Bは口縁が直線的に立つ形態で、外面底部周辺のハケ目をナデ消している。20では口径23cm・器高30.1cm・底径10cmを測るずんぐりした器形となる。貯蔵具は須恵器のみで、22は体部をタタキ調整後ロクロナデ、底面は回転へら削りを施す短頸壺Cである。23は短頸壺Aで体部は22同様タタキ調整している。7期の土器様相である。

SB121 図版166

1は黒色土器A杯AⅡで底部回転糸切り。須恵器杯Aは2個体あるが切り離しの方法は不明である。煮炊具は3・4が土師器小型甕Bで外面ハケ目調整。底面には木葉痕が残る。5は土師器甕Aで口縁端部を面取りしている。貯蔵具では須恵器甕の破片が1片あるのみである。3～4期の土器様相である。

SB122 図版166

須恵器が食器の主体となっている。1は土師器杯Cで底部内面に放射状の暗文が見える。底面は手持ちへら削りである。2は黒色土器A杯AⅡで底部糸切り、3・4の須恵器杯Aも糸切りである。5の杯Bの底部中央にも糸切り痕が残る。6は土師器甕Cであるが口縁部での残存18%と残存が少ない。7は甕Bで口縁の返りが強い。5期の土器様相である。

SB123 図版166

食器は須恵器が主体を占めている。1・2の杯Aは底部糸切りである。土師器甕B(3)は口縁部が直線的に伸び始めている。6期の土器様相である。

SB124 図版166

須恵器主体に食器は構成されている。須恵器杯Aは9個体が識別できるが、そのうち5個体が回転へら切りである。2・3が回転糸切り、4は回転へら切りである。5は土師器小型甕Dで底部回転糸切り。6・

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯AⅡ	14	430	23 70%	1～8
	杯AⅢ	3	90		
	碗	1	5		
	皿AⅠ	5	210		
	不明		70		
黒色土器A	杯AⅡ	1	10	1 3%	33 82%
	碗	1	15		
黒色土器B	小碗	2	100	3 9%	9・10
須恵器	杯A	1	5	3 9%	
輸入陶器	碗	1	3	1 3%	12
灰釉陶器	碗	2	55	2 6%	11

煮炊具

土師器	甕B	2	15	6 15%	
	小型甕E	1	50		14
	小型甕D	1	15		13
	羽釜A	2	2,950		15・16

貯蔵具

須恵器	甕	1	20	1 3%	
-----	---	---	----	---------	--

第20表 SB117 出土土器構成表

7は甕Bで体部内面上半(6)には指オサエの指頭圧痕が、内面下半(7)には指によるナデアゲの痕跡が残る。4～5期の土器様相である。

SB125 第21表、図版167

黒色土器Aが食器の主体で、須恵器と灰釉陶器がある。軟質須恵器はない。黒色土器Aは杯AⅡ(1～7)・椀(8～10)・皿B(11)と鉢Aがある。12は須恵器杯蓋Bで、天井が高い不安定な器形である。13・14は灰釉陶器椀でともに体部内面には自然降灰が認められるが、外面は無釉、黒笹14号窯式である。煮炊具は土師器甕B(16)・甕C(17)・小型甕D(15)で構成されている。甕Bの口縁部は肥厚して直立気味、甕Cは「コ」字状を呈する口縁である。貯蔵具は須恵器で甕B(18)と甕体部の破片がある。7期の土器様相である。

SB126 図版166

食器は須恵器のみである。杯Aは回転ヘラ切り2個体・回転糸切り1個体である。煮炊具は甕B(1・2・5)と小型甕B(3・4)のみである。いずれも口縁部の外反は強く、短い。内面にもハケを施すもの(4・5)がある。4期の土器様相である。

SB127 第22表、図版167・168、PL57・58

黒色土器A(1～5・9・10)を主体とする食器構成で、須恵器(6)、灰釉陶器(7)、緑釉陶器(8)がある。8は緑釉(素地)陰刻花文椀で、内面・外面・底面も含めて全面を非常に丁寧にヘラ磨きする。陰刻花文は内面の底部と4方に毛彫状に施される。白色に近い灰白色の精良な胎土でやや軟質、釉は掛けられず、内面には重ね焼きの高台跡が観察できる。7の灰釉陶器は体部外面を中程まで回転ヘラ削り、釉はハケ塗りて内面に自然降灰の釉が掛る。煮炊具は土師器甕B(14・15)と小型甕Dの2器種のみで、甕B(14)は口径23cm・器高31.5cm・底径8.6cmを測る。口縁は直立気味で、底部周辺をヘラ削りしている。小型甕Dは11が口径10.2cm、12が13.1cm、13が15cmと法量に大小がある。貯蔵具は須恵器で、長頸壺A、壺の体部(16)、甕D(17)、甕の体部がある。甕Dは断面四角形の凸帯に小さくつまんだ耳が付く。7期の土器様相である。

SB128 図版168

食器は須恵器のみである。杯Aは回転ヘラ切り1個体・回転糸切り4個体で、図示した1・2は回転糸切りである。杯Bは3・5がⅣ、4がⅢである。3・5には底面中央に糸切り痕が残る。6は杯蓋Bで天井の削りの範囲が広い。内面にはヘラ記号がある。煮炊具には土師器甕B(7)・甕C・甕D(8)・小型甕B(9)があり、8は底面に糸切り痕が残り底部周辺は手持ちヘラ削り、内面にはハケ目が残る。20も底

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯AⅡ	12	725	21 73%	1～7
	椀	5	300		8～10
	皿B	3	185		11
	鉢A	1	30		
須恵器	不明		410	5 17%	
	杯蓋B	1	120		12
灰釉陶器	椀	3	49	3 10%	13・14

煮炊具

土師器	甕B	5	1,050	11 24%	16
	甕C	3	320		17
	小型甕D	3	260		15

貯蔵具

須恵器	短頸壺C	2	50	5 11%	18
	壺	1	70		
	甕	2	100		

第21表 SB125 出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
黒色土器A	杯AⅠ	1	140	16 70%	9
	杯AⅡ	11	690		1～4
	皿B	3	90		5
	鉢A	1	190		10
須恵器	杯A	3	160	5 22%	6
	杯蓋B	1	5		
	鉢A	1	25		10
緑釉陶器	椀	1	200	1 4%	8
灰釉陶器	椀	1	15	1 4%	7

煮炊具

土師器	甕B	8	2,340	12 29%	14・15
	小型甕D	4	880		11～13

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	10	7 17%	
	壺	1	400		16
	甕D	1	1,400		17
	甕	3	70		

第22表 SB127 出土土器構成表



部周辺を手持ちヘラ削りする。貯蔵具は須恵器体部片2片、甕体部破片5片のみである。このなかには美濃須衛窯産が2片ある。4期の土器様相である。

**SB129** 図版168・169

食器の主体は須恵器で美濃須衛窯産製品が多い。須恵器杯Aは底部の切り離しは回転ヘラ切り(1~5)が12個体、回転糸切り(6)が2個体である。回転ヘラ切りのもは比較的底部が小さく、体部の開きの強いもの(1~3・5)と、底径が大きく体部が箱形になる(4)の2種がある。6は回転糸切り後底面を手持ちヘラ削りしている。煮炊具は土師器甕B(12~16)と小型甕B(9~11)の大小の組み合わせが主体である。小型甕Bの底部調整は、底部の残る6個体中4個体に木葉痕が残り、他は指ナデ。甕Bの底部は15個体中4個体が木葉痕、1個体がハケ調整、6個体が指ナデである。15の体部外面はタタキ後縦方向のハケ目を施し、さらに横方向のハケ目、最後に体部は部分的にヘラ削り、尖り気味の底部は指ナデしている。内面は上半を横ハケ、下半は縦方向のハケを施す。16は体部上半のみと残存が少ないが、15に類似する。貯蔵具は須恵器長頸壺B(18)・短頸壺C(17)・甕E・甕(19)があり、18・19は美濃須衛窯産の搬入品である。3期の土器様相である。

**SB130** 図版169

須恵器が食器の主体となる。1は黒色土器A鉢Aで底部手持ちヘラ削りする。須恵器杯Aは底部回転ヘラ切り(2・3)7個体、回転糸切り4個体である。杯Bの4~6のうち4は美濃須衛窯産である。5の底面中央には静止糸切り痕が残る。7は須恵器盤。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・甕G(10)・小型甕B(8・9)・小型甕Dがある。11・12は須恵器で、12は底部を回転ヘラ削りする短頸壺であろう。3~4期の土器様相である。

**SB131** 図版169

須恵器主体の食器構成である。杯A(1・2)はすべて回転糸切りである。煮炊具は小片で図示できない。貯蔵具は7の須恵器甕Dを図示したが、他に長頸壺Aがある。美濃須衛窯産の甕体部片も1点ある。1期の土器様相である。

**SB132** 図版170

食器は須恵器のみで、杯Aは回転糸切り(1)4個体に回転ヘラ切りと思われるものが1個体ある。須恵器甕には美濃須衛窯産が1点ある。遺物は少ないが食器・煮炊具・貯蔵具の構成は4期を前後する段階と考えられる。

**SB133** 図版170

食器は須恵器のみである。非ロクロ調整の土師器杯・高杯があるが混入と考えられる。須恵器杯A(1・2)は回転糸切り、3は高杯と考えられるが、脚の短い盤の可能性もある。煮炊具は土師器甕B(4~6)が殆どで、他の器種は小片である。貯蔵具も小片である。美濃須衛窯産の甕体部破片がある。5期の土器様相である。

**SB134** 図版170

食器は須恵器主体(2)で、土師器杯C(1)と黒色土器A杯AⅡがある。1は底面もヘラ削りする。2は底部回転糸切り。土師器甕は図示してないが甕Bが最も量が多い。須恵器甕に1点美濃須衛窯産製品がある。5期の土器様相である。

**SB135**

須恵器杯A・土師器甕B・甕C・小型甕Dがあり、須恵器杯Aは底部回転糸切り未調整である。5期の土器様相である。

## SB136 図版170

須恵器主体の食器構成で、杯A(1・2)はすべて回転糸切りで、体部の外傾の強い形態で新しい要素である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕D(3)の組み合わせで、5期の土器様相である。

## SB137 図版170

須恵器主体の食器構成である。須恵器以外には黒色土器A杯AⅡ(1・2)と土師器盤A(10)があるが、(10)は体部をタタキ調整の後外面を回転ヘラ削りする。色調は黄橙色であるが、堅緻な須恵器質の焼き上がりである。煮炊具は甕B(11)が主体で、他に甕A・甕C・小型甕Dがある。甕Bには体部内面にハケをめぐるすもの6個体、底面に木葉痕を残すもの2個体が観察できる。12は須恵器鉢Aである。5期の土器様相である。

## SB138

土器はいずれも微細な破片である。

## SB139 図版170

遺物は少ない。食器は1の須恵器杯Aのみで、体部は厚く底部回転糸切り。2は土師器甕Bで口縁部を強く「く」字に屈曲させる形態である。4～5期の土器様相である。

## SB140 図版170

土師器甕A(1)のみが図示できた。遺物が少なく全体の様相は把握できないが、土師器煮炊具が甕Aのみであることから、1～2期を前後する段階と考えられる。

## SB141 図版171

土師器甕が2点あるのみである。1は甕Bとしたが甕Aの可能性もある。口縁がやや長めに伸びること、底部までハケ目を施す手法は4～5期の土器と思われる。

## SB142 図版171

食器は須恵器のみである。さらに食器のなかに占める美濃須衛窯産製品の割合が高く、在地産11個体に対し美濃須衛窯産10個体が数えられる。1は美濃須衛窯産製品で底面にヘラ記号がある。また杯Aの底部切り離し技法は、回転ヘラ切り6個体、回転糸切り4個体である。2の杯蓋Bはつまみが扁平で端部は断面三角形に折り曲げる。6は鉢Aで美濃須衛窯産、口縁部を屈曲させて口縁帯を作っている。煮炊具は土師器甕B(4・5)が最も多く、小型甕B(6)と大小関係を形成する。5は底面にもハケ目を施している。甕A・甕Fが残っていることなど古い要素も残っている。貯蔵具は須恵器で壺1点・甕2点の美濃須衛窯産製品を含む。7は須恵器甕Eで体部タタキ調整。3期の土器様相である。

## SB143 図版171

食器は須恵器と黒色土器Aで構成されており、量的には須恵器が多い。1は黒色土器A杯AⅠで、底面にヘラ記号がある。須恵器杯Aには回転ヘラ切りが1点ある。2は体部が強く開く形態である。杯Bには美濃須衛窯産が2点含まれる。煮炊具は土師器甕B(8・9)・甕C(7)・小型甕D(4～6)で構成され、7は口縁部が「コ」字状になる。5期の土器様相である。

## SB144 図版171・172

黒色土器Aが主体の食器構成で、須恵器は小片で図示できない。黒色土器A杯はⅠ(1～3)・Ⅱ(4・5)の2法量がある。6は碗である。2は内面の磨きが粗く、ヘラ磨きの間にロクロ目が見える。煮炊具の多い遺構で土師器甕B(11～15)、甕C(10)、小型甕D(7～9)の3種で構成されており特に甕Bが多い。甕Bは口縁が屈曲して長く伸びるもので、残存が高い14で法量を見ると口径22cm・器高31.9cm・底径9cmである。貯蔵具は須恵器であるが量は比較的少なく、頸部の太めの長頸壺A(16)が図示できた。7期の土器様相である。

SB145 図版173

土器のほとんどは煮炊具の土師器甕類である。食器は土師器杯Fが1個体と須恵器杯蓋D(1)が1個体ある、2は内外両面を横へら磨きし、内面を黒色処理するもので鉢とした。土師器甕は体部をナデ調整する甕A(3)・小型甕A、へら磨きする甕F(4)が主体で、ハケ調整の甕Bは少ない。須恵器甕は1個体あるが重複するSB144からの混入の可能性もある。須恵器の貯蔵具が少なく土師器甕Fなどが貯蔵の役割を果たしていたと考えられる。1期の土器様相である。

SB146 図版173

食器は須恵器が主体である。杯Aは回転糸切り(1)のみで、確実な回転へら切りは認められない。全須恵器17個体中5個体が美濃須衛窯産である。4~5期の土器様相である。

SB147 図版173

食器は黒色土器Aと須恵器の二者で構成されているが、量的には須恵器のほうが多い。杯Aは黒色土器A(1・2)、須恵器(4~6)ともすべて回転糸切り未調整である。貯蔵具には須恵器長頸壺A・短頸壺・甕があり、このうち2点は美濃須衛窯産である。6期の土器様相である。

SB148 図版172

食器は須恵器主体である。須恵器杯Aは回転へら切り4個体、回転糸切り14個体が数えられる。煮炊具のうち土師器甕A・甕Bには木葉痕の残るものがある。7は甕Aで小孔がうがたれる多孔式である。美濃須衛窯産の須恵器は食器に5個体・貯蔵具に8個体がある。4期の土器様相である。

SB149 図版173

食器は須恵器と黒色土器Aがあるが、口縁部破片が多く底部の切り離し技法等は知れない。煮炊具は土師器甕Bが最も多く1は口縁部が強く外反する形態である。2は須恵器短頸壺Cで、ロクロナデの後底部周辺を手持ちへら削りする。4期の土器様相である。

SB150 図版173

食器は黒色土器A(1)と灰釉陶器(2)がある。2は体部外面を中程まで回転へら削り、施釉はハケ塗りである。煮炊具は土師器甕B(4・5)と小型甕D(3)で、甕Bは口縁部は直立気味で端部を面取りし、底部周辺は指でハケをナデ消している。8期の土器様相である。

SB151 図版173

食器は回転糸切りの須恵器杯A(1)2個体のみ。煮炊具は、口縁部が短く強く外反する土師器甕B(2)と、小型甕Dの小片である。須恵器甕も小片である。5期の土器様相である。

SB152 第23表、図版174、PL58

食器は須恵器が主体で土師器・黒色土器Aは小片である。1は土師器杯Fで1期の遺物の混入であろう。2は底径6.4cmの土師器杯Cで内面見込に沈線を巡らし、体部と底部には放射状の暗文を施す。外面は底面全面に糸切り痕が残り、体部には横方向のへら磨きが観察できる。須恵器杯Aは15個体中回転へら切りが3個体、残りはすべて回転糸切りで、図示した3・4も回転糸切りである。杯BはIV(6・7)

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯F	1	50	2 6%	1
	杯C	1	35		2
黒色土器A	杯AⅡ	4	25	4 13%	
須恵器	杯A	15	590		26 81%
	杯BⅢ	2	370	8	
	杯BⅣ	2	135	6・7	
	杯蓋B	6	255	5	
	皿A	1	30	9	

煮炊具

土師器	甕A	1	25	27 38%	
	甕B	18	4,260		13
	甕C	2	455		10・11
	小型甕D	6	665		12

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	95	12 17%	
	短頸壺C	2	465		14
	壺	1	40		
	甕A	6	1,715		16
	甕E	1			15

第23表 SB152 出土土器構成表

とⅢ(8)の2法量で、6・8には底面中央に糸切り痕が見える。9は皿Aで口径28.2cm・器高2.7cmに復元できる。底面は回転ヘラ削りである。煮炊具は土師器甕A・甕B(13)・甕C(10・11)・小型甕D(12)があり、甕Cは口縁が緩く「く」字に折れる形態である。貯蔵具は須恵器長頸壺A・短頸壺C(14)・甕A(16)・甕E(15)がある14の底面には回転糸切り痕が残る。4期の土器様相である。

#### SB153 図版174

須恵器主体の食器構成で、杯Aは回転ヘラ切り(2・3)6個体に対し回転糸切り(1)は2個体である。4は杯BⅢあるいはⅡで酸化焰焼成である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dのみである。3～4期の土器様相である。

#### SB154 図版174・175

食器は土師器(1)・黒色土器A(2～7)・須恵器(8)・軟質須恵器(9)・灰釉陶器(10)で構成されている。量的には黒色土器Aが最も多い構成である。(10)の灰釉陶器皿は体部外面のヘラ削りがかなり高い位置まで及び、施釉はハケ塗りである。煮炊具は土師器甕B(13～15)と小型甕D(11・12)のみの組み合わせである。貯蔵具は須恵器のみで、長頸壺A・短頸壺C(16)・甕・甕D(17)がある。16は体部タタキ調整、底面は指オサエである。8期の土器様相である。

#### SB155 図版175、PL59

食器は須恵器(2～4)と黒色土器A(1)があり、量的には須恵器が多い。4は美濃須衛窯産である。6・7の土師器甕Bは口縁部が短く外反する形態で、5は小型甕Cである。8は搬入品の須恵器壺で頸部が短く直立し、口縁を屈曲させて口縁帯を作っている。頸部の接合部にはリング状の凸帯が巡る。5期の土器様相である。

#### SB156 図版175

須恵器杯Aは回転ヘラ切り6個体(1)、回転糸切り9個体(2・3)の構成である。煮炊具は土師器甕B(6)が最も多く、ついで甕Aが多い。須恵器には食器に3個体・貯蔵具に3個体の美濃須衛窯産が含まれている。4期の土器様相である。

#### SB157 図版176

須恵器主体の食器構成である。1は土師器杯C、2は黒色土器A杯AⅠで鉢Aとすべきかもしれない。須恵器杯Aは回転ヘラ切り4個体を含み、他は回転糸切りである。図示した3～7はすべて回転糸切りである。9・10の底面中央には糸切り痕が残る。貯蔵具はすべて須恵器で14は短頸壺C、15は長頸壺A、16は甕Dである。回転ヘラ切りの須恵器杯A、土師器甕A、美濃須衛窯産の須恵器は重複するSB156よりの混入と考えられる。5期の土器様相である。

#### SB158

遺物は細片である。須恵器杯Aは回転ヘラ切り。土師器甕は甕Aが主体で甕Bは少ない。須恵器貯蔵具のなかには横瓶がある。2期を前後する段階であろう。

#### SB159 図版176

須恵器が食器の主体を占める。1は土師器杯Cで体部外面に横方向のヘラ磨きがなされる。底面中央には糸切り痕を残し、外周を手持ちヘラ削りしている。須恵器杯Aは回転ヘラ切り12個体・回転糸切り11個体で、図示した(2・3)は回転糸切りである。杯BはⅡ・Ⅲ(11)・Ⅳ(9・10)・Ⅴ(7・8)・Ⅵ(6)の各法量がある。底面の調整は6が糸切り痕を残し、7は手持ちヘラ削りである。7は美濃須衛窯産と考えられる。煮炊具は図示できないが、土師器甕Bが多く、甕Bには底部に木葉痕を残すものがある。12の須恵器長頸壺Aは緻密な胎土で搬入品であろう。須恵器には食器に6個体・貯蔵具に3個体の美濃須衛窯産製品が含まれている。4期の土器様相である。

SB160 図版176

須恵器杯Aは回転ヘラ切り(1)と回転糸切り(2)の二種類があり、それらの個体数はほぼ同数である。3は鉢B、4は杯BⅢと考えたが、体部の立ち上がりの部分までヘラ削りがなされており、高台の付かない椀になる可能性もある。貯蔵具には須恵器長頸壺A・甕A・甕E・横瓶がある。美濃須衛窯産が4個体ある。4期の土器様相である。

SB161 図版177

須恵器が食器の主体をなし、須恵器杯Aでは回転ヘラ切りと回転糸切りの二つの技法が共存する。1は土師器杯Cで口径16.4cm・器高6.5cm・底径10cmを測る。内面は見込に沈線を施し体部は縦方向の暗文を密にひく。体部外面は横方向のヘラ磨きを行なっている。2は土師器杯Cと類似する褐色で緻密な胎土の土器で、内外両面に緻密な放射状のヘラ磨きを施す。須恵器では3は底部回転ヘラ切り、4は手持ちヘラ削り、5～9は回転糸切りである。杯BはⅢ(15・16)・Ⅳ(13・14)・Ⅵ(12)がある。10の杯蓋Aは1期の遺物の混入である。煮炊具は土師器甕Bが主体である。貯蔵具は長頸壺A・甕D・甕E(19・20)が4期の土器様相である。

SB162 図版176

遺物は小片で2点図示できたのみである。食器の構成、煮炊具の構成は5～6期の土器様相を示している。

SB163 図版177

黒色土器A(1)と軟質須恵器(2～4)で食器の主体は構成されている。3は灯火器として利用されている。煮炊具は土師器甕Bが主体で、口縁は直線的に立ち上がり(5)、底部周辺は手持ちヘラ削り(6)している。8期の土器様相である。

SB164 図版178

須恵器が主体の食器構成である。1は黒色土器A杯AⅠ・2は高台の径の大きな盤に近い形態である。須恵器杯A(3～7)は器壁が薄く体部の開きの大きい形態で、ロクロ目の目立つものが多い。10は鉢である。11は灰釉陶器椀である。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dで構成されている。土師器甕Aもあるが混入であろう。6期の土器様相である。

SB166 図版177

遺物の量は少ない。食器は黒色土器A杯A(1)と須恵器杯A(2)のみでそれぞれ2個体ずつである。煮炊具は土師器甕B(3)・甕C・小型甕Dの構成である。貯蔵具は1点もみられない。6～7期の土器様相である。

SB167 図版176

食器は非ロクロ調整で内面黒色処理の土師器杯Dと回転ヘラ切りの須恵器杯A(1)である。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F(4)・小型甕A(2・3)がある。貯蔵具は須恵器壺と甕の体部が3片のみで、そのうち2片は美濃須衛窯産である。2期の土器様相である。

SB168 図版178

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成されており、主体は土師器である。1・2は土師器杯AⅡ、3は椀、4は盤BⅡである。軟質須恵器はない。7～9は灰釉陶器皿で、7はハケ塗り、8・9は漬掛けである。10は体部をヘラ削りする小型甕Aである。2期の堅穴住居址が近接してあり、このSB168の遺物もそれらの遺物と接合することから10も2期の遺物の混入と考えられる。12は土師器甕Bで口縁部の外反は非常に弱く、端部を面取りする。8期の土器様相である。

SB169 図版178・179、PL59

食器は須恵器のみで、杯Aが主体。いずれも底部回転ヘラ切りである。2は美濃須衛窯産である。6の杯Bは底部にヘラ記号がある。7は須恵器碗Aである。8は底部に木葉痕が残る土師器甕Fである。9は口頸部を横ヘラ磨きする。10・11は体部外面を板状工具でナデ調整する甕Aで、11は内面にハケ調整を施す。12は甕Bで、体部外面に縦方向のハケ後横方向のハケ目を部分的に施している。2期の土器様相である。

SB170 図版179

食器は須恵器のみである。須恵器杯Aは回転ヘラ切りで、1は回転ヘラ切りの後底部に手持ちヘラ削りを施している。4の杯蓋Bは美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕Bと甕Aが多い。5は小型甕A、6は甕C、7は甕B、8は甕Aである。貯蔵具は少ないが9の須恵器甕Eを図示した。2期の土器様相である。

SB171 図版179

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されている。3の黒色土器A碗の内面のヘラ磨きは、内面全体に施されず8方向の放射状に施され、残りの部分はロクロ調整時のロクロ目が残っている。灰釉陶器5～8の碗は、外面の回転ヘラ削りが体部まで及び、施釉はハケ塗りである。4の耳皿は底面に糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組あわせで、甕B(9)の底部周辺は手持ちヘラ削りを施している。底径も10.8cmと大きい。8期の土器様相である。

SB172 図版180

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器の4者で構成されている。量的には小片も含めた重量では、土師器・黒色土器A・灰釉陶器がほぼ同量で軟質須恵器は少ない構成である。5・6の灰釉陶器はハケ塗り、5は灯火器に使用されている。貯蔵具は須恵器のみで少ない。8期の土器様相である。

SB173 第24表、図版180、PL59

土器の量は多く図示できるものも多いが、食器が中心で煮炊具・貯蔵具は小片のため図示できない。食器は土師器(1・12・24)が主体で、次いで灰釉陶器(16～23)・黒色土器A(13・14)・軟質須恵器(15)の順に量が多い。12の土師器杯AⅡは灯火器として利用されているが、14～15期の遺物の混入の可能性はある。灰釉陶器はすべて光ヶ丘1号窯式である。8期の土器様相である。

SB174 第25表、図版180・181、PL60

SB173同様煮炊具・貯蔵具が少なく、食器が多い。食器は土師器が主体で、次いで黒色土器A・灰釉陶器・軟質須恵器の順となる。3は土師器杯AⅡで、底部中央に焼成前に穿孔をする。15は軟質須恵器である。16・17は灰釉陶器で、17は光ヶ丘1号窯式、16は虎溪山1号窯式以降の新しい時期のもの混入であろう。8期の土器様相である。

SB175 図版181

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成され、量的には黒色土器Aが最も多い。軟質須恵器はない。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯AⅡ	35	2,720	52%	1～9・12
	碗	12	360		10
	耳皿A	1	55		11
	盤A	1	30		24
黒色土器A	杯AⅡ	13	545	26%	13
	碗	11	440		14
須恵器	杯A	1	30	3%	
	杯蓋B	1	10		
	鉢A	1	40		
軟質須恵器	杯A	4	155	4%	15
灰釉陶器	碗	7	595	14%	16～20
	皿	7	360		15%

煮炊具

甕A	1	185	12%	
甕B	7	2,060		
小型甕D	3	200		
甕B	1	60		
不明		170		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	1	45	94%	17%
	甕A	4	935		
	甕B	1	140		
	甕D	4	580		
	甕	6	1,720		
灰釉陶器	長頸壺	1	90	6%	

第24表 SB173 出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量 g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 A II	38	960	53 66%	1~8
	椀	14	285		9・10
	鉢 A	1	30		
	不明		465		
黒色土器A	杯 A II	8	385	15 18%	11・12
	椀	7	310		13・14
	不明		140		
須恵器	杯 A	1	20	2 2%	15
	杯蓋 B	1	5		
軟質須恵器	杯 A	6	100	6 7%	
灰釉陶器	椀	6	170	6 7%	16・17
	不明		5		

煮炊具

土師器	甕 B	11	1,400	16 14%	20
	小型甕D	5	210		18

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	20	15 94%	16 14%
	短頸壺C	4	170		
	甕	9	540		
灰釉陶器	長頸壺	1	15	1 6%	

第25表 SB174 出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量 g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 A II	18	615	20 55%	1~4・6
	椀	2	80		5
	不明		230		
黒色土器A	杯 A I	2	95	9 24%	7
	杯 A II	3	100		8・9
	椀	4	280		
	不明		30		
須恵器	杯 B V	1	15	3 8%	
	杯蓋 B	2	20		
軟質須恵器	杯 A	2	125	2 5%	10
灰釉陶器	椀	1	25	3 8%	11
	皿	2	130		12
	不明		10		

煮炊具

土師器	甕 B	6	1,825	10 17%	16
	小型甕D	4	585		13~15

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	3	170	11 95%	13 22%
	甕	8	1,110		
灰釉陶器	長頸壺	2	115	2 15%	

第26表 SB176 出土土器構成表

灰釉陶器(4~6)はハケ塗りで施釉する。煮炊具は少ないが、甕Bが2点(7・8)ある。8期の土器様相である。

SB176 第26表、図版181、PL60

食器が土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器の4者で構成される8期の土器様相である。量は土師器が最も多い。灰釉陶器椀はハケ塗りである。煮炊具は土師器甕B(16)と小型甕D(13~15)の組み合わせである。口縁部の形態は甕B・小型甕Dともに直線的で、外反の弱い形態である。

SB177 図版182

食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成されている。量的には土師器と黒色土器Aがほぼ同量で、軟質須恵器は小片のみである。灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式。貯蔵具は須恵器の甕A(9~12)の量が多く目立つ。他に須恵器と灰釉陶器の長頸壺がある。8期の土器様相である。

SB178 図版182・183

食器は黒色土器Aを主体に土師器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がある。4の土師器皿は14期前後の遺物の混入であろう。黒色土器Aでは椀(10・13)に見るように内面の磨きが省略されるものがあり、口縁付近の横へら磨きはなされるが、縦方向の磨きが省略されている。灰釉陶器はいわゆる三日月高台、ハケ塗りである。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせである。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、須恵器長頸壺A・甕A(27・28)・甕D(23)・平瓶(26)・横瓶(29)と灰釉陶器長頸壺(25)がある。24は平底の須恵器鉢Aか。26の平瓶は搬入品である。29は床面から出土したが、SB180(6期)・SB183(8期)・SB184(8期)・SB187(4期)の各遺構から出土した破片と接合しており、4期前後の時期に属する遺物の混入の可能性が高い。8期の土器様相である。

SB179 図版184

食器は黒色土器Aを主体に、土師器・灰釉陶器・軟質須恵器がある。灰釉陶器椀・皿類は(7~14)は黒色土器Aについて多く、高台は三日月形で、施釉はハケ塗りである。17は土師器甕Bで体部外面のハケ目は浅く、底部外周には手持ちへら削りをほどこしている。15は小型甕D、16は円筒形土器で端部は内

傾する面を作る。18は灰釉陶器長頸壺である。8期の土器様相である。

### SB180 図版181

土器は少なく図示できるものはない。食器は黒色土器Aと須恵器で構成される。煮炊具は土師器甕B、甕C、小型甕Dの組み合わせである。貯蔵具は須恵器のみである。6期の土器様相である。

### SB181 第27表、図版185、PL61

食器は須恵器のみである。杯Aはすべて回転ヘラ切りで、1が口径11.6cm・器高3.6cm、2が口径13.5cm・器高4cm、3は口径15.2cm・器高3cmと法量にばらつきがある。4の杯蓋Bと5の鉢Bは美濃須衛窯産である。6は器高が浅く体部を屈曲させる形態で、底部を回転ヘラ削りするもので、皿Aに含めた。煮炊具は、体部外面をハケ調整する土師器甕B（8～10）と小型甕B7が多く、甕A・甕C・甕Fの量は少ない。10はほぼ完形に復元でき口径22.4cm・器高36.3cm・底径8.4cmで、底面には木葉痕が残る。貯蔵具は図示できないが、甕類が多く、甕Eが特に多い。美濃須衛窯産の須恵器は食器5個体・貯蔵具4個体が数えられる。2期の土器様相である。

#### 食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
須恵器	杯A	4	515	11 24%	1～3
	杯蓋B	3	560		4
	皿A	1	110		6
	鉢B	2	135		5
	鉢	1	30		

#### 煮炊具

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	甕A	4	220	22 49%	8～10
	甕B	10	8,970		
	甕C	1	130		
	甕F	1	45		
	小型甕B	6	410		7

#### 貯蔵具

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
須恵器	壺	3	40	12 27%	
	甕E	3	590		
	甕	5	370		
	平瓶	1	80		

第27表 SB181 出土土器構成表

### SB182 図版185

食器は須恵器のみ、須恵器杯Aは回転ヘラ切りで1は底部手持ちヘラ削り、2は回転ヘラ削りを施す。2は美濃須衛窯産である。3は頸部の短い須恵器甕Cである。2期の土器様相である。

### SB183 図版184

食器は土師器（1～4）・黒色土器A（5～8）・須恵器・軟質須恵器（9・10）・灰釉陶器（11～18）があるが、量的に最も多いのは土師器で、次いで黒色土器Aが多く、さらに灰釉陶器である。須恵器は小片である。灰釉陶器はいずれもバケ塗りで光ヶ丘1号窯式にあたる。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせとなっているが小片のみである。19は灰釉陶器の手付き長頸壺である。20の須恵器甕Aは頸部をタタキ調整後ロクロナデする。8期の土器様相である。

### SB184 図版185・186

食器は黒色土器Aを主体に土師器・軟質須恵器・灰釉陶器・須恵器がある。12は軟質須恵器である。13～15の灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式。煮炊具は土師器甕B（16・17）と小型甕Dで構成されており、甕Bは16で口径23cm・器高30.5cm・底径9cmと、器高の低いずんぐりした形態となる。17では縦ハケ調整の後横方向のナデがハケ目を消すように施されている。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があるが、須恵器のなかに胎土の緻密な搬入品と思われる横瓶と平瓶がある。18は体部内面に同心円の当て具痕が残るが、在地窯産と思われる。SB175の覆土出土土器と接合した。8期の土器様相である。

### SB185 図版186

食器は黒色土器Aと須恵器がある。5は須恵器杯蓋Bで天井の削りの範囲は狭く、つまみも宝珠形にくびれず、また口縁端部も単に丸く納めるのみでくずれた印象の作りである。6は軟質須恵器でSB186からの混入遺物と考えられる。煮炊具は土師器甕B（9・10）・甕C（8）・小型甕D（7）の組み合わせで、甕Bの口縁の外反は強く、甕Cは「コ」字状の口縁である。6期の土器様相である。



SB186 図版186・187

食器は黒色土器Aを主体に土師器・軟質須恵器・灰釉陶器・須恵器がある。14～16は軟質須恵器で内外面に黒斑がある。灰釉陶器は18を除いてハケ塗り、18は口縁を小さくつまむ輪花椀で漬掛けである。13は須恵器高杯の脚部で、台形の透かしが付く。22～24の土師器甕Bは口縁が直線的に立つ形態で、ハケ調整のあとヨコナデが施され、部分的にハケ目が残る程度である。8期の土器様相である。

SB187 図版187

須恵器主体の食器構成である。1は土師器杯Cで底部を欠くが、体部内面はロクロナデ、外面上半に横へら磨きを3条施し、下半は手持ちへら削りする。須恵器杯Aは回転へら切り4個体・回転糸切り16個体を数える。図示したものでは、2・4は回転糸切り、3は底面を手持ちへら削りする。杯Bでは7が美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕Bが主体で、口縁部を強く屈曲させる形態である。11の須恵器甕は美濃須衛窯産である。美濃須衛窯産の須恵器は食器で4個体・貯蔵具で2個体がある。4期の土器様相である。

SB188 図版187

食器は黒色土器Aを主体に土師器・軟質須恵器・灰釉陶器で構成される。8期の土器様相である。

SB189 図版187

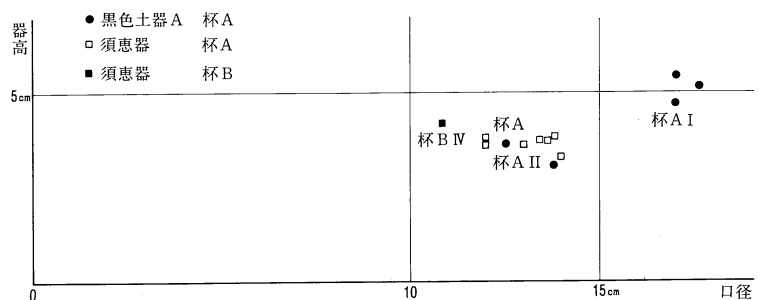
1は口縁部の破片でロクロ調整かどうか判断し難い。体部の傾きなどの形状は黒色土器A杯Aに類似するが、内面のへら磨きは横方向を基本としており、非ロクロ調整の杯D・Eの手法に共通する。須恵器杯A(2・3)は底径の大きな体部の開きの弱い形態で、底部回転糸切りである。回転へら切りが3個体識別できた。煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Bの構成である。須恵器貯蔵具には4個体の美濃須衛窯産製品が含まれている。4期の土器様相である。

SB190 図版187

遺物は少なく小片である。食器も土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器等複数の時期の遺物が混在している状況であるが、出土位置等から、土師器杯AⅡ・Ⅲ、灰釉陶器椀が本遺構につくものと判断した。図示した灰釉陶器椀は外に強く開く断面三角形の高台で、釉は内面深くまで漬掛けされている。土師器杯A・灰釉陶器椀の形態より、14期を前後する段階の土器と思われる。

SB191 第119図、図版188

食器は黒色土器A・須恵器でのみで、量的にも両者がほぼ同量の構成である。黒色土器A杯AはⅠ(1～5)とⅢ(7～9)の2法量があり、他には6のⅢBが1点あるのみで、椀などはない。須恵器も杯Aが主体である。10～17はすべて回転糸切り未調整で、体部の開きの強い形態である。18は杯BⅤで



第119図 SB191出土土器法量分布図

体部の立ち上がりが椀状に丸味をもつ形態である。煮炊具は土師器甕B(21～23)・甕C(19・20)・小型甕C(24～27)・小型甕D(28～31)があるが、体部を薄くへら削りする甕C・小型甕Cの量が多いのが目立つ。甕Bの口縁は「く」字に外反するが、口縁をやや肥厚させはじめており、甕Cは「コ」字になる口縁である。小型甕Cは4個体が数えられるが、2個体は台付きである。貯蔵具は須恵器のみ、33は甕Dで、四耳には棒状の器具の刺突による孔が開けられるが、貫通はしていない。7期の土器様相である。

SB192 図版189

食器は須恵器が主体で、黒色土器Aは1片のみである。須恵器杯Aは回転ヘラ切り(2)で、回転糸切りは認められない。須恵器貯蔵具には横瓶が2点ある。また須恵器甕には美濃須衛窯産製品がある。4期の土器様相である。

SB193

遺物は須恵器杯A・土師器甕B・須恵器甕があるが、小片で図示できない。須恵器杯Aは回転糸切り未調整である。5期を前後する段階か。

SB194 図版189

土器のなかでは煮炊具が多く食器・貯蔵具は小片である。1・2は須恵器杯Aで、1は体部外面を手持ちヘラ削りする。5は体部をタタキ調整する土師器甕で、器形は甕Bに類似するが、体部外面にタタキ目を残し、内面は当て具痕を横ハケでナデ消している。甕B(6・7)は口縁の外反は短い。5期の土器様相である。

SB195 図版189

煮炊具が多い。食器は須恵器のみ。1は底部回転ヘラ切り、2は底面が高台より下がる形態である。煮炊具は土師器甕B(4・5)が多く、3は小型甕Aである。2期の土器様相である。

SB196 巻頭図版3、第28表、図版189、PL61・62

食器は土師器(1~4)が主体で、黒色土器A碗、軟質須恵器・灰釉陶器(5)、緑釉陶器(6)がある。5は体部が直線的に伸びる形態で、施釉はハケ塗り。6は高台の高い緑釉陶器段皿で、内面は丁寧な横ヘラ磨き、外面は下半を回転ヘラ削り、上半はロクロ目が残りヘラ磨きはなされない。釉は暗緑灰色で胎土は須恵器質の堅い焼きである。尾北産と思われる。9期の土器様相である。

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯A	12	910	18 59%	1~3
	碗	6	320		
黒色土器A	碗	5	185	5 16%	
須恵器	杯A	1	10	1 3%	31 76%
軟質須恵器	杯A	2	10		
緑釉陶器	段皿	1	40	1 3%	6
灰釉陶器	碗	3	190	4 13%	5
	皿	1	15		

煮炊具

土師器	小型甕D	7	655	7 17%	7
-----	------	---	-----	----------	---

貯蔵具

須恵器	長頸壺D	1	380	2 67%	3 7%
	甕	1	170		
灰釉陶器	長頸壺	1	5	1 33%	

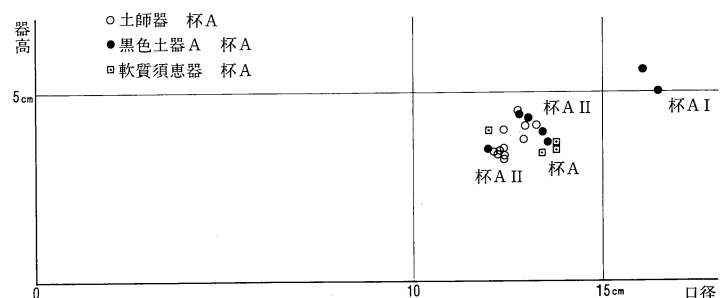
第28表 SB196 出土土器構成表

SB197 図版189

食器は非ロクロの土師器杯D(1)と須恵器杯A(2・3)がある。1は内外面をヘラ磨きする。2は底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り、3は回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。煮炊具は土師器甕B(4・5)が多いが、体部をロクロ調整する甕Dも1個体ある。6は須恵器短頸壺Dである。2期の土器様相である。

SB198 巻頭図版3、第120図、第29表、図版190、PL62・63

食器は土師器・黒色土器Aが主体で、他に須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。土師器杯Aは66個体が識別できるがすべて杯AⅡで、口径12.2~14.2cmの幅のなかにおさまる法量のもののみで、口径15cmを越える杯AⅠにあたる法量のものはない。黒色土器A杯AはⅡ(12~17)とⅠ(18・19)の2法量がある。黒色土器A碗(21~26)は体部が直線的に開く形態である。(27~30)は軟質須恵器で内外面に黒斑がある。灰釉



第120図 SB198出土土器法量分布図

陶器 (31~35) は三日月高台・ハケ塗りで光ヶ丘1号窯式である。36は緑釉陶器耳皿で、体部内面の縦方向のヘラ磨きを行なう。体部は内外面ともにロクロナデが観察できる。底部と体部下半にはヘラ削りを施している。煮炊具は土師器甕B (37) と小型甕D (38) の組み合わせ。貯蔵具は須恵器と灰釉陶器があり、39は須恵器長頸壺A、40・41は灰釉陶器長頸壺で、胎土・釉調から41は東濃産、40は三河産の可能性があり。41はSB183の覆土出土遺物と接合した。8期の土器様相である。

SB199 図版191

食器は黒色土器A (2~5) が主体で、ほかに土師器 (1)・須恵器 (6)・軟質須恵器・灰釉陶器 (7・8) がある。5の黒色土器A鉢Aは、内面の縦方向のヘラ磨きが粗い。灰釉陶器はハケ塗りである。8期の土器様相である。

SB200 図版191

須恵器主体の食器構成で黒色土器Aは少ない。1の黒色土器A杯A IIは底径7cmを測り、底径の大きな体部の深い形態である。4は須恵器杯B IIIである。土師器甕B (5~7) は口縁部を短く強く外反させる形態で、5の体部内面には横ハケが施される。5期の土器様相である。

SB201

遺物は少ない。須恵器杯B IV、土師器甕B・小型甕Bがある。土師器甕Bは内面にもハケ目調整を施している。4~5期の土器様相である。

SB202 第121図、第30表、図版191・192、PL63・64

須恵器主体に食器が構成されている。黒色土器A杯AはI (5・6) とII (1~4) の2法量がある。須恵器杯A (7~18) は回転糸切りで、体部の開きの強い形態である。21は杯B Vで、体部の開きは強い。煮炊具は土師器甕B (30・31)・甕C (24・25)・小型甕C (23)・小型甕D (26~29) がある。貯蔵具は須恵器のみで、32は短頸壺C、33・34の鉢Aのうち34は底部を回転糸切りしている。6期の土器様相である。

SB203 図版192、PL64

遺物数は限られている。1は底部回転糸切りの須恵器杯Aで、3は土師器小型甕Bである。5期の土器様相である。

SB204 図版192

土師器甕Aと甕F (1) があるのみである。1は底部から体部が大きく開くもので、底面には木葉痕が

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯A II	66	2,325	70 33%	1~11
	椀	3	55		
	盤	1	40		
	不明		510		
黒色土器A	杯A I	2		91 43%	18・19 12~17 21~26
	杯A II	62	1,535		
	椀	22	965		
	耳皿	1	5		
	鉢A	4	435		
	不明		1,570		
黒色土器B	耳皿	1	15	1%	
須恵器	杯A	3	50	5 2%	
	杯B IV	1	5		
	鉢A	1	435		
軟質須恵器	杯A	28	885	28 13%	27~30
緑釉陶器	耳皿	1	120	1%	36
灰釉陶器	椀	9	290	14 7%	31~33 34・35
	皿	5	290		
	不明		170		

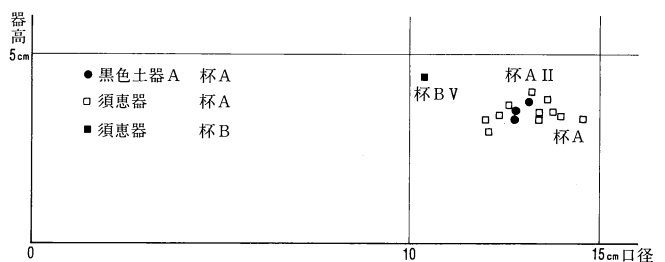
煮炊具

土師器	甕B	4	570	9 4%	37
	小型甕D	5	335		38
	不明		110		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	4	340	17 81%	21 9%	39
	短頸壺C	1	5			
	蓋	1	5			
	甕	11	7,440			
灰釉陶器	長頸壺	4	1,370	4 19%		40・41

第29表 SB198 出土土器構成表



第121図 SB202出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	盤 A	1	55	} 12%	5・6
黒色土器A	杯 A I	3	120		
	杯 A II	10	440	} 23%	1~4
須恵器	杯 A	33	1,550	} 56% } 60%	7~18
	杯 B III	1	15		22
	杯 B IV	1	65		21
	杯蓋 B	5	145		19・20
	鉢 A	2	350		33・34

煮炊具

土師器	甕 B	13	3,255	} 28% } 30%	30・31
	甕 C	6	860		24・25
	小型甕C	1	80		23
	小型甕D	8	585		26~29

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	2	55	} 9% } 10%	32	
	短頸壺C	1	80			
	甕 D	3	390			36
	甕	3	580			35

第30表 SB202 出土土器構成表

黒色土器Aと須恵器で食器は構成され、須恵器が主体となっている。1・2の黒色土器A杯Aは底部を欠くが、体部は内湾気味である。須恵器杯Aは回転糸切りで、底径がすべて6cmを越える底径の大きなものである。杯Bはすべて身の深い杯B III(9~11)である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕B(12)、甕C(13)で小型甕Dはない。5期の土器様相である。

SB208 図版193

遺物のほとんどは煮炊具の土師器甕類である。中でもほとんどは甕B(4~8)である。甕Bは口縁部の外反が長いもの(4~7)と短いもの(8)、面取りするもの(4・6)、体部外面に縦ハケの後横方向のハケ目あるいはナデを施すもの(4・5)、内面に横ハケを施すもの(5~7)など多様な形態と調整がなされ、5~7期の甕Bのような画一性は弱い。2・3の底面には木葉痕が残る。須恵器杯Aは底部回転糸切りで混入の可能性が強い。2~3期の土器様相である。

SB209 第31表、図版193

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器があり、須恵器・軟質須恵器はない。量的には黒色土器Aが圧倒的に多い。5は体部下半から底部を回転ヘラ削りしている。煮炊具は土師器甕Bのみで、直線的に伸びる口縁は端面を面取りしている。貯蔵具も12の1点のみ、体部タタキ調整後ロクロナデを施す須恵器短頸壺Cである。8期の土器様相である。

SB210 図版194

食器は土師器が主体である。土師器杯A IIは口径11.6~12.7cm・器高3~3.5cmで8期の杯A IIの法量に比べやや小振りである。7は灰釉陶器碗。8の土師器甕は、体部下半の調整は不明、上半はヨコナデするが回転を利用しているようにも見える。法量や口縁部の形態は甕Bに類似しており、ここでは甕Bとして扱っている。9期の土器様相である。

残る。1期の土器様相である。

SB205 図版192

食器は杯Dが1点と底部回転ヘラ切りの須恵器杯A(1)がある。煮炊具は体部をハケ調整する甕B(4・5)と小型甕B(2・3)で、甕Aは小片である。須恵器貯蔵具は少なく美濃須衛窯産の甕が1点あるのみである。2期の土器様相である。

SB206 図版192

食器では須恵器が主体で黒色土器Aは(2)の杯A Iの底部である。底面と体部下半を手持ちヘラ削りし、内面には漆が付着している。3の杯B IVの底面中央には糸切り痕が残る。4の土師器小型甕Dも底部回転糸切り、外周を手持ちヘラ削りしている。5期の土器様相である。

SB207 図版192・193

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 A II	6	130	} 6% } 35%	1・2
	杯 A I	1	75		7
黒色土器A	杯 A II	7	435	} 10% } 59%	3~6
	碗	1	140		8
	皿 B	1	115		9
	不明		80		
灰釉陶器	皿	1	105	} 1% } 77%	10

煮炊具

土師器	甕 B	4	900	} 4% } 18%	11
-----	-----	---	-----	---------------	----

貯蔵具

須恵器	短頸壺C	1	115	} 1% } 5%	12
-----	------	---	-----	--------------	----

第31表 SB209 出土土器構成表

SB 2 1 1 図版194

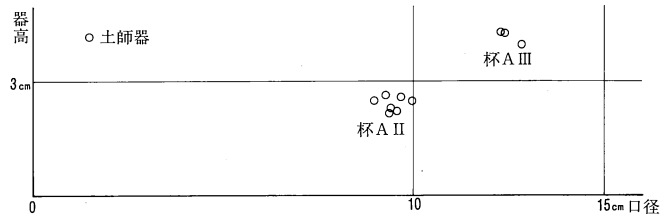
遺物数は少ない。食器に須恵器・軟質須恵器はなく、灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式である。8期の土器様相である。

SB 2 1 2 図版194

食器は黒色土器A・須恵器で構成されており、土師器杯AⅡ(1)は混入である。須恵器杯Aのうち、10は回転糸切り後底部周辺を手持ちヘラ削りする。12は黒色土器A鉢A。土師器甕B(15)はハケ目が体部最下端にまで及んでいる。7期の土器様相である。

SB 2 1 3 第122図、図版194

食器は土師器が主体で黒色土器A・Bは碗(11~13)のみである。土師器杯AはⅡとⅢの2法量があり、Ⅱは口径9~10cm・器高2.2~2.6cm、Ⅲは口径12.3~12.9cm・器高4~4.3cmを測る。14期の土器様相である。



第122図 SB 213出土土器法量分布図

SB 2 1 4 図版194

食器・貯蔵具の量は少なく煮炊具が多い。須恵器杯Aは回転ヘラ切りで、1は口径12cm、2は口径16cmと法量に開きがある。3の杯BⅣは美濃須衛窯産で底部にヘラ記号がある。煮炊具にロクロ調整の小型甕Dはなく、甕A・甕Bの底面には木葉痕が残ることがある。4の甕Cは口縁部が屈曲して「く」字に折れる形態である。3期の土器様相である。

SB 2 1 5 図版195

食器は須恵器と黒色土器Aのみである。須恵器杯A(3)は底径が5cmと小さく、器壁も薄い。体部の開きの強い形態である。4・5・6は体部をヘラ削りする甕で、4は小型甕C、6は甕Cで5には脚台が付く。7は須恵器短頸壺Aで体部外面はカキ目、内面は回転を利用しない横ハケを施している。8は肩に凸帯を貼付する甕Dで、凸帯は断面三角形で小さく低い。7期の土器様相である。

SB 2 1 6 図版195

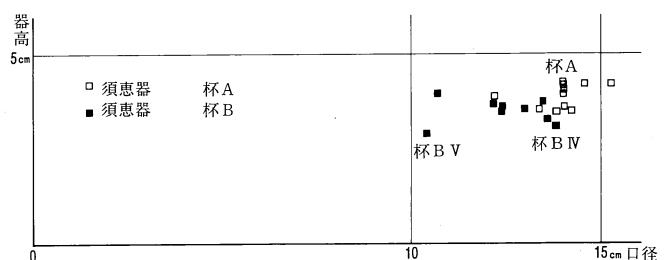
遺物は小片が多い。須恵器杯Aは回転ヘラ切り1個体・回転糸切り3個体である。須恵器には杯Bと甕に美濃須衛窯産製品がある。4期の土器様相である。

SB 2 1 7 図版195

遺物は少なく小片が多い。須恵器杯Aは7個体識別できるが、このうち2個体はSB216からの混入と考えられる回転ヘラ切りのもので、混入を除けば、黒色土器Aのほうが多い構成である。7期の土器様相である。

SB 2 1 8 第123図、第32表、図版196、P L 64・65

食器の主体は須恵器である。須恵器は杯A・杯B・杯蓋Bがあるが、杯Bは法量分化している。2の黒色土器A碗は混入であろう。黒色土器A杯Aは6個体が識別できるが、いずれも小片である。須恵器杯Aの底部切り離し技法は、回転ヘラ切り(3~5)と静止回転糸切り(7)、回転糸切り(9~20)があり回転糸切りが多い構成となる。また、8では回転糸切り後手持ちヘラ削りが、10では回転糸切り後回転ヘラ削りが底部に施される。19・20はロクロの回転方向が左回転で他が右回転であるのと異なる。杯蓋Bは口径に大小が見ら



第123図 SB 218出土土器法量分布図

れ、最も小さい21の13.8cmから31の17cmまでである。26と31は美濃須衛窯産である。杯Bも杯BⅡからVまで4つの法量がある。41～43は杯BⅢの可能性が有る。煮炊具のうち土師器甕B(46)は口縁外端面を外向きに面取りしている。4期の土器様相である。

SB219 図版195

遺物は少なく、特に土師器甕は2片、須恵器貯蔵具も2片のみである。須恵器の食器類が主体で、5期の土器様相である。

SB220 第124図、第33表、  
図版195、PL65

須恵器が主体の食器構成である。1は土師器杯Cで底部内面に放射状の暗文が施され、体部下半は手持ちへら削りで底面外周にまで及んでいる。体部内面はロクロ調整でへら磨きは見えない。2・3は黒色土器A杯Aで、3は底部回転糸切り。4～10の須恵器杯Aは回転糸切りが主体であるが、回転へら切りも3個体(4)ある。須恵器杯BはⅣ(13～15)とⅢ(16・17)の2法量が確認でき、13と17の底部中央には糸切り痕が残る。杯Bと杯蓋B合せて3個体の美濃須衛窯産製品がある。18は土師器小型甕Bで体部外面には薄くハケが掛る。底部外周は手持ちへら削りを施している。5期の土器様相である。

SB221 図版197

食器は須恵器が主体である。1・2は非ロクロ調整で、緻密な明褐色の胎土の杯である。1の口縁部は外反し、端部を内側に肥厚させる形態で、外面は横へら磨き・内面には斜め方向の暗文が観察できる。2は口縁部で内湾する形態で、外面は口縁部のヨコナデの部分を除いてへら削りを施している。内面にはナデの痕跡が見えるのみである。このほかに、図示してないが土師器で内面をへら磨きする高台の付く杯の小片がある。須恵器杯Aは回転へら切りのもの(3・4)と回転糸切りのもの(5)の両者がある。3は淡黄灰色で軟質の焼き上りである。6の杯BⅣの底面中央には糸切り痕が観察できる。煮炊具は土師器甕A・甕B(10)・甕D(9)・小型甕A・小型甕Bがある。貯蔵具は須恵器の小片があるのみであるが、いずれも軟質の焼き上りで、赤色を呈するものもある。3期の土器様相である。

SB222 図版197

食器は須恵器のみである。杯Aは回転へら切り1点、回転糸切り1点がある。5の杯蓋Bは美濃須衛窯産である。6は杯BⅢ。煮炊具は土師器甕Bが主体で7は小型甕Bである。4期の土器様相である。

SB223 図版197

須恵器主体の食器構成である。杯Aはすべて回転糸切りで、杯BはⅡ(4・5)・Ⅲ(3)・Ⅳ・Ⅵ(2)の各

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯C	2	8	2 1%	1
	杯AⅡ	6	80		
黒色土器A	碗	1	15	7 4%	2
	杯A	77	2,255		
須恵器	杯BⅡ	11	335	173 95%	3～20
	杯BⅢ	1	10		41～44
	杯BⅣ	27	900		34～40
	杯BⅤ	6	120		32・33
	杯蓋B	51	1,760		21～31
	不明		340		

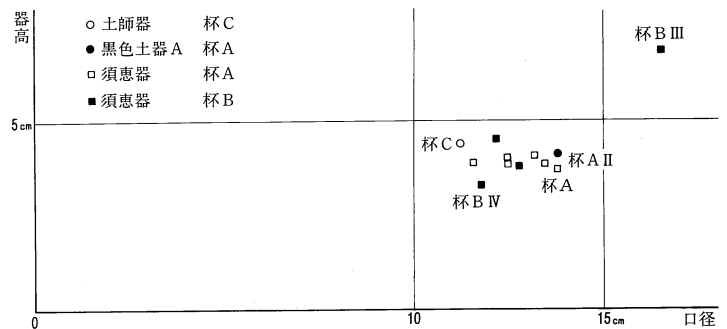
煮炊具

土師器	甕A	3	155	71 24%	
	甕B	48	1,3430		46
	甕C	4	65		
	小型甕B	4	225		
	小型甕D	12	515		45
	不明		1,220		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	7	275	46 15%	47～49
	壺	9	450		
	甕A	26	6,115		50
	甗	2	15		
	平瓶	2	65		

第32表 SB218 出土土器構成表



第124図 SB220出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比	実測図No.
土師器	杯 C	1	80	2 3%	1
	盤 A	1	10		
黒色土器A	杯 A II	4	100	4 6%	2・3
須恵器	杯 A	35	1,750		
	杯 B II	2	40		
	杯 B III	7	390		
	杯 B IV	9	320		
	杯蓋 B	11	480		
	盤	1	15		
	不明			240	65 91%

煮炊具

土師器	甕 A	1	40	28 23%	18
	甕 B	16	4,130		
	甕 C	3	250		
	小型甕B	1	305		
	小型甕D	7	425		

貯蔵具

須恵器	長頸壺A	4	140	22 18%	
	壺	3	50		
	甕	15	1,010		

第33表 SB220 出土土器構成表

法量がみられる。杯蓋B(6)は美濃須衛窯産である。煮炊具は甕B(7・8)が主体で、8は内面にも縦方向のハケ目を施している。美濃須衛窯産の須恵器は食器・貯蔵具合せて7個体が識別できる。5期の土器様相である。

SB224 図版197・198

食器は須恵器のみである。杯Aの底部切り離しは回転糸切り(3・4)4個体で残りは回転ヘラ切りと回転ヘラ切りのほうが多い。3の底部内面には漆が付着している。杯BII(7)は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A・甕B(9・10)・甕C(11)・甕F・小型甕D(12)がある。12は体部ナデの状況からロクロ調整と判断したが、底面にロクロ切り離しの痕跡は観察できない。須恵器は食器・貯蔵具合せて8個体の美濃須衛窯産製品がある。3期の土器様相である。

SB225 図版198

食器は須恵器が主体である。黒色土器A杯Aは5個体あるが、図示した1は杯A Iである。須恵器杯A(2~13)はすべて回転糸切りである。18は須恵器鉢Bである。土師器甕20は体部上位にロクロ調整を施している。5期の土器様相である。

SB226 図版199

須恵器主体の食器構成である。須恵器杯Aは回転糸切り未調整。4の杯BIVは底面中央に糸切り痕が残る。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dで構成されているが、甕Bのなかには体部をタタキ調整するものがある。6の須恵器甕Aの肩部には杯蓋Bや甕の体部が粘着しており、器体自身のゆがみも激しい。5期の土器様相である。

SB227 図版199

食器は須恵器のみである。杯Aは回転糸切り7個体・回転ヘラ切り2個体が数えられる。煮炊具のうち小型甕Dは、底部に切り離し痕跡は確認できていない。7は土師器小型甕B、8・9は甕Bである。10は須恵器短頸壺D、11は長頸壺Aで底部に糸切り痕が残る。4期の土器様相である。

SB228 図版198

須恵器が主体の食器構成である。1は黒色土器A杯A Iで、底部回転糸切り未調整。須恵器杯A(2~9)も回転糸切りである。杯BはIII(12)・IV(11)・V(10)の法量がある。煮炊具のうち14・15の土師器甕Bは口径が20cm未満と小さく、口縁部が強く屈曲する形態である。5期の土器様相である。

SB229 図版200

図示できる遺物は少ない。須恵器杯Aは回転糸切り未調整のみである。1の杯BIVの底面中央には糸切り痕が残る。3の土師器甕Bは口縁部が「く」字に折れ直線的に伸びるものであるが、体部内面にもハケ目を施し、体部外面には「キ」字状のヘラ描きがある。5期の土器様相である。

SB230 図版200

食器は須恵器のみである。須恵器杯Aには回転糸切り3個体・回転ヘラ切り1個体がある。杯蓋B(1・2)のつまみは扁平で、口縁端部の屈曲も極端ではない。3は杯BIIIであるが口径19cmと大きく底面にも

糸切り痕を残さない。4は須恵器短頸壺Aである。4期の土器様相である。

#### SB232 図版200

遺物は小片で少ない。食器は須恵器が主体。須恵器杯A(1・2)は、底部が観察できるものは回転糸切りのみである。煮炊具は土師器甕B(6)と小型甕D(5)の2種で構成される。貯蔵具は4の須恵器短頸壺Cのみである。5期の土器様相である。

#### SB233 図版201

食器は黒色土器Aと須恵器があり、黒色土器Aが多い構成である。黒色土器Aは杯AⅡ(1~4)と杯AⅠ(5~7)で椀・皿Bはない。須恵器杯Aは体部が直線的に開く形態で、底径も6cm未満がほとんどで小さい。14は器種不明。煮炊具は土師器甕B(16・17)・甕C(15)・小型甕Dの3種があり、甕Bは体部薄手で口縁は肥厚気味でやや長く伸びている。15は口縁部が「コ」字になる。7期の土器様相である。

#### SB234 図版200

食器は黒色土器Aと須恵器があり、量はほぼ同量である。黒色土器Aは杯AⅡ(1~4)と杯AⅠ(5~7)、椀(8)が1点ある。須恵器は回転糸切り未調整の杯A(9~18)が多く、杯B(20)、杯蓋B(19)は少ない。21・22の土師器甕Cは口縁部が「コ」字状である。貯蔵具は壺・甕の体部小片が5片あるのみである。6~7期の土器様相である。

#### SB235 図版201

遺物は少ない。食器は黒色土器A(1~3)が主体で、須恵器杯A(4・5)は器壁が薄くロクロ目が目立つ。煮炊具は土師器甕B(7)と甕C(6)と須恵器甌(9)がある。(6)は口縁部が「コ」字状になる。9は口径24.4cm・底径18.2cmで、厚さ1.7cmのドーナツ状のたがを底部外側に貼り付けている。口縁端部は内傾する端面を作る。7期の土器様相である。

#### SB236 図版202

食器は黒色土器A(1~7)・黒色土器B・須恵器(8~11)・灰釉陶器(12)があるが、主体となるのは黒色土器Aである。黒色土器Bは椀の破片である。煮炊具は土師器甕B(15~19)が主体で、甕C(14)と小型甕D(23)がある。7期の土器様相である。

#### イ 掘立柱建物址出土土器 図版202・203

掘立柱建物址出土の土器は、ST3の2の灰釉陶器椀が柱痕跡からの出土であるほかは、柱痕跡・抜き取り痕が確認できたものがないため、柱穴一括で取り上げられたものが多い。ここでは図示できた土器について記述する。ST3の1は土師器杯AⅡで口径9.8cm・器高2.4cm底部回転糸切りである。柱痕跡から出土した2は体部外面下半をヘラ削りし、ハケ塗りによる施釉を施すのものである。1は13~14期・2は8期を前後する時期に伴う遺物である。ST13の1は底径17.5cmを測る須恵器杯BⅡで、高台の端面にくぼみを入れている。ST18の1は底面中央に回転ヘラ切り痕が残る須恵器杯Bである。ST25の1の須恵器杯Aは底部回転ヘラ切り未調整である。ST41の1は底部回転ヘラ切りの須恵器杯A、2は体部をナデ調整する土師器甕Aである。ST42の1は明褐色の緻密な胎土で、内面に放射状の暗文を施し、外面上半は横ヘラ磨き、下半から底面にかけては手持ちヘラ削りを行なっている。他地域より搬入された土器であろう。2は底部外面を指オサエ後ヘラ削り、内面はヘラ磨き後黒色処理する。ST54の1は底部回転糸切りの須恵器杯A、2は体部を薄く削り調整する土師器甕Cである。ST57の1は杯BⅤであろう。ST63の1は軟質須恵器、ST67の1は須恵器の杯Aでいずれも回転糸切りである。

#### ウ 溝址出土土器

#### SD16 図版203

土師器杯AⅡ・黒色土器A杯AⅡ・須恵器杯A・須恵器鉢A・須恵器甕があり、須恵器杯A(1)を図示



した。底部回転糸切りで、口径14.6cm・器高4.9cmと大形である。須恵器杯Aには他に回転ヘラ切りのものがある。

SD71 図版203、PL67

SD71は近世の溝址であるが、1はこれに混入した緑釉陶器碗である。底面に糸切り痕を残し、高台にはわずかに段状のくぼみがある。内面底部には圏線が回りトチンの目跡が残る。釉は濃緑色で底面も含め全面に施される。胎土は黒みの強い灰色で堅緻な焼き上りである。

エ 墓址出土土器

SK42 図版203

破損した遺物が多く完形の遺物はない。1は土師器杯AⅡで小型である。2は盤BⅡ、3・4は黒色土器Aで、小碗と思われる。3は底面外周に高台の接合痕が残る。5は盤Aの体部、6～8は盤BⅠの脚台である。9は灰釉陶器広口瓶、10は短頸壺である。13期を前後する段階であろう。

SK43 図版203

図示した遺物のほかに、土師器盤Aの破片が1点ある。黒色土器Aの杯AⅡ3点と碗2点でいずれもほぼ完形。杯Aは底部回転糸切り未調整。3～6では、内面のヘラ磨きの省略と暗文化が著しく、口縁部周辺は横ヘラ磨き、縦ヘラ磨きは「十」字状に施され、他の部分はヘラ磨きされていない。8期の土器である。

SK50 図版203

土器は図示した4点のみである。3は盤BⅡが脚台を欠くほかはほぼ完形である。1は土師器杯AⅡで口径9.6cm・器高2.4cm、2は杯AⅢで口径14.6cm・器高4.6cm、いずれも回転糸切りである。4は灰釉陶器の体部の深い碗で、口縁は直立気味である。14期の土器様相である。

SK98 図版203

土師器杯Aの破片と、図示した黒色土器A碗がある。1は体部が直線的に開く碗で、高台は小さい。内面のヘラ磨きは粗く、底面には糸切り痕が残る。8期前後の土器であろう。

SK333 図版204

須恵器杯蓋B(1)と長頸壺(2)を図示した。1は口径19.4cmを測る大形で、口縁端部は屈曲せず断面三角形に下がる形態である。2は頸部を欠くが体部以下は完形である。灰白色の胎土で搬入品、美濃須衛窯産か。3～4期に属する土器であろう。

SK343 図版203

須恵器短頸壺Cが1点あるのみである。口径5.8cm・器高9.4cmと小形で体部下半を手持ちヘラ削りしている。焼成は軟質である。

オ 土坑出土土器

本遺跡では多くの土坑から土器の出土を見ているが、細片が混じり込む程度の出土の状況が多い。ここでは比較的土器の出土の状態が安定しているものについて述べる。

SK35 図版204

1は口径13.2cmの須恵器杯Aである。底部を欠くが回転糸切りであろう。他に土師器甕B・甕C・須恵器甕の破片がある。5期前後の土器であろう。

SK38 図版204

灰釉陶器広口瓶の口縁部で、口縁部での残存12%と残存が少ない。他に土器はない。

SK51 図版204

1の土師器杯AⅡが1点のみある。口径10.2cm・器高3.2cmで、底部内面に平坦面を持たず、底部中央

から一気に口縁まで挽きあげている。灯火器として使用されている。14～15期の遺物か。

**SK 5 5** 図版204

図示した黒色土器A杯AⅡ(1・2)、体部外面にカキ目を施す土師器小型甕D(3・4)のほかに土師器甕Bと須恵器甕がある。7期を前後する段階の土器であろう。

**SK 9 7** 図版204

1～3は小形で扁平な、皿に近い土師器杯AⅡである。口径10cm・器高1.8cmの法量で、1は底部からやや丸味をもって、2・3は底部から直線的に立ち上がる。他に土器はない。14期の土器様相である。

**SK 1 0 6** 図版204

黒色土器A皿B(1)が1点ある。口縁が外反する形態で、底面に糸切り痕が残る。7期を前後する段階の土器であろう。

**SK 1 6 2** 図版204

美濃須衛窯産の甕口縁部である。

**SK 1 8 0** 図版204

須恵器杯A(1)・杯蓋B・土師器甕Bがある。

**SK 2 7 6** 図版204

須恵器杯A(1)が1点のみ出土した。底部回転糸切りで、底径7.2cmを測り体部の開きの弱い、深めの体部である。5期の土器である。

**SK 3 3 8** 図版204

土師器杯AⅡ、黒色土器A杯AⅡ(1)・杯AⅠ(2)、灰釉陶器皿(3)の食器のみである。灰釉陶器皿は体部に稜をもつもので、ハケ塗りである。8期の土器か。

**SK 3 4 7** 図版204

ハケ塗りで施釉する灰釉陶器皿(1)を図示した。他に土師器杯AⅡ・黒色土器A杯AⅡ・土師器羽釜A・須恵器甕がある。

**SK 3 7 9** 図版204

食器は土師器杯AⅡ・黒色土器A杯AⅡ・須恵器杯BⅤ・軟質須恵器杯A、他に土師器甕B・須恵器甕があり、8期の竪穴住居址の土器のあり方に類似している。

**SK 3 8 7** 図版204

食器のみの出土である。図示したのは黒色土器A杯Aで、2は体部内面の縦へら磨きが「十」字に省略されている。食器の構成は8期の状況である。

**SK 3 9 2** 図版204

食器では、土師器(1)・黒色土器A(2)・須恵器・軟質須恵器(3)があり、8期の土器構成を示している。

**SK 4 0 2** 図版204

黒色土器A杯AⅡ・須恵器杯A・軟質須恵器杯A(1)と土師器甕Bがある。1は底部回転糸切りで、体部内外面に黒斑がある。7～8期の土器様相である。

**SK 4 1 8** 図版204、PL67

緑釉陶器碗の口縁部破片が1片ある。内外面ともにへら磨きを施し、淡緑灰色の光沢のある釉が施釉されている。胎土は明褐色の軟質である。

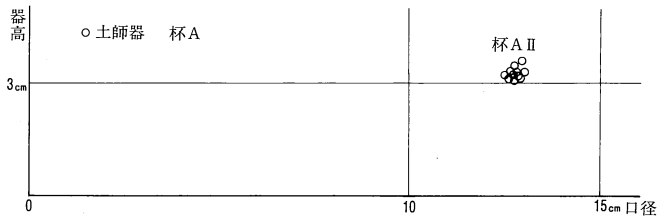
**SK 4 3 3** 図版204

図示したのは土師器碗(1)と灰釉陶器碗(2)である。1は体部が直線的に開くもので底部には回転糸

切り痕が残る。その他の出土遺物の状況を考えあわせれば8期前後と考えられる。

**SK 4 3 5** 第125図、図版205、PL66

土坑の坑底から土師器杯A II 15個体が完形でかたまって出土した。図示していない他の黒色土器A杯A II・土師器甕B・小型甕Dは小片である。1～15は法量もほぼ同一で、口径12.5～13cm・器高3.1cm～3.6cmの範囲のなかに入る。



第125図 SK 435出土土器法量分布図

13～15は灯火器として使用されており、口縁部に煤が付着している。8～9期の土器である。

**SK 4 4 3** 図版205

須恵器杯A (1)と土師器甕C (2)を図示した。1は体部の開きが強く、器壁が薄くロクロ目の目立つものである。2は口縁部が「コ」字の形態となる。7期前後の土器である。

**SK 4 5 0** 図版205、PL66

土師器杯A IIのみが10個体出土した。うち9個体を図示したが、いずれも口径12～12.8cm・器高3.2～3.9cmの範囲で、口径はSK435の土師器杯A IIよりやや小さい。9期の土器様相である。

**SK 4 5 6** 図版205

黒色土器A杯A II (1～3)・須恵器杯A (4)・灰釉陶器椀(5)・土師器甕B (6)・甕Cがある。4は体部の開きが強い。(6)は口縁部が直線的にやや伸び始めている。7期の土器様相である。

**SK 5 1 1** 図版205

図示したのは須恵器鉢Cの底部である。底面と底部端面は手持ちヘラ削りで仕上げる。酸化焰による赤色の焼成である。

**SK 5 6 8** 図版205

黒色土器A杯A II (1)・土師器甕B・小型甕Dがある。7～8期の様相である。

**SK 5 7 5** 図版205

須恵器杯A (1・2)が出土した。1は口縁部での残存40%、2はほぼ完形である。底径の大きな体部の開きの比較的弱い形態である。6期の土器である。

**SK 6 0 2** 図版206

他の土坑にくらべて煮炊具・貯蔵具が多い。食器は須恵器杯A・杯Bがあり、杯Aは回転糸切りである。土師器甕C (1)と須恵器甕C (2)を図示した。1は口縁部が緩く外反する形態で、2は完形に近く復元できた。4～5期と考えられる。

**SK 6 1 4** 図版206

土師器甕のみである。図示した1は土師器甕Gで、器壁は厚く、体部で大きく開く器形で、底径も大きい。2～3期の土器か。

カ 自然流路出土土器

**NR 4** 図版206

灰釉陶器椀(1)のみの出土である。高台は接合部の広い断面三角形で、外反が強い。14期に伴う型式である。

**NR 5** 図版206

ハケ調整を施す土師器甕が7個体ある。1は器壁が厚手で、体部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケを施している。

遺構名	遺構の時期	器種と数量(実測図番号)	遺構名	遺構の時期	器種と数量(実測図番号)
SB 109	古6期	碗Ⅱ類 1個体(図版160-13)	SD 59	中1期	碗Ⅱ類(図版206-2)・ Ⅳ類(図版206-7)・ Ⅴ類(図版206-12・18・21)
SB 112	古5期	皿 1個体			
SB 117	古15期	輪花碗 1個体(図版164-12)	SD 60	中1期	碗Ⅳ類 2個体(図版206-5)・ Ⅴ類(図版206-19)・ Ⅳ or Ⅴ類 3個体
SB 252	中1期	碗Ⅳ類 1個体			
SB 260	中2期	碗Ⅱ類 1個体 皿 1個体(PL 67-26)	SD 64	中1期	碗Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類
SB 264	中1期	碗Ⅳ or Ⅴ類	SK 249	古代?	碗Ⅳ or Ⅴ類 2個体
SB 265	中1期	碗Ⅴ類 2個体(図版206-11)	SK 888	中1期	碗Ⅳ or Ⅴ類
SB 266	中1期	壺型合子(図版206-28) 碗Ⅸ類(PL 80-172)	SK 905	中1期	皿Ⅸ類
			SK1069	中2期	碗Ⅳ or Ⅴ類
SB 270	中1期	碗Ⅳ or Ⅴ類	SK1079	中世	碗Ⅱ類
ST 45	古2~3	碗Ⅱ類(図版206-1)	SK1081	中1期	碗Ⅴ類(図版206-17)
ST 88	中1期	碗Ⅳ類(図版206-6)	SK1093	中世	碗Ⅳ or Ⅴ類
SD 2	古~8期	碗Ⅳ類(図版206-3)	SK1279	中1期	碗Ⅴ類
SD 52	中1期	碗Ⅱ類	SK1483	中2期	碗Ⅷ類・Ⅳ or Ⅴ類
SD 54	中世	碗Ⅴ類・Ⅳ or Ⅴ類	SK1505	中2期	碗Ⅳ or Ⅴ類
I 区 検出		碗Ⅳ類(図版206-4)			
II H 区 検出		碗Ⅴ類(図版206-10・13)・皿(図版206-27)			
II K 区 検出		碗Ⅱ類・Ⅷ類(図版206-24)			
II K-O区 検出		碗Ⅴ類・Ⅷ類 2個体(図版206-23)			
II N 区		碗Ⅱ類・Ⅴ類 6個体(図版206-9・14・15・16・20・22)・Ⅷ類 2個体(図版206-25)・ Ⅳ or Ⅴ類 5個体・皿 2個体(図版206-26)・小壺(PL 80-171)			
II Q 区 検出		碗Ⅴ類 2個体(図版206-8)			
II 区 検出		碗Ⅳ or Ⅴ類			

第34表 白磁一覧表

## (3) その他の土器 卷頭図版3、第34表、図版206、PL67

以上記述してきた古代の遺構のほかに、包含層、中・近世の遺構からも古代の土器が出土しているが、ここでは下の輸入陶磁器についてのみ記述する。

1~28は白磁を中心とする輸入陶磁器である。出土遺構等については一覧表(第34表)で示した。1・2は白磁碗Ⅱ類で、1の口縁部は小玉縁で、貫入の入った黄味の強い釉が薄く掛る。2は底部破片で、内面底部に段をもち釉は厚い。外面は体部下半まで回転ヘラ削りを施す。3~7はⅣ類碗。3~5は大玉縁の口縁で、5は白みの強い透明感のない釉調である。6・7は低く削り出された高台で、外面は露胎。7は胎土が特に粗い。8~22はⅤ類碗である。8~15は端反の口縁部で、いずれも青味のかかった透明釉を施す。12には櫛目による文様がある。19~21は底部破片で、19・20は外面露胎、21は内面に櫛目による文様を施し、外面も高台の部分まで釉が掛る。23~25はⅧ類で、23は内面底部周辺は無釉、外面も体部下半の釉をノミで削りとった跡が残る。24・25は底部破片で、高台はやや低く、内面底部の見込の部分の釉を掻きとっている。26・27は白磁皿で、26は器肉が厚く体部で折れて立ち上がる形態で、内面見込に段をもつ。27は内面にヘラと櫛をもちいた花草文を施すもので、底面を除いて青味を帯びた透明釉を掛ける。28は壺形合子の底部破片で、黒味の強い胎土で、内面に透明釉を掛ける。

## 2 文字関係資料

本遺跡出土の文字関係資料には墨書土器、刻書土器、転用硯がある。

## (1) 墨書土器 第126図、第35表、図版207～212、付表7、PL68・69

		体部正位	体部逆位	体部右	体部左	体部不明	底部	小計	合計
土師器	杯		2	1	2	4	5	14	14
黒色土器A	杯	9	1	2	1	7	6	26	49
〃	椀	2			1	3	1	7	
〃	皿		1					1	
〃	?		2	2		10	1	15	
須恵器	杯	5	16	1	2	1	4	29	29
軟質須恵器	杯			1		1		2	2
灰釉陶器	椀						11	11	12
〃	皿						1	1	
合計		16	22	7	6	26	29	106	106

第35表 墨書土器一覧表

総数106点を数える。各個体については付表7に掲げたので、ここでは総括的記述に留める。まず、第35表を参考に墨書される器の種類、器種などについて概観する。

本遺跡の墨書土器の初現は4期のSB227から出土した89で、墨書土器を出土する遺構は概ね7・8期に集中する傾向がみられる。

種類別内訳は、黒色土器Aが49点を数え、総点数の46%を占める。次いで須恵器29点、土師器14点、灰釉陶器12点と続く。黒色土器Aが多いのは、墨書土器が7・8期に盛行するためであろう。しかし、当該期の食器の構成で比較的多い軟質須恵器の墨書する例が少ないのは注目できる。軟質須恵器の色調は墨との区別が難しい場合があり、墨書の効果が上がらないため意図的に選択しなかった可能性が高い。須恵器は5～7期にかけての遺構から出土しているように、器の種類が多寡は墨書土器の盛行段階、並びにその段階に使用された食器の構成をそのまま反映するものである。

器種についてみる。食器の種類を除外すると、杯71点、椀18点、皿2点、不明15点で、杯に墨書される例が圧倒的に多い。これは土師器、黒色土器A、須恵器などのすべての種類に認められる特徴で、総個体数の多い黒色土器Aは杯26点、椀7点でやはり杯の占める割合が高い。おそらく、杯を意図的に選択した結果と考えられよう。

墨書の部位は体部と底部に大別され、体部は字句の書き方によってさらに区分される。前者の内訳は体部77点、底部29点である。灰釉陶器12点の場合、体部の灰釉に墨がのらないため底部に墨書せざるを得ないものと思われる。これを除いて考慮すると、墨書の大半が体部に書かれたと判断できる。おそらく墨書された字句が誰の目にも止まるような効果を狙ったためだろう。体部に記された字句で、書き方の不明な26点を除くと、正位あるいは逆位に書かれる例がそれぞれ16、21点と多く、土器を正位に置いた際、文字が横になる右・左横位に記されるものは少ない。

続いて字句についてみる。読み取り可能な字句で最も多いのが『嬰』である。SB183から46～49の4点が出土し、ほかにSB177の42、SK392の98がある。これ以外にも断片的で確定はできないが、52・56・99などもこれに加えてよいかもしれない。『嬰』は灰釉陶器と黒色土器Aの二種類の食器に記されるが、黒色土器Aに墨書するものは体部に右・左横位で、灰釉陶器は底部にそれぞれ墨書しているが、黒色土器Aはあえて正位や逆位に書かなかったことも考えられる。98は文字の形状が崩れ、模写したような字句であり、また、『嬰』の「貝」の書き方で42・48のような「𠄎」と46のような「日」があることから複数



第126図 古代墨書・刻書文字集成図

の書き手が存在したと思われる。なお、46の字句の周囲にはほかの墨書土器と区別するためか、朱を「○」状に塗彩している。

『真』は5点がある。SB198出土の62・66は土師器、黒色土器Aの体部に正位で記され、SB183の45、SB198の76・77は底部に墨書される。『真』も62のように最終画が長く伸びるものと、伸びないものがあり、複数以上の書き手が予想される。SB186の57は体部2面に書かれ、『真』の可能性もある。

2は須恵器杯底部に墨書され、『蘭』と読める。4は「仕」を意図して書かれたものだろう。SB67出土の12は『乙』と解釈できるが、SB174出土の37も『乙』と読み取れる。但し、12は灰釉陶器に書かれ、37は土師器杯に墨書されており、いずれも8期ながら12が若干後出的な遺物であることから、別々に記された字句の可能性もある。なお、34は37と同様に『乙』と書かれている可能性が高い13は『𠂔』であろうか。類例が35にあるが、確定的でない。15は『○』と太く墨書される。26・27も須恵器杯底部に『◎』と記し、文字と言うよりは記号を書いた例として興味深い資料である。SB174から出土した38は黒色土器A杯体部に『勢福』と大きな文字を配する。第一字は「勢」の異体字であり、おそらく吉祥句か人名であると思われる。40は灰釉陶器の底部中央内・外面に『田』を一字ずつ墨書する。同一人物による墨書と推定され、外面の字句の周囲には薄く朱が塗彩される。SB141の60・61は『龍』であろう。両者とも須恵器杯体部に逆位で記されるが、かなり薄い墨書である。SB198からは16点の多量な墨書土器が出土した。このうち、65は習書とも考えられ、太い筆跡である。おそらく文字を意図して書かれたものではないだろう。67は『方』と読み取れる。69は『人』または『尺』などが考えられる。SB202の80は『𠂔』で、「𠂔」を意図して墨書したと推定されるもので、呪的な文字の選択は墨書土器の機能を推測する上で注目できる。82は『倉』で、隣接する三の宮遺跡に類例がある。SB209の83は土師器杯体部に左横位で『仁□(里カ)』と墨書された、細い筆跡である。86は『𠂔』と読めるが、「寅」を墨書しようとしたとも考えられる。87・93は『太』で、SB21・234の別々な住居址からの出土である。89・92はそれぞれ2文字を配する。89はSB227からの出土で文字は薄い、『得成』と判読される。92は『□足』で上の字句は『以』などが考えられる。SK43出土の97は黒色土器A杯体部に正位で墨書し、重ね書きがなされる。下には薄い墨で『旭』に近い字句が書かれ、その上にはそれより濃い墨で習書とも受け取れる細い筆跡が観察される。遺構外から出土した104は土師器杯Cの底部に小さな文字で『小田』と縦書きする。土師器の杯Cに墨書される例は少なく、遺構に伴わない資料ではあるが、SB227の89に先行する遺物になりうる可能性は高い。

## (2) 刻書土器 第126図、図版212、付表7、PL69

ここで言う刻書土器とは土器焼成後に先端の尖った工具を使用して文字などを線刻したものを指し、土器焼成前に篋書きされた、いわゆる「ヘラ記号」とは区別する。

本遺跡出土の刻書土器はSB52出土107・108、SB120出土109の3点がある。107は黒色土器Aの杯または碗の体部に、2mm程の幅で直線状に刻む。残存部位がわずかなため文字を意図して刻書したのかは明確でない。108は黒色土器Aの碗内面に刻書するもので『九日』と縦書きしているかのように読み取れ、幅2mm程の線刻を数度繰り返す。109は黒色土器A碗底部に刻書する。先端の鋭い工具で幅広く刻むが、文字を意図したものとは思われない。

## (3) 転用硯 図版212・213、付表7

ここで言う転用硯とは土器や陶器が本来持つ属性を失い、硯として転用されたものを指す。分類や定義については「総論」で述べるが、筆揃えや墨溜めとして使用したものは厳密に硯と区別できないため広義の転用硯として扱うこととした。また、朱を付着するものについては朱墨硯との区別が困難であるためこれに加えた(図版212・213のうち、網部は墨や朱の付着を、一点鎖線は磨滅範囲を示す)。

本遺跡の転用硯は総数18点を数える。

器の種類は須恵器3点がある以外はいずれも灰釉陶器である。須恵器を転用した110・115・116の3点のうち、SB9出土の110は短頸壺の底部外面を硯面としている。甕の胴部を転用する例はまみられるが、底部を転用する資料は、周辺遺跡でもみられず、貴重な資料である。110は底径16.1cmを測り、胴部を打ち欠いた整形痕が認められる。底部を裏返して据えると、硯面はほぼ平坦になる。硯面は墨痕が不鮮明なもの、全体に磨滅し、光沢がある。内面は降灰を被り、自然釉が観察される。115・116は両者とも須恵器の蓋内側を硯に転用するが、116は美濃須衛産須恵器である。115は中央周辺が磨滅し、使用によってロクロ目が滑らかになっている。116は内側のつまみ部周辺に墨痕がわずかに観察され、その周囲が特に磨れている。

灰釉陶器を転用するものの内、111・119・127の3点には朱が付着する。これらは朱墨硯になり得る可能性がある資料である。111は灰釉陶器の皿Bで、器の内・外面に朱が観察される。127は朱は薄い、磨滅痕は明瞭である。

この3点以外の灰釉陶器の器種は122・124が皿であるほかは、いずれも碗である。硯に転用する際、整形のために碗などの体部を打ち欠く、調整痕の認められる例が大半を占め、122だけが整形されない。112は内面全体に墨痕が残る。113は磨滅痕跡が明らかで、灰釉のかかった内面の小さな気泡に墨が染み込んでいる。117は内面全体に墨が拡散し、比較的鮮明に残る。120は灰釉を被らない全面に磨滅が観察され、光沢がある。121は細かな調整が加えられるが、墨や磨滅痕が不鮮明であり、転用硯に含めて良いか微妙である。しかし、硯に転用する目的から調整を加えたと判断し、これに加えておきたい。122は完形品に近い。底部が厚さ3mm程で極端に薄い。墨痕が底部外面に認められ、器を伏せた状態で使用したものであろう。126は内面を硯面とし、外面には『力』または『方』と読み取れる墨書がある。

本遺跡の転用硯の内、灰釉陶器の場合は碗を転用する例が多い。しかも、いずれも調整を加えた痕跡が認められることは重要である。皿ならば、敢えて整形しなくても使用に不都合な点はないが、碗は墨を擦るには体部が存在すると不便なためである。また、転用硯の大半が碗であることは破損の頻度が高く、転用されるケースが多かったとも推定される。

### 3 金属製品・鍛冶滓

#### (1) 鉄製品・鉄滓 図版214・図版215 - 1～42、付表9・10、PL70・71

本遺跡より、古代の鉄製品として遺構から185点が出土している(付表9・10)。このほか鉄滓が23遺構から出土しているが、これらは住居址がほとんど確認されない9・10期を除いた各時期にみられる。7期までは住居址1軒に対する鉄製品の個数0.3点弱から1.1点程度である。しかし、時期が下るにつれ個数は増し、8期では点数が最も多くなる。9期以降は、住居址数は少ないが、数字の上では1軒に1.0点から2.0点となり、各住居址で1点は保有していたことになる。1軒から出土した量として注目されるのはSB52(8期)で11点の鉄製品があり、ほかに鉄滓や羽口が出土している。またSB198(8期)では8点と鉄滓が出土し、SB72(14期)から6点、SB75(8期)・SB174(8期)・SB188(8期)には5点が集中して出土している。鉄製品の種類としては刀子の出土が多い。なお、本稿では遺構外出土の時期不明の35点も本項で触れていくことにするが、いずれも小片で図化できたものはない。

**鋤・鍬** SB198から1点出土している。5に図示したもので、「U」字形となる鋤及び鍬先である。袋部の一方は厚みがあって外折しており、向かって左側の耳部が欠損している。刃先の刃側から袋部までの幅が3.8cmと狭めである。

**鎌** 古代遺構から11点、遺構外の時期不明のもの1点がある。基部の破損した資料のみのため、着柄角



を測ることのできるものはない。1は着柄角がおおよそ45°くらいになると思われ、基部から刃部へ移る辺りに最大幅をもつ。2は刃部に最大幅があり、3.6cmを測る。3は刃部が緩やかに内側に曲がるもので、最大幅は現存部で1に近く、僅かに2.8cmを測る。

**刀子** 遺構内から47点、遺構外から2点出土しており、各時期にみられるが、8期に最も多い。図化した7～18の12点のうち、茎部に目釘穴のあるものはなく、7～9・11・12・14～18は、刃長・関幅などがほぼ似ており、関幅では1.1cm～1.4cmにおさまる。13は現存で刃長14.1cm、関幅1.8cmを測り、10も関幅1.8cmを示す。13は7期、10は5期の住居址から出土したもので、図示した他のものも4期から8期の時期に限られるものである。これ以降の時期の刀子は2点のみで、小片であるため比較することができない。なお、13はSB77(14期)からの混入の可能性がある。

**斧** SB191(7期)から出土した6の1点のみをみることができる。刃幅4.2cm、刃角度約49°で、着柄部は袋状になり、その断面はほぼ方形状になる。

**楔** 遺構外から1点出土している。図示していない。頭部は平坦で4mmの厚さをもち、先は薄くやや丸みを帯びる。古代より新しい時期のものと考えられる。

**釘** 本遺跡出土の釘は総数64点あるが、古代に属すと考えられるものは19点で、中世に至って増加することが知れる。21はSB224(3期)出土のもので、基部に対して頭部は細く作り出し、鉤状におさめている。SB198(8期)出土の23もほぼ同様である。SB34(6期)出土の22は頭部を半弧状に細く叩き出す。19・20は北部北地区の遺構外出土のもので、本地区では古代遺構が検出されていることからここで掲示したが、あるいは後出的なものであるかもしれない。19は平釘で長さ14.1cmを測る。出土した釘はいずれも断面が方形になる。

**鋏** SB98(5期)より刃部の一部と思われる片刃の破片が出土した。刀子の可能性もある。

**燧鉄** SB72(14期)から1点出土している。24は折損した部分の燧鉄中央部が、内側に山状になって突出する平面形態を有すものである。使用面は平坦で、厚みは3.5mmを測る。

**鍔** 8点が出土し、25～32に図示した。25(4期)・27(5期)・30(11期)は、鍔身が幅広で平面は三角形状を呈し、前2者は逆刺が2段に刻まれている。26(4期)も幅広で三角形状となるが、鍔身はやや長く扁平であり、一般には古墳時代にみられる古い形態を有すものである。28(8期)・29(8期)・31(11期)・32(13期)は細身で鍔身が長いものである。28・29は腸挟がなく、篋被も比較的短い。32は腸挟が深めで、篋被も29と比べると長い。31はX線照射を行っていないため詳細は不明であるが、32に近いものと思われる。

**鉸具** SB72(14期)から1点、遺構外(中部北区南側)から1点が出土している。33は杵が長方形を呈すもので、刺金軸は中央より上縁に付き、刺金は短い。図示できなかったものは、杵が「U」字形を呈し、上縁は丸みをもつ。刺金軸は帯留部近くに付き、刺金の長さは約5.7cmを測る。杵の最大幅は上縁にあって3.8cmを測り、最小幅の帯留部は3.3cmとなっている。

**鐸** SB92(14期)より1点出土している。34は現存部で長さ7.7cm、上端部径1.5cm、下端部径1.8cmを測る。1枚の板を巻いたもので、舌や門及びその痕跡は残っていない。

**金具** SB52(8期)から出土している1点がある。図示はできない。破片資料で環状部に棒状のものが連続する形で、建築関係の金具か馬具の一部と思われる。

**苧引鉄** 古代遺構から3点出土している。いずれも破片資料で、SB72(14期)出土の4とSB49(8期)出土の36を図示した。4は身部幅が広く、3.5cmを測り、刃は鋭く、背には木質が付着している。手持ちの穂摘鎌の可能性もある。36は何枚かの板を重ね合わせて作り出しており、4に比べ小形である。

**紡錘車** 9点が出土し、6点を図示した(37～42)。37(2期)は紡輪のみで重量22g、42(14期)は20gで

ある。38～41は軸部も伴うが、いずれも両端が欠け、鉤などはみられない。現存部で38(3期)は46g、39(4期)は56g、40(14期)は35g、41(8期)は25gとなり、残存量は各々異なるが、4期以前と14期では総じて14期のものは軽い。また紡輪の厚さは14期の40・42より、2期～4期に属する37～39の一群のほうが厚い傾向がある。

**その他・不明** 全体の形状を知り得ないものや、用途の不明なものを一括した。

棒状の鉄製品としては、断面が正方形に近いもの、円形のもの、長方形のものがある。それらは順に15点、5点、7点が遺構に伴い、遺構外から8点出土している。正・長方形のものは、家屋や構築物に使用する釘、鋸、鋏などの建築用資材に関係するものが含まれていると考えられるが、詳細は不明である。図化したSB75(7期)より出土した35は、L字に曲がっているもので、長い辺は先が欠損するが、細くなっていくことが知れる。やはり建造物に関係するものであろうか。

板状のものは、作り出し不明のもの4点がある。また遺構外から2点出土している。いずれも欠損品である。

環状のものは、SB83(8期)から1点出土しており、平面は楕円形を呈し、また断面も楕円形となるものである。締まり金具であろうか。

塊状のものは、SB198(8期)とSB220(5期)から1点ずつと、遺構外から1点出土しており、また鉄片も5点出土している。両者とも鉄製品の破片であり、厚いものと薄いもので各々一括した。鉄片は刀子の切先部や鎌の先端部などのものであるが、限定できない。

**鉄滓** 本資料には、出土地点・出土遺構が不明になってしまった資料が総数にして62点・3,010gがある。付表9には所属のわかる鉄滓の重量を示したが、所属不明資料によってさらに重量が加算され得る。また表中の「○」印は、その遺構から出土しているが、対応する鉄滓が不明確で重量を提示できないものである。なお、表中重量・「○」印記載以外の遺構からは出土していない。

鉄滓は23遺構より出土し、計測されたものは183点・7,220gがある。このほかに遺構外出土の29点・610gと上記の出土地点不明の62点・3,010gがある。遺構外と出土地点不明のものは総計91点・3,620gあり、ほとんどは古代に属すと思われる。量的に注目されるのは6点・2,270gが出土したSK387で、またSK419からは50点・1,420g、SK461から98点・1,250gが出土している。この中で、SK387は掌にのる大きさの椀形鉄滓が6点みられ、特徴的である。またSK419でも小さめの椀形鉄滓3点と3cm前後の球状になった鉄滓が47点、SK419では球状のものが98点出土している。SK419では羽口も伴出している。

#### (2) 銅製品・銅滓・銭貨 図版215 - 43～46、付表11、PL72

銅製品は6点、銅滓は埴埜に付着したものが1例ある。銭貨については古代の遺構から出土したものは3枚あるが、そのうち1枚は遺構との時期が合わないことから混入したものと考えられる。銅製品は銅錠と捉えたもの4点、金環1点、不明品1点がある。以下個別に触れていくことにする。

**銅錠** 付表11でわかるように4点とも小破片であり、錠ではない可能性もある。図示した43は弱く湾曲する板状のもので、3点中では最も薄く0.1mmを測り、丁寧に研磨されている。44は180×110cmの隅丸長方形の土坑SK440から出土した。平坦な板状で、底部と思われるが、平底であることから盤なども考えられる。厚み0.5mmを測る。図示できなかったSB58出土の銅錠はピット内から出土し、底部に近い体部下半の破片で、緩やかなカーブをもって底部に続くようである。厚さは約1mmある。錠ではない可能性もある。またSB172出土のものは錠の口辺部小片で、口唇部は内側に凸状に肥厚しており、体部器壁は2mmを測る厚いものである。

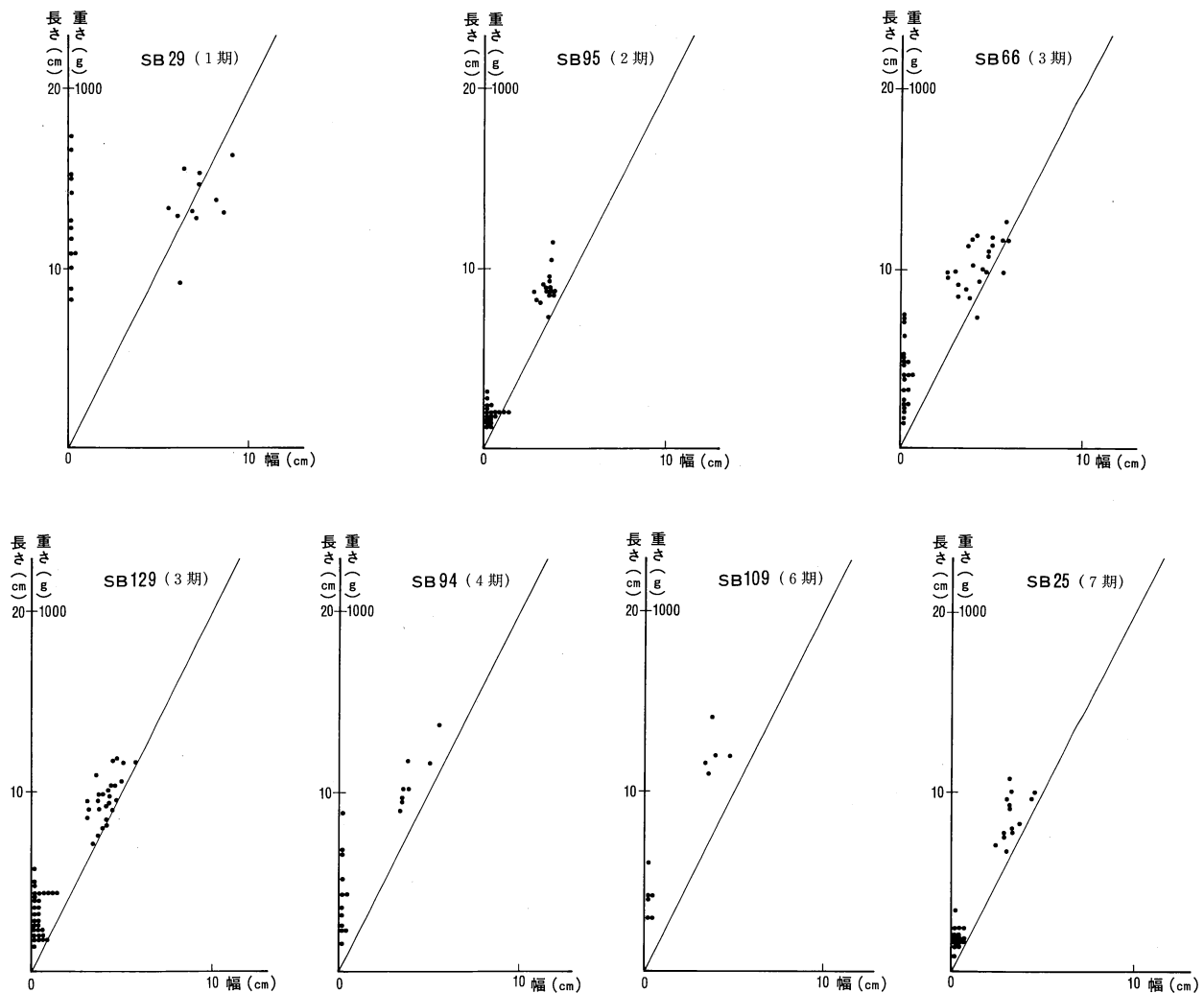
**金環** 46はST25から出土した。金環あるいは銀環と思われるが、鍍金または鍍銀はほとんど剥落し、緑青の吹く銅部分のみ残存している。

**不明品** 用途不明の破片が1点出土している。平面形は魚のような形状をもつが、一部に2.3×0.5 cmで0.4 cmの突出部があり、突出部を外面にして湾曲している。表面は緑青が観察できるほかは、外面暗オリーブ色(5GY3/1)、内面赤黒色(7.5R2/1)を呈する。2次的に熱を受けたとも考えられる。突出部のある外面は凹みが多く観察され、その反対面は滑らかである。金具とも考えたが、銅滓の可能性もある。

**銅滓** SB43から坩堝に銅滓が付着して出土した。一カ所に半球状の盛り上がりがあるほかは、坩堝器壁に溶解してこびり付いている。

**銭貨** 古代遺構から3枚が出土しているが、前記したように1枚は遺構と時期が合わない。5期のSB206からの出土で、初鑄年998年の北宋銭「咸平元寶」である。他の2枚はSK90出土の「至道元寶」(初鑄年995年)、SK264からは「熙寧元寶」(初鑄年1068年)であるが、土坑の周囲には銭貨と合致する初鑄年以降の古代遺構がないため、中世からの混入とも考えられる。いずれも破損が甚々しく図化できない。

4 石製品 (第127図、図版215～217-1～28、附表12・13、PL72・73・75)



第127図 古代遺構出土石錘長幅比グラフ

古代に属する石製品は178点が出土している。このなかには遺構外出土の砥石7点が含まれているが、出土状況などからいずれも古代のものと判断されるので本項で扱う。石製品の内訳は石錘137点、砥石38点、丸石としたもの1点、敲石1点、凹石1点である。以下個別に取り上げていくことにする。

**石錘** 137点出土しているが、通常1点では機能を果たさず、数点を一組にして使用するため、石製品に占

める割合は下がる。竪穴住居址7軒から出土していることから、最低7セットと数えることができる。時期別には、付表12に示したように5期を除く1期から7期の住居址から各々出土しており、本遺跡では8期以降の出土はみられない。SB29(1期)、SB129(3期)から各々31点出土し、最も点数が多い。本址出土の石錘の特徴としては、1点の最低重量で410gを測り、他址出土石錘の最大重量に劣らない。また最大重量は870g、平均529gを測り、他のセットと比較して群を抜いた要素をもつ。重量分布は460g内で広がり、分布範囲内での重量集中はなく、散漫に分布している。形状としては長幅比はおおよそ2対1となるが、他と比較して長さに対して幅が広めである。2期のSB95出土のものは最大160g、最小60gで100gの間に20点が集中しており、2期以降は1期と異なり、平均重量200g前後以下の軽量型となる。本址と同じ傾向にあるのは7期のSB25で点数は15点と少なめであるが、170gを最大としてそれ以下の重さのものが多く、平均重量も94gとほぼ同様な値を示す。2～3期のSB66、3期のSB129、4期のSB94の3軒には、SB29のような重量型はなく、SB95・25の軽量型と、いずれからも得られなかった200g前後から400g前後の中型のものがある。6期のSB109出土の石錘は、点数は少ないが中型のものが構成されている。

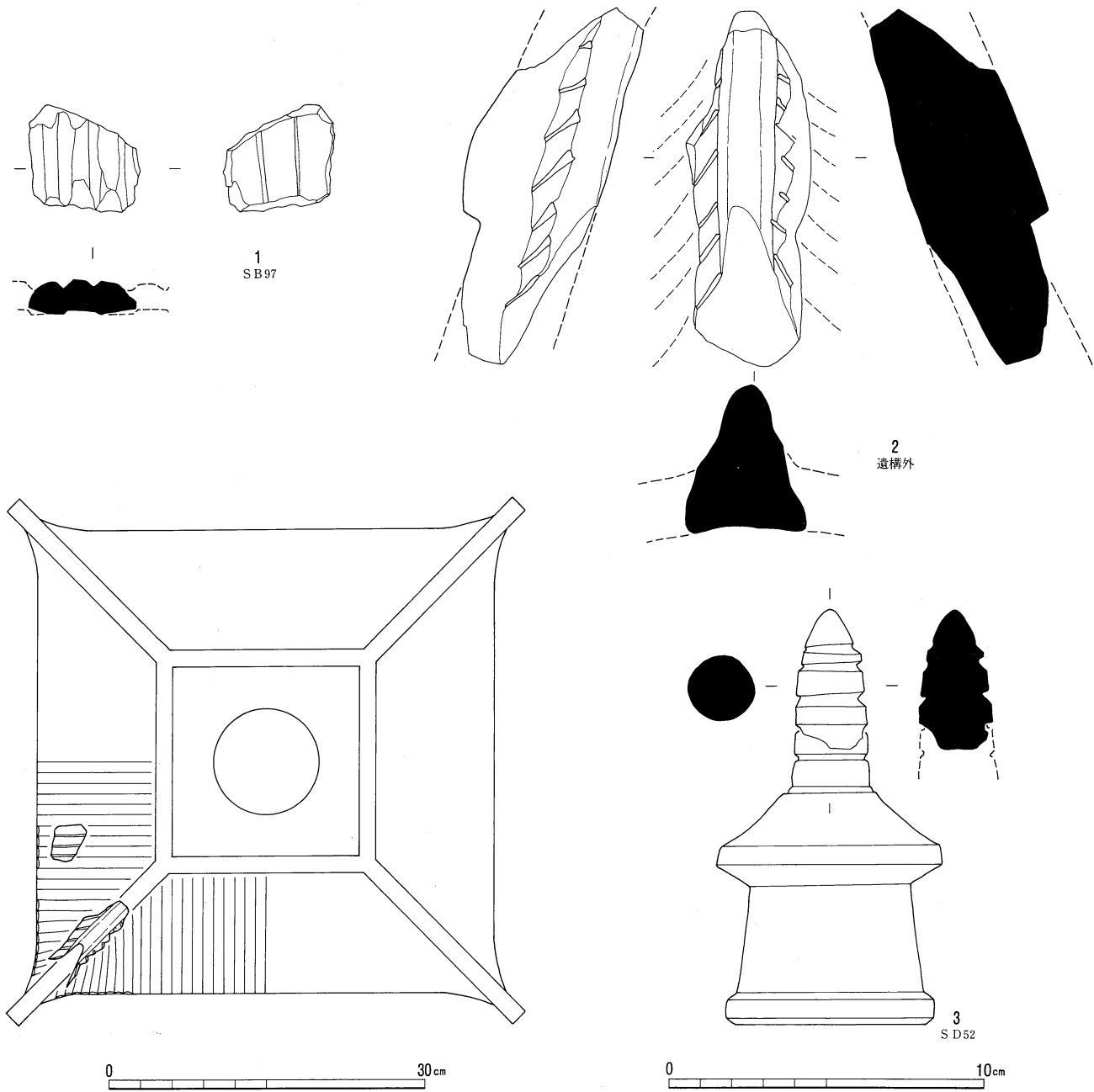
**砥石** 石質はほぼ限られ、住居址出土の31点中砂岩製が18点あり、半数以上を占める。このほか凝灰岩が10点、安山岩1点、頁岩1点、不明1点となる。時期的には、9期から12期を除く2～15期から出土しており、砂岩は3～8期に17点、14期に1点と前者の時期において選択されている傾向にある。凝灰岩は、5・6・8期に6点、13～15期に4点がみられる。目の粗密は石材と関連し、砂岩は荒砥的な存在であったようである。各期における数量に注目すると、住居址数のおよそ1割から3割の量がみられる。この中で8期の住居址29軒に対して6点の砥石が出土しているが、SB52・179の2軒に限られており、保有する住居址に限られる特異な状況にある。

**丸石・敲石・凹石** 各1点ずつ出土しており、いずれも砂岩製である。丸石とした1は、ほぼ球形状を呈すものである。表面は磨滅した痕跡があるが、人為的なものか否かは判断できず、また使用痕であるか整形痕であるかの区別も出来ない。2の敲石は正円形状を呈し、片面に敲打によると思われるアバタ痕が列状に集中した凹みがほぼ中央と、それに平行してみられる。また表裏の平坦面には、顕著ではないが磨滅痕があり、磨石としての使用も考えられる。14期の住居址から出土しているが、縄文時代に見受けられる磨石と酷似することから、古代のものであるかは不明である。3の凹石は断面形が楕円形で、平面形もほぼ楕円形になり、凹みは表裏両面に1個ずつある。凹みは大小あり、小さい方の凹みは石の中央からやや外れている。凹みの形状は、凹みの径より浅い緩やかなものである。

#### 5 土製品 (第128図1～3、図版218-4～21、付表14、PL73・74)

紡錘車7点、土錘3点、埴塙1点、瓦塔2点、泥塔1点、粘土塊1点の計15点と鞆の羽口が9基の遺構から1,340.7g(個体数不明)、遺構外から490.7gが出土している。2点の瓦塔は同一個体と考えられる。以下個別に取り上げていくことにする。

**羽口** 8軒の住居址と2基の土坑から出土している。土坑の時期は不明であるが、住居址は5～8期に限られ、SB199(8期)の覆土に構築されたSK418からは1,083.2gの羽口が集中的に出土し、住居址廃絶後に鍛冶関係の場所として利用されたようである。これを除く257.5gを、時期別にみると5期(SB114)42.4g、6期(SB76)11.2g、7期(SB42・212)69.5g、8期(SB52・154・178)104.9gという内訳となっている。遺構外からは490.7g(8点)が出土するが、時期を捉えることはできない。この中で、7に掲示した羽口はほとんど未使用の状態で、被熱による顕著な赤化部分はない。残存率は9割くらいである。8軒の住居址のなかで、羽口と関係深い鉄滓を出土した住居址はSB42・52・76・199の4軒がある。



第128図 古代土製品実測図

**紡錘車** 7点が出土しているうち、時期のわかる遺構出土のものは5点ある。時期的には4期と5期に限られ、4期3点(SB94・160・161)、4～5期1点(SB146)、5期1点(SB225)となっている。完形に近いSB146・225出土のものは重さ130g代を示し、SB146の21は平面円柱状、断面長方形を呈する。SB225の20は断面台形を呈す。20のみ側縁をヘラ削りにより調整しており、他は丁寧な指オサエとなっている。SB94・160・161から出土したものはほぼ半欠しているが、推定重量はSB94が100g前後、SB160・161は200g前後になると思われる。

**土錘** ここで扱う3点のうち、遺構から出土している土錘はSB61(3期)の13のみで、14・15は遺構外の出土である。14は13と形状が似ているため、また15は北部南地区(I-G地区)の出土で、周囲に中世の遺構がないため古代に含めた。13・15はほぼ完形で、14は残存率9割である。いずれも土師質のもので、13・14は胎土が精選され、緻密な感じがある。整形は丁寧な指ナデによるものである。

**埴埴** SB43(12期)の焼土溜まり付近から出土している。内面に銅滓が付着していたため銅製品の図版215-45に掲示した。口径は約9.4cm、器高は約9.3cmを測る。外面には指オサエ調整痕が明瞭に残っており、器壁は厚い。

**瓦塔** 瓦塔は第128図1・2に示したように、屋蓋の小破片が2点出土している。2点とも同じ色調を呈しており、表面は淡黄色もしくは浅黄橙色を示し、断面観察から土器内部は灰色を示す。焼成は軟質で、土師質の感があるが、還元焰焼成による須恵質のものであろう。復元模式図を添えたが、大きさは小片のため、明確にはできない。SB97(6~7期)出土の1は丸瓦をへら削りによって表現しており、裏側は垂木を約1cm幅で断面四角状に交互に凹凸に削り出して描出している。垂木と丸瓦は表裏で対応する。丸瓦も約1cm間隔で溝を切る狭いもので、平瓦はない。丸瓦の継目については、残存部では窺い知ることができない。従って継目は少ないと思われ、1節であろう。

2は飛檐隅木の部分で二軒屋根になっており、裏面には段が作られている。隅木の表現は高く作り出しており、丸瓦を削り出した部分より約1.5cm高くしている。丸瓦は1同様に平瓦部分を持たず、約1cm間隔で瓦を刻んでいる。北部南地区南半(Ⅱ-E地区)の遺構外からの出土で、1・2は色調・焼成・調整技法から同一個体と考えられるが、直線距離にして250m以上離れている。

**泥塔** 第128図3に示したものは泥塔の相輪部と考えたもので、宝輪が重畳する層輪形のものである。須恵器製で、色調は灰色、焼成は硬く、在地窯のものと思われる。中世に属すSD52より出土したが、古代6期のSB109と切り合う近くから出土しているため、本来SB109に包含されていたものであろう。

**粘土塊** 用途不明の粘土塊がSB87(4期)から出土した。一面には平坦な面があるほかは、破碎したままの面である。酸化焰焼成によるもので、軟質である。植物繊維が混入している。

## 第4節 中世の遺物

### 1 土器・陶磁器 (巻頭図版4、図版219~222-1~160、付表8、PL76~80)

#### (1) 概観

総破片数1,058点が確認されている。種類は豊富で、土器では土師器皿・内耳鍋・土師質搦鉢・片口鉢、古瀬戸系陶器では天目茶碗・平碗・卸皿・縁釉皿・折縁深皿・直縁大皿・鉢・瓶・四耳壺・香炉・蓋、大窯製品として天目茶碗、無釉陶器では山茶碗・山皿・捏鉢・常滑系甕・四耳壺・三筋壺・須恵質搦鉢、また輸入陶磁器としては青磁碗・皿・杯、青白磁梅瓶・合子・蓋、白磁皿・壺・合子が出土している。量的に多いものは、I類とした非ロクロ成形の土師器皿が407片出土し、常滑系甕も248片がある。但し、常滑系甕のうち145片はSB252から出土した3個体に復元できたものである。

時期判断の不明なものを除いて、時期別には中世1期に属すものが9割近くを占め、土師器皿I類・常滑系甕・山茶碗40片・捏鉢98片・輸入陶磁器80片(うち青磁碗56片)などがある。中世2期は内耳鍋82片を主にして1割程度に収まり、特に大窯期の製品はSD66の1点に限られ、時期が新しくなるにつれて少なく、近世に入っても17世紀の遺物は多くはならない。古瀬戸系陶器は27個体が確認され、1期は9個体、2期は碗皿を中心にして18個体を数える。

これらは、付表8に示したように堅穴住居址・掘立柱建物址・溝址・墓坑・土坑から検出され、出土総数の8割が遺構に伴っている。このなかで堅穴住居址・掘立柱建物址は1期の遺物が伴うのが特徴的である。また、遺構外出土の遺物の分布は、2期の遺物が北部南区から内耳鍋や土師器皿が少量あり、そのほかは堅穴住居址・掘立柱建物址の集中する地区から検出されている。

なお、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類については前節で扱い、第34表に一覧表を提示した。

(2) 竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址出土の遺物

**SB251** 図版220 - 70

70の捏鉢は、粗い砂粒が目立つが、胎土は精緻で、色調は明るい灰白色を呈す。口唇部に溝を設け、器壁は強くなでられ薄いつくりとなっている。体部下半は回転ヘラ削りを施すが、一周せず一部ナデが残っている。VI類に属す。

**SB252** 図版219 - 1 ~ 16、PL76・78・79・80

土師器皿が、時期的に先行するIA1類(8)・IB1類(2・3)と後出的なIA2類(4~7)・IB2類(1)が出土している。それぞれ大小のセットとなる。古瀬戸系陶器では13・14があり、前者は折縁深皿としたが器種名に問題は残る。角状付高台で、底外面は高台付け根はナデ、中心は糸切り痕がわずかに残る。口縁部は水平になるように外へ出し、灰釉を漬掛けする。14は四耳壺で、均等に四耳を付し、内面には輪積み痕がみられ、灰釉を刷毛塗りしている。いずれも13世紀代のものであろう。山茶碗は窯洞1号窯式に比定される碗と、明和1号窯式のおろし碗が出土している。11の捏鉢は口縁部を角状におさめ、体部をなでたIV類である。図示できなかったものに口唇部に溝を入れたVI類がみられる。10は高台高0.8cm、12は1.3cmを測る。10以外は明るい灰白色となり、緻密な胎土となる。10は暗い灰白色で、粗粒質の胎土である。常滑系の甕は図示できない1個体が底部片で、2個体を15・16に図示した。2点ともIII類に属すもので15は頸部が狭く、肩部に棒状工具によって記号が描かれている。16は広口になる。輸入陶磁器としては、同安窯系の碗とF類かH類に分類される鎬蓮弁文の龍泉窯系碗があり、中国産の緑釉陶器の盤(9)と思われる口縁部片が出土している。口縁部は玉縁状に折り返し、釉は薄く掛けられている。

**SB253** 巻頭図版4、図版222 - 151、PL80

青白磁梅瓶を図示した。花文をヘラ状工具と櫛状工具で描くもので、SB265に同一個体の破片(149・150)があり、SK1495(146)とSD60(152)の口唇部片と底部片が同じ個体になるかもしれない。また、SB264・SB265(32)出土の蓋とセットの可能性もある。

**SB254** 巻頭図版4、図版219 - 17 ~ 19、PL80

17・18は土師器皿で、IA3類に属す。口径の割に器高が高い。色調は浅黄橙色で、口唇部は丸みがある。19はF類と思われる。

**SB255** 図版219 - 21

SB256と接合したVI類の捏鉢がある(21)。精緻な胎土で、明るい灰白色を呈す。

**SB256** 図版219 - 20・21、PL76

21の捏鉢はSB255と接合するもので、口唇部に溝を設ける。20の土師器皿はIA2類に属すが、本分類中では器高が高く、検討を要す。

**SB259** 図版219 - 22、PL76

内耳鍋はIB類に分類されるとも考えたが、口縁部内面の2条のヨコナデは明瞭ではなく、明確にグルーピングできない。体部上半から口唇部にかけてやや内傾する。

**SB260** 図版219 - 23、PL78

古瀬戸系陶器の天目茶碗が出土している。削り出し内反り高台で、高台周辺に鉄化粧される。高台脇の削りはあまり丁寧ではない。

**SB261**

図示したものはない。常滑系の甕は、SD59と接合しており、中世1期の甕と思われる。ほかにI類に分類される手捏ね成形の土師器皿がある。

**SB262** 図版219 - 24 ~ 30、PL76

24 ~ 29は土師器皿で、24 ~ 27がI B 2類、28 ~ 29がI A 1類に分類される。28は口縁部に強いヨコナデをいれて尖状にしたもので、29は口唇部を面取りして断面を角状におさめている。30の捏鉢は口縁部を面取りしたⅢ類で、精緻な胎土、明るい赤褐色を呈す。この胎土・色調は類例が少なく、他のものとは産地を異にするのであろう。

**SB264** 図版220 - 31 ~ 50、PL76・77・80

土師器皿は、47・48はI A 1類、42 ~ 46はI A 2類、33 ~ 41はI B 2類である。全体的に口縁部にヨコナデを入れて薄くし、尖状に近い形としているが、42・43はそれらに比べて丸みがある。また、49も土師器皿であるが、口径17.0cmを測るものは類例がない。口唇部はわずかに折り曲げたような形態で、外面をヨコナデして面を持たせている。47は出土状況よりSB266からの混入の可能性がある。50は捏鉢で、Ⅲ類に分類され、口縁部を角状に作出する。SB265・SD60と接合する。31は白磁の合子で、外面下半のみ露胎としており、釉は光沢のある白色を呈し、素地は硬質である。あるいは全く時期のあたらしいものである可能性がある。SK1279出土のものと接合する。32の青白磁は、梅瓶の蓋か合子の蓋と思われ、当遺跡では2個体の梅瓶と1個体の合子が出土しているので、それとの関係が考えられる。蓋上面には蓮弁文が型押によって表現されている。SB265出土の破片と同一個体である。

**SB265** 巻頭図版4、図版220 - 32・50 ~ 53・図版222 - 149・150・157、PL79・80

50の捏鉢はSB264・SD60と接合する。また、52は底部片で高台高1.0cmを測る。53はVI類に属するもので、口唇部に溝をもたせ、明瞭に二又状にわかれる。胎土は53が明るい赤褐色で、30と似るほかは明るい灰白色である。51は土師器皿で、I A 2類に分類される。図示できないものに口径12.0cmの同類の皿がある。輸入陶磁器としてはH類の青磁碗(157)があり、底内面に双魚文がスタンプされている。このほかST100(147)と遺構外(148・PL80 - 170)から出土した渦文をもつ青白磁梅瓶と同一個体の体部破片(PL80 - 169)と、花文をもつ149・150の2種類がみられる。花文の梅瓶はSB253(151)と同一個体、またSB264出土と同一個体の青白磁蓋(32)が出土している。

**SB266** 図版220 - 54 ~ 62、PL80

青磁碗F類、白磁碗IX類(横田・森田1978)、常滑系甕片が出土しているが、図示できたものは土師器皿のみである。60・61はI A 1類、56・57はI B 1類、58・59はI A 2類、54・55はI B 2類で、54・62は口唇部を尖状に、57・61は面取り、58は弱い溝が入れられている。白磁碗は体部片で、内面に花文を型押により施文するものである(PL80 - 172)。

**SB267** 図版220 - 63 ~ 67

6465はI B 1類の土師器皿、63はI B 2類である。63・65は口唇部をヨコナデしてわずかに面をもたせている。66・67は捏鉢で、66は口唇部にむかって薄く挽き出し、断面を角状にまとめるものでI類に分類される。より緻密な胎土で粘質感が強く、暗い灰白色を呈す。67は粗粒質の暗い灰白色で、高台高0.8cm、先端に丸みをもたせる。

**SB270**

図示はしなかった。土師器皿は口径8.2cm、器高1.4cm強でI B 2類に分類される。また捏鉢は小片4点がみられ、いずれも別個体である。色調が異なり、粗胎で灰白色・赤褐色、精胎で灰白色のものが確認されている。ほかに古瀬戸四耳壺片、常滑系甕が出土している。126の山茶碗(丸石3号窯式比定)は本址から古代住居址SB118に混入した可能性がある。

**SB272** 図版220 - 68・69、PL76・78

68は古瀬戸系陶器の平碗で、灰釉を厚く漬掛けし、残存部での露胎部はロクロナデが明瞭に残る。69



の内耳鍋は口縁部内面に幅広の工具で弱くナデを1条入れるもので、II A類に分類されると思われるが、SB259出土の内耳鍋同様に分類が難しい。

**SB273**

図示できないが、SK1336と接合する常滑系甕の肩部片が出土している。肩部に丸みがあるが、小片のため時期をおさえることはできない。

**ST82** 巻頭図版4、図版220-71、PL80

P2から青磁碗が出土している。間弁のみえる鎬蓮弁文で、F類に属す。

**ST87** 図版220-72、PL78

古瀬戸系陶器の天目茶碗がある。口縁部のくびれは弱く器肉は厚い。後期様式中葉ころのものでろう。ほかに内耳鍋が出土している。わずかな残存部の体部と口縁部境に強いヨコナデがみられ、II類である可能性が高い。

**ST88** 図版220-73・74

73は窯洞1号窯式に比定される山茶碗で、口唇部直下を強くなでて器壁を薄くしている。74の捏鉢は高台付け根の幅が広いのが特徴であり、軟質感のある暗い灰白色を呈す。

**ST92**

捏鉢は砂質感のある暗い灰白色のもので、青磁碗はおそらくC類かD類に分類される龍泉窯系でも古手のものであろう。

**ST100** 巻頭図版4、図版222-147、PL80

青白磁梅瓶の体部片が出土している。本遺跡から出土している2個体の梅瓶のうち渦文が施される個体で、SB265(PL80-169)と遺構外(148・PL80-170)出土のものと同一体である。SK1495(146)出土の口唇部片とSD60(152)出土の底部片は、本個体かもう1個体の花文をもつ個体いずれかのものである。またSB264・SB265(32)出土の蓋が伴う可能性がある。

**ST101**

白土原～明和1号窯式の破片が出土している。薄手に作り出された直線的な形となる。

**ST104** 図版220-76、PL77

ST112出土の山茶碗と同一体と思われる。白土原～明和1号窯式期のもので、内面は精製されて薄手に作り出し、口縁部は小さな玉縁状にする。

**ST112** 図版220-7677、PL77

76の山茶碗はST104と同一体と思われる白土原～明和1号窯式期のものである。77はIA3類の土師器皿で、口縁部を玉縁状に作り出している。

**ST117** 図版220-75、PL80

底内面に文様を描くF類の青磁碗が出土している。角高台で、残存部より鎬蓮弁文のあるのが知れる。

**SD52**

猿投産の第II期第2型式～第III期第1型式比定の山茶碗、常滑系甕のII類～III類と思われる口縁部近くの破片が出土している。ほかに青磁碗H類、捏鉢がある。

**SD54**

土師質播鉢の体部片がある。内耳鍋のような胎土で粗く感じるが、内耳鍋と比べて硬質である。ほかに内耳鍋小片がある。

**SD59** 巻頭図版4、図版221-78～81、PL79・80

IB1類の土師器皿(78)は、粘土盤の端をわずかに立てて体部をつくり、底部は厚い。81は頸部から

「く」状に外反してラッパ状の口縁部にしている。色調は黄褐色である。図示できない別個体の破片ではSB261と接合する。79は青磁碗C類の龍泉窯系劃花文で、80は青磁皿I-2類(横田・森田1978)のもので、底内面に櫛状工具による文様が描かれている。

#### SD60 図版220-50・図版221-82~86・図版222-152、PL80

83の土師器皿はIA2類、やや口唇部を尖状にする。捏鉢は、50・84が皿類で、85はそれと同類かIV類~VI類であろう。高台高は1.4cmを測る。胎土はいずれも緻密なもので、50は明るい淡黄色、84・85は明るい灰白色である。50はSB264・265と接合する。86は須恵質播鉢で、内面は良く磨滅し、滑らかになっている。播目は7条一組になり、底外面はいわゆる砂底、底部付近の体部はヘラ状工具によってナデを行なっている。82は青磁碗H類と思われ、底部の器肉は薄く、高台は細い。152は青白磁梅瓶の底部片と思われ、4本の沈線が引かれ、畳付けと底外面は露胎とする。ST100(147)・遺構外(148)・SB265の個体とSB265(149・150)・SB253(151)の個体のいずれかのもと同個体であろう。また、SB264・SB265(32)出土の蓋が、これら梅瓶のものである可能性がある。ほかに丸石3号窯式前後に比定できる山皿が出土している。

#### SD62

浅間窯下1号窯式の比定される山茶碗底部片が確認されており、付高台は欠損、糸切底で、器形に丸みがある。

#### SD64 図版221-87~91、PL77

87の土師器皿はIA1類に分類され、口唇部を尖状にし、体部下半に手持ちヘラ削りを施しているようである。88・89の山茶碗は、丸石3号窯式と猿投産第VIII期第1型式に比定され、ほぼ併行するか前者がやや先行するかもしれない。88は口唇部を玉縁状にしている。90・91の捏鉢は、口唇部を丸くおよび隅丸にまとめているもので、皿類と考えたが、あるいはI類としても捉えられる。

#### SD66 図版221-92~96、PL77・78・80

92は大窯期の天目茶碗で、口縁部は弱く外反する。高台脇には回転ヘラ削りがみられ、露胎となる。本遺構への混入品であろう。93~95は古瀬戸系陶器で、93の天目茶碗はほぼ完形である。釉調は不安定でムラがある。体部下半は回転ヘラ削りを行ない、削出し高台の畳付けには糸切り痕がみえる。鉄化粧はなく露胎とする。口縁部と体部の区別はなくほぼ直立する。94の平碗は、内面に灰釉、外面は残存部は露胎である。付高台で、底外面には糸切り痕が観察され、高台脇は回転ヘラ削りによって調整される。95は合子の蓋であろう。灰釉を施し、無文である。蓋の基部底面は糸切りが残る。古瀬戸系陶器は14世紀後半の所産と考えられるが、天目茶碗は15世紀に下るかもしれない。96の山茶碗は窯洞1号窯式に比定される。このほか図示できない中に淡青灰色を呈す三筋壺片がある。

### (3) その他の遺物

#### ア 土器

##### (ア) 在地系土器 図版221-97~116、PL76

皿 墓址SK1393出土の103を除き、97~104は土坑から出土し、105は古代遺構SB117に混在したもの、106~115は遺構外出土である。104(SK1671)・115はロクロ成形で、IIA類に分類される。前者は見込み部分に強いナデを施して凹状にし、後者は口唇部を丸く仕上げている。2点のほかはすべて手捏ね成形になる。以下分類に従って記述する。

IA1類; 111~115が本類に属し、すべて遺構外出土である。111は口唇部に不明瞭ながらも面をもち、113はナデによって口唇部を尖らせている。111は煤が付着する。

IB1類; 97(SK798)・100(SK1334)・105・107・108が出土する。100は器壁を薄く作り、105は軟質感

のある厚手のもので、指オサエが明瞭である。器高が高く、本類のなかでは類例はない。106は口唇部をやや尖らせており、107は本類のなかでは器高が高く I A 3 類に属す可能性がある。また、108は I A 2 類のさらに小型化した形態とも考えられる。

I A 2 類 ; 98 (SK1217)・101 (SK1334)・109・110がある。98は煤が付着し、101は体部中程を弱くおさえて口縁部に膨らみをもたせている。109・110は口唇部を尖らせる。

I B 2 類 ; 102 (SK1349)・103 (SK1393)・106は本類で、102は粘土版の端を少し立ち上がらせてヨコナデしたもの、103は本類でも小型のものである。102・103とも口唇部を細く挽き出している。

I A 3 類 ; 99 (SK1330) は、残存部では全体にヨコナデが観察され、体部中程をやや強めにナデを入れている。口縁部外面に粘土接着痕の隙間を残したまま仕上げとしている。粘土の接着痕は別のものを継ぎ足したのではなく、口縁部の調整の中で意図して溝を残している。

**内耳鍋** SK1151出土の1146は、口縁部上半が欠損しているが、2条のナデを内面に施しているようである。このほか形態のわかるものでは、SB259・260の東側あたりから出土したものに I 類かと思われるもの、SD66に囲まれた範囲の南側から II A 類と思われる破片などがある。本遺跡の内耳鍋は口縁部内面のナデが弱く、分類が難しいのが共通した特徴である。

(イ) 産地不明の土器 (図版221 - 117, PL77)

片口が付くと思われる土師質の鉢が ST95の付近から確認された。擂鉢である可能性もある。表面は黄橙色をし、口縁部はヨコナデによって調整され、口唇部に面をもたせる。ロクロの使用は認められない。143・144に掲げた須恵質擂鉢と技法など共通点が多い。ほかに遺構外から擂鉢が1点出土している。

## イ 陶器

(ア) 古瀬戸系陶器 巻頭図版3、図版222 - 118 ~ 125, PL78

**天目茶碗** 118は口縁部のくびれは弱く、体部の立ち上がりは直線的である。削り出し内反り高台で段が残されている。高台脇は露胎である。

**平碗** 120は墓址 SK1505から出土し、142の常滑系甕などと伴出している。119・120は体部が直線的に「V」状に開くもので全体に器高が扁平である。121はSD66に囲まれた範囲の南側から出土したもので、前二者に比べ体部に丸みがありそうである。いずれも15世紀前葉から中葉くらいに位置付くであろう。

**卸皿** 122は口縁部内側にやや突出部分があり、口唇部にわずかに溝がある。図示できなかったが、墓址であるSK1505出土の卸皿もほぼ同じ形態である。

**縁釉皿** 123はST87付近から出土した。底外面に糸切り痕が残され、口縁部のみに鉄釉が漬掛けされる。

**折縁深皿** 124はSB259・260の東側付近から出土した。三足が貼付され、底外面は回転ヘラ削り痕が観察される。ほかにSK1505から底部小片が出土し、ヘラ削りにより糸切り痕を消している。

**香炉** 墓址であるSK1504からほぼ完形で出土している。袴腰型のもので、体部下半の膨らみに4個の印花が押されている。器高は9.0cmと中型の法量を有し、口縁部は「く」状に外反、鉄釉を施す。14世紀でも古い様相をもつ。

(イ) 東海系無釉陶器 図版222 - 126 ~ 142, PL77・79

**山茶碗** 東濃系のものである130(遺構外)が浅間窯下1号窯式、126(SB118混入)・131~134(中部北地区出土)が丸石3号窯式、127(SB169混入)が白土原~明和1号窯式にそれぞれ比定される。130は高台断面が台形で、器形にやや丸みがある。126は古代住居址に混入しているが、中世のSB270が重複しているため、SB270の遺物である可能性が高い。次期の丸石3号窯式のもの、同様に器形に丸みを帯びるが、高台断面は三角形状で、高台高が低い。127は器壁が薄く器形は直線的に広がる。付高台の接着面は狭い。

猿投産と指摘できるものは128・135が第VII期第3型式かと思われるもの、129は第VIII期の所産と捉えら

れる。128は口唇部直下にナデを入れて薄く作り出しており、135は底部が厚く高台は幅広である。129はつくりがやや薄手で、口唇部直下に強いナデを入れている。

**捏鉢** 140は器厚を均一に作り出し、口唇部を面取りするⅡ類の捏鉢である。139は同様に器厚を均一に作り出すが、面取りを行わず丸みをもたせたもので、Ⅲ類に分類できる。Ⅳ類とした137は、体部上半に強いナデを行ない器壁を薄く作り出している。Ⅴ類は図化できなかつたが、古代住居址であるSB142に混在して確認された。Ⅳ類と同じ様に器壁を薄く作り出して断面を角状に仕上げ、口唇部に弱い溝がみられる。Ⅵ類の136は器壁を薄く、口唇部を丸く作り出したあと明瞭な溝を入れるものである。胎土に違いがみられ、140は粗い胎土で暗い灰白色となるもの、Ⅳ類の137は緻密な胎土で明るい淡黄色となるものであるが、Ⅳ類中では類例はなく、これ以外は明るい灰白色を呈し粗胎と精胎の2種類が確認される。本遺跡出土のⅤ類とⅥ類では、53(Ⅵ類)を除いてすべて精胎・明るい灰白色を呈する。

**常滑系壺・甕** 明らかに壺と認定できるものは、遺構外出土の三筋壺とSK1279出土の四耳壺である。三筋壺は肩部の破片で、2条の沈線が施される。内面には指オサエののち工具によって弱く横になでられている。四耳壺は粗い胎土で灰赤色を呈し、耳部が欠損した肩部片である。古代住居址のSB84に混入していた141は口縁部断面が「ㄣ」状になるⅢ類で、長頸型の壺になるものであろう。墓址であるSK1505から体部小片が出土し、本址より約30m北の遺構外より出土した底部片142と同一個体と思われる。色調は黄橙色で、砂質感がない。またSK1535出土のものと遺構外の数点は灰白色を呈すほかは、灰赤色のものが多く出土している。

(ウ) 産地不明の陶器 図版222 - 143・144、PL77

須恵質播鉢がある。中部北地区中程(ST98付近)から出土した143は、土師質ともいえる質感をもち117にも近い。口唇部は水平に面取りする。144は還元焰焼成と思われ、口唇部の外側を面取りする。両者とも調整は土師質播鉢と共通して明瞭なヨコナデ痕がみられるが、体部外面では指頭圧痕の凹凸が残る。ロクロの使用は考えられない。

#### ウ 磁器

(ア) 白磁 PL80

**皿** SK905とSB269付近の遺構外からⅨ類(横田・森田1978)に分類される口禿皿が確認された。

**小壺** 小壺と思われる小片が中部北地区(ST94付近)から出土している。外面に型押による花文がみられる(PL80-171)。時期的には前記した白磁皿Ⅸ類と同時期であろう。

(イ) 青白磁 巻頭図版4、図版222 - 145・146・148~150、PL80

**梅瓶** 渦文をもつ個体と花文をもつ個体の2種類が出土している。中部北地区(ST102北側)から出土した148は渦文が施されるもので、SB265(PL80-169)・ST100(147)出土と同一個体である。図示できなかった遺構外出土の花文(PL80-168)のものは、S253(151)・265(149・150)出土と同一個体である。SK1495出土の146とSD60出土の152はいずれかの個体の口縁部片と底部片であろう。

**合子** SK859出土の145は、外面を型押によって蓮弁文が表出される印籠型のものである。文様のある部分に施釉されている。

(ウ) 青磁 巻頭図版4、図版222 - 153~160、PL80

**碗** 同安窯系をまとめたA類・B類は、SK1180から各1点、遺構外からA類4点が出土している。153は内外面に櫛目文がみられ、外面下半は施釉せず、化粧土もない。劃花文や飛雲文を施文する龍泉窯系でも古手のC類・D類は、墓址であるSK1486からD類が、遺構外からC類3点(154)が出土している。鎬蓮弁文を描出するF類・H類は量的に多く、角高台となるF類は14点、細みの蓮弁文を特徴とし、三角状の高台を有すH類は5点ある。両者は区別が難しく類別でないものも3点ある。156・158はF類、155・

1594はH類、ほかに内外面無文のI類が2点ある。SK1454出土のものはF類に併行するものであろう。そのほか小片のため分類できない破片が出土している。

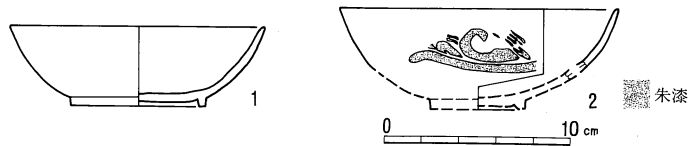
杯 III-3類(横田・森田1978)に分類される杯がSB262・265付近から出土している。口縁部を外反させ端部を直上させる。

## 2 文字関係資料 (図版225-36・37、付表12、PL83)

石硯2点が出土した。36は墓址と考えられるSK740から、37はⅡ区Ⅴ地区(南部北区北西)のSK1734の付近から出土したもので、SK1734に伴うものであろうか。36は平面長方形を呈する頁岩製の硯で、短軸断面は上外方へ広がる台形となるもので、背面は平坦である。長軸断面で見られるように海に向かって緩やかに下がるもので、海と陸の境は不明瞭である。縁帯は欠損しているが、その痕跡より細めの縁帯と思われ、硯尻の一隅は入角となり、波文様が線刻されている。他の三隅の様子は、残存部から硯尻左側と硯頭右側には入角を知る跡はなく、確実なことは分からない。陸部には裏面にみられるような截痕が激しく残っており、陸部中央は凹んでいる。37も頁岩製で、6.5×5.7cmの正方形に近い36同様に海と陸の区別はなく、緩やかである。断面は短軸が上外方に広がる台形となっている。2例とも遺構からは時期を知ることにはできないが、形状より中世2期前半のものと思われる。

## 3 漆器 (第129図1・2)

当遺跡出土の漆器は、すべて中世に属す遺構から確認され、それ以外のものはない。総計11点がST112・SK773・923・1469・1486・1509・SD66から出土している。時期は、伴出遺物と遺構の性格から、ST112・SK773・923・SD66は中世1期に属し、ほかはやや後出する時期と考えられる。ST112が北部南地区、SK773・923が南部北地区から出土しているほかは、中部北地区に限られている。



第129図 中世漆器想定復元図

これらは遺存状態が悪く、器種や法量などを知ることは難しい。ST112・SK773・923出土の漆器は形状をとどめず詳細は不明、SK1509は碗か皿のようである。SK1469からは2点出土し、1点は盆状のもので、残存部で19.5cm×14cm、側縁が1cmほど立ち上がっている。もう1点は碗か皿のようである。また、SK1486からは3点出土し、1点は板状のもので、盆あるいは箱であろう。ほかの2点は碗で、1点は口径13cm前後、もう1点もほぼ同じ法量と思われる。黒漆を塗ったあと朱漆で文様を描いている。SD66からは碗2点が出土し、第129図に示した。木質部は損われ、器の内外面の漆皮膜が遺存するだけである。図は想定復元で、口径は1が13.6cm前後、2が14.8cm前後となる。口径の割りに器高が比較的低めである。体部の木目は水平に走っている。1は朱漆文様が施されているが、文様をみることはできず詳細は不明であり、2は朱漆文様が外周一面に描かれているが、剥落が著しく、痕跡をとどめる程度である。

## 4 金属製品・鉄滓

### (1) 鉄製品・鉄滓 図版223-47~58、付表9・10、PL81

中世の鉄製品として、117点が出土し、最も多いのは釘である。古代では住居址からの出土が多かったが、中世では土坑からの出土が多い。中世の遺構は1期に属すものが多く、従って鉄製品も1期のものがほとんどである。一遺構からの出土をみるとSK1690から14点、SK923から13点となっており、また土坑以外ではST100から8点が出土している。このほか、鉄滓は5遺構から出土している。

**鎌** 2点出土しているが、図示できるものはない。2点とも身部破片と思われ、背縁は丸みがあり、刃部は直線的である。

**刀子** 4点出土し、47～50に図示した。48・49については、身部はほぼ完形で、茎部もおおよそ残存していると思われる。本2例は茎部に目釘穴がみられ、X線照射では関と目釘穴の間に何かが巻かれているようであるが、判読できなかった。47はX線照射を行っていないが、刃長約21cm、現存茎長約11cm、茎幅1.8cmを測る。48は刃長20.5cm、現存茎長8.6cm、茎幅1.8cmで、半折して出土し、茎側の銹部分には漆の付着がみられた。49は刃長15.1cm、残存茎長6.7cm、茎幅1.3cmである。50は関付近が残る破片であるが、残存している茎部の幅が1.4cmあることから、刃長は47～49と同様になると思われる。

**鉈** 茎部から関部付近までが残存する鉈が、SB261から1点出土している(PL34)。関部は銹化が著しいことと、X線照射を行っていないことから、関の有無・形状を捉えることができない。残存長は41.2cmで、茎部は長く、関部の付近まで約35.5cmを測る。茎部は関部近くで最大幅をもち、2.1×1.0cmの断面長方形を呈し、茎尻部に最小幅があって0.7×0.2cmの長方形となる。関部から刃部に至って湾曲をみせる部分で折損しているため、刃部の様子はみることができない。

**釘** 出土量の最も多い器種で、45点が出土している。図化したものは51・52の2点で、残存している長さではSK1324出土の51が最も長く、12.2cmを測る。2点とも断面は方形である。

**鍬** 1点出土している。雁股鍬と呼ばれているもので、SK923から出土している。刃部は短く、篋被部は関より直線的に伸びたあと、三角形に広がって刃部へ至るものである。銹落しが的確に行ない得ず、全体に断面に丸みがあるが、篋被部は平たく長方形の断面になると思われる。

**脛当** SB267から出土した55の1点がある。幅の違う大・小2種の鉄板を一か所で留め合わせたもので、縁をやや厚めに作り出す。大は長さ27.4cm、小は長さ25.8cmあり、ほぼ完形になるもので、上端には立拳などの痕跡はない。

**鉸具** 脛当と同じSB267から1点出土している。図化しなかったが、杵は6.4×4.7cmの長方形になる。刺金軸はほぼ中央にあり、刺金の長さは約4cmある。

**弓引鉄** SB254から出土した1点がある。耳部を欠損している53は、比較的小形のものと思われる。破損付近の内側になる部分が山状になっていることから、欠損部を中央とした半折品である可能性もあり、その場合大形の製品となる。刃は不明瞭で、実際には鋭利になるものと思われる。

**その他・不明** 用途の不明確なものをここで扱うことにする。

棒状製品は断面正方形のもの5点、円形のもの1点、長方形のもの4点、不明のもの1点がある。断面長方形のものは釘である可能性が高いが、小片ばかりで断定はできない。

板状のもの2点と環状のもの1点がある。板状のものはSB267より出土しており、57・58に図示した。2点は同一個体と思われ、緩く内湾する器形をもつ。脛当の出土した遺構と同じ住居址出土であり、55の脛当と形状や表面の状況など酷似することから、脛当のさらに片側である可能性がある。56に掲げた環状製品はST92から出土し、楕円形の形状から締め金具とも考えられる。

**鉄滓** 古代で触れたように、出土地点・出土遺構が不明瞭となった、帰属させることのできない鉄滓62点・3010gがある。ほとんどは古代のものと思われる。

鉄滓は5遺構から出土している。69点・760gが出土しているが、碗形鉄滓はみられず、いずれも球状の3cm前後の小さいものである。従って点数に対して重量は軽く、比重も軽いといえる。点数の多く出土している遺構は、SK922で47点・270gが出土し、またSB256からは10点・350gが出土している。鉄滓が出土したSB253・SK922・923からは羽口が伴っている。SK922はSK923からの混入である可能性がある。

(2) 銅製品・銭貨 巻頭図版2、図版224 - 59 ~ 77、付表11、PL82

銅製品は、銅鏡1点、簪1点が出土している。銭貨は45枚が出土しており、うち7枚は遺構外出土であるが、ここで取り上げていくことにする。

**銅鏡** 59は1期のSB261から出土した。背面の文様は鈕を中心点としてほぼ点対称に鶴と松葉が配されている。界圏は細線の単圏で松葉を線上に重ねており、松は枝が略され、葉のみの描写となっている。鈕は低い丸形で、鋸歯文のような文様で囲まれるが、鈕の輪郭は弱くはっきりしない。鈕の孔は形骸化し、無孔となっている。文様は全体的に起伏に欠け、繊細で力強さはない。縁は内傾するやや高めのもので、中縁に分類される。径10.2cm、厚み1.6cmを測る。

**簪** 77は先端が二又に分かれた簪で、その反対側は耳かき型となる。鍍金が施されていたようで、僅かに痕跡が残っている。中世に属するSK1089より出土したため、中世として扱ったが、近世のものと考えられる。

**銭貨** 総数45枚が出土した。うち遺構外の7枚は中世遺構検出時に得られたものであるためここで扱う。銭貨は付表11でみるように、住居址や掘立柱建物址、溝址からも出土するが、ほとんどは土坑から出土しており、13基から16枚がみられる。銭名判読不可能なものを除いて、銭貨はすべて渡来銭であり、唐銭3枚、北宋銭13枚、明銭2枚となっている。初鑄年が最も新しいものは「永樂通寶」(1408年)で、火葬墓であるSK1271から出土している。銭貨を多く出土した遺構はST92で7枚、次いでST101より6枚が出土している。銭貨の種類は17種類あり、多いものは「開元通寶」で4枚が確認され、また「天聖元寶」・「熙寧元寶」・「元豊通寶」が各々3枚ずつあり、他は1枚ずつ確認されている。

5 石製品 (図版224 - 29 ~ 35、付表12・13、PL83)

総数9点が出土している。内訳は砥石7点、石硯2点である。このうち石硯は「2 文字関係資料」で取り上げた。ここでは砥石について記述することにする。

**砥石** 古代の砥石はいずれも住居址からの出土であったが、中世では掘立柱建物址、溝、土坑より出土している。7点とも中世1期の遺構から検出された。石材は6点が凝灰岩であり、4点は目が比較的細かいⅡ類に属するものであるが、SD60出土の凝灰岩製の2点については更に目が細かく、Ⅲ類と分類できるものである。他の1点は、SD60から出土したもので、変成岩製であり、目が粗く、Ⅰ類に分類した。SD60出土の3点は扁平な板状を呈すもので、そのほかは3点が短軸の断面が正方形に近い角柱状のもので、もう1点は断面がおおよそ1 : 3くらいの長方形になる角柱状をなすものである。

6 土製品 (図版225 - 22 ~ 40、付表14、PL83)

土錘6点、用途不明の粘土塊が2点出土している。このほかに鞆の羽口が1421.2g確認されている。これらは中世の遺構から出土したものであるが、古代の項で扱った遺構外出土の土錘・羽口の中にも中世の遺物が含まれる可能性があるかもしれない。以下個別に取り上げていくことにする。

**羽口** 住居址2軒(SB253・255)から出土したほかに、9基の土坑から出土が確認される。ほとんどは1期に属すもので、特にSK923で757.0g、SK874で493.5gが出土している。このほかの遺構からは199.6gが出土する。遺構は中部南区と南部北区の境付近に集中しており、50cm前後の小さめの土坑からの出土が多い。SK922はSK923と切り合い関係にあり、SK922出土の羽口はSK923からの混入の可能性がある。羽口と関係の深い鉄滓が伴出している遺構は、SK922・923の2基がある。

**土錘** ST104から3点、SD60から3点が出土している。大きさはほぼ近似しており、長さ3.0 ~ 3.5cm、1.8 ~ 2.3cmである。重量は8.9 ~ 18.6gに分布している。ST104出土の37は残存率約50%である。6点

とも土師質で、調整は指オサエである。

**粘土塊** SK874・929の2基から出土している。2点とも酸化焰焼成で、植物繊維が混入しており、前者は滑らかな面を僅かにもち、後者のものは指オサエが明瞭に残る塊状のものである。

## 第5節 近世の遺物

### 1 土器・陶磁器 (第130図・第36表)

#### (1) 概観

総数で106片が出土している。時期別にみていくと、17世紀代のものが12片、18世紀代から19世紀に入るものとして23片、確実に19世紀代といえるものが35片出土している。ほか36片は時期の限定ができない。また、明らかに明治時代の所産として、瀬戸・美濃系の磁器碗を中心に26片が確認されている。遺構からの出土は、SD71(第130図1~3)とSL3らのものがある。SD71からは17世紀から明治時代に至るまでの遺物がみられ、瀬戸・美濃系陶器の天目茶碗・丸碗・丸皿・香炉・播鉢、在地系陶器として播鉢、産地不明の土鍋・甕、肥前系陶器の碗、肥前系磁器の碗・皿、明治時代に属するものでは、瀬戸・美濃系磁器の碗・壺がある。またSL3からは、瀬戸・美濃系陶器の碗・播鉢・片口鉢が出土しており、時期的には18世紀後半以降のものと考えられる。

分布は、全期間を通じて全域に点在するが、特に18世紀後半以降の遺物は、中部北区と北部南区の北半に多い。以下、主な遺物を取り上げて記述をする。

#### (2) 土器

小片のため、形態をつかむことができない。土鍋と思われるものは、口縁部の破片で、火鉢の可能性もある。断面は丸みがあり、器高は低いと思われる。

#### (3) 陶器

**碗：瀬戸・美濃系** - 17世紀の所産では、天目茶碗・丸碗が確認できる。天目茶碗は高台を削り出したあと、高台脇(体部下半)を削らず、ロクロナデ調整を残している。丸碗にも同様の調整が認められる。1に図示した丸碗は小型のもので、鉄釉は黒色と茶色が斑状に発色している。

18世紀代のものとしては、拳骨茶碗があり、ムラのない安定した釉調を呈し、厚く掛けている。18世紀から19世紀のものとしては、いわゆる御深井釉の丸碗が多く、貫入の多くはいった黄緑色の釉調をしている。

**碗：肥前系** - SD71と中部北区から1点ずつ底部片が出土している。2点とも類似しており、透明感のある淡黄白色の釉調を呈し、細かな貫入が多い。素地は黄味がかり、軟質感が強い。

**皿：瀬戸・美濃系** - 長石釉の掛かったいわゆる志野織部の丸皿が4点出土している。そのうち2を図示した。口唇部と見込みに鉄絵をみることができ、また、ほかの底部片では、内面に草花文を描いているものがある。このほか、18世紀後半以降の灰釉丸皿や鉄釉燈明皿が出土している。

**鉢：瀬戸・美濃系** - 錆釉を施した播鉢が出土している。体部外面を丁寧に回転ヘラ削りし、釉を薄く刷毛塗りしている。SD71から出土した3の播鉢は、15本を一組として播目をいれている。

**鉢：在地産** - 佐久市川越石焼か、飯田市富田焼と思われる播鉢の口縁部片がSD71より出土している。釉調は透明感・光沢のない緑色を呈し、厚く掛けられている。4本の隆帯を口縁部外面に貼り付けている。素地は赤味が強く、軟質感がある。

**甕：産地不明** - 素地の色調は赤っぽく、外面に錆釉を施している甕がある。内面には指頭圧痕が多く観察され、外面は横方向に丁寧にナデが入れられている。常滑系のものであろうか。



その他：瀬戸・美濃系 - 香炉が出土している。口縁部片と底部片があり、前者は口縁部を内側に折り返し、灰釉系の釉を外面に施している。後者は、体部外面に御深井釉を施し、底外面は回転ヘラ削りがみられる。

(4) 磁器

碗：肥前系 - 菊花文の周囲に氷裂地文を描く小碗が出土している。そのほか、文様はよくわからないが、素地の色調から19世紀に下りそうな碗がある。

皿：肥前系 - 1点については、底内面に山水文を描くものがあり、19世紀でも新しいものであろう。瀬戸・美濃系の可能性もある。そのほかは小片でよくわからない。

2 金属製品

(1) 鉄製品 付表9・10

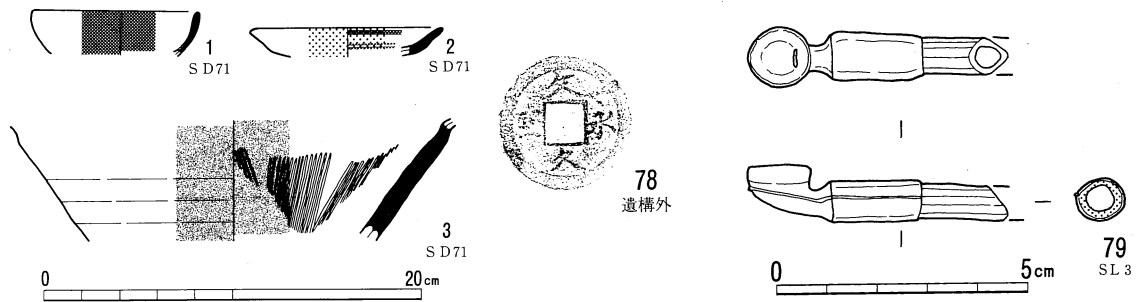
2点出土しているが、図示はしていない。ST118から出土した刀子は刃部破片で、使用による磨り減りが著しい。棒状鉄製品はSL3より出土したもので、断面が長方形になる棒状鉄製品である。釘である可能性が高い。

(2) 銅製品・銭貨 第130図78・79、付表11、PL82

煙管が1点、銭貨が2点出土している。

79の煙管は、雁首部分とラウの木質の一部が残存しているもので、火皿と首部は1枚で巻かれている。脂通しは非常に短く緩やかな傾斜をなし、火皿は低い。SL3より出土したもので、近世でも全体に新しい段階の様相をもっている。

銭貨はSD71からと遺構外から出土したものがある。遺構外出土の銭貨(78)は「文久永宝」(初鑄年1861年)で、SD71出土の銭貨は銭名が読めない。



第130図 近世陶磁器・銭貨・銅製品実測図

陶器 94	瀬戸・美濃系陶器 61			肥前系陶器 2		磁器 8	瀬戸・美濃系磁器 2					
	碗	天目茶碗	3	碗	碗		碗	碗	2			
		拳骨茶碗	5				肥前系磁器 6					
	皿	丸碗	23	その他の産地 31			碗	碗	3			
		丸皿	7	碗	碗				小碗	1		
	鉢	燈明皿	1				皿	燈明受皿		挿鉢	皿	皿
		挿鉢	4	鉢	片口鉢				1			
		片口鉢	4									
	壺	捏壺	4	瓶	土瓶		1	土器 4	産地不明 4			
		壺	1						甕	甕	9	鍋?
瓶	土鍋	1	甕	甕	9	甕	甕	1				
	土瓶	1				その他	不明	13				
その他	德利	1										
	徳香	2										
	不	4										

第36表 近世土器・陶磁器 器種構成表

## 第4章 考察

### 第1節 遺構の変遷と構造

#### 1 竪穴住居址の変遷

本遺跡で検出された竪穴住居址は、古代に属するもの235軒・中世27軒、総計262軒である。竪穴住居址の存在しない時期があり、また時期ごとの軒数に多少は認められるものの、その変遷をおおよそたどることができる。ここでは、時期を追って変遷の過程に検討を加えるとともに、建物の構造把握に迫ってみたい。なお、出土土器からみた住居址の各時期の軒数については付表5にまとめた。

##### (1) 規模と形状

主軸とそれに直交する軸方向の長さで規模と形状を示し、時期別に分布をまとめてみた(第131図)。規模については「小型」～「超大型」まで6分類し、凡例に示した通りである。

古代において初めて竪穴住居址が構築される1期では、軒数が少なく明確に傾向を指摘できにくいものの、中型の規模で方形を呈するという、比較的均質の竪穴住居址で構成されている。しかし、同じ中型の住居址でも、15㎡程度の規模を有する中型1と30㎡前後の大型1に近い中型2に大別される。

次の2期では、規模の大小の相違が顕著にみられるようになる。すなわち、1期に存在した中型の二つの規模の住居址に、10㎡未満の小型のものと50㎡以上の大型2の規模のものが新たに加わり、大きく4グループに分かれる。形状は直交軸が長い長方形2を呈するものがわずかに存在するものの、基本的には方形が多い。

3期では、ふたたび均質化する傾向を示す。中型の大小二つの規模があり、平面形は方形を呈するという、1期同様の状況になる。また、35㎡前後を中心にして同規模・同形状の住居址が集中することが、特徴的に認められる。

4期から7期にかけては、住居址の小規模化という方向での変遷が認められる。4期は、3期の状況を引き継ぎつつ、小型の住居址が現われ、核は15㎡前後の規模に移る。直交軸が長い長方形2を呈するものが存在し、長方形1の竪穴住居址の数が増加する。5期では、4期の動きを受け継ぎ、中型2に比べ中型1の数が圧倒的に多くなり、小型の住居址も数を増す。主軸線の方に長いものと直交軸が長いものの、2種類の長方形1・2を呈する竪穴住居址の数が増えるのが目立つ。6・7期にかけて、中型2が認められなくなるなど、小規模化する一方で、小型の住居址の数は減少し、15㎡前後の規模のものがほとんどとなり、形状も方形を呈するものの数が増えるなど、均質化する傾向がみられる。

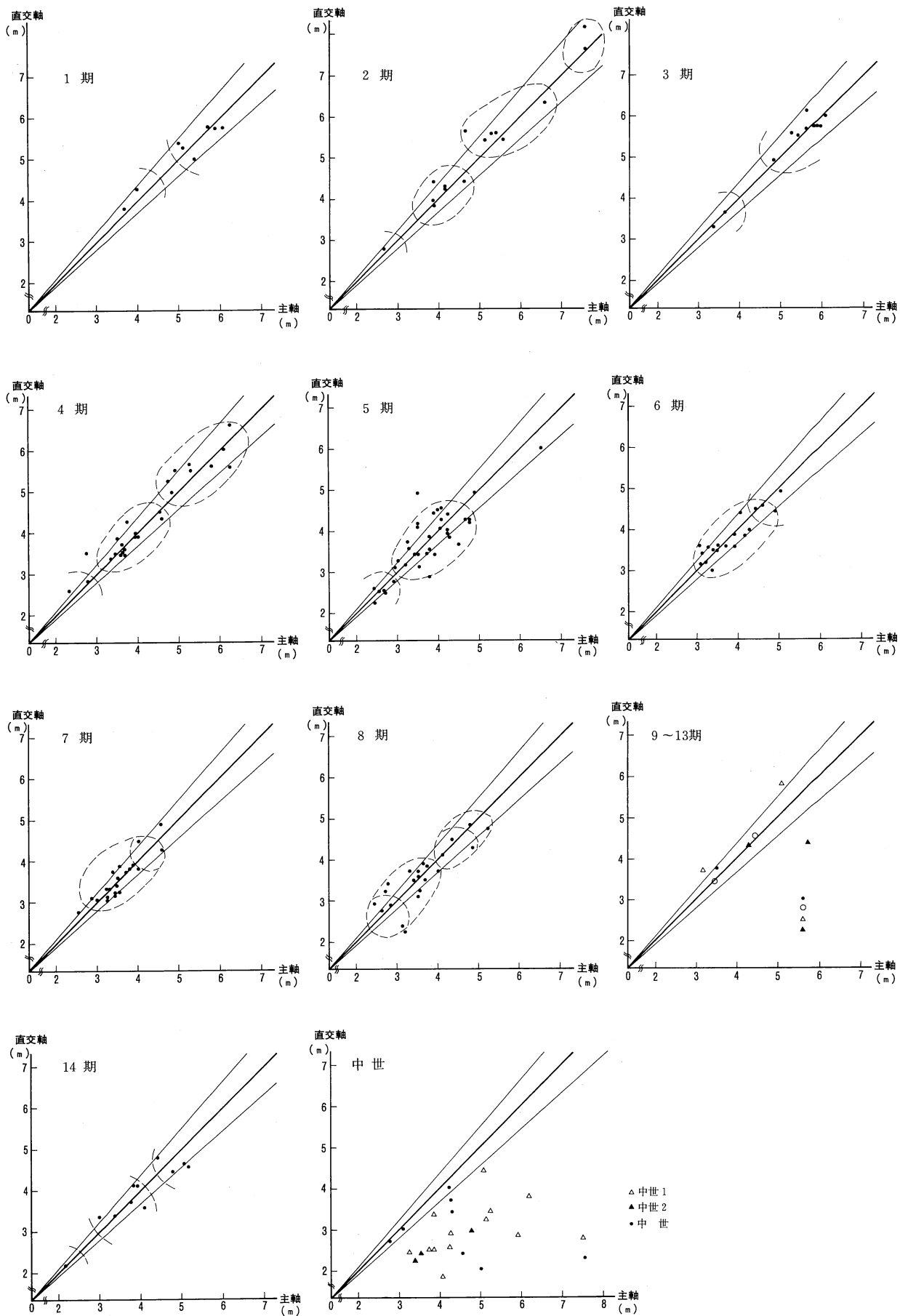
8期にいたり、20㎡以上の中型2に近い規模の住居址がみられるなど、やや大形のものが認められるようになる。また小型の住居址も比較的数量多く存在するので、前時期に比べて規模の多様化がはっきりとする。形状は長方形1・2を呈するものが数多く存在し、5期の特徴に類似している。

9期から13期の間は、軒数が少なく、変遷として捉えることは難しいが、規模のバラエティーがあることは、8期の特徴を引き継いでいるといえよう。

14期では、規模は小型から中型2までに分散して存在しており、8期以来の傾向と同様である。形状についても長方形1を呈する住居址の数が多く、状況に大きな変移はない。

15期は、軒数が少なく傾向をつかむことができない。

中世の竪穴住居址は、古代から時期的に継続して存在しておらず、カマドが消失するなど建物としての性格もかなり異なっていると考えられ、すべてを同じ系譜の上で論じることは無理がある。しかし、覆屋を持つ居住空間の可能性の強い竪穴ということでは、両者に共通する部分があるので、比較検討してみる



第131図 竪穴住居址の規模と形状度数分布

ことにする。形状のうえでは、古代の竪穴住居址と平面形がまったく異なるものが、新たに出現する。すなわち、平面形の長辺が短辺の2倍以上を測る、極めて細長い形状を呈しており、明らかに系譜を異にする竪穴住居址と捉えることができよう。一方で、形状や壁・床面の状態が古代の竪穴に類似するものもいくつか確実に存在している。規模は10～20㎡の間にほとんどが存在しており、これは古代の5期以降の規模と一致する。

最後に竪穴住居址の深さについて触れたい。竪穴住居址の深さは、廃絶以後の土層堆積の状況や上面の耕作などの程度、さらに覆土と地山の判別など検出の難易度によって、実際の掘り込み面からの深さとかなり異なった数値となることがある。しかし、隣合う住居址間でも明らかに床面のレベルが異なる場合が認められることも多く、それが壁や屋根の構造などと密接に関わりをもつことが考えられる。

まず、時期別に深さの違いを住居址数で一覧してみる(第37表)。全体の傾向として、深さ10cmから30cmの間にピークを持ち、深さが増すとともに数の減少をみせる。時期別の状況をみると、1期から8期までは、1期にやや浅いものが多く、2・6・8期は30cmを越えるものが多いものの、全体的には変化が少ないのに対し、14期の住居址は、10cm以下の深さが一番多く、30cm以上の深さをもつ竪穴住居址がほとんど存在しなくなり、明らかに掘り込みは浅くなる。形状では長

	～10 cm	～20 cm	～30 cm	～40 cm	～50 cm	～60 cm	60 cm～
1 期	1	4		1			
2 期		3	4	5	1	3	
3 期		3	6	1	2		1
4 期	1	6	11	1	5	2	1
5 期	5	13	10	7	6	4	1
6 期	2	4	3	5	4	3	1
7 期		9	7	4	3	1	
8 期	1	4	5	7	4	4	3
14 期	5	4	4	1	1		
中 世	1	6	9	6	3	1	1
合 計	16	56	59	38	29	18	8

第37表 竪穴住居址時期別深度一覧表

方形が多く、掘り込みでは浅くなるのが古代末期の特徴といえよう。中世の竪穴住居址と比較すると、深さ30cmをピークとする正常分配曲線に近い分布状況を示し、14期の傾向とは異なる。

つぎに、規模と深さの関係を検討する。ほぼ同時期に構築され、検出の難易や検出面のレベルが類似するという、条件をできるだけ近づけた北部南地区の8期の住居址19軒で比較した(第38表)。10㎡以下の規模の住居址では、10～40cmの深さが多い。これに対して、10～20㎡の規模では40～60cmの深さのものが多くなり、20㎡以上の規模では50cm弱と60cm強の深い掘り込みとなる。

	～10 cm	～20 cm	～30 cm	～40 cm	～50 cm	～60 cm	60 cm～
～10 ㎡		2	2	2		1	1
～20 ㎡			2	1	2	3	1
20 ㎡～					1		1
合 計	1	2	4	3	3	4	3

第38表 北部南・中地区8期住居址深度一覧表

もちろん、これは傾向としてとらえられるのであり、個々の竪穴住居址の深さは規模に規定されているのではない。しかし、全体の状況をみたととき、小規模の住居址に浅い掘り込みが多い傾向は指摘でき、壁や上屋の構造あるいは建物の性格と関わる重要な観点と考える。

## (2) 柱配置

柱配置を含む柱穴や柱痕跡の様相・構造は、上屋等の究明に当たっての重要な判断材料である。しかし、

第39表に示すように、本遺跡で柱穴をもつ竪穴住居址は全体の20%に過ぎず、そこから柱配置が復元できる例はさらに少なくなる。また、柱穴も柱痕跡まで把握できた例は皆無に等しく、この状況のもとでは、建物の柱配置を理解することすら難しいといわざるを得ない。限定された資料ではあるが、変遷を概括しながら構造の変化などを考えたい。

まず、時期を追って、柱穴を有する住居址の数と割り合いをみてる。1期から7期にかけては、時期によって増減はあるものの、ほぼ全体の柱穴を有する住居址の割合に近い、20%前後の住居址で柱穴が確認され

	有柱穴 住居址率	有礎石 住居址率	有柱穴 住居址 規模						4本柱 住居数
			小 型	中型 I	中型 II	大型 I	大型 II	超大型	
1 期	3/6・50%	0/6・0%			2	1			2
2 期	3/17・18%	0/17・0%			2	1			3
3 期	7/14・50%	0/14・0%			2	5			4
4 期	5/29・17%	0/29・0%		2	1	2			2
5 期	13/46・28%	1/46・2%	1	6 (1)	3	2			5
6 期	4/22・18%	0/22・0%		4					1
7 期	4/24・17%	1/24・4%		3	1 (1)				1
8 期	2/29・7%	1/29・3%	2 (1)						1
9～13	1/9・11%	2/9・22%		(1)	1 (1)				1
14 期	0/14・0%	0/14・0%							
総 計	42/210 20%	5/210 2%							
			3 (1)	15 (2)	12 (2)	11			19

第39表 時期別有柱穴住居址数一覧表

( ) 内は有礎石住居址数

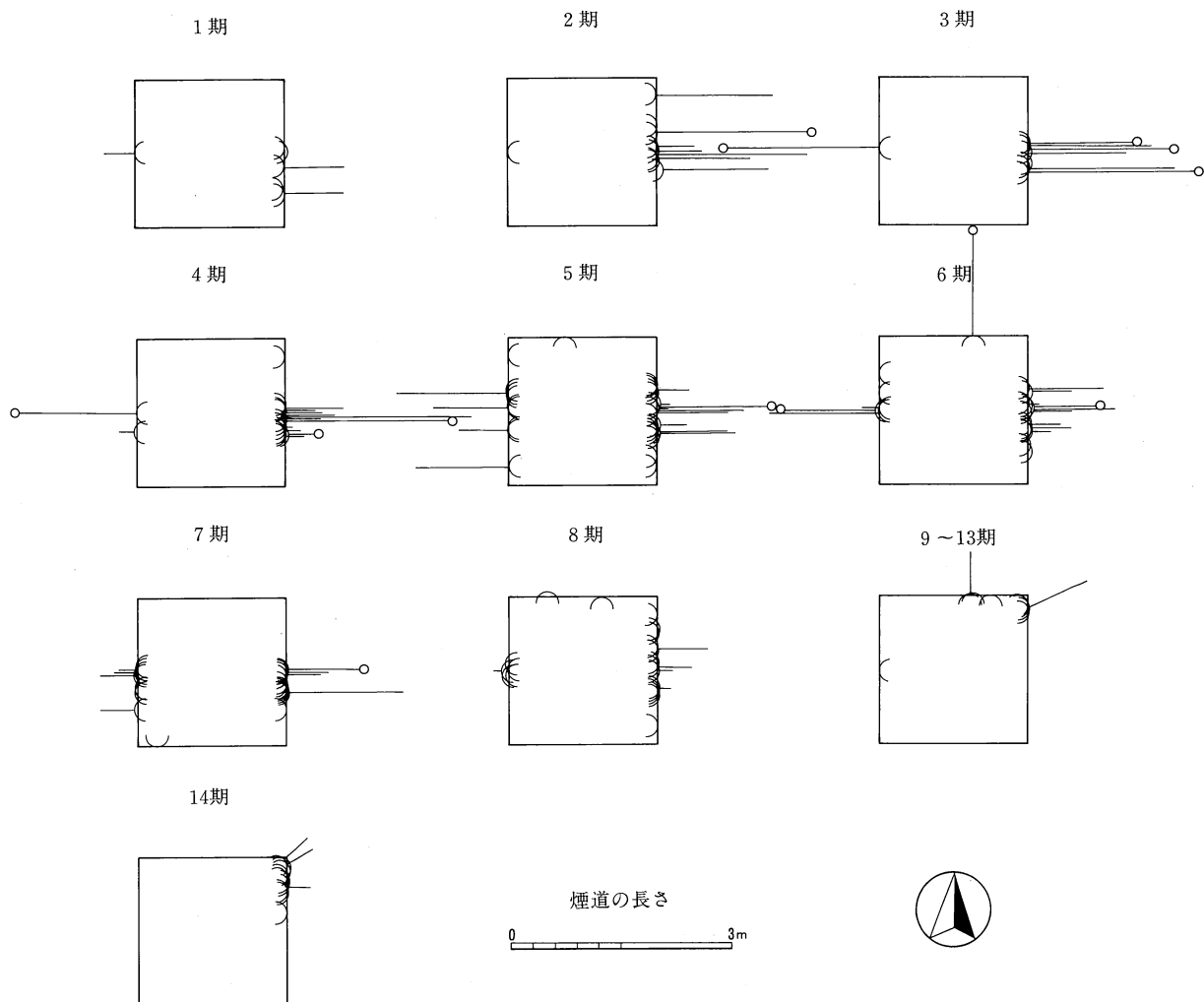
ている。8期から13期で、その割り合いが10%程度に半減し、14期にいたると柱穴を有する竪穴住居址は認められなくなる。しかし、四隅付近に柱穴を配する、4本柱の柱配置が確認できた住居址の数でみると、5期まではかなりの割り合いで存在するのに対して、6期以降はほとんど柱配置を明確にできる住居址がなくなる。全体に柱穴掘り方が浅くなるとともに、3基以下の柱穴をもつもの(SB68・152等)、竪穴住居址の外に4本柱を配するもの(SB150)、柱穴と礎石をもつ住居址(SB225)などが認められるようになる。圧倒的に多いのは、まったく柱穴を有さない住居址であり、時期が新しくなるにつれて割り合いが増すが、その柱配置などは明確にならない。柱穴を有する住居址を規模との関係で検討すると、1期から3期では、中型2以上の規模の竪穴住居址に限られ、4期では中型1から小型の住居址に柱穴を有する住居址が出現し、時期を追って小型の割り合いが増加していく。これは、竪穴住居址全体が小規模化していく傾向と同一の流れでもあり、当初は比較的大規模の住居址に限られていた柱穴の構築が、規模に係わりなく柱穴を設けるようになり、やがて省略されていったと捉えるのが妥当であろう。

礎石と思われる平石が、床面をわずかに掘りくぼめて据えられているのが確認された例が5例ある。柱穴と混在するという変則的な在り方を示す1例(SB225・5期)を除くと、7期から13期までに少数認められている。前述したように、7期前後が4本柱の柱穴を有する住居址が判然としなくなり、一つの画期と捉えられることから、この時期に礎石を設ける竪穴住居址が出現することは注目される。さらに、礎石が壁に沿って1～1.5mの間隔で並ぶ、掘立柱建物址を思わせる柱配置をもつものに対して、柱穴の場合は壁沿いには存在せず、柱間間隔が2.5～4mを測るという差異を指摘することができる。この間の事情は上屋構造に直結する問題を秘めていると考えられる。

(3) カマド

竪穴住居址内の諸施設のうち、カマドについて時期を追って検討を加えたい。カマドはほとんどの住居址に普遍的に付属する施設であるので、変遷や特徴をとらえる材料となりやすい。しかし、住居址廃絶時

にカマドを破壊する例が多いことや、煙道・天井部・袖などが構造的に残存しにくいことから、限られた内容で比較・検討せざるをえない。ここではカマドの位置と煙道の方向・長さを概念図に表わし、形態の大まかな変遷を追ってみた(第132図)。それと、個別の要素や構築材などの変化(第40表)を照らし合わせな



第132図 カマド位置・煙道変遷模式図

がら、時期別の特徴と傾向性を概述してみたい。

まず、1期から3期にかけては、東壁中央に、住居址の主軸線と同方向でカマド・煙道を構築し、水平で長い煙道を持つ例が圧倒的に多い。また、堅穴住居址を掘りくぼめる際、袖部分の地山を掘り残しておき、それを芯として粘土で袖や天井部を構築している。言ってみれば、先に敷設を計画的に想定しての住居址構築と思われる例が多い。さらに細かく時期別の特徴をみると、1期ではカマド内の支脚に小形土器を逆位にして用いており、石製の支脚が一般的な他の時期との大きな相違点となっている。2期・3期と全長2mを越えるような煙道が穿たれ、3期では水平に延びた煙道が垂直に上に伸びる煙出し部分には円形の掘り込みを設ける、いわゆる煙道先ピットを持つものが多くなる。住居址の壁を凸状(函形)に掘り込んで、奥壁や燃焼部を構築する例も次第に増加していく。

4期から6期では、壁を函形に掘り込み、煙道先ピットを有するカマドが特徴的にみられる。カマドの位置や煙道の形態、地山を掘り残しての袖構築など、基本的にはそれまでの特徴・傾向を受け継ぐ。西向きカマドや東壁でも中央部以外の位置に構築されたり、カマド位置にバラツキが認められるようになり、煙道の長さも短くなるなど、新しい傾向が現われる。そして、この傾向は時期を追って明確になり、5・6期では東壁中央以外に構築されるカマドの数が多くなる。また、袖と天井の構築材も、いくつかの大き

	袖掘残し	煙道先P	袖土器使	袖構築材		壁への掘込		煙道の傾き				煙道口の高さ			
	住居址率	住居址率	住居址率	粘土	石組	方形	円形	～5°	～15°	～25°	30°～	～5cm	～15cm	～25cm	30cm～
1期	2/6・33%	0/6・0%	0/6・0%	5		1		2	1			1	2		
2期	3/17・18%	1/17・0%	1/17・0%	8	5	2	3	5	2				4	2	1
3期	2/14・14%	4/14・7%	1/14・7%	11	2	1	5	6	1			1	4	2	
4期	4/29・14%	3/29・11%	0/29・0%	18	10	4	9	4	3	2		1	6	4	2
5期	9/46・20%	1/46・2%	0/46・0%	25	13	8	12	2	6			1	8	4	4
6期	3/22・14%	3/22・14%	1/22・5%	11	11	6	7	1	4	5		1	6	5	1
7期	1/24・4%	1/24・4%	4/24・17%	7	16	7	5	1	3	2	1		5	1	1
8期	0/29・0%	0/29・0%	0/29・0%	1	21	2	8		1	1			2	3	1
9～13	0/9・0%	0/9・0%	0/9・0%		8			1	1				1	1	
14期	1/14・7%	0/14・0%	0/14・0%	2	10	1	3	1		1	1	1	1	1	
総計	25/210 12%	13/210 6%	6/210 3%												
				88	96	32	52	23	22	11	2	6	39	23	10

第40表 カマド構成要素一覧表

な平石を組んで粘土を貼り付ける例がしだいに数を増す。袖石の使用は、梓川系の堆積がみられる北部北地区などの下層や周囲に礫が多くみられる地域で割り合いが高く、本地域では小礫の入手がしやすいことを契機にして、石を使用したカマドを構築したことも考えられる。

7期はカマド構築に大きな変化が生じる時期である。地山を掘り残して袖を構築したり、煙道先ピットを設ける例が、7期以降ほとんどなくなる。また、袖の構築材に石を用いるものが大多数となり、壁への掘り込みも、函形から船底形に変化していく。さらに、煙道の立ち上がる角度が、水平方向から急角度になり、奥壁と煙道の判別がしにくくなる。この時期に限定されるように、土器を袖に貼り付けて構築材の一部としているカマドが存在するのは、該期の特徴であるとともに注目される点である。8期は、7期の傾向がさらに明瞭になり、特に煙道は、1期以来の長く水平なものはまったく構築されなくなり、奥壁や住居址の壁と同角度で立ち上がるために確認できなくなる。

本遺跡ではまったく住居址が構築されない空白時期を挟み、11期では、北東隅に住居址の主軸線とまったく異なる方向にカマドが設けられる。9期から13期は、検出例が少なく傾向などの把握は難しいが、11期以降新たな方法によってカマド構築がなされたのであろう。比較的小さな石を多く組み合わせて袖や天井部を構築し、煙道を急角度で立ち上がらせている点は、これまでの傾向を受け継いでいる。

最後に、火床と煙道口の比高差であるが、10～20cmを測るものが大部分であり、時期的な変化はほとんど認められない。7期以降、奥壁と煙道が判別しにくくなるという問題点は残るものの、変化の激しいカマドの形態にあって、機能に直結すると思われる煙道口の高さはほとんど変化しなかったといえよう。

## (4) 諸施設

カマド以外の施設について、個別に状況と変遷を検討する。

まず、住居址の床面の状況であるが、薄く粘質土などを入れて硬く締めるいわゆる貼床と、地山あるいは掘り方の土の上部を平坦にしているだけの床とに、大きく大別される。時期別に貼床の確認できた住居址数とその割合を比較する(第41表)と、多少の増減はみられるものの、時期別の変化などは特に認められず、貼床を有する住居址の割合である25%に近い数値で各時期終始する。したがって、貼床の構築は、古代には一般的に認められ、その割合などは変化しなかったと思われる。つぎに、床面あるいは床下の掘り込みに焼土や炭化物と遺物が伴うピットについては、貼床と同様に時期別の変化は認められない。ピットの位置が、カマドの袖から焚口付近に設けられるものと、四隅に近く構築されるものとの、二つに大別されるが、これも時期別の傾向や変化は認められない。

限定された時期に存在する施設として、周溝とテラスがある。周溝は、5期以前にごく少数認められ、4柱穴を持つ住居址に限って存在する。しかし、竪穴住居址の掘り方は、柱穴の外側から壁際を深く掘り込む例が多いことから、周溝と掘り方の判別が難しいこともあって、施設としての性格や構築割合などは明らかにならない。壁に沿って一段高い部分を設けたり、地山をその部分だけ掘り残す、いわゆるテラスは、7期以前に認められる。SB65のように全周に近く構築されるものと、壁の一角などに部分的に築かれるものがある。2期から4期にかけて、カマドの脇を柵のように一段高くしたり、壁の一部に階段のように高まりを設ける例がみられ、後者は入り口施設を想定させる。いずれにしても事例が少なく、不明確な部分が多い。

そのほか、さまざまな位置への掘り込みや、据え付けられたように床面上に位置する平石などもいくつかが検出されたが、いずれも普遍的な施設として、性格や変遷をとらえることはできない。

## (5) 軸線の方向

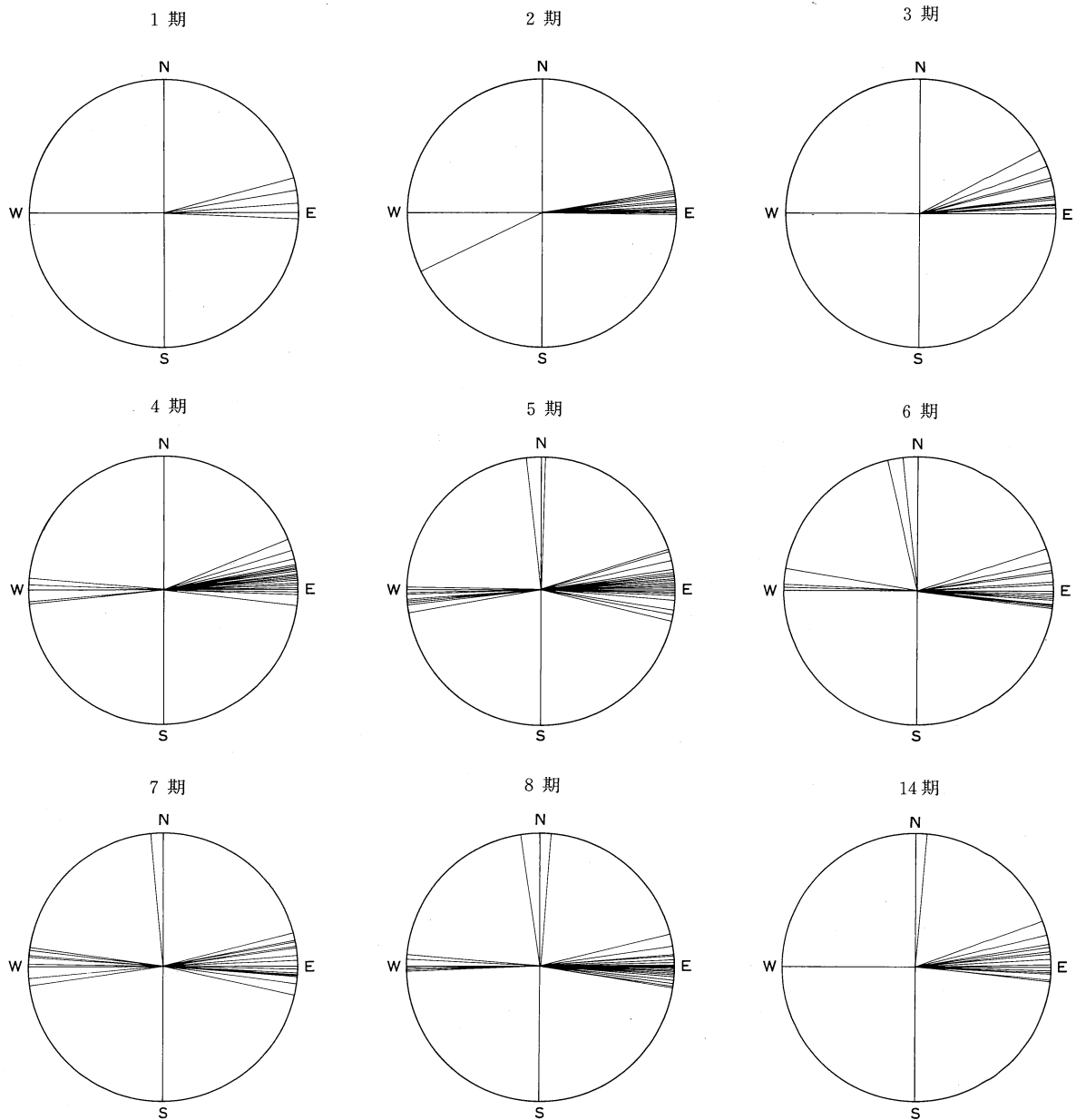
住居址の方向をカマド位置から割り出した主軸線との角度で示し、時期別の変遷をみた(第133図)。1期から3期までは、軸を東西軸線に合わせるように、東からわずかに北東方向までの間で住居址を構築しており、ほとんどが東にカマドを設置している。特に2期においては、遺跡全体に竪穴住居址の分布が広がっているにもかかわらず、1軒を除くすべてが、東西軸線から北10°以内に方向を合わせるように構築されている。新たに竪穴住居址が構築され始める2期に、軸規制ともいえる現象が遺跡全体に認められるのである。3期になると、北を向く住居址がいくつか存在するなど、やや主軸線方向にばらつきがみられるようになる。

4期から7期の間では、3期の傾向を引き継いで軸線の方向のばらつきがさらに進み、西あるいは北向きに主軸線を持つ住居址がみられるようになる。また、西カマドの住居址は確実に数を増し、東カマドの住居址と分布が混在して位置する。しかし、カマドの位置を除くと、基本的には東西・南北の方向で軸線をもって構築されている。東西軸線から北に10°以内の方向の住居址が圧倒的に多いことは、3期までの傾向と一致するが、東西軸線より南の方向の住居址が多くなっていく。7期になると西向きの住居址の

	有貼床 住居址率	有灰溜P 住居址率	有周溝 住居址	有テラス 住居址
1期	2/6・33%	1/6・16%		
2期	5/17・29%	2/17・12%	1	2
3期	6/14・43%	0/14・0%	1	1
4期	8/29・28%	4/29・14%		2
5期	12/46・26%	5/46・11%	1	1
6期	8/22・36%	6/22・27%		1
7期	4/24・17%	4/24・17%		1
8期	4/29・14%	1/29・3%		
9~13	2/9・22%	2/9・22%		
14期	4/14・29%	6/14・43%		
総計	55/210 26%	29/210 14%	3	8

第41表 住居址内諸施設一覧表





第133図 竪穴住居址の方向

割り合いが増し、方向のバラツキはさらに進む。北部南地区から北部北地区にかけては、7期には西向きの住居址がほとんどを占めている。

8期にいたると、ふたたび東西軸線に方向を合わせる住居址が増加し、東西軸線から南・北へ各々 $10^\circ$ 以内の方向に構築されるものがほとんどである。西に軸線を持つものが一定の割り合いで存在し、北のものが少数見られる点は、4期以降の傾向と一致する。9期から13期の間は傾向をとらえることができない。14期では、西方向の主軸線の住居址がみられなくなり、東に主軸線をもつ住居址が東西軸線に近い方向で分布するようになる。西カマドの住居址が存在しなくなることは、それまでの傾向と大きく異なるが、東カマドの住居址の方向は8期に類似する。なお、中世の竪穴住居址は、カマドが存在しないので直接比較することができないが、東西・南北の軸線に正しく方向を合わせている。

## 2 掘立柱建物址の変遷

本遺跡全体の掘立柱建物址の棟数は111棟であり、時期別の内訳は古代71棟、中世37棟、近世3棟となる。しかし、古代の後半では建物址がほとんど確認できないなど、時期によって棟数が大きく異なることや、遺構の性格上時期の確定が難しいことなど、時期を追っての傾向や変遷を比較・検討する上でやや問題になる点が認められる。ここでは、100棟を越える掘立柱建物址の帰属時期をできるかぎり限定し、大きく時期ごとの特徴や傾向性を把握することで、掘立柱建物址の機能や性格なども考え合わせながら、古代から中世までを概括したい。

## (1) 規模と形態

形態は桁行方向と梁行方向の柱間数(第42表)によって、規模は両方向の長さや面積(第134図)によって

	1×1	2×1	2×2	3×1	3×2	3×3	4×1	4×2	4×3	4×4	5×3	5×4	5×5	6×4
2期		3	1		2			3	2					
3期		2	10	1		1		1	1					
4期		2	5		1									
5期	1	2	8		5			1	1					
6～8期		3	3		1									
12・13期			3											
中世		4	4		7	5	2	2	2	1	1	2	1	2
近世			1					1	1					
合計	1	16	35	1	16	6	2	8	7	1	1	2	1	2

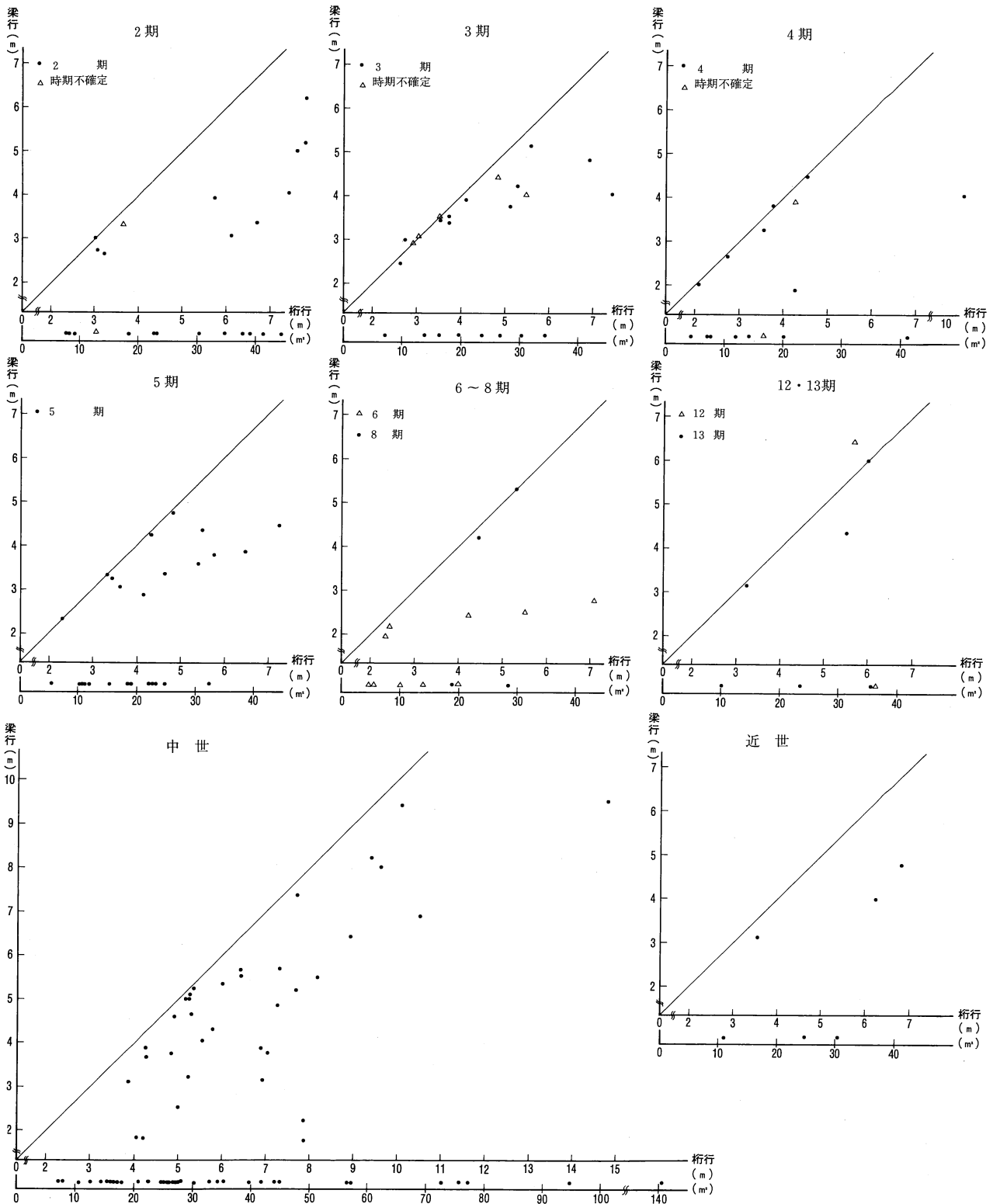
第42表 掘立柱建物址規模別一覧表

表わし、時期別に比較してみた。

掘立柱建物址が初めて構築される2期の建物址は、4×3間あるいは4×2間で30㎡から40㎡を越える大きなもの、4×2・3×2間で20㎡前後のもの、2×2・2×1間で10㎡程の小さなもの、と大きく三分できそうである。大形の建物址は全部で5棟検出され、南部北地区と中部南地区に集中して存在する。このうち西または東に庇をもつものが3棟認められ、40㎡以上と大きな面積をもち柱穴の掘り方なども1mを越えるものが多い。中規模以上の建物址は、平面形が長方形を呈するのに対して、小形になると方形を呈するようになる。また、小形の建物址のうち、1棟存在する2×2間のものは総柱建物であり、他はすべて2×1間の規模である。

3期から5期にかけては、庇の付くような大形の建物址の数が減少するが、ほかは2期の状況を受け継いでいる。3期では、2×2間の建物址の数が過半を占め、それが面積20㎡程度と10㎡前後の二つに分かれる。2×1間を含む小形の建物址は、基本的に方形を呈するのに対し、20㎡以上の建物址は長方形を呈し、規模が大きくなるにつれて細長くなる傾向を示す。4×3間・4×2間の規模の建物も少数存在するが、庇をもつものはなく面積も小さくなる。4期は事例が少なく、全体に面積が小さくなるものの、3期とほぼ同様の傾向を示している。1棟だけ存在する大形の建物址は、形状・柱配置など他に類例が認められない。5期は3期と状況が良く似ており、面積10㎡・20㎡・30㎡の付近に集中して分布し、やはり大きく三分できる。20㎡前後の面積の建物に、2×2間の方形のものと3×2間の長方形を呈するものが、相半ばして存在する点が3期などとやや異なる部分である。規模や形状が不明確ながら、庇をもつ大形の建物が、数は少ないもののこの時期までは確実に存在している。

6期以降になると、掘立柱建物址の事例が非常に少なくなる。しかし、まったく存在しなくなるのではなく、少数ながら竪穴住居址とともに構築され続ける。数が少ないので、傾向などの明確な指摘はできな



第134図 掘立柱建物址の規模・形状

いが、6期から7期にかけては平面形にかなり細長い長方形を呈するものが目立ち、8期では2×2間の総柱建物に20㎡を越える大きな面積のものが現われる。12・13期でも、2×2間の建物の大形化が指摘され、30㎡を越えるものも出現する。

2～8期において、掘立柱建物址1棟に対する竪穴住居址数を概観してみると、2・3期においてはおよそ1棟に対し、竪穴住居址1軒の割り合いで存在し、4期では1棟に対し4軒、5期では1棟に2～

3軒が存在し、徐々に掘立柱建物址の機能が堅穴住居址に転換されていく様子を見ることができている。6～8期では時期の限定が難しいが、4・5期と同様の形で存在し、1棟に対して最低3軒以上が組み合わせとなる。

中世の掘立柱建物址は、古代の建物址とは規模・形態ともに様相を異にする。4×4・5×5・6×4間といった、古代にはまったく見られなかった規模の建物が構築されるようになり、全体に建物規模が大形化する。しかも、そのほとんどが総柱建物である点も、古代との大きな相違である。古代でも8期以降では2×2間の建物の大形化が目立ち、総柱の建物が多くなる傾向があり、それを若干受け継いでいるとも考えられるが、系譜をたどることは難しい。平面形や規模においても、古代とは違った状況が展開される。面積10～15㎡と25㎡前後に分布の集中が認められるが、小形の建物に非常に細長い形状のものが多く存在し、25㎡程度の建物は正方形に近い形状を呈することは、古代とはまったく逆の現象・傾向である。30㎡を超える大きな建物も数多く存在し、方形もしくは方形に近い長方形を呈することも、規模が大きくなるにつれて細長くなる傾向のある古代の掘立柱建物址の在り方とは異なる。この大形の建物は、35㎡・40㎡・55㎡・75㎡あたりにまとまりを持ちながら、140㎡を超える大きさのものまで幅広く分布する。近世の掘立柱建物址が3棟検出されているが、中世との関係等は不明確である。

(2) 柱穴・柱間隔

掘立柱建物址の構成要素の中から、柱穴の大きさと柱間の間隔についてみる。柱痕跡の確認できた建物址が少ないことから、掘り方規模で比較(第43表)し、柱間の間隔は桁行方向を用いて(第44表)検討した。

	～30 cm	～40 cm	～50 cm	～60 cm	～70 cm	～80 cm	～90 cm	90～ cm
2期			1	1	4	4		2
3期			1	5	4	3	3	
4期	1		2	3	1	2		
5期	1	3	4	7	4	3		
6～8	1	1	1	2	4			
12・13		1	1	1				
中世	27	9						
近世	2	1						
総計	32	15	10	19	17	12	3	2

第43表 柱穴掘り方規模一覧表

	～140 cm	～160 cm	～180 cm	～200 cm	～220 cm	～240 cm	～260 cm	～280 cm	280～ cm
2期		3	2	5	2				
3期	1	3	4	4	1		2	1	
4期	2		2	1	2	1			1
5期		2	5	4	3	4	1	1	
6～8	2				1	2	2		
12・13		1							2
中世		2	9	10	7		5	1	
近世		1	2						
総計	5	12	24	24	16	7	10	3	3

第44表 桁行柱間隔一覧表

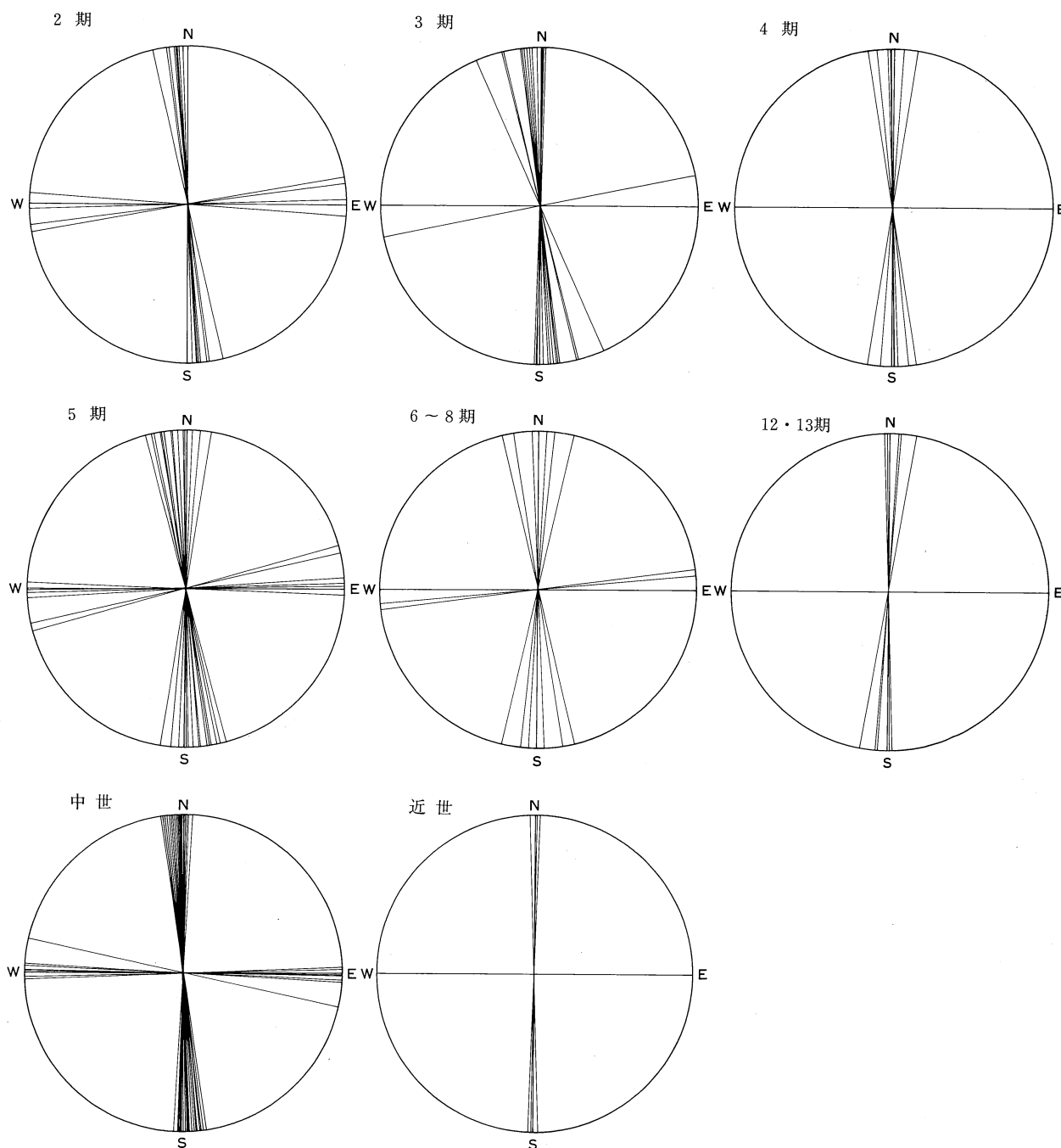
柱穴掘り方の規模は、古代と中世以降で明確に異なる。径40cmを境に、古代ではそれより小さいものはほとんど存在しないのに対し、中・近世の建物址では40cmを超えるものは存在せず、柱穴規模で大きく時期の想定ができることにもなる。また、古代においては、径50～70cmの規模に分布のピークがみられるものの、時期を追って確実に小さくなっており、その傾向の延長上に中世の小さな柱穴があるといえる。さらに、掘り方の平面形であるが、2期から5期にかけては、円形を呈するものと方形のものが混在し、徐々に円形のもの割合が増加する。そして、6期以降中・近世まで、わずかな例外を除いて、柱穴は円形に掘られることが基本となっていく。

次に、柱間の間隔をみる。2期から5期にかけては、180～210cmの間隔で構築されるものが比較

的多く、新しくなるにつれて間隔のバラツキが大きくなる傾向が認められる。そして5期以降になると、柱間が200cmを越す建物址が増加し、やや柱間間隔が広がる傾向がみられる。中世では、個々の柱間が不揃いになるが、平均しての柱間間隔は175～220cmの間に集中してくる。また、250cmを越えるような広い柱間の建物址も相当数存在する。

(3) 棟方向

最後に棟方向について記したい(第135図)。全体に南北方向に棟を持つ建物址の数が圧倒的に多く、東西棟を含めて東西・南北の軸線から大きく外れるものはほとんどみられない。2期から4期にかけては、南北に棟方向を取るものが多く、特に北西から南東に軸をわずかに振るものが目立つ。2期では、大形の南北棟に直交して位置する東西棟が何棟か存在し、3期・4期にはほとんど認められなくなる。4期になると、北東から南西方向に軸線をもつ建物址が現われ、5期以降その数を増すため、結果として棟方向の



第135図 掘立柱建物址棟方向模式図

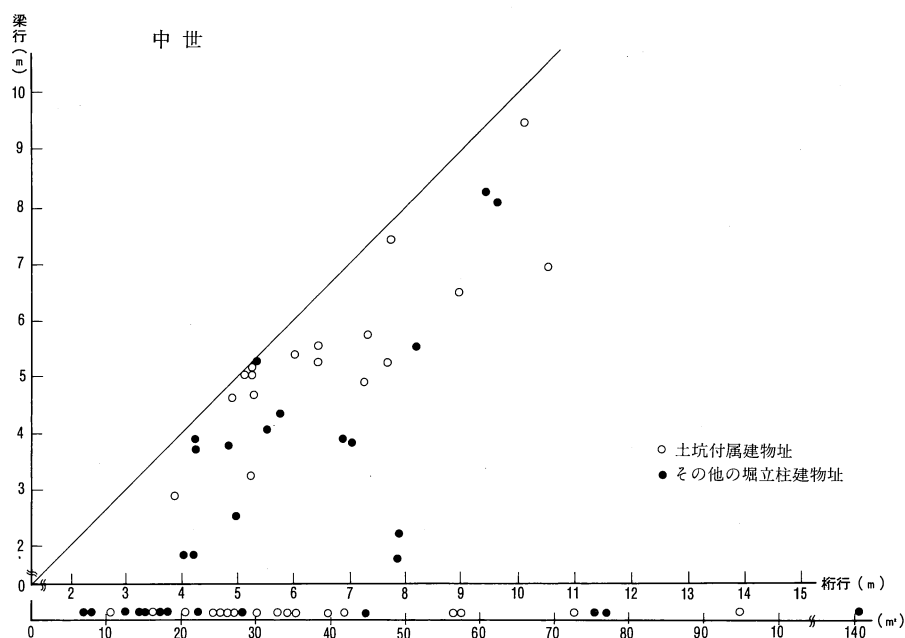
バラツキが大きくなる。5期に東西棟の数が多くなるが、6期以降時期を追って東西棟の数が増加する傾向が認められるかは、事例が少ないこともあって明確にできない。中世では、方向が5°以内のズレの範囲に収まるものが大多数になるなど、建物の方向の一致が特徴的に認められ、軸規制等の存在をうかがわせる。

### 3 土坑を伴なう掘立柱建物址について

中世に帰属する掘立柱建物址37棟のうち、建物址の一角に竪穴状の施設を伴なうものが約半数の18棟確認された。複数の土坑を伴なう例が1例(ST87)あるが、基本的にはそれぞれの建物址に1基の土坑が付属し、その形態等に共通の特徴が認められるので、施設として同一の性格をもつものと思われる。ここでは、土坑を付属させる建物址を他の建物址と比較検討し、建物としての特性を明らかにするとともに、土坑そのものの内容や性格についても考えたい。

まず、桁行と梁行の長さによる形状と面積(第136図)や柱間数による規模(第45表)を、土坑を伴わない建物址と比較してみた。

規模別に比較すると、2×1間から6×4間まで、中世の建物址の規模別の分布範囲いっぱい存在するが、桁行3間の建物址には、ほとんどが土坑が構築されるのに対して、桁行2間の建物には土坑が伴なう例が少ない。小形の建物址には原則的に土坑が付属せず、中規模の建物に土坑を構築する割り合いが特に高く、大形の建物では半数に土坑



第136図 土坑付属建物址の規模と形状

	2×1	2×2	3×2	3×3	4×1	4×2	4×3	4×4	5×3	5×4	5×5	6×4
土坑付属建物址	1	1	6	4	0	0	1	1	0	1	1	1
それ以外の建物址	3	3	1	1	2	2	1	0	1	1	0	1
総計	4	4	7	5	2	2	2	1	1	2	1	2

第45表 土坑付属建物址数規模別一覧表

が付属するというように、規模によって土坑の構築される割り合いは大きく変化する。

面積や建物の長さで比較すると、桁行・梁行ともに5m以上、かつ面積25㎡を越える規模を有する建物址にはほとんど土坑が付属する。それ以下のものではST101・106には土坑が付属しており、建物面積のほぼ半分近くを土坑が占めるというやや異質な形態をもっている。また面積が70㎡を越える大形の建物は、土坑が付属するものが約半数に減り、土坑の構築される割り合いは少なくなる。

まとめると、桁行3間以上、長さにして5m以上の規模になると、土坑が構築されるようになり、桁行3間・面積25～40㎡の建物址のほとんどに土坑が伴ない、それ以上の規模になると半数程度に土坑の付属する割り合いが減るという結果を得た。

つぎに、付属する土坑について検討したい。土坑の位置・規模・形状・覆土などを数値化し、分類基準を設けて、一覧表(第46表)にまとめた。まず、土坑の構築される位置については、建物の北側に設けられた例が12例あり、うち北東に位置するものが7例、北西に位置するものが5例である。対して南側に構築された例は7例認められ、南東部が3例、南側中央が1例、南西部が3例と分かれる。そのほか、東側と西側に構築された例がそれぞれ1例ずつ存在する。これらから土坑は、建物の中央に設けられることはなく、北東隅・北西隅を中心とした四隅に設けられることを通例とする施設ということができよう。

土坑の規模と形状を一覧表と分布図(第137図)でみると、平面形は、方形あるいは短辺:長辺が1:1.5程度までの長方形を呈するものが大多数であり、わずかに円形を呈するもの(ST90・102)が認められる。円形を呈する土坑は、長軸の長さ1.5m以下・面積2㎡未満と、他の土坑に比べて極めて小規模であり、四角形を呈するものとは施設としての性格等が異なる可能性が高い。方形あるいは長方形を呈する土坑は、規模で3群に区分できる。一辺の長さ1.2~2mで面積が2.5~4㎡という、小形の土坑の一群が7例存在する。1×1間の柱間の内側にきちんと掘り込まれる方形の土坑と、それからはみ出るように2×1間の中に構築される長方形のものがある。一辺の長さが2~3mで面積が5~10㎡の間に分布する、中規

No	位置	棟方向	規 模			付 属 土 坑								
			桁行×梁行	桁方向×梁方向	面 積	位 置	規 模	面 積	形状	断面形	深さ	底面	覆 土	備 考
87	中南	N1°W	5×4	9.42×8.20	75.84	北東隅	2.64×2.30	6.07	1	イ	0.68	い	?	a
						東中央	1.76×1.26	2.22	2	イ	0.70	い	?	b
						南 東	2.52×1.55	3.90	3	イ	0.78	い	自然?	c 天目茶碗出土
88	中北	N0°W	5×4	8.90×6.44	57.31	北西隅	3.58×3.04	10.88	1	イ	0.68	い	?	南西部テラス状 覆土中に礫
90	中北	N6°W	2×2	5.00×5.20	26.00	北東隅	1.50×1.32	1.98	5	イ	0.45	い	?	
91	中北	N1°W	3×2	6.42×5.20	33.12	北西隅	1.56×1.40	2.18	1	イ	0.40	い	?	
92	中北	N1°W	3×3	5.28×5.06	26.71	北 東	2.88×2.24	6.45	2	イ	0.60	い	?	銭貨7枚・青磁・ 捏鉢片出土
93	中北	N0°E	3×2?	7.30×4.88	35.62	南東隅	2.30×1.34	3.08	3	ハ	0.40	え	人為	付属土坑かやや疑問
98	中北	N5°W	4×4	7.68×7.36	56.52	南西隅	2.62×2.44	6.39	1	イ	0.62	い	?	
100	中北	N7°W	2?	4.06		南 東	2.68×2.00	5.36	2	ロ	0.28	い	?	鉄釘
101	中北	N1°W	3×2?	4.60×4.92	20.74	南 西	2.84×2.20	6.25	2	イ	0.26	い	?	銭貨6枚出土
102	中北	N91°E	2×1	3.86×2.82	10.88	北西隅	0.72×0.55	0.40	6	ロ	0.12	い	?	
103	中北	N2°W	6×4?	10.52×6.90	72.58?	北西隅	4.08		3	ロ	0.58	い	?	調査区外で不明確
104	中北	N8°W	5×5	10.06×9.42	94.76	北東隅	4.90×3.22	15.78	3	イ・ロ	0.52	い	人?	礫・焼土・炭出土 銭貨・鉄製品出土
105	中北	N3°W?	4×3?	7.32×5.68	41.57	南中央	3.04×2.44	7.42	2	ロ	0.28	い	人為?	
106	北南	N87°E	3×2?	5.24×3.22	16.87	西 側	2.88×1.96	5.64	2	ロ	0.15	い	?	
107	北南	N4°W	3×3	6.02×5.04	30.34	北 東	3.60×3.52	12.67	1	イ	0.15	あ	人為	柱部分掘り残し 礫敷詰める状態
111	北南	N3°E	3×2	5.30×4.64	24.59	南西隅	1.80×1.50	2.70	2	ロ	0.64	い	人為?	鉄片出土
112	北南	N91°E	3×3	6.42×5.34	34.28	北東隅	2.40×1.82	4.37	2	イ・ロ	0.62	い	自然?	柱位置をずらす
115	北南	N2°W	3×2	5.16×5.00	25.80	北西隅	2.00×1.70	3.40	1	ロ	0.34	い	人為	覆土中より礫多出
117	北南	N2°W	3×3	7.68×5.16	39.62	北東隅	2.64×2.60	6.86	1	ロ	0.26	い	?	青磁片出土

○形 状 (短辺:長辺)

1. 正方形 (1:1~1.2)      2. 方形 (1:1.2~1.5)      3. 長方形 (1:1.5~2.0)

4. 長長方形 (1:2.0~ )      5. 円 形 (1:1~1.2)      6. 楕円形 (1:1.2~1.5)

○断面形

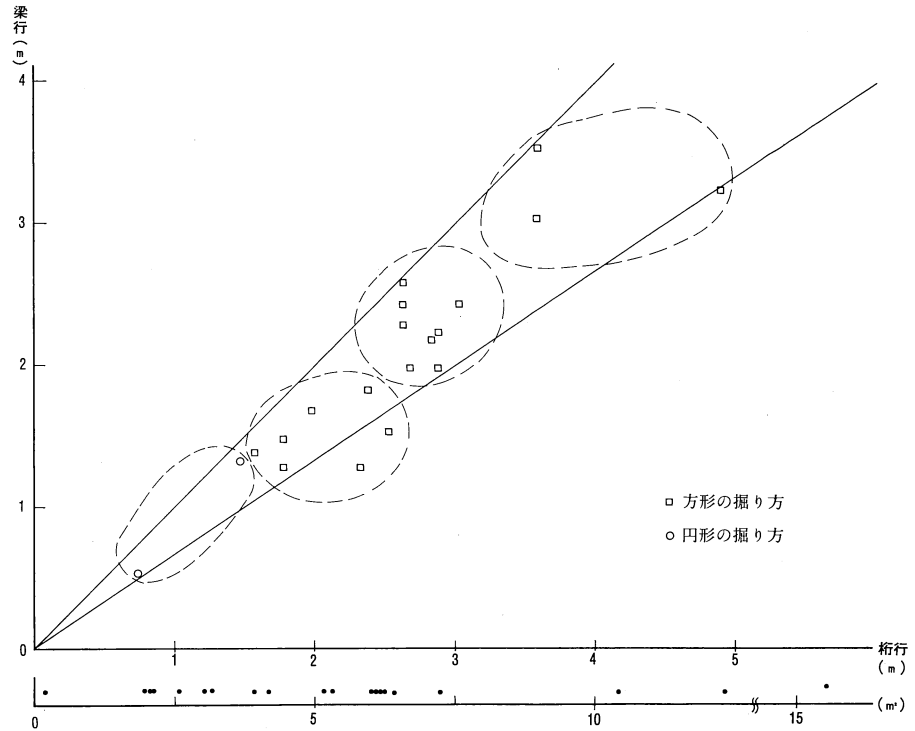
イ. 壁が垂直に掘り込まれる      ロ. 壁が斜めに掘り込まれる      ハ. その他

○底 面

あ. 平坦で硬い      い. 平坦で柔らかい      う. 凹凸がある      え. その他

第46表 付属土坑規模別一覧表

模の土坑群が8例認められる。2×2間の内側に構築されているものが多く、方形もしくは方形に近い長方形を呈する。3×2間の柱間の内に構築され、一辺の長さ3～5mで面積が10㎡を上回る、かなり大形の土坑が4例検出された。四角い大きな掘り込みという共通点はあるが、形状や面積の分布に比較的バラツキが目立つ。土坑の規模と形状は、いくつの柱間の中に掘り込まれたかに密接に関係し、掘り込みが1



第137図 付属地坑の規模と形状度数分布

間から3間までの内に設けられるのに対応して、規模等で区分された3群がとらえられる。

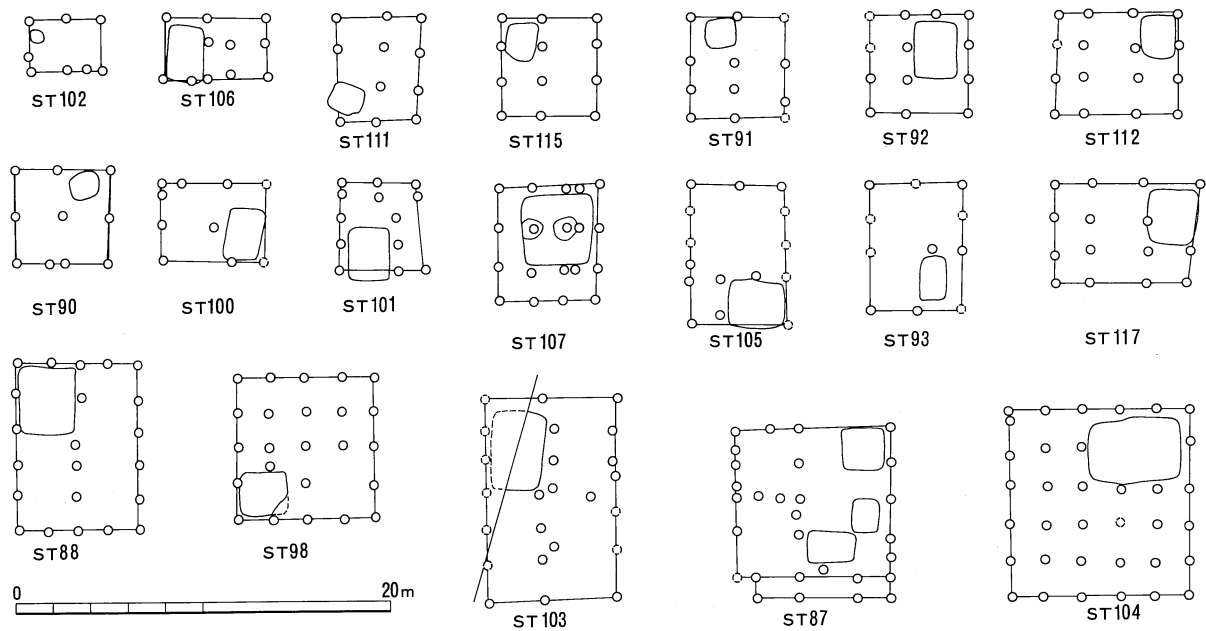
土坑の内部、壁面・底面等の状況であるが、壁は垂直またはやや斜めに立ち上がり、底面は平坦に構築されており、竪穴住居址の状態と共通する部分が多い。また、深さは竪穴住居址と同程度かやや深く、50cmを越えるものが約半数ある。しかし、構築時のたたき締めや使用された結果としての、貼床や硬化した面は、ST107を除いて認められない。共通する内部施設などは認められないが、底面の一角がテラス状に一段高くつくり出されている例(ST88)や、底面上に礫が敷詰められたように入っていた例(ST107)などは、土坑の機能を明確にする手がかりとなろう。

覆土から埋没の過程が明らかになったものは少ない。しかし、単一層と把握できるものが多いこと、礫の投棄が認められる土坑(ST88・104・115)や掘り込みが深くても壁などの崩落が認められないことから、人為的に埋められたものが多いと考える。覆土内から中世の陶磁器片の出土した土坑が多く、ST87の土坑から出土した内耳鍋片が中世2期前半の所産であるほかは、遺物はいずれも中世1期までに帰属する。そのほか、銭貨や鉄釘などの鉄製品の出土もある。遺物の出土状況や出土量、出土遺物の種類などは、同時期の竪穴住居址と比較しても大きな違いは認められない。

最後に、土坑の付属する掘立柱建物址について、その特性を项目的にまとめる(第138図)。

- 土坑の付属する建物址の構築される時期は、中世1期から中世2期前半までであり、中世2期に明確に帰属する建物はST87の1棟だけであることから、中世1期に盛行した遺構と考える。
- 建物址は総柱の柱配置が基本であるが、前述したST88・103、中世2期のST87は総柱建物ではない。
- 同時期の土坑を伴わない掘立柱建物址と比較すると、建物の長さが5mを越える桁行3間の規模の建物址に土坑の付属する割り合いがきわめて高く、大形の建物になると半数程度に割り合いが減少する。
- 北東隅・北西隅を中心とする建物の四隅に構築される土坑が多く、柱間の内に掘り込まれている。土坑が建物面積の半分近くを占める例が、桁行5m以下、面積25㎡以下ではST101・106があり、それ以上ではST107がある。建物の外に張り出して構築されるではST101・111も認められる。





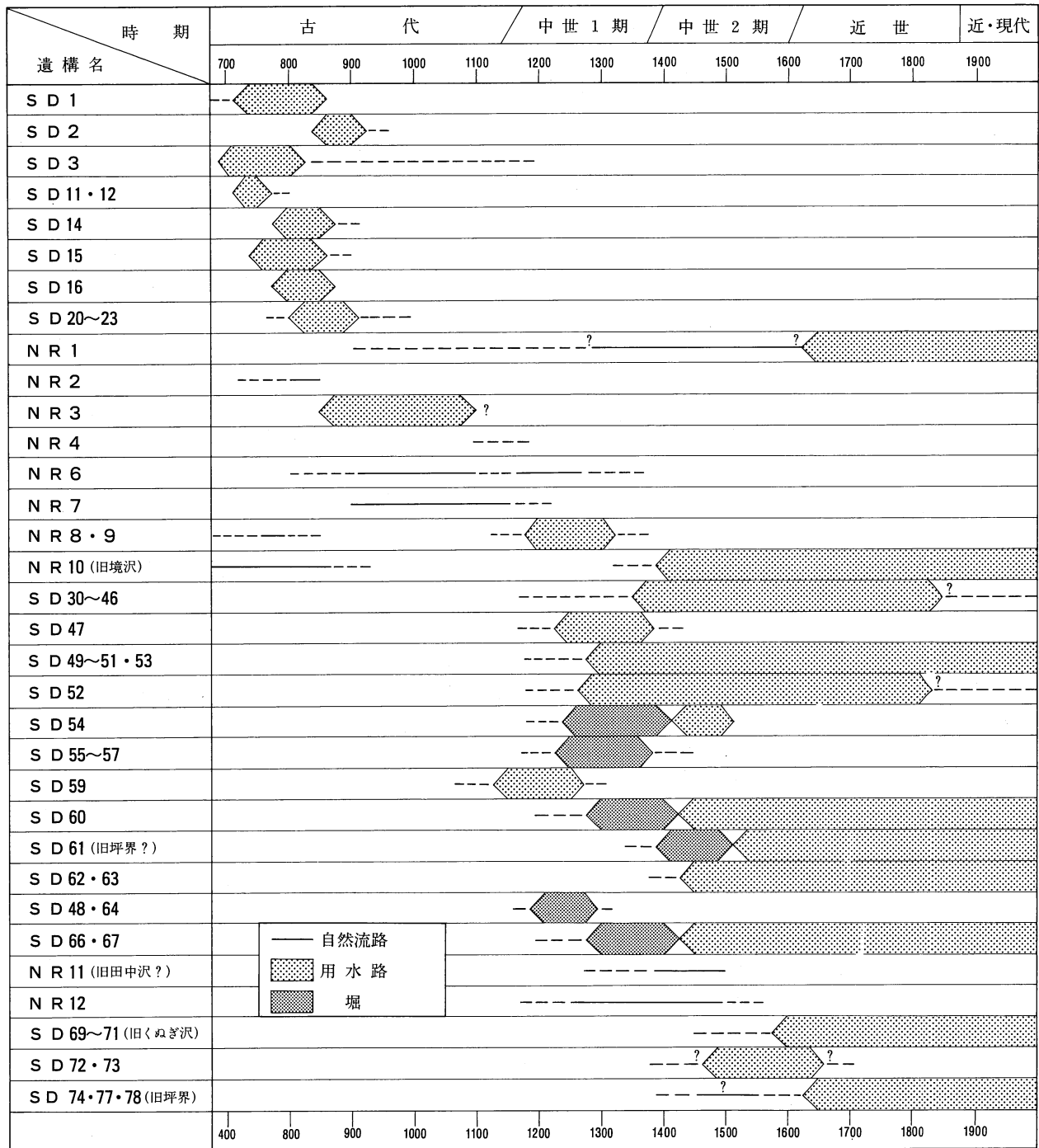
第138図 土坑の付属する掘立柱建物址模式図

- 土坑の中に柱を建てたり (ST98・107)、柱の位置をずらして土坑を構築する (ST101・103) など、土坑構築に際して柱の配置などに工夫がなされている。また、これによって、土坑が建物に確実に付属することが証明された。
- 土坑は、方形または長方形を呈するものが各建物址に1基構築される。複数構築される例 (ST87)、楕円形を呈する例 (ST90・102) も存在する。
- 土坑の規模は、1㎡以下から15㎡を越えるものまで大小さまざまであるが、傾向としては建物の規模に比例し、規模別に4つのグループングができる。
- 土坑の規模や形状、壁面・底面の状態、遺物出土状況などは、該期の周辺の竪穴住居址や土坑に類似するものがある。それらに比べて、全体的に掘り込みが深いのが特徴的である。
- 土坑あるいは建物址の性格や機能と積極的に結び付くような、所見あるいは出土遺物などは認められない。

## 第2節 用水と水田開発

### 1 溝址・自然流路の変遷と水利

礫層上に構築された集落が多く、井戸址と思われる遺構が認められない本遺跡において、集落存続の絶対的前提条件である水は、溝址あるいは自然流路に依存していたと思われる。用水堰や自然流のなかにも、沢筋を流下する草川を改修して用水路として管理するようになったものや、用水堰が氾濫等の結果自然流路と同様の状況を呈しているものなどが想定でき、両者を峻別することは難しい。また、集落内あるいはそれに隣接して流れる自然流も同様に用水などに利用されたことは十分考えられ、合わせて水利施設としての検討を行なった。用水堰の存続時期を明確にすることはかなり困難であり、長期にわたる使用の間に変質するものもあるが、切り合いや出土遺物と周囲の遺構の状況などを考え合わせ、出来得るかぎりの時期の限定を試みた (第139図)。ここでは、集落の状況や水田を中心とする生産址のあり方がそれぞれ異なると思われる、古代前半 (5期前後)、古代後半 (14期前後)、中世1期、中世2期、近世の5つの時期の溝



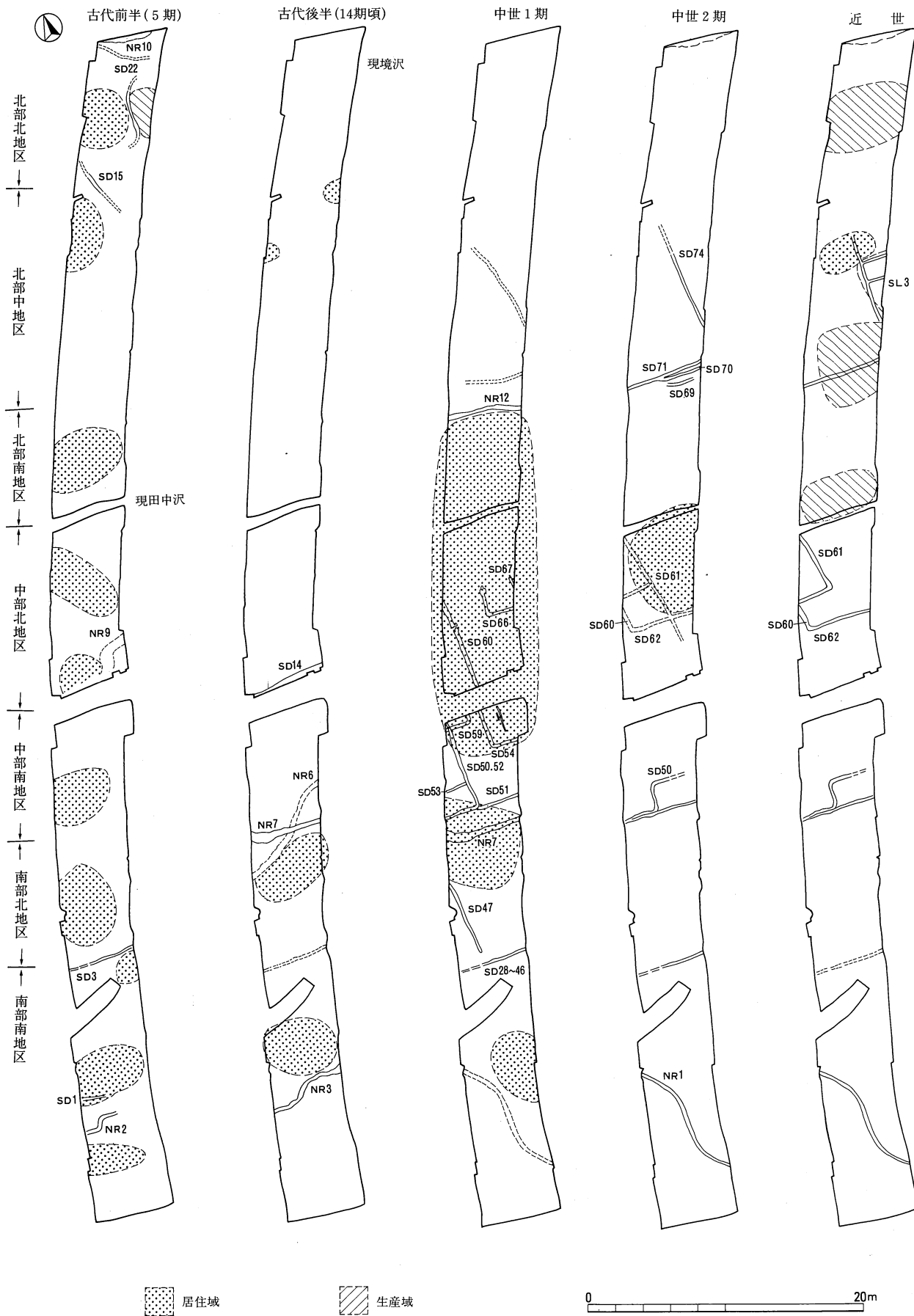
第139図 溝址・自然流路の存続時期

址・自然流路と他遺構の分布など(第140図)から、水利の状況と変遷を検討してみる。

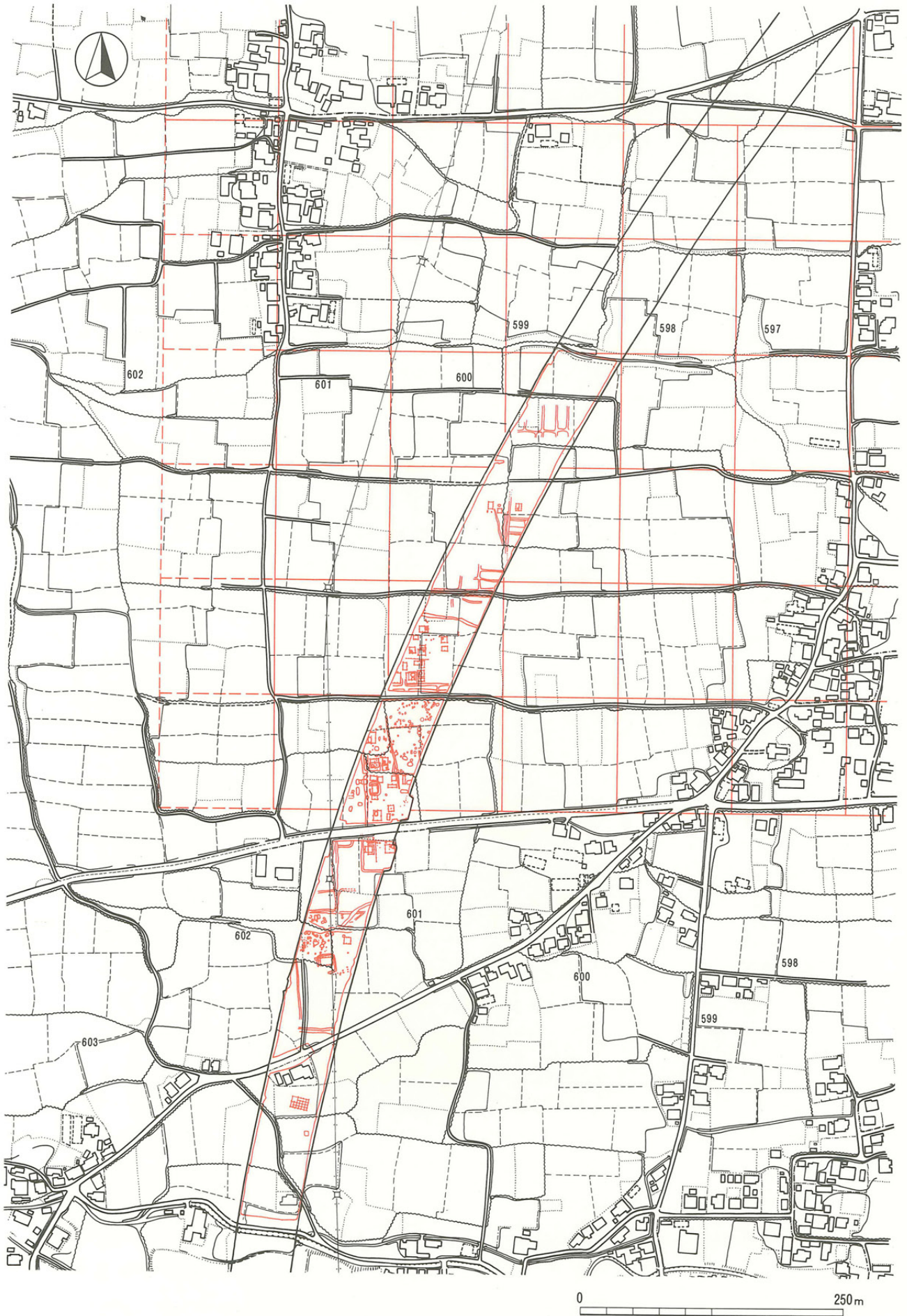
また、本遺跡の中部北地区以北が島立条里的遺構の南西部分を構成し、その東西坪界が東流する用水堰に依っていると指摘があり、それと位置や方向の一致する溝址等もいくつか存在することから、現用水堰を含む条里的景観との比較(第141図)も、条里的景観の起源などと係わる重要な点であり、合わせて比較検討を行なった。

(1) 古代前半(5期前後)

遺跡のほぼ全域に集落が展開し、本遺跡において最も居住空間が広がり住居址などの数も多くなる時期である。傾斜の方向に沿って大きく蛇行する自然流路またはそれに近い用水路が、中部北地区以南では南西から北東方向(NR2・6付近・9)へ流れる。本地域では凹地を選ぶようにうねり、比較的広い流路幅をも



第140図 時期別の流路の変遷



第141図 中・近世の遺構分布と条里的景観

つ、自然流路に近い流れである。それに対して、北側の北部北・中両地区では北西から南東方向へ幾筋か流れており（SD15・17・18・20～22）、直線的で幅の狭い流れである。遺跡北端に位置する境沢の下に検出された、大きな自然流路（NR10）より取水した用水堰であろう。南部南地区の北端に位置し、東西軸線と方向を合わせ直線的に流れるSD3は、ほかの流路とはやや異質である。建物や柵址とともに規格性をもって構築されており、区画線としての役割も果たした溝と思われる。なお、このSD3は、同位置同方向で10回以上つくり直されており、その後かなり長期間にわたって用水路として使用されたことが明らかになった。

自然流路的な流れの多い該期の用水路であるが、それを挟むように両岸に居住域（集落）が位置する例が多く、生活用水を供給する役割を担っていたことが明確になった。中部南地区のNR6に沿って柵列状の施設（SA3・4）を設けており、自然流路を用水に利用し、それを管理しながら使用していたと想定できる。中部北地区と北部南地区の集落の用水が明らかにならない。両地区の間に位置する現田中沢の下が調査できていないが、不明確ながらこの位置に流れた形跡のある自然流路様のものが検出されており、両側の集落は、これを用水としていた可能性もある。

## （2）古代後半

9期以降15期までは、集落が遺跡の南側に部分的に展開しているだけで、中部南地区以北は遺構空白域が続く。確認できる溝址・自然流路は、南部南・北地区のNR3・6・7、中部北地区のSD14があり、これらは既に前半代に存在したものが存続するか、位置を若干変えて流れていると考えられる。該期の遺構が稀薄であるので、切り合い等から時期を判断することが難しく、帰属する溝などが特定しにくい。遺構空白域には溝址・流路が特定できず、水田の水掛かりがなされていたとは想定しにくい。現境沢に連なる流路・溝は該期に明確ではない。

自然流路的な流れが多く、それに沿って集落が営まれる点は、古代前半の状況とほとんど変わらない。また、南部では流路の位置の移動が小さいことから、地形的に安定した場所であることと、流れの管理が行き届いていたものとみられ、その部分に限って集落が存立している。

## （3）中世1期

時間幅があるが、一応14世紀代を想定してみた。中部地区を中心に集落が形成されており、用水堰の状況等は古代とは一変した様相を呈する。まず、自然流路的な流れはほとんど存在なくなり、直線的な用水路が縦横に走るという、流路の形態の大きな変化が指摘できる。また、条里的景観の骨格をなす現用水堰や現畦畔とこの時期の溝址などと、その位置や方向の一致するものが増えることも、条里的景観の起源に直接係わる重要な変化である。

南部南地区と北地区の境界付近の古代から続く東西の溝（SD30～46）から北部南地区の北端に近い位置をほぼ東西に直線的に流れる自然流路（NR12）までの、南北幅約400mの間に居住域および墓域が展開している。その間に存在する溝は、東西または南北の軸線に方向を合わせ、一定の幅で直線的に構築されており、直交するものや直角方向に掘られたものが認められ、全体を溝や柵列などで方区画していると判断される。南北方向の大きな溝であるSD60は、中途が陸橋状にとぎれる部分を持ち、用水堰とは異なった形態で、滞水は想定できるものの、恒常的な水の流れは確認できない。このSD60をはじめ南北方向の溝や直角に曲がる溝には、滞水の可能性の高いものや、緩やかに水が流れた痕跡の認められるものが多い。いずれも、掘立柱建物址などの遺構群を区切る、区画溝としても機能していたと思われる。現代の水田畦畔や用水堰の下部にほとんど位置を変えずに検出されたものも多いが、SD60は条里南限線とされる和沢（上沢）の南まで延びており、NR12も坪界線と一致しないなど、現条里的景観との一致は重要な部分で食い違うところがある。逆に、条里の南に外れる地域を流れるSD49～53とSD28～46は、ほぼ東西の坪

界に対応する位置と方向に構築されている。これも条里的景観の範囲や変遷と絡んだ重要な事実であるが、現在の畦畔と一致しないことや部分的な範囲での確認であることから、状況を説明するにとどめる。

北部では、坪界の下を2か所で調査しており、東西3条(SD69~71)南北5条(SD72~74・77・78)の溝が、同位置で切り合って検出されている。一番新しい溝は、現坪界の状況と同様、用水堰に比較的広い道(馬踏道)が沿っており、これが近世に存在したことは切り合いと出土遺物から確認されている。さらにこれを切って、部分的な蛇行や方向の若干ずれる溝が何本か存在し、近世以前の段階から、坪界の下には用水路が配されていたことが明らかになった。このうちSD69やSD72・73は、中世でも古くさかのぼって存在していた可能性がある。したがって、遺構としては明確に検出できないが、付近はこの時期には水田化していた部分も存在したことが想定できる。南部には、集落の一部と思われる少数の建物が検出され、現代の用水堰の脇を流れる溝の起源が中世にさかのぼる可能性もあるが、該期の水利状況の復元などはできなかった。

#### (4) 中世2期

15世紀中ごろの状況を提示した。竪穴住居址と土坑が中部北地区に範囲を狭めて存続し、この一帯のほとんどは墓域となっていた。中世1期に存在した溝は姿を消すものが多く、陸橋を持つ同形態のSD60とSD61のように、方向を同じくし位置をずらして構築される例が認められる。重要なことは、新しく造られたSD61は、条里的景観における南北坪界にほぼ一致することである。また、SD60・61ともに、北半分を用水堰として再利用された形跡がうかがえる。つまり、水をたたえながら方区画溝としての機能を果たしていたが、集落の消滅とともにその必要性が無くなると、おそらくその凹みを利用して、用水堰へと移行していったと想定できるのである。しかも、その用水堰は現代もまったく同一の場所を流れ、水田に水を供給し続けている。同様のことは、中部南地区でも確認でき、現条里的景観がこの段階までではほぼ確立したことと、その成立過程の一端が明確になった。したがって、16世紀に入った段階では、現在とほぼ同一の水配りによる水田が、遺跡全体に存在したと思われる。

前述した北部の坪界の下の状況は、ほぼ現在の位置と方向に溝址が延びており、東西の坪界には、くぬぎ沢が徐々に流路幅を狭め直線化しながら東流している。境沢も現在の位置を流れるようになっていたことが確認されており、栗林堰の枝堰として、東西坪界線ごとに存在する直線的計画水路は、この段階までに自然流路的な様相から、管理された用水路に移行し終るものと思われる。南部の状況はもう一つ判然としないが、栗林堰の水路網がこの段階で成立していたことを考え合わせると、他と同様、現在の景観に近い水利状況になったいたであろう。

#### (5) 近世

近世と特定できる溝址は、北部の2条の坪界の下(SD71・74)と中部北地区のSD61などに限られ、現用水堰の状況に酷似する。他の用水堰なども、切り合いや出土遺物等から時期を確定することができないが、同様に現景観に近い状況が想定でき、条里的景観と灌漑形態は、長期にわたり変化なく存続し、近代から現代へ受け継がれていく。

南北坪界に相当するSD74に直交する溝が2条(SD77・78)検出されている。位置や規模から、坪界を流れる用水堰の分流ととらえられ、東西軸線方向に直線的に走る。水田一枚を挟んで20m程の間隔で並行して流れており、当時の水掛かりの具体的な状況の一端が明らかになった。中部北地区から北部にかけて、該期に帰属する水田が数か所で検出された。いずれも坪界に沿う位置で畦畔の痕跡が確認されており、現条里的区画と同方向に田面が区画されている様子がうかがえる。また、SD74を挟んでごく近接する位置で、小規模な集落が営まれており、生活用水としても堰の水が使われていたことが具体的に判明した。

条里的景観より外れる中部南地区以南の状況では、条里的遺構の東西坪界に対応する位置2か所に存在

した溝が、いつ現在の状況に変化したのかが問題として残るが、その時期を特定することはできない。

## 2 水田址の変化と現条里的景観

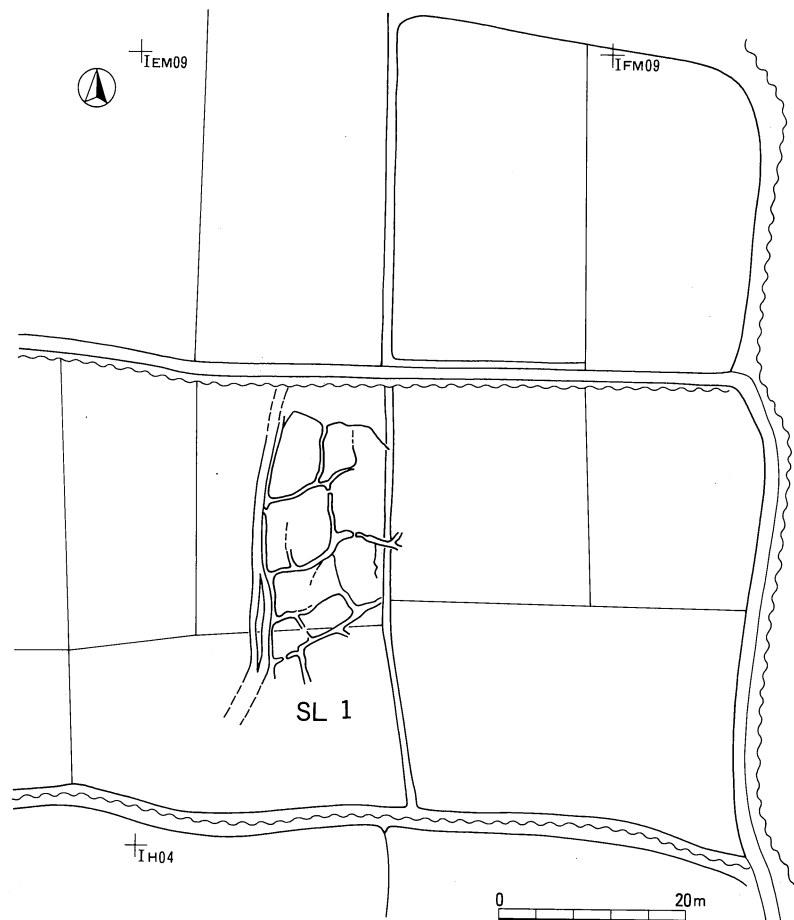
生産址として用水路と密接にかかわる水田址について、時期別の特質や変化を検討し、畦畔等の状況と条里的景観との関係について概括したい。

第142図～第144図に示したように、時期を明確にでき、形態の判明した水田址は、古代の前半と近世に限られており、時代を追っての変遷などはもちろん把握できない。ここでは、条里的景観と係わせながら、おおまかな時期別の状況を明らかにすることと、付近の現代の水田との比較検討も通しながら、水田開発の過程を整理してみたい。

### (1) 古代の水田

第2章第3節の古代の水田址の項でも述べたように、北部北地区の境沢に近い場所で、7期前後と思われる水田址 SL 1 が検出されている(第73・142図)。ほぼ南から北に流れる水路の東側 30 × 15 m の範囲に、

田面が11面確認され、検出が難しく明確にできなかったが、さらに周辺に水田が広がると考えられる。水田址の形状は、現条里的景観下の水田とまったく異なり、微地形の傾斜に合わせ、水の便などを優先させて構築した結果、平行四辺形や台形に近いものが存在し、不定形なものも多く認められる。1面の面積が15～40㎡と想定でき、極めて小規模な水田(梯子状区画水田)が集合する、いわゆる条里水田とは異質の形態で展開していたと考えられる。検出レベル等との関係ですべてが明確にならないが、畦が途切れそこから河原砂が放射状に広がるものを典型例とする水口が数か所で検出されている。水口の位置関係などからは、水路の畦から直接導水し、次の田面にも水口を通して通水して



第142図 古代水田址と現条里的景観

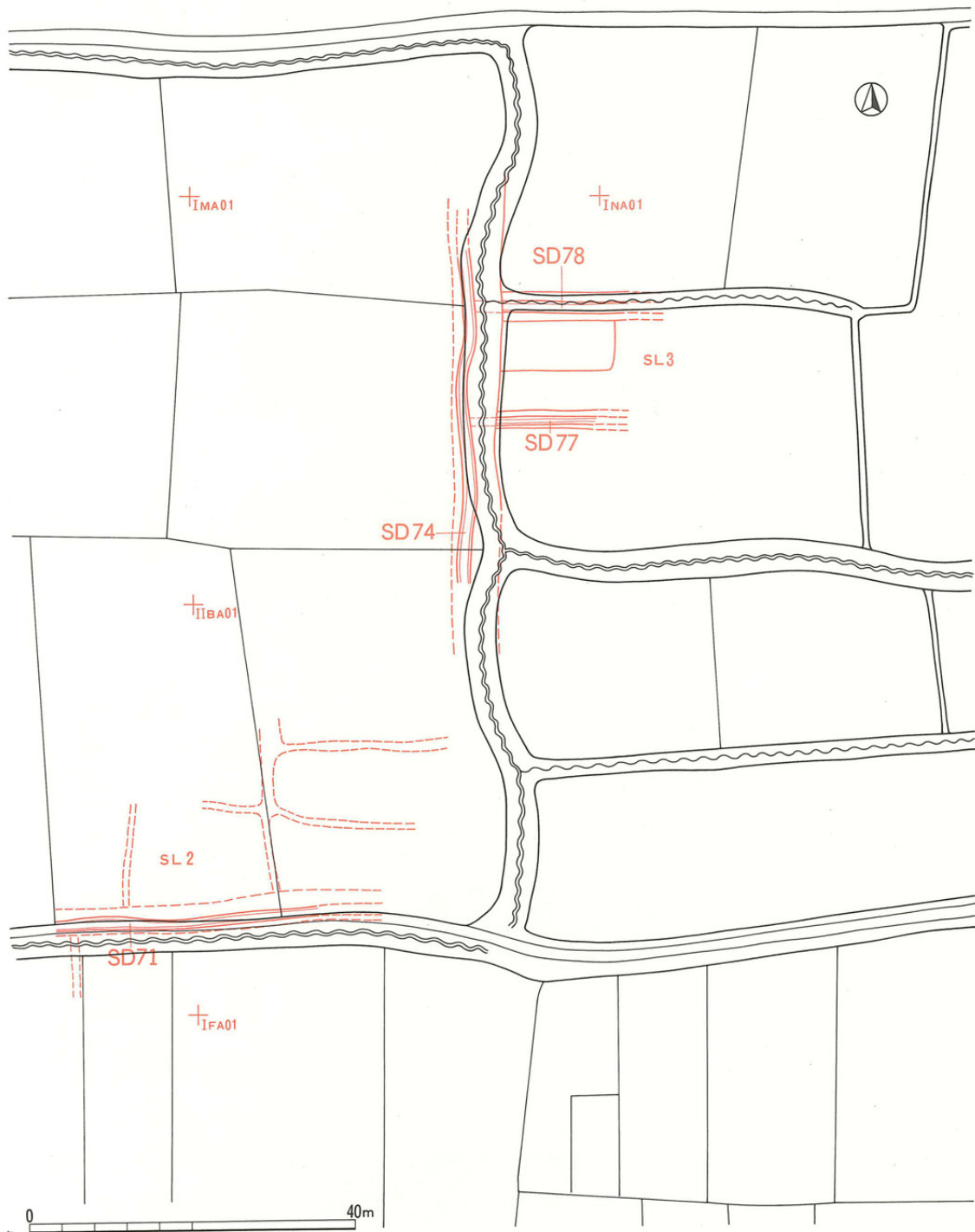
いく水掛かりの具体的な方法と、梯子状区画にして迅速に水を田面に送りこむ合理的形態が明らかになった。畦畔がわずかの高さで検出されており、水口の存否が明確にならない部分もあるが、水口の確認できない畦での「田越し」形態の水掛かりも想定できる。

現水田や用水堰とは、形態などが異なることはもちろん、位置や方向もいわゆる条里的区画とは関連が認められず、一帯に条里的な景観の成立する以前の生産址の一端を明らかにできた。

### (2) 近世の水田

北部南地区から北地区にかけて検出された、坪界を構成する用水堰とそれに沿う水田址、また坪の中央

付近に位置する水田址について、すべて同時期に帰属するとは確定できないが、少なくとも17～19世紀までの近世のなかでは確実に存在していたと想定できるので、近世水田として一括して検討する（第143・144図）。



第143図 近世水田址と現条里的景観(1)

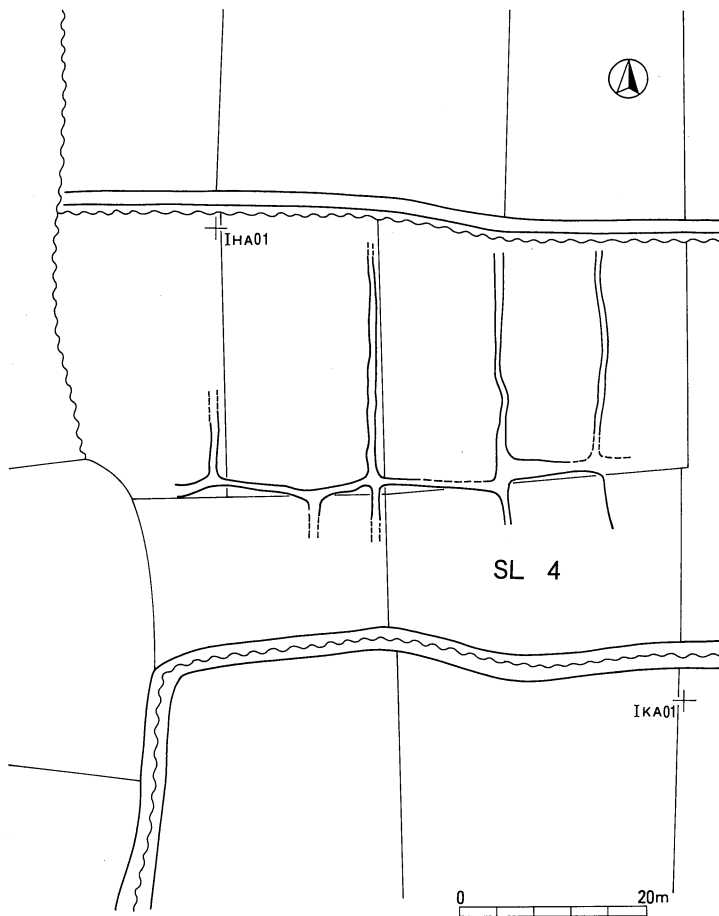
南北坪界(SD74)とその東に検出された3面以上の水田址(SL3)は、水田の形態や水掛かりの状況が比較的明確に把握できる。畦畔を東西・南北の軸線に合わせて、矩形を基本とする水田が整然と構築されていたと想定される。面積の明確になった水田は1枚だけであり、100㎡足らずの規模である。古代の水田の2倍以上の規模をもつが、現在の付近の水田よりははるかに小さい。水田2枚を挟んで用水路2条(SD77・78)が並行して東流している。ここでの水路の形態は、直交する坪界の堰より分流させて、すべての水



田に水路が届くように配していたと思われる。したがって、原則的には水口を通しての導水と考えられるが、全体がこの灌水システムであったかは確認できない。

東西坪界 (SD71) の両側からは、溶脱を受けた水田耕土中に、その影響を受けない帯状の土が検出され、形状などから水田畦畔と判断した (SL2) が、いわば上面に存在した畦畔の痕跡である。前述した水田と同様に、軸線に方向を合わせて整然と並んでいた様子がうかがわれ、東西に細長い矩形の形状などは SL3 と類似するが、面積は 150㎡程度と予想されるものがあるなど、やや規模が大きい。このような状況での検出のため、用水路の位置や水掛かりの形態は明らかにならない。

北部北地区からも、坪のほぼ中央部分に 8 面からなる水田址 (SL4) が確認された (第144図)。現水田を 2 ないし 3 分するように、南北方向に細長い矩形の水田が整然と構築されている。しかし、現水田とまったく同位置・同形状のものもあり、当時の小規模水田がすべて揃って現代の大区画に移行したとはいえない。現畦畔の位置と重複した同位置で当時の畦畔が推定できるものが多く、面積を算出するとおよそ 100㎡～450㎡があり、個々の水田で規模の差が大きいことが類推される。南北方向の用水路 (SD79) が 1 条検出できただけだが、現在の水路から想定して、水田 2 枚を挟んで両側に東西方向の水路が配され、両側の水口から取水する方法が考えられる。SL3 共通する灌漑法であり、現在も原則的には同様の方法が継続されている。



第144図 近世水田址と現条里的景観(2)

現条里的景観と比較すると、まず、SD71・74の坪界はほとんど移動せず、形態も同様であることは、前述したとおりである。しかし、東西線はわずかに位置をずらすだけであるのに対して、南北線は現代の用水堰の方が蛇行が激しく、条里的方区画形成の後、それが徐々に崩れて今日に至るが、傾斜に平行する南北の区画線の崩れがより進んだと考えられる。その中を細分している水田畦畔と水路は、現在の水田の下に近世の水田が細分された状況で存在するが、基本的な灌水システムや水路網は現在と同様ととらえられる。東西あるいは南北に細長い水田が目立ち、面積は 200㎡程度が平均と思われるが、断片的であり、近世の一般的な様相と即断することはできない。

### 第3節 出土遺物の検討を通して

遺構出土の遺物を主体として、いくつかの内容について整理しておきたいと思う。初めに、竪穴住居址から出土した土器を定量分析することを通して、遺構内の遺物残存状況の把握と住居址ごとの土器の使用

量の違いなどに検討を加えた。次に、本遺跡においては遺物残存状況の良好な SB75を中心に、竪穴住居址内での土器の使用状況や使用個体数などについて考えてみた。また墨書土器・鉄製品を中心とした概括を行ない、最後に中世の土器・陶磁器について整理しながら、中世1期を土器・陶磁器の様相からさらに4細分し、中世の遺物の在り方をまとめておこうと思う。

### 1 竪穴住居址内出土土器の量と器種構成

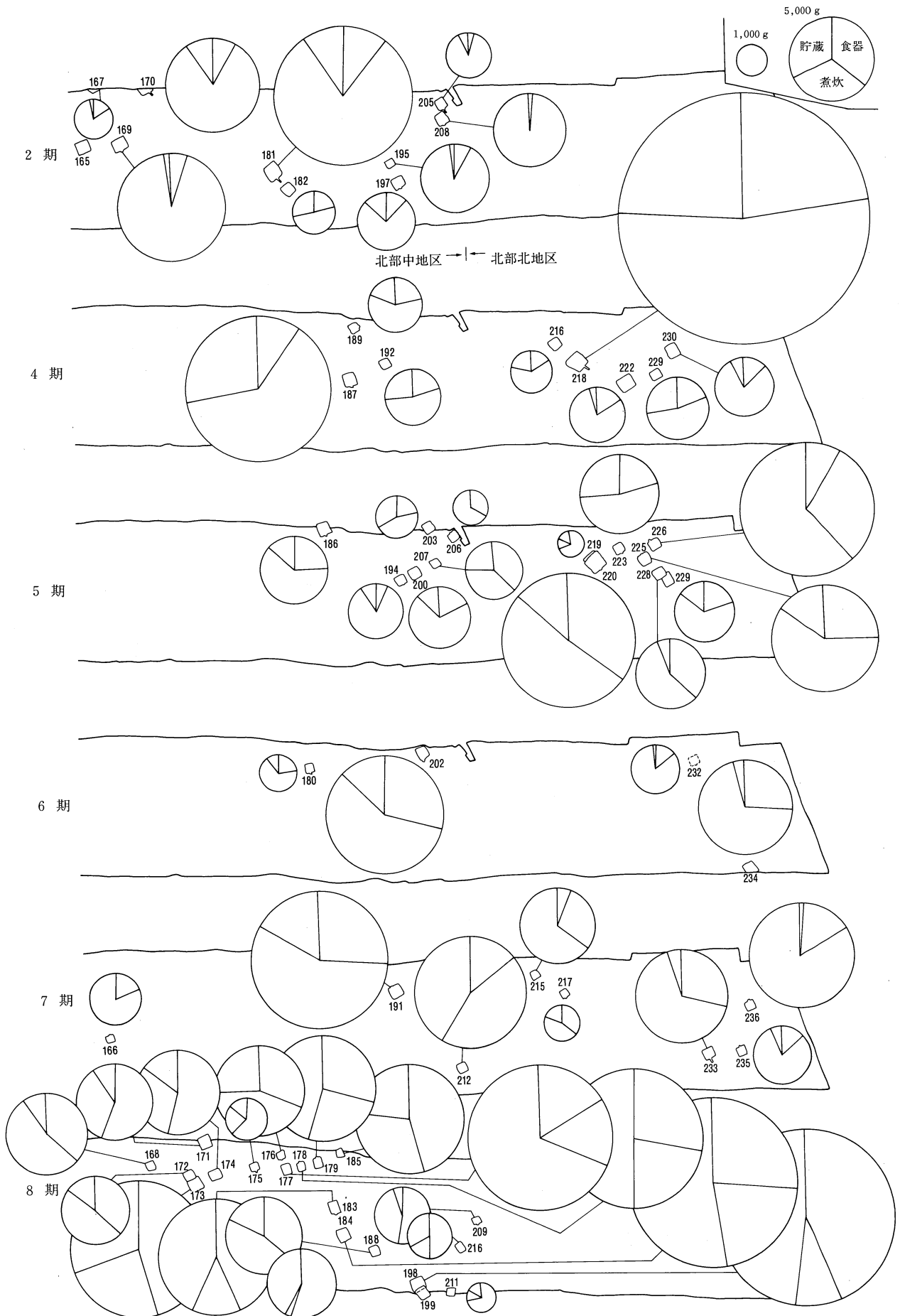
竪穴住居址より出土した土器の量とその器種構成を比較検討し、出土状況や他の出土遺物さらに廃絶後の状態を加えて考えることにより、器種別の数量比とその変化を捉えようと試みた。対象とする地区は、遺構の切り合いがあまり認められないため混入遺物が少ないことと、遺構配置や変遷などが明確で住居址の移動などが把握しやすいことから、北部中地区と北部北地区に特定して比較検討を進めた(第47表)。また、時期ごとに竪穴住居址別の土器出土量と器種別構成を重量で示し(第145図)、遺構間の遺物量の関係や、住居址の移動・消長と遺物の残存状況の関係を検討した。それをもとに、時期を追って特質や傾向を述べていきたい。

北部中地区で住居址が構築され始める1・2期においては、土師器甕を中心とした煮炊具の多出が目立つ。出土土器個体数の半数以上が煮炊具という住居址が圧倒的に多く、出土土器総重量が5kgを越えるSB169・170・181ではカマド内や床面よりまとめて出土した土師器甕が全体の重量を増やす主因となっている。また、出土土器個体数が多くなると、煮炊具の個体数より食器と貯蔵具の個体数を増す傾向がある。SB181とSB182は同時存在したと考えられている住居址であり、覆土は自然埋没の状況を呈している。前後かなり長い期間周囲に遺構が構築されていないことから、出土遺物はそれぞれの住居址で使用されたものである可能性が高い。SB181はカマド付近に完形に近い形で残存する土器が多いのに対して、SB182では覆土中に土器片として散在しており、出土総重量に大きな差があるが、個体数にはそれほどの違いは認められず、重量比だけでは出土土器の様相を把握できない。2軒の間で接合する個体はなく、おそらくSB182の遺物の多くは、竪穴住居址の周囲に広がって散逸してしまったのか、別の場所で使用、もしくは廃棄されたのであろう。

次に、3期から4期にかけての状況をみる。3期では北部北地区に住居址が構築され始めるが数が少なく、北部中地区では該期の住居址が検出されないなど、煮炊具が多いという傾向は認められるものの、明確に内容を捉えられない。4期になると、中地区に再び住居址が構築され、北地区も継続して集落が営まれており、食器と貯蔵具の出土量が増えることが全体的な傾向として指摘できそうである。SB187およびSB218は、他の住居址に比べてきわめて多量の遺物が出土している。すべての器種にわたって個体数・重量ともに他を圧倒しており、特にSB218は対象としたどの住居址よりも出土量が多い。土器の多くは覆土中より出土し、上下2分層される間層に入る焼土とともに集中出土している。2軒はそれぞれのまとまりの中では一番規模の大きな住居址であることが共通するが、特別な施設や遺物などは認められない。その他の住居址は、出土土器総重量2000g前後で、10～20個体の食器と10個体前後の煮炊具5～10個体の貯蔵具と、出土個体数や重量が類似しており、当時の土器構成の一端を理解する参考になろう。

続く5期では、北地区に対して中地区の住居址出土土器量が全体に少ないことが指摘できる。須恵器甕Aが出土したSB226を除くと、器種別の構成比などは大きく違わないが、やや小規模の住居址が直線的に並ぶ中地区の住居址に遺物が少ない傾向にある。規模の大きな住居址に遺物が多い傾向は、6期以降にも認められる傾向であるが、4期ほど顕著な状態ではない。また、カマド石を含む礫の覆土中への投棄の認められる住居址で、礫に混在して出土する土器の量が多く、礫の投棄された住居址からの土器出土量が全体的に多い。煮炊具以外の器種の増加、特に食器の数量の増加は時期を追って明確になる。





第145図 時期別住居址出土土器量比

6・7期では食器が増し、食器2に対し煮炊具1程度の割り合いが一般的となる。北地区では、3期以来ほぼ同一場所に続けて住居址が構築されてきたが、6・7期では位置を北に移す。それとともに、多量の土器の出土する住居址がなくなり、それぞれの住居址の量比は比較的均質化する。

8期にいたると、北地区に住居址が構築されなくなると同時に、中地区に集中して住居址がつくられるようになる。南北・東西に数軒の住居址が並ぶなど、規格性の強い配列が認められ、住居址の規模も小規模化し、近似したものが多い。土器の出土総量も住居址間の格差が比較的少なく、比較的地出土量の多い住

図版	番号	種類	器種	住居址	時期	出土地点	距離	備考
137	SB 36 -6	須恵器	杯 B	SB 19 SB 36	4 期 1~2か	ピット 覆土	16 m	SB37(4期)からの混入か?
146	SB 66 -1	須恵器	杯 A	SB 63 SB 66	4 期 2 期	床下 床下ピット	18 m	SB62(2期)と切り合う 2期でも新しい様相
146	SB 66 -5	須恵器	杯蓋 B	SB 66 SB 67	2 期 5 期	覆土 カマド	8 m	SB64(2期)と切り合う SB64(2期)と切り合う
162	SB111 -26	土師器	甕 G	SB110 SB111	2 期 3 期	カマド 覆土	14 m	
163	SB112 -28	須恵器	鉢 C	SB112 SB118	5 期 6 期	覆土 カマド	32 m	
176	SB159 -12	須恵器	長頸壺	SB159 SB160	4 期 4 期	覆土 覆土	8 m	
178	SB169 -6	須恵器	杯 B	SB168 SB169 SB170	8 期 2 期 2 期	覆土 床面 覆土	22 m	混入と思われる
180	SB173 -15	軟質 須恵器	杯 A	SB172 SB173	8 期 8 期	覆土 覆土	4 m	切り合い関係にある
180	SB173 -17	灰釉 陶器	碗	SB172 SB173	8 期 8 期	覆土 カマド	6 m	切り合い関係にある
180	SB173 -18	灰釉 陶器	碗	SB172 SB173	8 期 8 期	覆土 床下	4 m	切り合い関係にある
182	SB177 -10	須恵器	甕	SB176 SB177	8 期 8 期	覆土 覆土	6 m	
183	SB178 -29	須恵器	横瓶	SB178 SB180 SB183 SB184 SB187	8 期 6 期 8 期 8 期 4 期	床面 覆土 覆土 覆土 覆土	32 m	
186	SB184 -18	須恵器	甕	SB175 SB184	8 期 8 期	覆土 覆土	44 m	
190	SB198 -41	灰釉 陶器	長頸壺	SB183 SB198	8 期 8 期	覆土 覆土	40 m	
---	---	土師器	杯 A	SB198 SB209	8 期 8 期	床下土坑 覆土	32 m	
---	---	須恵器	横瓶	SB222 SB224	4 期 3 期	煙道先 覆土	8 m	
201	SB235 -8	須恵器	長頸壺	SB235 SB236	7 期 7 期	床面 覆土	16 m	
201	SB235 -9	須恵器	甗	SB235 SB236	7 期 7 期	床面 覆土	16 m	

第48表 古代住居址出土土器接合個体一覧表

居址が目立つ。器種別の構成は、食器の個体数の増加傾向が前代に続いて顕著であり、食器の総数が30個体を越えるものが大多数を占め、50個以上の住居址も過半数あるのに対して、煮炊具はそれまでとほぼ同量である。また、貯蔵具の出土量が多くなり、総数が10個を越える住居址が増加する。覆土に礫の投棄される住居址が数多く存在するが、特に土器の出土量が多いなどの傾向は認められない。

以後、突然住居址の数が激減し、9期にわずかに存続した後、短期間に少数の竪穴が構築される14期に至るまでのあいだ住居址は構築されない。14期では煮炊具がほとんど認められなくなることが明確になる他は、傾向や特質を抽出できない。

住居址廃絶後の遺物の状況については、基本的に使用時の位置を保っての出土よりも、竪穴住居址内に土がある程度入った後、礫や焼土とともに土器が投棄される例が多く認められる。覆土内に遺存される土器は、床面などのまとまった遺物と比較して、相当量を占めていると言える。礫を覆土中に投棄する住居址は、構築場所の移動の激しくなる6期以降に多くみられ、集落の移動・廃絶などに関係する廃棄の方法である可能性が認められる。

## 2 竪穴住居址間における土器の接合について

距離をおいた2軒以上の住居址から出土した土器の接合関係に注意を向けてみると、第48表に示したように18例を見出すことができる。ここでは直接2軒以上が切り合う場合に起った土器の混入の可能性の高いものは除外している。その意味において、SB66・67例はSB64を間にして切り合っていることから、本例はSB64が包含していたものがそれぞれの住居址に混入したとも考えられ、SB172・173で接合した3例についても西壁と東壁が接するように切り合うことから、除外した方が良いと思われる。またSB19・36例、SB63・66例は時期の異なるものであるが、SB36はSB37と、SB63はSB62とそれぞれ「入れ子」状に切り合うことから、実際にはSB19はSB37と、SB66はSB62との接合関係を考える方が時期間に齟齬がなく妥当である。さらにSB168・169・170例、SB178・180・183・184・187例のうち、前者のSB168、後者のSB184はそれぞれその中では時期を異にするもので、単独遺構ながら伴出する他の遺物を参照しても時期の異なる混入遺物が認められることから、何らかの理由により接合した個体も混入した可能性があるとして、SB168とSB187を除外しておくことにしたい。従って、各々前者はSB169・SB170の2軒、後者はSB178・180・183・184の4軒が考察の対象となる。以上より、出土状況によって再整理してみることにする。

### ① 覆土出土土器同志の場合

- ・SB159 — SB160
- ・SB175 — SB184
- ・SB176 — SB177
- ・SB183 — SB198

### ② 床面出土と覆土出土土器の場合

- ・SB169 — SB170
- ・SB178 — SB180・183・184
- ・SB235 — SB236 (2例)

### ③ ピット(床下ピット・土坑)内出土と覆土出土土器の場合

- ・SB 19 — SB 36 (SB 37)
- ・SB 66 — SB 63 (SB 62 覆土)
- ・SB198 — SB209

④ カマド出土と覆土出土土器の場合

- SB110 — SB111
- SB118 — SB112

⑤ 煙道先ピット内出土と覆土出土土器の場合

- SB222 — SB224

これらのうち、土器がほぼ同時期に廃棄された可能性のあるものをAとすると、①の4例を挙げることができる。また③のSB198・209例は、SB198の床下土坑出土土器がSB198覆土出土のものと接合していることから、床下土坑は開口していた可能性もあり、Aのグループに準じる在り方と考えられる。次に同時期に廃棄されたか、他の1軒で同時使用または再利用されていたものをBとすると、②の4例と③のSB19・36(37)とSB66・63(62)の2例を指摘することができる。さらに、他の1軒で同時使用または再利用されていた可能性のあるものとしては、④のSB112・118例と⑤のSB222・224例を考えることができる。④のSB110・111例は、出土状況よりいずれかの住居址に混入した可能性があり、ここでは考察の対象から外すことにする。本グループをCとする。Cの2例については、一方の住居址で廃棄されたものが、果して他の住居址で実際に使用されていたかは確証がなく、否定も肯定もできない状況である。しかし、カマド出土のSB118と煙道先ピット内出土のSB222は、もう一方の覆土出土の住居址よりそれぞれ1時期新しいことから、遺物廃棄後その破片を各々SB118、SB222で再利用していたことが暗示される。具体的にはSB112→SB118、SB224→SB222という「もの」の動きがあり、同時にその背景には「ひと」の動きが想定される。いずれにせよ2者には密接な関係があったことは明白であろう。Aについて遺物廃棄の同時性は、単に2者の関係に留まらず、1個体の土器が2カ所に分れて廃棄されていることは、第三者の介在が想起される。すなわち、例えば1軒のある中心的な役割を担った住居址の廃絶に伴う不用品の整理を考えたとき、同時に廃絶された周囲の複数の竪穴住居址の凹地に適当に捨てられたと考えることが可能である。また、Bとしたものは、ほぼ同時期に廃棄されたか、さらに再利用されたか、AとCの両者いずれかの可能性をもつものである。しかし、実態として②の床面と覆土出土土器接合の場合は、1軒の住居址内で床面出土のものと覆土出土のものが接合するケースがあることから、床面出土は覆土出土と同義であることがあり、②はAと同様に扱って考えられそうである。③の2例においても同じ③のSB198・209がAとして捉えられるように、CよりAのグループに近い在り方が想像される。

以上のように遺構間で接合する例は、2期から8期にみられ、8期に接合するピークがあることは、個別の住居址を結ぶ有機的な関係の存在の頻度を反映しているものと考えられる。8期の在り方と逆に、9期に住居址がほとんどみられないことや、接合資料が見出せないことは、9期以降「ひと」の紐帯が前代と異質な関係に変化したとも想像され、本遺跡の様相の変化を考える上で興味深い。

なお、遺構間の接合関係の全体像については、整理作業の限界に伴ってすべてを網羅できていないことは考慮しなければならない。

### 3 SB75における出土状況について

ここでSB75をモデルに遺物出土状況と住居内の空間利用について簡単に触れておこうと思う。

SB75は、貯蔵具である須恵器の壺・甕がほぼ完形に近い形で床面に横転して出土した住居址で、このほかにも床面直上から遺物が多く出土している住居址である(第146図)。本址は、出土状況より最終使用の在り方がある程度残したまま遺棄された住居址と考えられる点で重要な資料であるといえる。

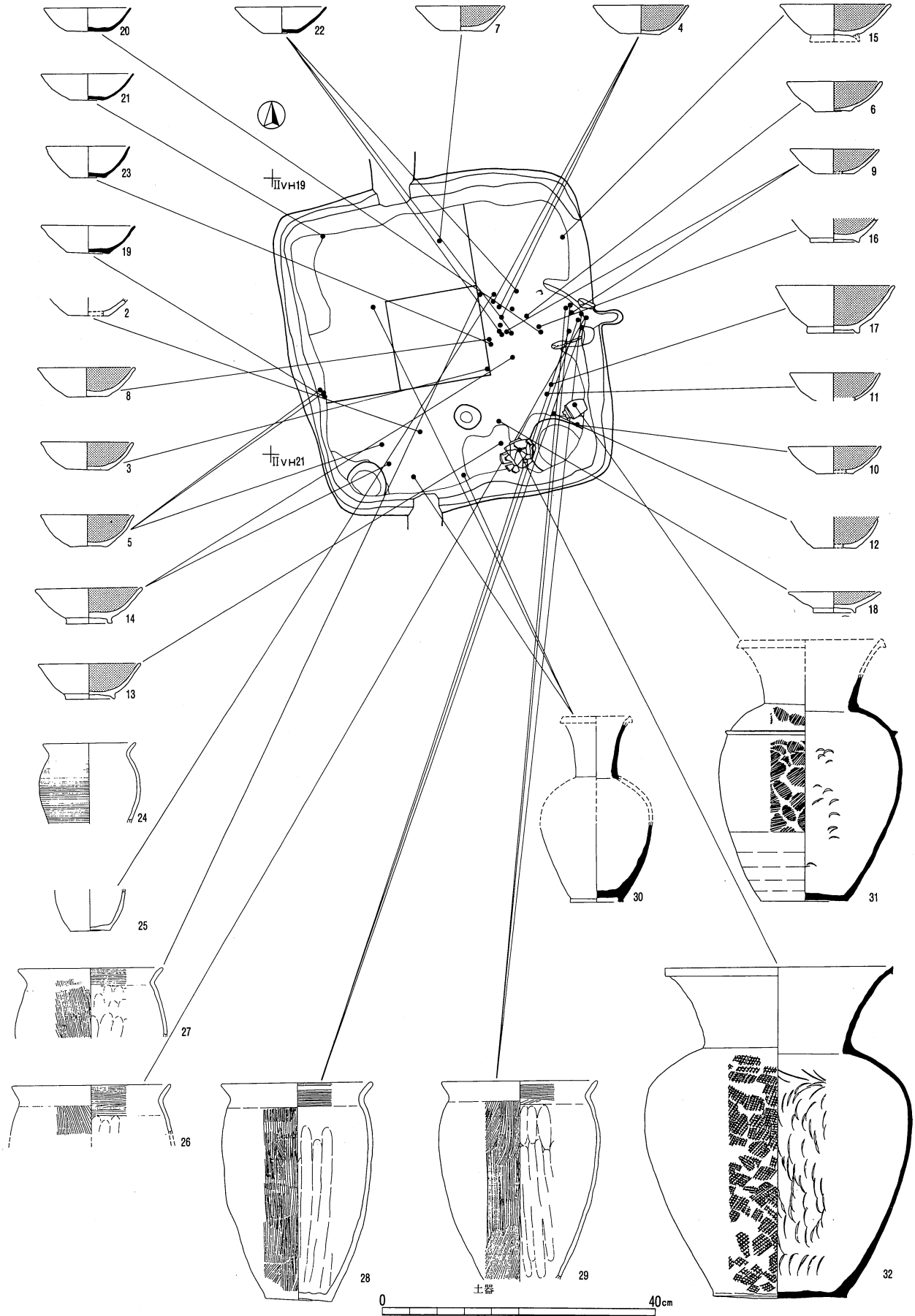
SB75から出土した遺物は7期の様相を示すものであり、土師器杯片の出土、甕Bの口縁部形態より8期に近い内容とも考えられるが、SB120を代表とする7期後半の特徴である軟質須恵器の出土がない点で

住居址	土 器			鉄 製 品 銅 製 品	滓	羽 口	石 製 品	文 字 関 係 資 料
	食 器	煮 炊 具	貯 蔵 具					
SB 25	40	23	12	釘1			石 錘 15	
SB 32	34	21	8		○			
SB 42	18	4	4	釘1	○	○		墨書1「往」
SB 47	5	9	1					
SB 50	23	9	2	刀子1・不明1				墨書3
SB 55	18	12	5					
SB 70	11	1	1					
SB 75	53	11	9	釘2・棒状1・鉄片1・不明5				
SB 78	24	12	6	刀子1			砥石 2	
SB107	30	13	8					
SB120	59	20	12	不明1				刻書1
SB125	30	11	4					転用硯
SB127	23	12	7	刀子1・釘1				墨書1
SB144	20	15	6				砥石 1	
SB166	4	6	0	不明1				
SB191	73	35	10	刀子1・斧1				墨書4「龍」・「龍」
SB212	20	9	4			○		墨書3「宍」・「太」
SB215	6	10	6					
SB217	16	7	5	鎌1				
SB233	35	13	7					墨書1
SB235	10	6	2					
SB237	28	15	4	刀子1・釘1				

第49表 7期の住居址出土遺物表

SB120をやや遡る時期とも考えられる。SB75の出土土器を機能別に個体数を求めると、食器53個体、煮炊具11個体、貯蔵具9個体、総数73個体となっている。他の7期の住居址の様子と比較してみると、確実に7期の枠で捉えられるのは第49表に示した22軒があり、総数では4番目の量となる。また、機能別には22軒の平均個体数は食器26.4個体、煮炊具12.5個体、貯蔵具5.6個体、総数平均44.4個体である。個別には食器・貯蔵具は平均の倍の量を持ち、本址の出土量は多い方である。平均値より食器：煮炊具：貯蔵具の比は5：2：1となり、SB75が5：1：1となることから、煮炊具が少ないと言える。平均的な土器の在り方とは偏った煮炊具の状況から、SB75は使用時の全くそのままの姿を反映しているとするよりは、廃棄時点に取捨の意志・余裕があったと考えるほうが妥当である。出土した個体の残存率については、総数73点のうち、残存率80%以上、あるいは欠けていても使用に耐えられると判断されるものは多くても14点あり、約20%近くにあたる。また鉄製品の点数は多いが、破片などであり、そのまま使用に耐え得る製品は少ない。このことから使用時の本来の姿をある程度投影しているに留まり、本址が何かの事情で、取るものも取りあえず去ったという形を想定することはできない。本址の須恵器甕・四耳壺





第146图 SB 75遺物出土状況実測図

の出土は特殊な感を強く受けるが、上述の通り、特異な位置・状況・状態にあった住居址と考えるよりはごく一般的な住居址内の様子を表わしていると思われる。

以上のSB75の状況を把握したうえで、7期の住居址内の在り方を考えていくことにする。廃棄された土器の中で、注目されるのは従前の貯蔵具である。ほぼ完形に近い須恵器四耳壺と甕が南東隅に2点、南壁際中央付近に須恵器長頸壺が1点出土している。覆土より人為的埋没と捉えられている。仮りに自然埋没としたとき、本址の周囲の環境から西側及び北側から土砂が入ることが自然であり、上屋がないことを条件にすれば、2点の貯蔵具は口を南東に向けて倒れていることが自然であろう。実際には口を南西に向けて倒れていたことは不自然であり、大胆に言うなら北東方向からの人為的埋没が想像される。SB75の北東隣りにSB78があることから、SB78を掘り下げる時の土が投げ入れられた可能性もある。SB78とは距離的に同時存在しない。細部はさておき、いずれにせよ床面遺物はある短時間のうちに覆土でパックされたと考えられる。出土土器がほぼ原位置を留めていることを前提にして、住居内の空間利用を想定してみることにする。

本址はカマドが東壁中央に位置するもので、東壁を除く三周は壁が階段状に作り出されている。ピットは住居址の隅に2基と、その中間に1基が壁からやや離れて確認されたが、後者のピットは貼床下から確認されていることから、ある段階で機能していなかったと考えられる。貼床は住居址の隅にあるピット2基の際まで粘土を貼っており、また北西隅には貼床のみられない部分があった。遺物は煮炊具がカマド内とカマド焚口及び手前に集中し、食器はカマド焚口手前に多く、ほかに南東隅のピットの周囲、また南西隅のピットの周囲から西壁際にかけてのところにみられる。貯蔵具は南東隅のピット際に2点、南壁際中央に長頸壺がみられる。このことから、煮炊具と食器の集中するカマド及びカマド焚口手前あたりは「食」の空間であり、南東隅のピット付近は水などの「貯蔵」の空間、南西隅の付近や、南東隅の付近は食器などの「保管」の空間であろうか。また、遺物が少ない中央部から北西にかけての空間は「寝間」及び「作業」の空間と考えられる。この空間は2.6×2.5mくらいの広さがあり、うち住居中央にあたる約1.3×1.3mを「作業・その他」の空間としたとき、残りの空間は4.81㎡となり、SB75の床面積の約3分の1にあたるL字形の空間が「寝間」と言えよう。仮にこれを「寝間」としたとき、本遺跡で調査された伸展葬の墓址SK22・43・50・98・103の底面面積平均が1.22㎡であることから、4.81㎡の寝間は、3.9人が寝られるスペースが最低あったと思われる。

本遺跡以外の類例をみると松本市下神遺跡(松本市内その3)のSB97とSB111においても同様の間取りを推定することができる。2軒はともに7期に属するものであり、SB97は10.05×9.55mの大型住居址で、カマド右側の南東隅に貯蔵具を置いたと思われる石敷遺構がある。またSB111では、カマド左側の北西隅に貯蔵具類が散乱し、その反対側の南壁側から東壁側に沿ってL字状に分布する炭化物が確認された。炭化物は敷物と考えられ、寝間と推定される。SB111とSB75はSB97とは住居址の規模に差があるが、住居内の空間利用には大差が無かったのではないかとと思われる。少なくとも該期の住居内では1軒で最小単位(1家族?)の生活サイクルが完結していたと考えられそうである。

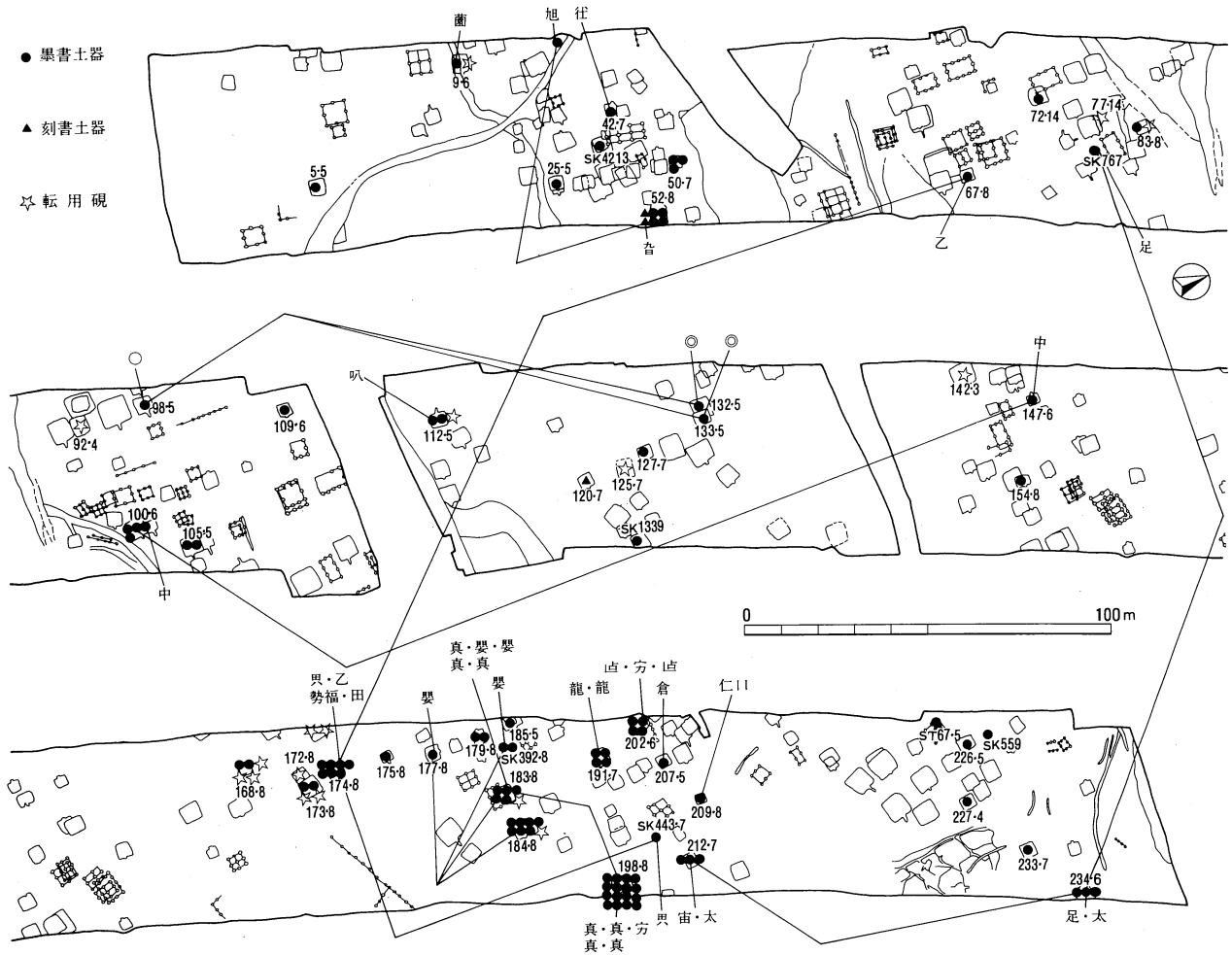
以上、住居址内の空間利用について述べたが、推定の域を出ない部分が多いことをお断わりしておきたい。

#### 4 文字関係資料の出土状況について

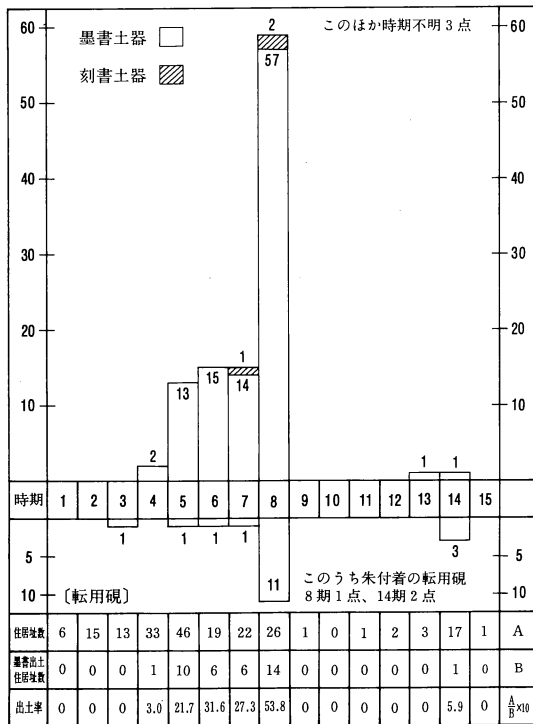
文字関係資料についての現状は、第3章第3節2で述べた通りであり、ここではさらに遺跡全体に係る視点で文字関係資料の在り方を整理しておく。

106点出土した墨書土器は4期に出現し、5～7期で各々13～15点が確認され、8期で57点と圧倒的

第4章 考察



第147図 墨書・刻書土器分布図



第148図 文字関係資料出土数

期	意味	人名	地名・人名	記号	建物・人名・吉祥句	人名・吉祥句	不明・吉祥句	人名ほか	
4	文字	得成	小田						
遺構	SB227	遺構外						●遺構外出土の「小田」は土器から4期あるいは5期	
5	文字	(人)	□人	◎	◎	○	倉	幸	
遺構	SB112	SB132	SB133	SB98	SB207	遺構外		●遺構外出土の「幸」は土器から5期あるいは6期	
6	文字	中	中	亅	亅	方 or 字	官職・場所	人名	不明・吉祥句
遺構	SB100	SB147	SB202	SB9	SB234			●SB234は6期の住居址であるが、墨書された土器は7期への過渡の様相をもっている。	
7	文字	往	足	宙	太	(法大)	人名ほか		
遺構	SB42	SK767	SB212	SB233	SK443			●「宙」は「寅」の略とすれば方向などが考えられる。	
8	文字	SB52 (刻書)	SK43	SB67	SB174				
遺構		SB184	SK392	SB177	SB183				
9	文字	方	人 or 尺	眞	眞	眞	眞	眞	仁 圃
遺構		SB198		SB183	SB209				●SB67は5期の住居址であるが、墨書土器自体は8期

第50表 判読文字一覧表（「意味」は推測）

な出土量をもち、14期でみられなくなる。これは住居址数の増減に符合してくるが、中でも8期の出現頻度は非常に高く、第148図に示したように出土率は53.8%で、8期の住居址のうち約半数の住居址が墨書土器を保有する。また8期では、1軒あたりの保有指数(墨書土器/各期住居址数)が2.2点となるのに対し、実際には特定の住居址(SB198)で16点を保有するなど、1軒の住居址に集中するという傾向にある。5期から7期では出土率が21.7~31.6%で、1軒あたり0.3~0.8点と1点未満である。刻書土器は3点あり、7期と8期に確認される。墨書土器と関連の深い転用硯の増減も墨書土器と同様の様子を呈し、8期に多い。転用硯の出現は墨書土器より早い3期には1点が確認されている。また転用硯の中には、朱墨硯と認定することは難しいが、表面に朱の付着のみられるものがあり、8期に1点、14期に2点が出土している。

墨書土器の分布については、第147図に示した。総体的には北部地区(図中下段中央より北側付近)に多く集中し、また南部南区(上段中央付近)にも一定量が集中している。これらの地域は8期の住居址が点在するところであり、その軒数に従って墨書土器の量も増減する。但し、前述したように8期では一住居址に墨書土器が集中する傾向があり、南部南区ではSB52に、北部地区ではSB198・SB184・SB174などに多い。また分布する墨書土器は必然的に出土量の多い該期の黒色土器Aに書かれることが多く、特に墨書土器のために意図的に土器(種類)を選ぶことは認められない。その他の時期においても、住居址の分布に従って点在しており、際立った特徴を指摘することはできない。同一文字の分布について、距離の離れるものは6期の『中』が約250m、6~7期の『□足』・『足』が約600m、8期の『乙』が約450m離れている。また『嬰』は約830m離れた南栗遺跡NR4で出土しており、『菌』もおおよそ190m離れた南栗遺跡SB598(7期)より複字句の一文字であるが出土している(松本市内その4参照)。北接する三の宮遺跡とは、『倉』(SB27・7期)が200m離れたところから出土しているが、時期的には合わない(松本市内その6参照)。また三の宮遺跡出土の「田人」(SB32・7期)が、三の宮遺跡に近い北栗遺跡SK443(7期)で、『田人』と同意と思われる『𠂔』が出土し、さらに南下してSB174(8期)で『𠂔』と『田』がみられる。三の宮遺跡SB32とは220m離れており、時期とともに文字が略され、位置的にも南下していく動きが指摘される。

墨書土器と係りの深い転用硯については、墨書土器の分布と変わることなくほぼ重なっている。

文字について、判読あるいは形状を確実に読み取れたのは、第126図に掲げた42点と刻書土器の1点がある。一時期内では、先にあげた『中』・『足』・『乙』以外にも、遺構を越えて同一字句を見出すことができる。それらを以下にまとめてみる。

- 5 期：『◎』 - SB132、SB133あるいは『○』のSB98
- 6 期：『中』 - SB100、SB147
- 6~7期：『□足』 - SB234、SK767
- 『太』 - SB234、SB212
- 7・8期：『田』及び『𠂔』 - SB174、SK443
- 8 期：『乙』 - SB 67、SB174
- 『嬰』 - SB177、SB183、SB184、SK392
- 『真』 - SB183、SB198

このほかに刻書文字のSB52の『𠂔』とSK43の『旭』も同意のものと考えられる。8期の『真』については、SB183の45(第126図)とSB198の66(第126図)は同一人物の筆跡とも考えられそうである。SB234は6期の住居址として捉えられるが、SB234の『□足』・『太』の土器自体は7期との過渡的様相をもつことから、SB234は『太』の出土する7期のSB212との関連が想像される。またSB234の『□足』とSK767の『足』は複字句と単字句という差があり、距離的にもおおよそ600m離れているため、同質のものかは不

明である。前述のように『乙』・『中』も距離を置いており、当時の人々がどの範囲内で、どのような関係をもっていたのかは推測に頼らざるを得ない。逆に8期の墨書土器が集中する北部地区においては、同一文字『嬰』・『真』・『兕』が100m強の範囲内で分布しており、遺構配置の空間的な在り方を含め、密接な関係を窺わせる。

出土状況については、住居址からの出土がほとんどを占め、それ以外からは少ない。墨書土器のすべては食器に表記されており、他の食器と出土状況に相違を見出すことはできない。また伴出遺物に目を向けてみると、墨書土器を多く保有する住居址は鉄製品が多く出土している遺構であることに気付く。4～7期まででは2者の関連は不明確であるが、8期についてみるとSB52で鉄製品11点と鉄滓、SB174では鉄製品5点、SB198では8点と鉄滓をみることができる。鉄製品・鉄滓の出土は8期に増えているため、偶然の在り方とも受け取れるが、注意を要する。これらの遺物を集中的に保持していた住居址の役割について様々な仮説が成り立つが、当時の集団の中心的・指導的位置にあった建物であることが想起される。但し、周辺の他遺跡と比較してもSB52・174・198の住居址自体は、規模などにおいても傑出していないことから、中心的・指導的位置にあったと考えるよりは、これらの遺物をまとめて捨てた大型建物址の存在を近くに想定すべきかもしれない。

次に文字の意味について考えてみたい。書かれた文字・記号が、果たして何を表わしているのかは明らかにしえないが、通常官職・身分・地名・場所・建物・人名・数字・季節・方位・吉祥句・呪字などを表わしているとされている。本遺跡の資料を考えると、少なくとも数字と季節を直接表現したものはない。文字・記号の形をおさえることのできた4期から8期までの遺物を対象にして、墨書・刻書の文字の意味について推測し、第50表に時期ごとに並べてみた。これ以外の意味も推定することも可能であり、ここで意味を決定付けるものではない。また表には、形状は不鮮明ながら、推測のある程度つく墨書文字に（ ）をして付け加えた。表に示した文字の意味を整理し直してみると次のようになる。

## ① 官職と思われるもの

6 期：『藺』（SB9）

## ② 身分と思われるもの

8 期：『真』（SB183・SB198）

## ③ 地名と思われるもの

4 期：『小田』（遺構外4～5期）

## ④ 場所と思われるもの

6 期：『藺』（SB9）

8 期：『田』（SB174）及び『兕』（SB174・SK443）

## ⑤ 建物

5 期：『倉』（SB207）

## ⑥ 人名

4 期：『得成』（SB227）

『小田』（遺構外4～5期）

5 期：『中』（SB100・SB147）

『（人）』・『□人』（SB112）

『倉』（SB207）

『幸』（遺構外5か6期）

- 6～7期：『□足』(SB234)、『足』(SK767)
- 8期：『乙』(SB67・SB174)  
『田』(SB174) 及び『𠂔』(SB174・SK443)  
『勢福』(SB174)  
『真』(SB183・SB198)  
『嬰』(SB177・SB183・SB184・SK392)  
『仁□(里?)』(SB209)
- ⑦ 方位と思われるもの  
7期：『寅』(SB212) — 「寅」の略か
- ⑧ 吉祥句と思われるもの  
5期：『幸』(遺構外5か6期)  
6～7期：『太』(SB234・SB212)  
8期：『𠂔』(SB52) 及び『旭』(SB52・SK43)  
『勢福』(SB174)  
『龍』(SB191)
- ⑨ 仏教的色彩のあるもの  
7期：『法大』(SB233)
- ⑩ 文字以外の記号  
5期：『◎』(SB132・SB133) 及び『○』(SB98)  
8期：『田』(SB174) 及び『𠂔』(SB174・SK443)
- ⑪ 判読不可のもの  
6期：『𠂔』(SB202)  
7期：『𠂔』(SB42)  
8期：『𠂔』(SB198)  
『𠂔』(SB174・SK443)
- ⑫ その他 = 不明

以上より、①～⑦の固有名詞的なものと、⑧～⑩の抽象的なものに分けられる。本遺跡での特徴を考えると、特に吉祥句的な言葉の初出は、5ないし6期の『幸』(遺構外)と7期への過渡期とされるSB234出土の『太』に吉祥句的な意味をもつ可能性があり、それより古い時期には認め難い。吉祥句は確実に8期には存在しており、新しい時期に限られるという傾向をみることができる。逆に、4・5期には『得成』・『小田』・『□人』・『倉』など具体的なもの・人を表わす言葉が記されている。墨書文字は、現実的なものの表現から始まり、次第に様々な内容を表わすようになり、それと同時にやがて一部は文様として形骸化していくものも生れてくるのではないかと思われる。

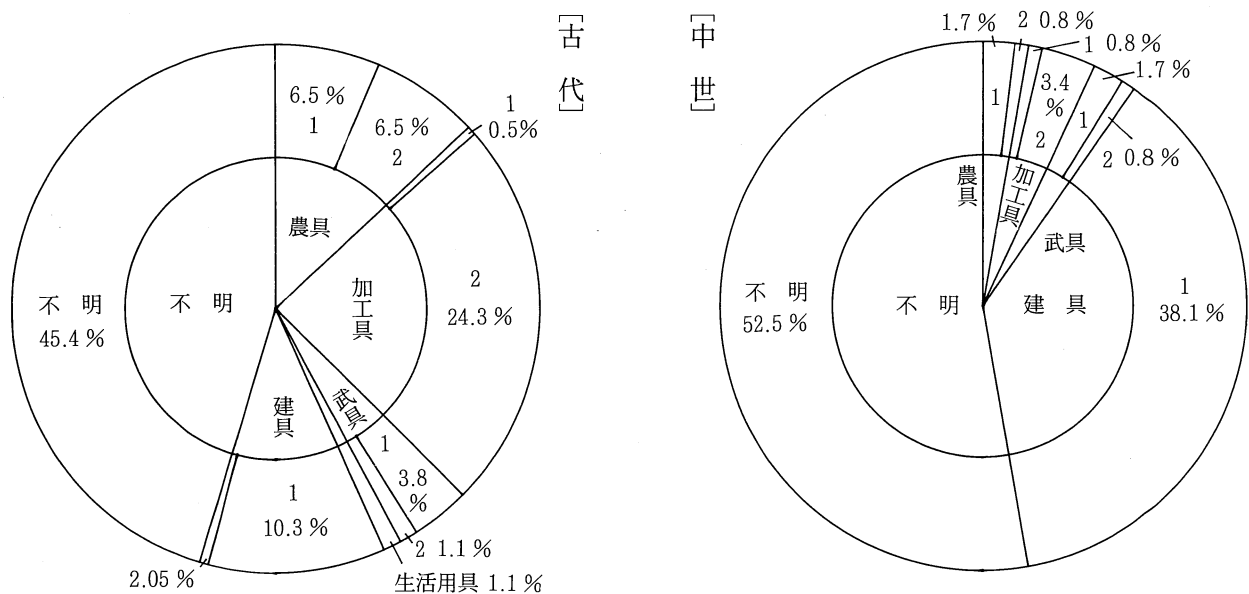
## 5 鉄製品の出土状況について

鉄製品は総数339点が出土し、その内訳は古代185点、中世117点、近世2点、遺構外の時期不明なもの35点である。また鉄滓については343点、11,600gが出土している。ここでははじめに古代・中世の鉄製品についてみていくことにする。

古代で最も出土量の多い器種は、刀子で44点を数え、次に釘が19点、鎌11点が出土している。それに

	古 代						中 世						
	機能 1	個体数	占有数	機能 2	個体数	占有数	機能 1	個体数	占有数	機能 2	個体数	占有数	
鋤・鍬	農具 1	1	6.5	農 具	24	13.0	農具 1	0	1.7	農 具	3	2.5	
鎌		11	%				農具 1	2	%				
苧引鉄	農具 2	3	6.5				農具 2	1	0.8				
紡錘車		9					農具 2	0					
斧	加工具 1	1	0.5	加 工 具	46	24.8	加工具 1	0	0.8	加 工 具	5	4.2	
鈍		0					加工具 1	1					
楔	加工具 2	1	24.3				加工具 2	0	3.4				
刀子		44					加工具 2	4					
鍬	武具 1	7	3.8	武 具	9	4.9	武具 1	1	1.7	武 具	3	2.5	
脛当		0					武具 1	1					
鉸具	武具 2	1	1.1				武具 2	1	0.8				
鐸		1					武具 2	0					
鋏	生活用具	1	1.1	生活用具	2	1.1	生活用具	0	0	生活用具	0	0	
燧鉄		1					生活用具	0					
釘	建具 1	19	10.3	建 具	20	10.8	建具 1	45	38.1	建 具	45	38.1	
金具	建具 2	1	0.5				建具 2	0	0				
棒状	不 明	27	45.4	不 明	84	45.4	不 明	11	52.5	不 明	62	52.5	
板状		4						不明					3
環状		1						不明					1
塊状		2						不明					0
鉄片		5						不明					3
不明		45						不明					44
合計		185	100.0		185	100.0		118	99.8		118	99.8	

第51表 鉄製品機能別一覧表



第149図 鉄製品機能別円グラフ

対し、中世では釘が45点出土し、次に多い刀子は4点であり、古代では刀子が多く、中世では釘が圧倒している。これらの鉄製品の機能を類推してみると第51表のように分類される。分類の内容について出土遺物を中心に触れておくと、鋤・鍬及び鎌の耕作具を「農具1」とし、生産にかかわる苧引鉄・紡錘車を広義に「農具2」と分類した。次の加工具については斧や鉈など直接加工に携わるものを「加工具1」とし、刀子などはその用途に留まらない万能的な道具を「加工具2」とした。刀子については、種々の機能が想定され、2次的な用法では副葬品としてのはたらきもあろう。武具については鎌や脛当など直接戦闘の武器・武具を「武具1」とし、「武具2」には鉈具や鐸などの武装以外の用途も想定し得るものをまとめた。「生活用具1」は実生活の中で必需品となるものをまとめ、出土はみられないが、精神生活に係るものを「生活用具2」と分けた。釘は直接ものを組むためのものと考えて「建具1」とし、同様のはたらきをもつが、装飾的な他のはたらきも想定される金具などを「建具2」とした。機能分類中の各々「1」・「2」のまとまりは、総じて「1」が直接その機能を専門的に果たすもの、「2」はその機能の拡大解釈、あるいは他の機能を合わせもつものなどであり、「1」に準じるものを一括した。

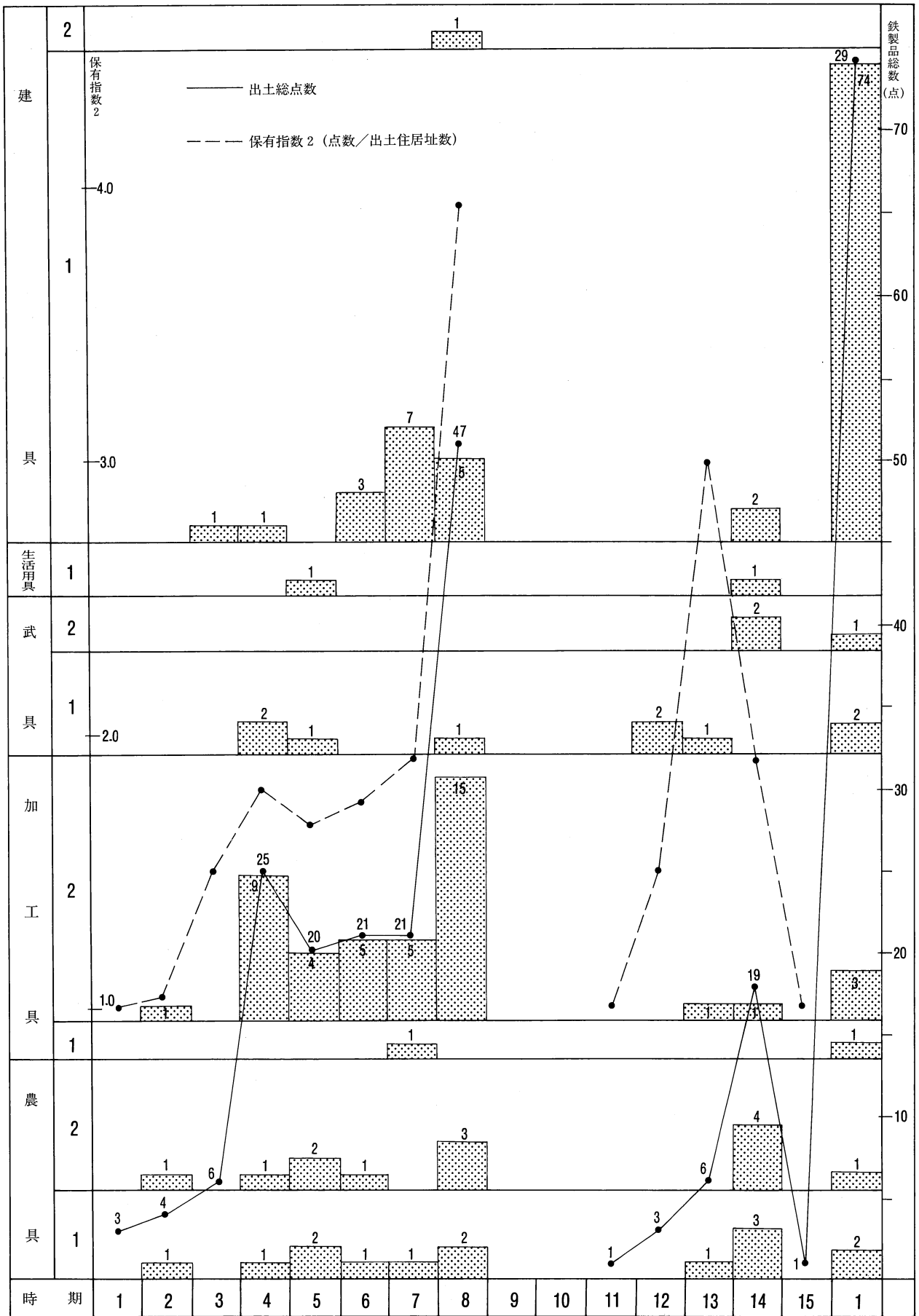
機能に従ってその占める割合を表わしたのが、第149図の円グラフである。鉄製品の宿命として1点では一機能を完結できず、ひとつの「もの」の部品であることが多いことや、銹化の進度により形状が復元されず不分明となるため、古代・中世とも機能の類推できない不明品が半分を占める結果となっている。古代では、機能的には加工具が多いが、万能具としての刀子がほとんどで、加工具1の割合は非常に少ない。農具・建具の割合はほぼ同じ10%代を示し、武具などの割合は少ない。中世では、釘の出土量によって建具2が38.6%を占める。釘は住居址や掘立柱建物址の構築物からの出土が多いが、土坑からの出土も多く、本遺跡での釘の普及を窺うことができる。加工具2としての刀子は大形のものに変化しており、武具1として考えるべきである。これを加えると武具の比率は5.9%になって、古代よりやや増加することになる。中でもSB267から出土した脛当の出土は注目される。脛当は出土した遺構より中世1期でも初頭段階のものと思われ、騎戦中心の該期においては類例が少なく、一定の富裕層が想像される。加工具や農具の比率は古代と比較して減っているが、短絡的にそれらの意味する仕事量の停滞を指摘するのは早急と思われる。

さらに、各時期別に推移をみたのは第150図である。4～8期、14期では比較的安定した量をもっており、前半部分の8期以前では4期で一度ピークを迎えながら徐々に8期に向かって増えていく。1軒あたりの保有指数は同図、第52表に示したように各時期の総数に対し、1点前後以上(保有指数1)認められるのは6～8期であり、後半期の11期以降では対象数が少ないが、6～8期に引き続いて同様に1点以上が比較的安定した形で保有されていた傾向を読むことができる。

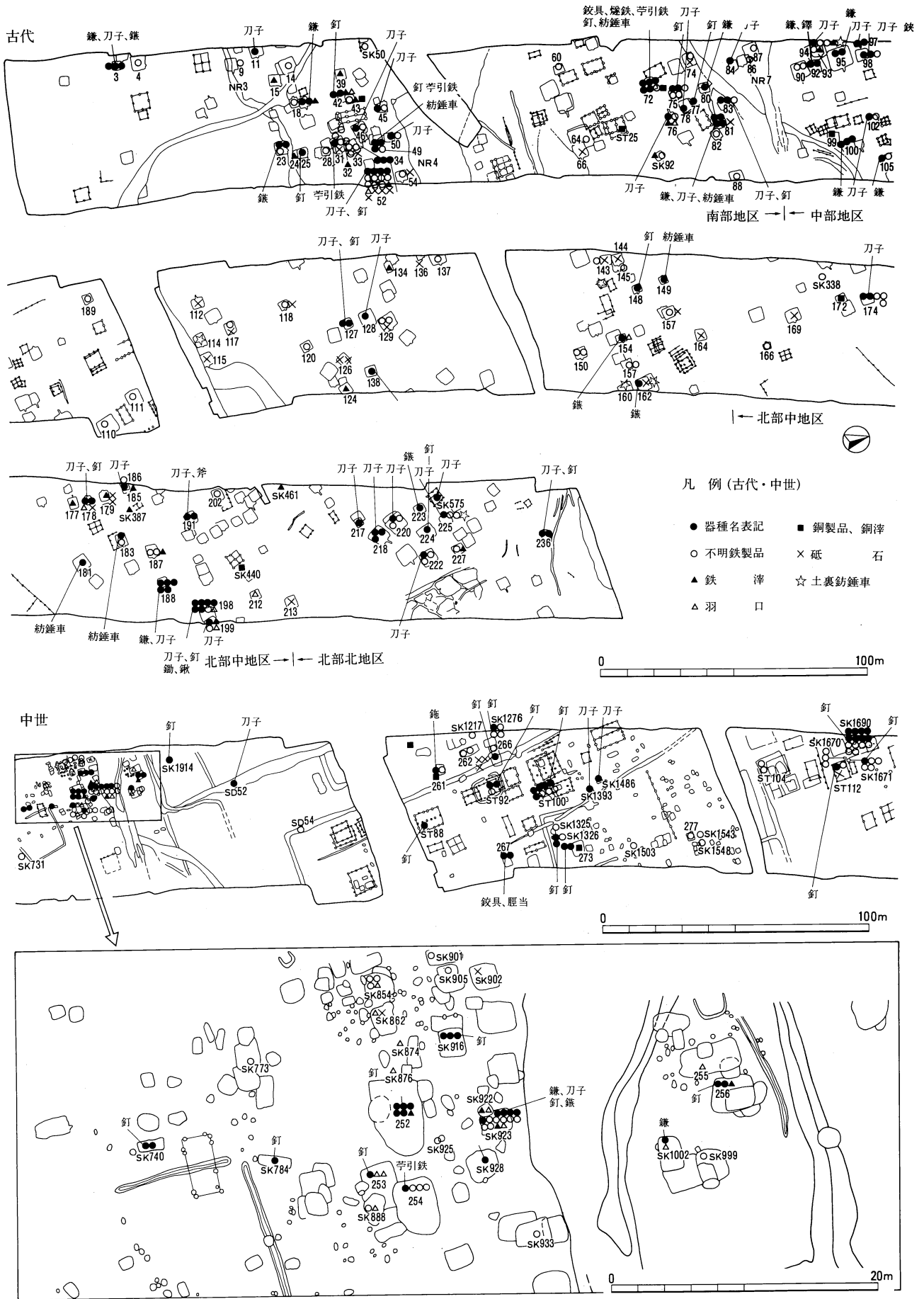
時 期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
住 居 址 数 A	6	15	13	33	46	19	22	26	1	0	1	2	3	17	1
出 土 住 居 址 数 B	3	3	4	14	12	12	11	12	0	0	1	2	2	10	1
出 土 点 数 C	3	4	6	25	20	21	21	47	0	0	1	3	6	19	1
出土率 B/A × 100	50.0	20.0	30.8	46.2	26.1	63.2	50.0	46.2	0	0	100	100	66.7	58.2	100
保有指数 1 C/A	0.50	0.27	0.46	0.76	0.43	1.11	0.95	1.81	0	0	1.00	1.50	2.00	1.12	1.00
保有指数 2 C/B	1.00	1.33	1.50	1.79	1.67	1.75	1.91	3.92	0	0	1.00	1.50	3.00	1.90	1.00

第52表 鉄製品保有指数の推移

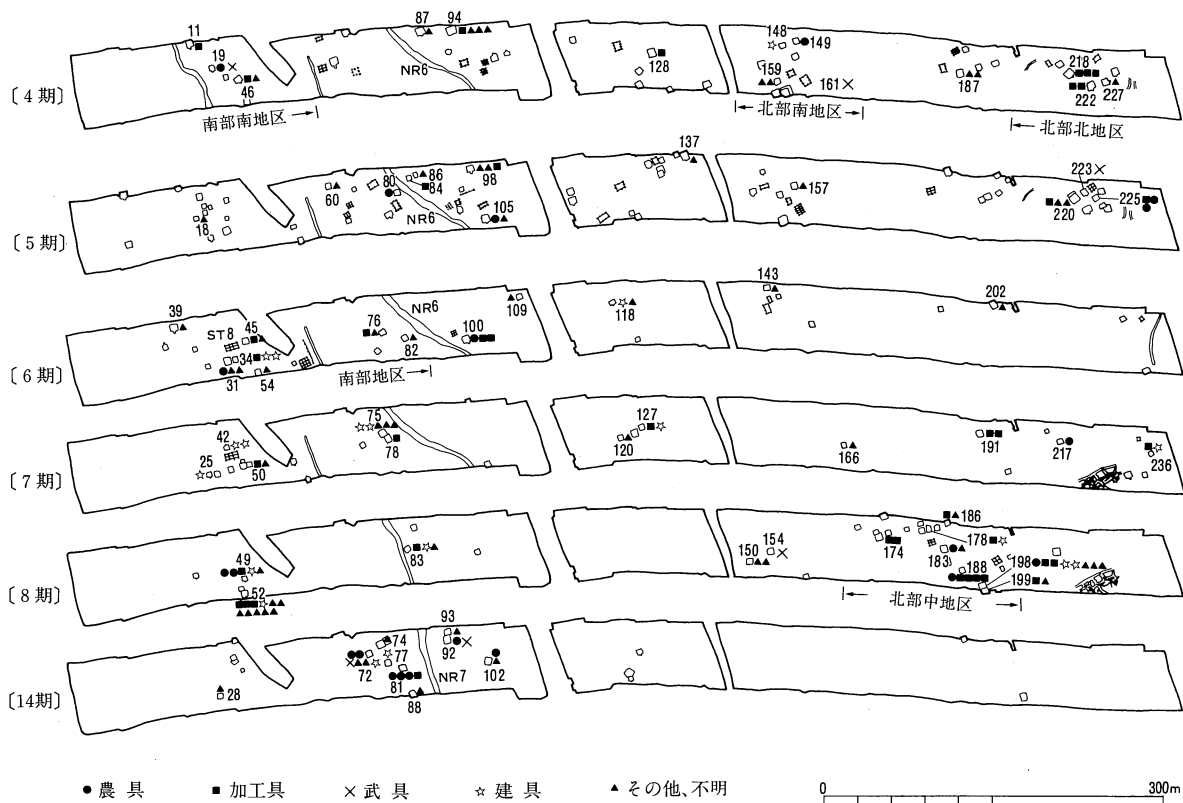




第150図 鉄製品時期別出土数



第151図 鉄製品及び関連遺物出土分布図



第152図 鉄製品時期別出土分布図

次に鉄製品の分布について第151・152図をみてみたい。古代については第151図より遺跡全体に点在していることが知れるが、特に南側のNR7（南部地区と中部地区の境）の南北地域、北部中地区～北部北地区に集中する傾向が認められる。特に出土量の多い4～8期、14期について時期別に個別に取り出してみると（第152図）、4期では遺跡全域に分布しており、北端のSB218・222・227では刀子が多く、南部地区のSB11・19・46と、北部南地区のSB148～161の2グループでは各機能をもつ鉄製品がバランスよくみられる。量的には各地域とも均質な数で分布している。続く5期では、4期と比べ加工具2が減る時期であり、1軒あたりの保有指数がわずかに減る時期でもある。分布は住居址が全域にみられるのに対し、出土遺構一部地域に集中し、NR6の南北両側と、北端の地区に集中する傾向にある。いずれの地域でも各機能をもつ鉄製品が出土している。4期で集中した北部南地区では、5期でも住居址群が継続するのに対し鉄製品は少ない。6期では住居址の分布に従ってNR6より南の南部地区に集中し、特にST8周辺に多い。続く7期でも住居址の分布に従って鉄製品も分布し、6期の集中していた南部地区のST8周辺には特に多い。最も点数の多い8期では住居址の集中する北部中地区に鉄製品が多く、SB188・198などにみられるように前代までと相違して1軒の住居址に出土が集中する。南端では8期の住居址数が少ないが、SB52から11点と鉄滓、砥石なども出土し、南端でも1軒に集中する傾向がある。時期を置いて14期では、NR7の両側に集中し、鎌・紡錘車・苧引鉄が多い。

このほか古代全体を通じて、鉄製品と関係が深い砥石が鉄製品の出土している住居址にみられる（第151図）。銅製品については、量が少なく同一時期のものがいないためか分布は点在している。鉄製紡錘車に対し、土製紡錘車は4期（SB94・160・161）と5期（SB225）に出土がみられ、各々の地域で鉄製品の機能を補完する立場にあり、偏在した分布は認められない。また鉄滓の出土は、SB19・94・186の4期の住居址からが初見で、羽口は5期のSB114からみられ、鉄製品が4期以降で多出することを考え合わせれば合致してくる。少なくとも4期以降では集落内で鉄製品の補給を行っていたと考えられる。鉄製品が多くなる

に従って鉄滓・羽口の出土量も増すことから、小鍛冶は必要に応じて日常的に行なわれていたと思われる。

次に中世の鉄製品について触れる。中世は1期の遺構が集中する南部北地区から中部北地区に鉄製品もほとんどが分布する。第151図に示したように、特にSB252からSB256が構築されている南側の一角に集中しており、住居址のほか土坑からも釘の出土が多くみられる。この一角に限って鉄滓・羽口の鍛冶関係遺物が出土しており、北側の中部北地区の地域にはみられない。

## 6 中世の出土遺物から

本遺跡では、第3章第4節1で述べたように、中世の土器・陶磁器は1期に属するものがほとんどを占めており、2期に下るものは少ない。今回の報告で古代と境を分けた12世紀中葉から13世紀初頭頃から始まる1期(約2世紀間)には、全期間にわたって遺物を捉えることができ、さらに2期に至っては1期からの連続として15世紀代までのものが量を減らして見出すことが出来る。逆に言えば、15世紀後葉以降の遺物は破片資料が1点と皆無に近く、17世紀前半になって少ないながら再び遺物を見ることができる。遺物の激減する15世紀前半と、遺物のみられなくなる15世紀後葉頃に消費者に何らかの変化があったことが想定でき、当地でのひとつの画期を考えることができる。

はじめに、中世の連続として古代末からの土器・陶磁器を含めて、器種構成などの様相の変化を時期を追いながら整理しておくことにする。なお、土器・陶磁器の分類や編年などは総論編に詳しい。

**古代15期** 15期の資料としては、図版164に示したSB117出土例に限られている。遺構外出土を含めても該期に属すと考えられる資料は、白磁(横田・森田分類によるⅡ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類を主とするもの)を傍証として挙げるができるだけで、積極的に把握できるものはない。白磁については、今回古代所産のものとして報告しているが、北栗遺跡では第34表に示したように古代遺構出土のものは限られ、またほとんどは混入と判断されるため、実際にはSB117のほかはすべて中世の遺構に伴うものである。いずれにせよ、該期から使用されていたことは松本市北方遺跡9号住居址など(松本市教委1988)や、塩尻市吉田川西遺跡SB31段階(長野県教委1989)の資料などから事実と思われる。

該期として唯一のSB117の遺物は、碗として灰釉陶器1点・白磁輪花碗1点・黒色土器B小碗2点、また杯AⅡは小形のもの8点図示される。そのほか小型甕A・D各1点、羽釜2点が出土している。15期では大小の法量分化が最も進んで全体に小形化した段階であり、当住居址では大形の杯は確認されていない。技法的には小型甕Aと羽釜Aが非ロクロ成形によるほかはロクロ成形であり、また、灰釉陶器・山茶碗や輸入陶磁器は少なく、ほとんどは土師器が主体という構成をもつ。

**中世1期** 土器・陶磁器から、結果的には以下のように大雑把ながら4つの時期に分けて考えることができる。

- ① 13世紀前葉まで
- ② 13世紀中葉～後葉
- ③ 14世紀前半
- ④ 14世紀後半

**13世紀前葉まで** 該期と考えられる遺構出土の遺物には、伴出事例として良好な出土を示すものは少ない。古代と比較して、ひとつには遺物を内包する遺構の特質の変化を想定することもできる。遺物は、食器では白磁碗・皿、青磁碗・皿、山茶碗があり、調理具として東海系捏鉢、貯蔵具としては常滑系甕が指摘できる。量的には少ない。これらの遺物年代観は、輸入陶磁器や東海系陶器の既存研究に頼った結果抽出できたものであるため、輸入陶磁器や東海系陶器の消費が主体である錯覚を起こし易いが、実際には在地産の製品も存在するはずであり、研究の遅れている在地産の遺物を見出すことは二次的な作業となる。

従って、これらと対比するとSB266・SD59・64が該期の遺構と考えられ、そこから出土する手捏ね成形による土師器皿は、この時期のものであろう。該期の土師器皿は、法量的には大小の2法量が存在する。古代15期の土師器杯と比較すると大法量は資料がなく不明、小法量は近似する。東海系の製品は常滑産や渥美産と考えられるものが多い。土師器皿については本期と前代との間にロクロ調整から手捏ね成形という技法の転換があり、在地系土器の生産に何らかの転機があったことを指摘できる。古代15期に位置付けられるSB117出土土器と器種構成を比較すると、この時期以降煮炊具の出土が認められなくなり、遅くとも15世紀初頭に出現する内耳鍋を待たなければならない。

本期遺物の出土は、市道高綱線を挟んで中部北区南西から中部南区北寄りに集中し、また南部北区北寄りにも稀薄ながら出土している。

**13世紀中葉～後葉** 竪穴住居址として捉えられる遺構からの出土が認められるようになり、従って該期に属す遺物は増量する。地域的には前時期をほぼ踏襲する形で存在し、中部北区南寄りに多く、また南部北区北寄りでも確実に遺構が営まれるようになる。具体的にはSB264・265、SB253などが挙げられ、前時期との過渡的存在としてSB262が想定される。

この時期の遺物は、明らかに手捏ね成形による土師器皿を捉えることができることから、器種構成上では食器が増える。そのほかは大きな変化は認められない。また白磁碗・合子、青磁碗・杯、青白磁合子・梅瓶の輸入陶磁器は豊富で、山茶碗、捏鉢、常滑系甕・壺などがある。東海系の無釉陶器は、前代と異なり、美濃・中津川産などの量を増やす傾向にある。該期の土師器皿は前時期と比較して、大・小2法量とも小形化している。

**14世紀前半** 前時期より量は減っている。遺構としてはSB254があり、過渡的なものとしてSB252がある。掘立柱建物址は該期に属すものが多いと思われるが、遺構の性格上遺物の出土量は限られている。遺物の出土する場所は前代を継承するほかは、さらに北部南区の南寄りにも広がる。

遺物の内容については、大きな変化はみられない。前時期同様のものでは、白磁碗、青磁碗、山茶碗、捏鉢、常滑系甕土師器皿がある。また特異なものでは、調理具として須恵質もしくは土師質の挿鉢や片口鉢の出現があり、ほかに壺・瓶を中心とした古瀬戸系陶器の移入が確認される。土師器皿は量が激減しているため変化を明確に成し得ないが、法量の分化は不明瞭で、口径・器高とも前時期からの小形化傾向は連続しない法量を示している。

**14世紀後半** 遺構の減少とともに遺物の量も減少する。中世初頭から継続して利用されていた中部北区南西では遺物がみられなくなり、変わってこの一角より北東に位置するSD66の付近に、遺物が僅かにみられるようになる。

遺物の出土量が少ないため、考察の対象は限られる。輸入陶磁器は出土せず、山茶碗も不明である。調理具の捏鉢と貯蔵具としての常滑系甕は量を減らして存在する。前者は中津川産、後者は常滑産と中津川産と思われるものがある。古瀬戸系陶器は前時期と様相が変わり、食器である天目茶碗・平碗などが確認されるようになる。土師器皿の様相は不明である。

**中世2期** 遺物の絶対量は減る。地域的には前時期と同じSD66付近に継続されるほかは、中部南区北西隅と、それに近いSD54囲まれた地域に限られ、また新たに北部南区にごくまばらに点在する。

遺物は限られ、供膳具では古瀬戸系陶器の天目茶碗・平碗と土師器皿、ほかに貯蔵具として常滑系甕、煮炊具として内耳鍋が出土するようになる。古代15期で姿を消した煮炊具は、少なくともこの時期に至って初めて登場する。土師器皿はロクロ成形によるものであり、12世紀終末あるいは13世紀初頭から始まった手捏ねによる成形技法は、出土例のない空白の14世紀後半の中で途絶え、本遺跡ではその技法の変換期を探ることはできない。

該期では、15世紀後葉には実質的には原位置を留めた遺物の出土はなく、生活址としての利用は発掘域では認められなくなると考えられる。

## 第4節 遺構群の構成と変遷

高速道路幅(55m~60m)という細長く限られた調査範囲であるので、集落の全容を明らかに把握できる発掘調査とはなっていないが、地形などに区切られたり遺構の平面的なまとまりから、いくつかの遺構群として理解できるところがある。さらに、時期を限っての遺構群内の構成や、遺構の移り変わりなどが具体的に把握できた場合もある。ここでは、大きく古代と中世に時期を分けて、いくつかの遺構群について、どのような遺構がどの程度の数で構成され、それが時期を追ってどのように変遷していくのか、具体的に検討してみたい。

### 1 古代における遺構群の構成と変遷

#### (1) 南部北地区(2期~8期) 第153図

南部北地区は南北を用水路あるいは自然流路もしくは小凹地によって区切られており、東西は若干広がりそうであるが、遺構のまとまり具合からはほぼ一つの遺構群が検出されたと考える。

南部北地区に遺構が構築される最初は2期であり、大形の竪穴住居址SB64と庇付きの大形掘立柱建物址ST25が南北に並立し、西側に対応する位置でST16・19が並ぶ、規格性のある建物配置がみられる。さらにST19の南東に小形の建物址(ST17)が位置し、竪穴住居址1軒と掘立柱建物址4棟で群を構成していたと考える。3×2間以上の建物址を居住の場とすると、住宅4棟に小形の建物址1棟が付属していたと仮定できる。本遺跡において該期には、これより南に遺構は存在せず、北側の遺構群とも100mほどの間隔を置くので、少なくとも南北100m以上の範囲をこの遺構群が占地していたことになる。いくぶん時期を新しくして、SB64はやや小さく建て替えられてSB66となり、それに対応してST25もST21に小形化して移動したと思われる。したがって、全体がやや小規模の建物になり、規格化した配列ではなくなるが、竪穴住居址1軒と掘立柱建物址4棟の構成には変化はみられない。

3期になると、SB66は真西に30mほど移動してSB61としてST18と南北に棟を連ねるように位置する。遺構群の核ともいえる大形住居址SB61の南東にST13が構築される。北西にはST20と同規模・同形態を呈するST17が存在しており、SB66の移動につれてST17がST20へ移動したと考えたい。ST19は同位置に建て替えられてST18として存続し、ST21も同時期まで存在していたと思われる。2期同様、竪穴住居址1軒と掘立柱建物址3~4棟で構成された遺構群が、位置を西へ移して形成されたと想定できる。また、南側は東西軸線方向の溝SD3が構築され、区画線としての役割も果たす。この時期に溝が構築されていたか判然としないが、遺構配置から境界南限として意識されたものと思われる。

4期も基本的にはそれまでの遺構の構成を崩さずに存続する。大形の核的住居址SB61はすぐ東にSB63として建て替えられ、さらに同位置で規模を小さく建て替えてSB62へと移行する。まったく同じ動きが、ST13→ST14→ST12の同位置での建て替えにもみられ、その間にST21はST24へ、ST17はST15へと、規模や形態を類似させながら近くに移動する。ST17が移動した跡には新たにSB68が構築され、総数で5棟という建物の数は変化しないが、竪穴住居址2軒に対し掘立柱建物址3棟の構成となる。建物址は2×2間以下の規模の小さなもので、居住施設とは考えにくい。NR6を挟んでSB87が新たに構築されるが、北接する遺構群に含まれる可能性が高い。

5期にいたって、遺構群の構成が大きく変化する。核的な大形住居址がみられなくなり、竪穴住居址4

軒に掘立柱建物址4棟の構成となる。また、遺構間の移動も想定の難しいものが多くなり、それまでの占地場所も全体にかなり北に移る。住居址はSB68からSB60への移動が、規模や位置の関係で可能性を指摘できるほかは、前期からの変遷を追うことができず、建物址もST24に近接してST22・23が構築されるが、北側の建物は新たな構築であろう。SB69付近は3期以降遺構の空白域で、これを取り囲むように遺構が配置されていたが、該期には空白域(広場?)を北に移し、それを半円形に取り囲むように建物が位置する。5期は遺跡全体に遺構が展開する時期であるが、南北に隣接して住居址などが構築される。

6期は、遺構群を構成してきた掘立柱建物址のみられなくなる時期である。カマドの向きや規模と位置関係から、SB69→SB76、SB67→SB71、SB79→SB82の移動が考えられ、竪穴住居址3軒が半円形に並んで位置し、規模を小さくして遺構群が存続するが、掘立柱建物址は確認できない。占地場所は北側に3軒が集中し、2期以来遺構の構築されてきた南側部分に遺構が構築されなくなる。なお、この時期に、南接して庇付きの大形建物址ST11が構築され、溝(SD3)と堀(SA1)が北側に配されて、本遺構群とは明確に南北に区画されていたことがわかる。

7期も同様の構成で遺構群が存続する。SB76はすぐ北側のSB78へ移り、SB71はSB70へ、SB82はSB75へと西側に移動して新たに構築されたものと思われる。やはり竪穴住居址3軒が半円形に配され、6期に類似した構成と遺構配置がみられる。

本遺構群が終焉する8期は、SB83とその北のSB85の竪穴住居址2棟で構成されていたと思われる。両住居址間に位置するNR7は、SB83が流路にかかると東への流れも認められることから、位置を変えていた可能性がある。6期以降小規模になりながらも存続した遺構群は姿を消し、14期に一時的な遺構群が現われるまで遺構空白域となる。

#### (2) 北部南・中地区(1期～9期) 第154図

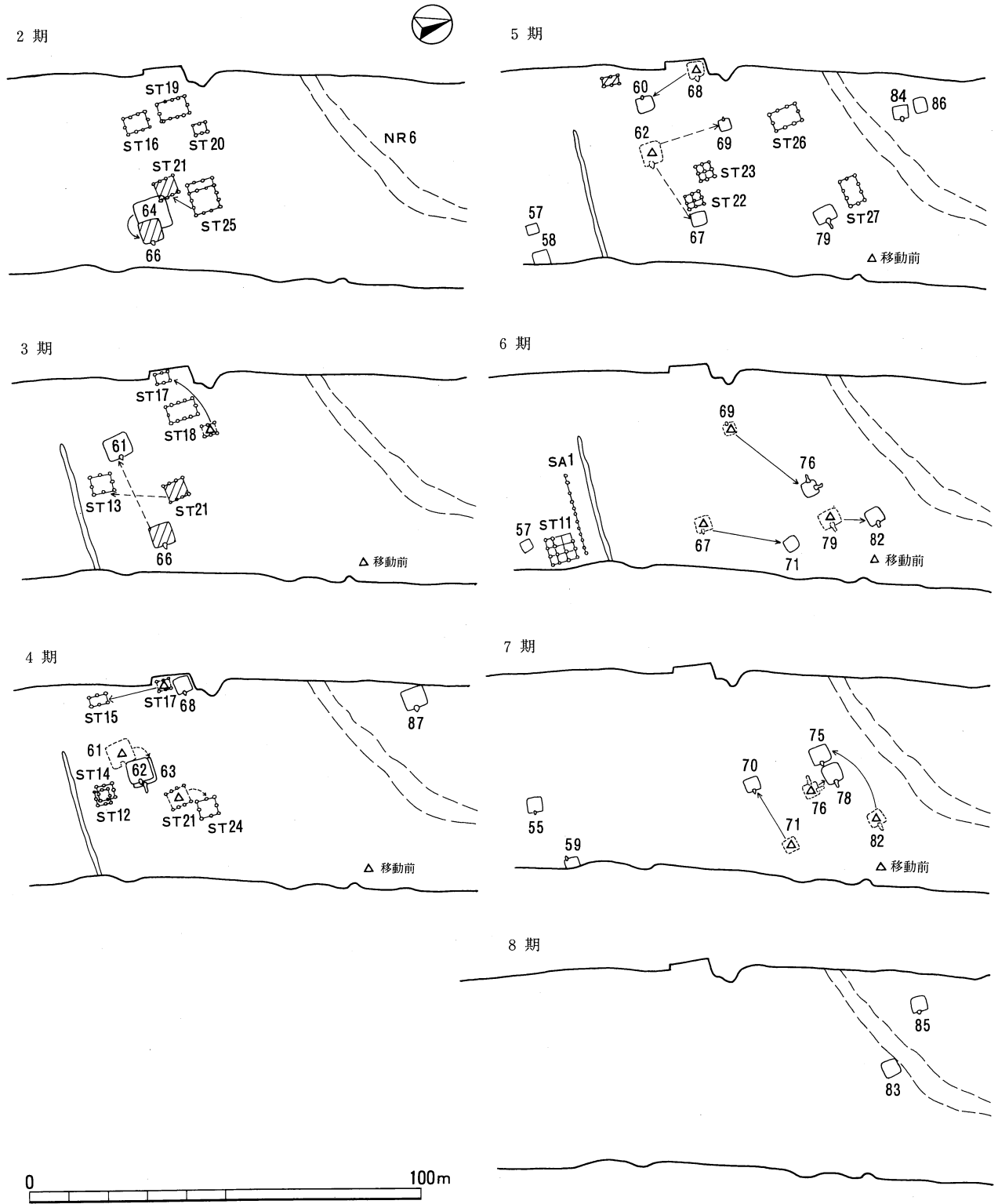
北部南地区から中地区にかけて、特に北部中地区ではかなり長期にわたって遺構群が存在し、前述の南部北地区とは異なる構成や変遷が確認できる。しかし、遺構群の東半分程度が検出されただけで、全体を把握することはできない。したがって、やや断片的ではあり群としての理解も十分にできにくい、時期を追って概括したい。

2期に近い1期の時期にSB204が構築され、当該地区に初めて遺構が出現する。調査範囲の西端に位置するので判然としないが、以後の状況を見ると、複数の建物が西側に存在しそれと合わせて遺構群を構成していたと思われる。

2期では南地区から中地区にかけて広く遺構が確認される。しかし、SB181とSB182あるいはSB195とSB197のように、大小の竪穴住居址2棟で群を構成していると思われる部分があり、SB204もSB205からSB208へとわずかに位置をずらせて存続するが、ST64と2軒の建物で群を構成していた可能性がある。SB169付近では、竪穴住居址3棟に掘立柱建物址1棟程度の構成が考えられるが、南部北地区の大形住居址・建物址を核とした整然とした配置や構成とは様相が異なる。このように2棟一対のごく小規模な遺構群がある距離を置いて構築されるが、SB208付近を除いて3期まで存続しない。極めて存続時期の短い不安定な遺構群の状況は、構築途中で放棄されたSB165に端的に現われている。遺構群への水の供給経路が明確にならないが、部分的に検出されたSD15から判断して、北側の境沢付近を流れた自然流路から導かれた用水路の可能性が濃い。

3期にいたると、SB208が該期まで残った可能性があり、SB193が不明確ながら存在していたと想定できるだけで、遺構の存続自体が判然としない状況にある。なお、後述するが、北部北地区のSB214などと遺構群を構成していた可能性も指摘できる。

4期では再び遺構群が明確に把握できるようになる。SB193が建て替えられたSB192と、SB208の移



第153図 南部北地区遺構群時期別変遷図

動と思われるSB201に加え、SB187・189の2棟の住居址と建物址で構成される。建物址の帰属時期が不明確であるが、方向と位置関係からST61・62が付属する可能性が強い。そうすると、やや規模の大きいSB187を含む竪穴住居址4軒と掘立柱建物址2棟で遺構群が構成されており、中央に空間をもつ半円形もしくは楕円形の遺構配置がされたと想定できる。西側部分が調査範囲外にかかるために確認できず、もう少し遺構数が増える可能性も残る。



5期も同様の場所に遺構群が継続して構築されている。個々の具体的な移動を指摘することは難しいが、SB194・200・207が4期のSB187・192・201に対応して南北方向で並び、その南の建物址ST60・61・62のうち1ないし2棟は該期に帰属すると思われる。西側のSB185・203・206を加え、竪穴住居址6軒と掘立柱建物址2棟程度の構成が想定でき、4期同様に半円形または楕円形に配置されている。

6期ではSB180・202の竪穴住居址2軒が認められるだけで、位置的には5期の遺構群が存在していた範囲の内に構築されているが、遺構群の構成や配置はまったく異なる。大小の竪穴住居址が南北に距離を置いて2軒で群を構成していた可能性もあり、全体が西に移動した結果とも考えられるが、その内容などを把握することはできない。

7期も、遺構群として明確に捉えることができない。大小の竪穴住居址が2軒東西に距離を置いて位置し、6期の状況を受け継いでいると考えることもできるが、北部北地区のSB215・217とともに、4軒の住居址で大きく半円形を描くように遺構群を構成していた可能性もある。

8期に入ると、突然多数の住居址が構築され、遺構群の様相が一変する。SB172からSB186まで南北に整然と住居址が並び、その東側に数棟の住居址が半円形に位置する。SB171の存在などから、整然と並ぶ遺構群はさらに西側に展開すると予想され、かなり規模の大きな建物などのまとまりが想定できる。その東側には大小の住居址がそれぞれ3軒づつ程度で構成され、半円形に配置されていたと思われ、可能性は低いが掘立柱建物址が併存していたことも考えられる。6期以降、短期間でその構成や占地場所を変えてきた遺構群が、8期にいたってさらに大きく変化した結果が示されている。

9期には、規模の大きな遺構群が再び姿を消してしまう。該期に帰属する住居址はSB196だけであり、存続した可能性のあるSB168を含めて、単独の住居址に土坑が伴う小規模の遺構群が考えられる。突如として遺構の数が減少して、以後14期で小規模な遺構群が形成されるまで、遺構空白域となる。

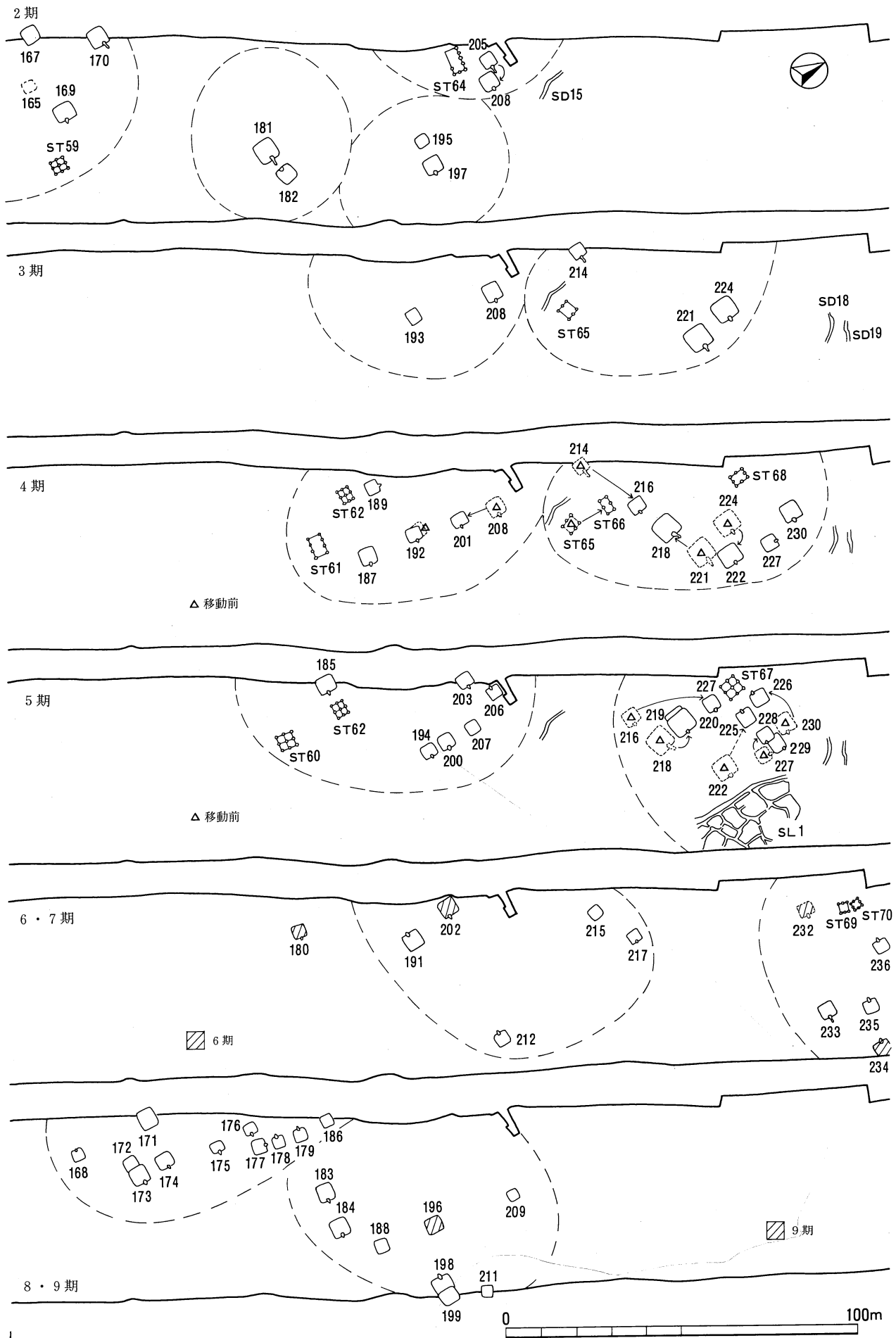
### (3) 北部北地区(3期～7期) 第154図

前項で記した北部南・中地区に隣接して、比較的まとまった遺構群が存在する。

南側の遺構群より遅れて、3期から本遺構群が構築され始める。SB221およびSB224の大形住居址と、規模などを明確にできないが、ST68付近の小土坑の密集する部分に想定される建物址、それにSB214とST65、さらに西側に遺構の存在する可能性も含め、住居址数軒と建物址2棟程度の構成で、やはり半円形に近い遺構配置が考えられる。SB214とST65は中地区の遺構群に属する可能性もあるが、以後の遺構の状況からは本遺構群に含まれると考える。SD15・18・19が断片的ながら検出され、境沢付近の自然流路よりの水の供給がうかがわれる。

続く4期も、同位置で遺構群が存続する。同位置に建て替えられるST68をはじめ、SB221→SB218、SB224→SB222、SB214→SB216、ST65→ST66の移動が想定でき、SB227とSB230を加えて、竪穴住居址5軒と掘立柱建物址2棟で構成され、半円形に近い配置が認められる。住居址は大形のものが3軒、規模の小さなものが2軒存在し、3期に大形の住居址が構築された場所に引き続き大きな竪穴住居址が建てられていく。同様の半円形の遺構配置であるが、全体がやや北東方向へ移動している。

5期でも同様の状況・内容で遺構群が構築されていく。大形の住居址はSB218からすぐ北隣のSB219へ移り、同地で建て替えられてSB220となり、遺構群形成期以来続く大形住居址の占地場所の限定が認められる。同様に近接して建て替えが行なわれる例にSB227→SB228→SB229があり、ST68は3期以来同位置へ建て替えられてST67となる。さらに、SB216→SB223・SB230→SB226の移動が考えられ、大形の住居址SB222は占地場所を変え小形化してSB225に移動していると仮定すると、竪穴住居址5軒と掘立柱建物址1棟で遺構群が構成され、4期までとは逆の向きの半円形に遺構配置がなされている。遺構全体の占地場所は変わらず、また3～5期を通じての東側の遺構空白域には水田址(SL1)が認められ



第154図 北部地区遺構群時期別変遷図

るなど、居住域と生産域の関係を理解する好例となっている。

6期以降は、南接する遺構群と同様に、遺構群の構成や構築場所の変化・移動が著しい。まず6期では、それまでの遺構群の占地場所から北の境沢沿いに移動し、遺構群の構成も明確に把握できなくなる。該期の竪穴住居址が2軒確認され、小形の掘立柱建物址1棟がともなうと思われるが、それらが一つの遺構群を構成している可能性は低いと考えられ、遺構群としての規模や構成は不明である。

7期も6期と同じく北側に遺構が構築される。やや規模の大きい住居址 SB233をはじめ3軒の竪穴住居址と1棟の掘立柱建物址が、南に開口する半円形に配置され、一つの遺構群を構成している。南に位置する SB215・217は別の遺構群の一部であろう。この時期以降現在まで、北部北地区には建物は構築されず、遺構空白域あるいは生産域の状態が続いていく。

#### (4) 南部南地区 (4期～8期・11期～14期) 第155・156図

本遺跡の南端では、1期に遺構群が形成された後短期間で姿を消し、4期でふたたび遺構が構築され始め8期まで存続する。やや後出的な遺構群ということもあってか、今まで述べてきた遺構群の在り方とは若干異なる様相を呈する。また、11期以降遺構群が継続して構築されるのは、本遺跡では唯一南部南地区だけである。遺構群の構成などを明確に把握できない部分もあるが、古代後半を中心とする遺構群の構成と変遷をみていきたい。

4期に新たに構築される遺構群は、南西から北東方向に走る凹地に沿うように、5軒の竪穴住居址が位置する。ほぼ等間隔に直線的に位置する状態は、これまでの円弧状の遺構配置とは異なる。さらに東西に広がる可能性が強いが、SB19からSB53までの4軒の住居址が一つの群にまとまる可能性を指摘できるだけで、明確に遺構群としてとらえることはできない。遺構群の存続する14期までの水の供給源は、時々で位置を変えながら凹地を流れる SD1・NR2・3を含めた流路であり、5期以前にはNR2が流れていた可能性がある。

5期に帰属する遺構は、竪穴住居址約10軒と掘立柱建物址1棟である。続く6期の状況などを考え合わせ、SB10からSB21まで半円形に位置する住居址5軒と建物址1棟の西側の群と、SB26・30・35で構成される東側の群、および南側のSB2・5に分かれると考えた。西側の遺構群は、規模の大きなSB13と小規模な住居址・建物址で構成されているが、SB16・18とST6は同時存在したと考えにくいので、実際にはさらに建物数の少ない構成であったことになる。東側の遺構群では、南北に並ぶSB26・30の位置に以後住居址が建ち並ぶことから、半円形とは異なる遺構配置がされていたと思われる。南側の2軒の住居址は同一の群を構成しているかを含め判断としない。カマドの位置と遺構相互の位置関係から、SB11からSB10への移動が想定できるが、他の遺構の変遷は明確にならない。

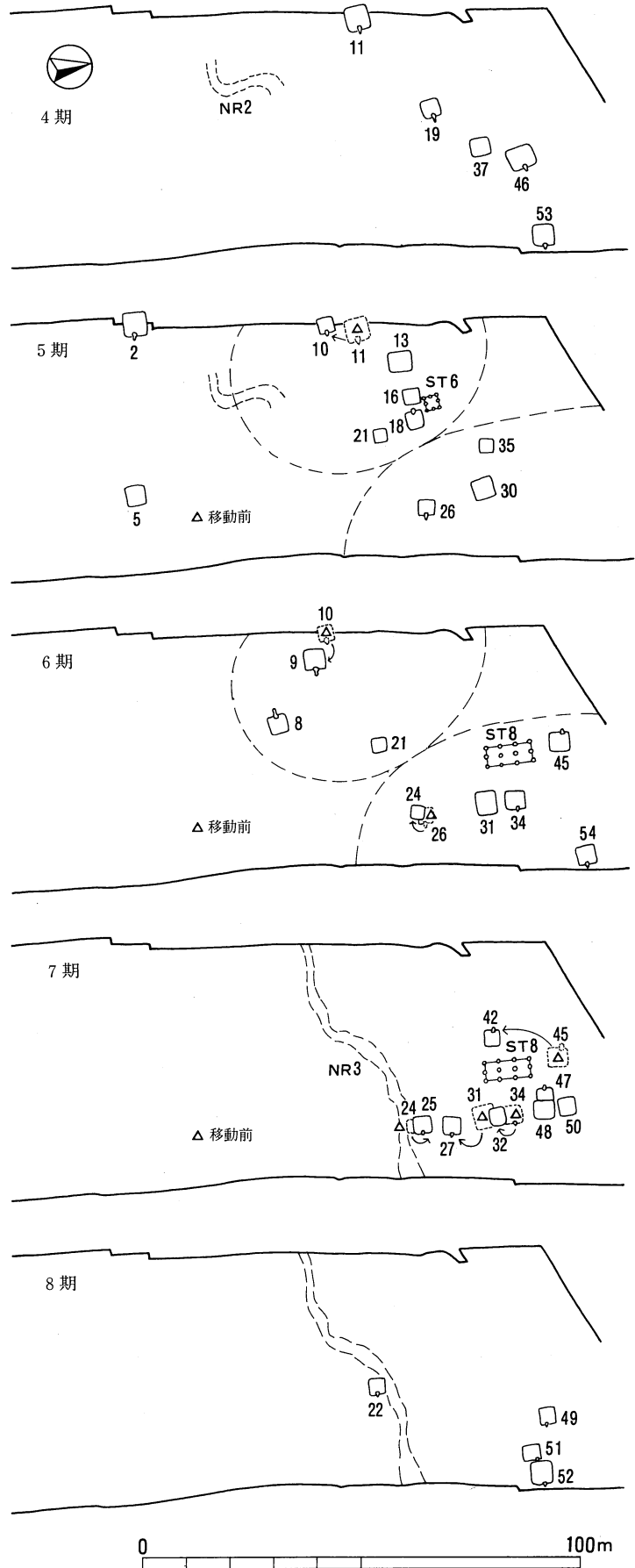
続く6期では、南側部分から住居址が姿を消すものの、東西二つの遺構群はやや規模・構成を変えながら存続する。西側の遺構群は、SB10の移動と判断したSB9と該期まで残存したと思われるSB21を含め、住居址3軒で構成され、半円形の遺構配置をとる。東側の遺構群は、ほぼ同位置に建て替えられたSB24・31の北にSB34が構築され、計3軒の住居址が南北に建ち並ぶ。その南北の並びと対応する位置に、大形の掘立柱建物址ST8が位置する。北隣りに構築されるSB45を合わせ、竪穴住居址4軒と掘立柱建物址1棟で遺構群が構成される。大形の建物址ST8を中心として、規格性をもち計画的に建物が配置されており、半円形の遺構配置とは明らかに異なる。SB54はさらに東の遺構群の可能性があり、西側の遺構群から東側へ住居址が移動したことも考えられるが、いずれも具体的に指摘できない。

7期になると、西側の遺構群が姿を消し、東側の遺構群の内容がより明確に把握できるようになる。西側の遺構群の住居址は、6期から7期にかけて東の遺構群へ移動した結果遺構群が消滅し、時期を追って規模を大きくしていく東側の遺構群に構築された住居址となった可能性がある。大形の掘立柱建物址ST

8は6期から引き続いて存続していたと思われ、その東の住居址3軒の南北方向での並びは、それぞれが建て替えあるいはすぐ隣への移動を通して、ほぼ同位置・同方向で存続する。さらにその北側に2軒の住居址が構築され、合計5軒の住居址が南北に等間隔で軒を連ねて建つ。SB45は建物址の西側に移動してSB42となり、SB47はSB48とは同時存在できないのでやや時期が新しくなると考えたい。これより、大形の掘立柱建物址を中心に、その東側に5軒の小形の竪穴住居址が規格的に並び、反対の西側にも1軒の住居址が位置する、遺構群の具体的な様相が把握できる。該期以降、11期までの間はNR3が南側を流れていた可能性が高い。

8期にいたり、6期から7期の遺構群の配置や構成とは変わった状況を呈する。南北に建ち並ぶ住居址の位置には、SB49が建て替えられて存続するだけで、ほかの住居址・建物址はまったく構築されない。東側にSB51・52の2軒が位置し、南にやや離れてSB22が存在するが、さらに東側に遺構群が続く可能性が高く、その規模や構成などを明確にすることはできない。その後、9期から11期にかけては、遺構の構築されない時期が続く。

12期では、南側に位置を移して遺構が構築される。竪穴住居址5軒が、それぞれかなり距離を保って位置し、一つの遺構群とすると広い範囲を占地していることになる。時期が不明確ながら、ST2・4は該期に帰属する可能性が高い。SB4あるいはSB43、SB23が遺構群から外れる可能性があるなど、明確に遺構群が把握できない部分があるが、13期の状況を考慮して、竪穴住居址4軒と掘立柱建物址2棟程度で構成される遺構群が、大きな半円を描いて展開していたと考えることができる。しかしまた、住居址1～2軒と建物址で小規模な

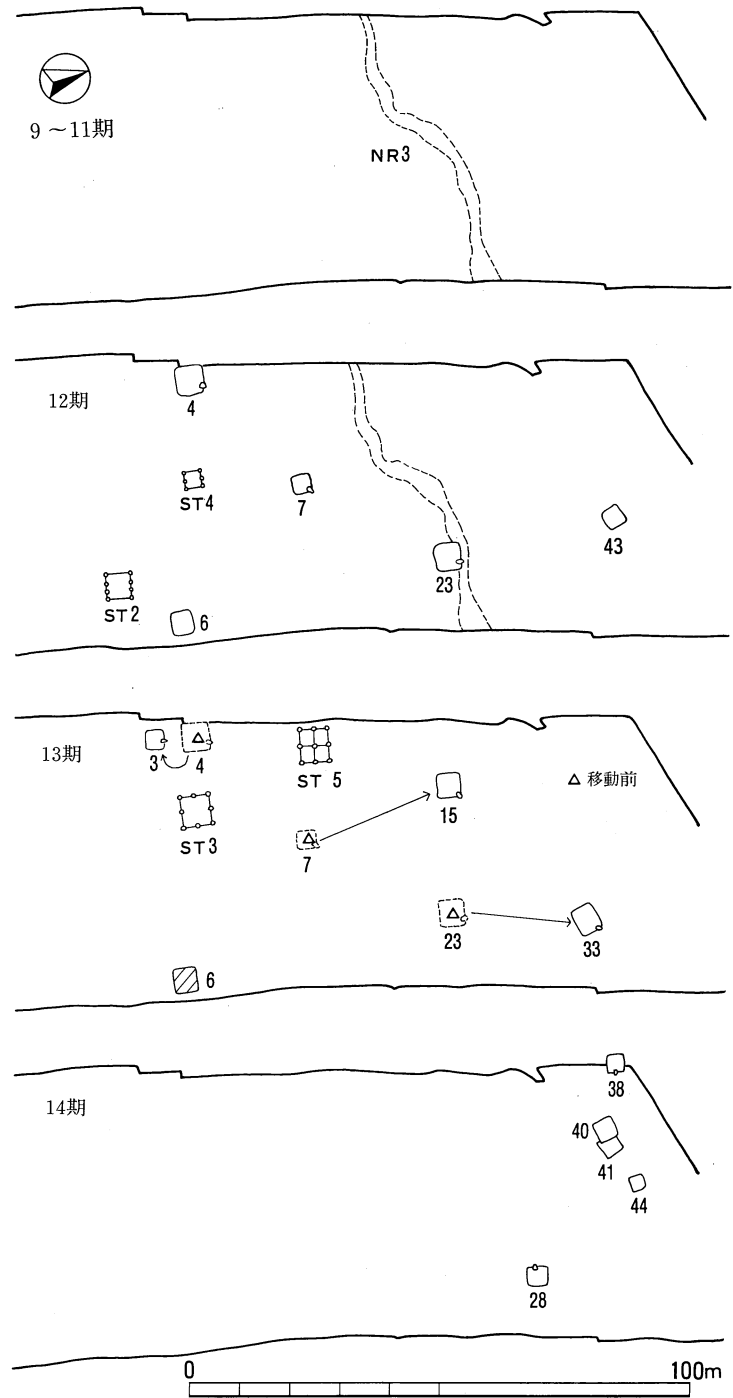


第155図 南部南地区遺構群時期別変遷図(1)

遺構群を構成していたとも想定でき、その場合は3群程度に分かれそうである。なおSB43については、土器の出土状況や銅滓の付着した埴塼、床面にみられた焼土溜まり、構築時における「地鎮め」的な施設の存在は、特異な状況にある。

13期でも、竪穴住居址3～4軒と掘立柱建物址2棟程度で構成される遺構群が、さらに大きな範囲に半円形に配置される。12期とほぼ同位置付近に存在するSB3とST3の他に、SB7→SB15、SB23→SB33と北に移動して構築される住居址、新たに建てられるST5、該期まで存続した可能性の高いSB6を加え、大きな占地面积をもつ遺構群が形成されていたものとする。住居址は比較的規模の大きなもの3軒と、小規模な住居址1軒で構成されており、12期と同様の内容で存続するが、建物址は同数ながら規模が大きくなり、遺構群を構成する建物の数は同様でも内容には違いの生じたことも想定できる。規模の大きな2棟の掘立柱建物址を含め、古代前半の遺構群の内容・構成からは種々の変化が認められる。

最後に遺構の構築される14期は、北側部分に限って5軒の竪穴住居址が位置する。SB40とSB41は同時存在しないので、4軒の住居址が東西方向で存在しているが、住居址間の移動は明確にできず、遺構群の構成や規模も判然としない。



第156図 南部南地区遺構群時期別変遷図(2)

## 2 中世における遺構群の構成と変遷

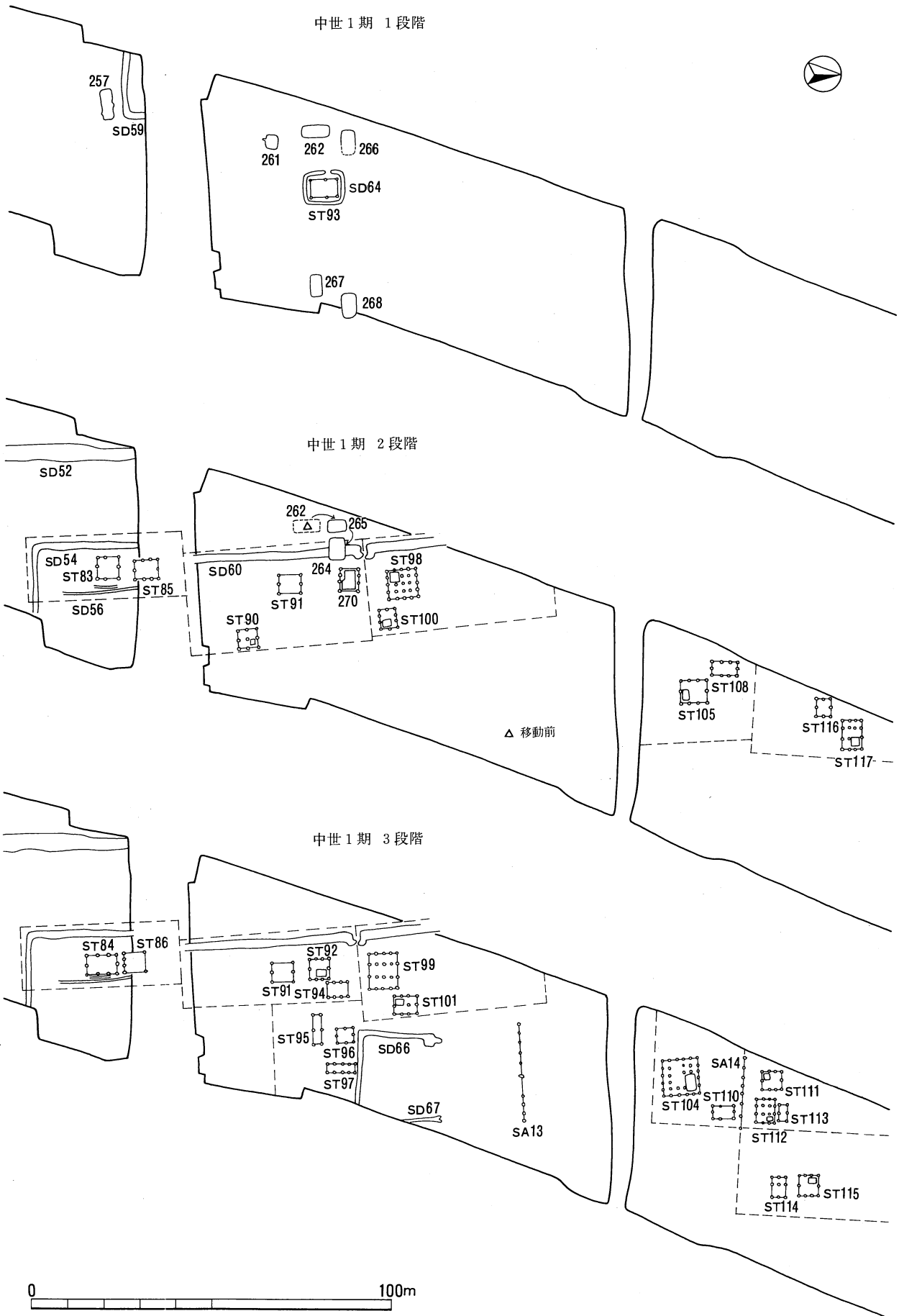
中部地区を中心に、南部北地区から北部南地区にかけて、中世の遺構が集中して検出され、竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址・土坑などを中心とする遺構が多数存在する。古代に比べると、出土遺物は少なく遺構と直接結びつく例も限られるが、竪穴住居址・掘立柱建物址を合わせ約20棟から、時期の判断できそうな遺物が出土しており、その他の出土遺物や切り合い関係から、時期を限定しての遺構全体の状況や変化がある程度は把握できる。前節で述べた中世土器・陶磁器の区分に従って、中世1期を4区分し、中世2期と合わせて、5段階に分けて遺構の帰属と変遷を検討した。中部北地区を中心とする部分の遺構は、その配置や方向の関連性に加え、遺構を取り囲むように位置する溝址の存在から、有機的につながる一つ

のまとまりと考えられ、遺構群として分析を加えた(第157・158図)。古代の遺構群との内容的な比較検討や、遺構群が意味する具体的な性格等は後述することとして、ここでは遺構の構成や移動・変遷に焦点を当てて整理した。

中世1期の1段階では、中部北地区の南側を中心とする狭い範囲に、特徴的な竪穴住居址と掘立柱建物址が構築される。古代で最後に遺構が構築された15期との関連は、唯一の15期の竪穴住居址 SB117が1段階に構築される掘立柱建物址(ST93)のすぐ南に位置することや、白磁など古代と中世をつなぐ遺物の出土が1段階の遺構の構築される範囲に集中することから、連続する可能性を含めて非常に近似した内容をもつことを指摘できる。1段階では、周溝(SD64)に囲まれた掘立柱建物址(ST93)を中心として、細長い竪穴住居址4軒が構築される。周溝は、西側の一部が陸橋状に途切れる。かなり大形の建物址が存在したと思われるが、柱穴が明確に検出できないこともあって柱配置が判然としない。類似する形態の周溝を伴う建物址としては、南部北地区のSD64があげられる。竪穴住居址については、SB267に代表されるように、6×3.5m程度の規模をもつ長方形のプランが基本であり、同住居址では中央部の床面に火床が認められたが、ほかでは竪穴内に施設等は特に検出されなかった。掘立柱建物址の周囲に、方向や位置に規格性をもたせながら数軒の竪穴住居址が構築され、古代の遺構群と共通する点が認められる遺構の構成と配置である。

中世1期2段階になると、竪穴住居址はSB262・266→SB264・265と近接地に移動しながら、3軒がまとまって構築されている。一方、掘立柱建物址では、周溝を伴うものが姿を消し、大小の規模をもつ総柱の建物が範囲を広げて分布する。建物の方向が統一されることや整然とした配置から、この地域全体の建物がある計画性のもとに配されていたと思われ、その基準となるSD54・60等の溝もこの段階から存在していた可能性が高い。SB264などはSD60に先行することが切り合いから明確であり、1段階から続く竪穴住居址中心の古代的な遺構群の在り方から、2段階の中で計画的に配された中世掘立柱建物址中心の遺構群へ移り変わるものと思われ、本段階の中で遺構群の画期が存在したと想定できる。建物址はいくつかの小さなまとまりとしてとらえることができ、ST83とST85、ST98とST100、ST105とST108、ST117とST116というように、ほとんどが大小2棟の建物で組み合わせられて一つのまとまりを構成している。ST83・85に認められるように、SD54とSD56・57によって方形に区画された内に、整然と建物が配置されており、このような方区画された建物のまとまり(小群)が、以後中世1期を通じて5～6か所に固定され存続していく。掘立柱建物址にはST83・85・108のように柱配置がやや不明確なものと、ST98・100・117のように総柱であることが明確に判明するものがある。前者は1段階の建物の特徴を受け継いでおり、後者は建物の隅に方形の土坑を伴うことが多い。竪穴住居址は少数ながら存続するが、遺構群を構成する主体とはなっていない。したがって、2段階の途中から、方区画によって整然と配された掘立柱建物址2棟一対の小群が成立し、それが数群まとまって遺構群が構成されていたととらえた。

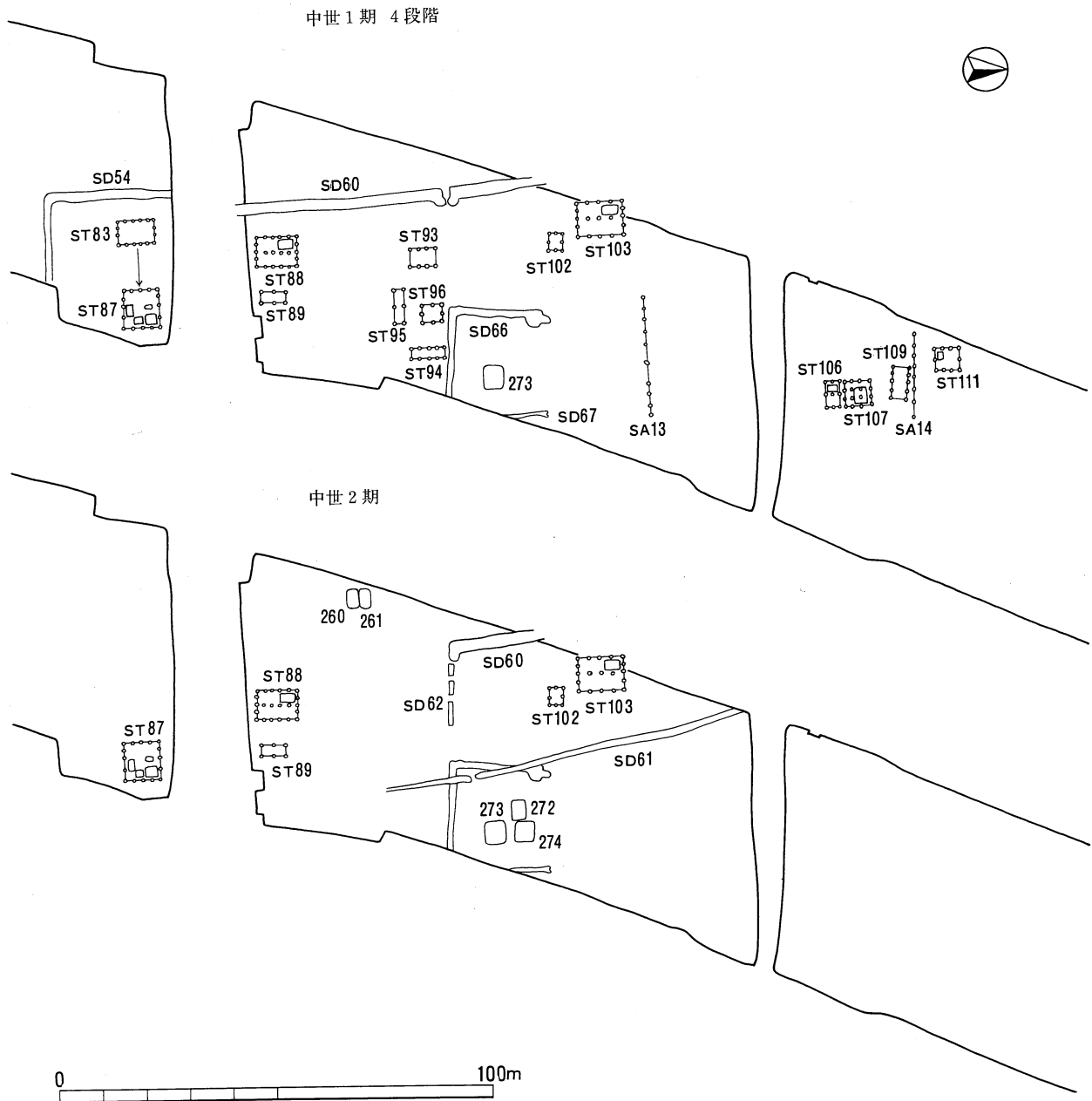
3段階は、基本的に前段階の遺構群の構成や配置を受け継ぎ、さらに整然とした遺構群を構成する。ST84・86・99・104がほぼ同位置に建て替えられるなど、2段階で成立した方区画内への建物の構築は、3段階でも忠実に継承されている。建物の方向の統一はさらに徹底され、2棟一対を基本とする構成の小群が7群確認できる。規模の大小を問わず、総柱建物址で土坑を伴う例が多いが、小群の2棟のうち規模の大きな建物にだけ土坑が伴う例が、北側部分の小群を中心に認められる。そのなかで、ST95・96・97で構成される小群はやや特異であり、梁行1間の非常に細長い建物2棟に小形の建物1棟で成り立つ。建物などを区画する溝は、南北方向に延びる規模の大きなSD60をはじめとして、ほとんどはこの時期に存在していたと思われる。明確に検出できなかったが、現用水堰や道路の下に位置して東西方向の縦堰が



第157図 中世遺構群変遷図(1)

流れており、そこから区画溝に導水されていたと考えられ、区画溝は水の供給路としての役割も果たしたのであろう。三方を囲むSD66・67は、掘立柱建物址などの遺構と重複しないことや周囲の遺構の位置と方向から、少なくとも3段階ではSD66・67を意識した建物配置がなされており、この溝がすでに存在していた可能性もある。区画には溝が大きな役割を果たしているが、他県では柵址がその位置に構築されている例もあり、おそらく道なども境界となっていたのであろう。SD66・67に囲まれたなかにある掘立柱建物址の構築されない部分は、大小の土坑が構築されており、そのいくつかは墓墳である。掘立柱建物址を中心とする遺構群とは対照的な内容であり、3段階以降この範囲に墓墳を主とする土坑が構築され続ける。これを含めて遺構群全体が構成されるのであるが、細かな時期の明確にならない土坑が多く、具体的な様相を指摘できない。中世2期まで存続する本遺構群が、最も整然と形成され建物の数も多く構築されていたのが3段階であろう。

中世1期の終る4段階になると、帰属の判然としない遺構が多くなり、建物配置や区画などもやや不明



第158図 中世遺構群変遷図(2)



瞭になってくる。3段階までの小群は、存続しているものが多いものの、ST87・88・103などいずれも区画内の少し離れた別の場所に移動して構築されている。そして、それまでの総柱建物から、間仕切りの柱を除いて内側の柱が確認できなくなり、上屋構造等に変化が起きた可能性が認められる。特に、北側は3か所の小群で保持されてきたところが、ST107を中心として建物址3棟程度で構成される1群が存続するだけで、小群の構成も、大小の掘立柱建物址一对の典型的な内容とはならない。区画溝にも変化が生じ、SD60の陸橋より南の部分が存続していない可能性があるなど、3段階までのきちんとした溝区画が崩れてきていることを窺わせる。遅くともSD66・67はこの段階には存在しており、一辺約23mの規模で三方を方区画する。方区画された内側には、SB273などの堅穴住居址や土坑が構築されており、掘立柱建物址が存在した痕跡はない。したがって、建物の方向や基本的な区画は3段階までの状況を継承しつつ、個々の小群や建物には変化が目立ち始めるのが、4段階の様相といえよう。

中世2期に入ると、ST87・88・89・102・103が前段階から存続する建物址として、しばらく残存していたものと思われる。しかし、北側部分からは建物址をはじめすべての遺構が姿を消しているの、中世1期に比較すると遺構群の規模が小さくなり、全体の様相もかなり変質したものとなる。一応3小群で構成されていたと想定できるものの、確実に中世2期まで存続すると判断できる建物はST87・88の2棟であり、建物址を主体とする遺構群が消滅する寸前の状況といえる。それとともに、区画溝が構築された2段階及び3段階の時点から、SD60の西側には堅穴住居址が姿を消し、建物が構築されずに経過してきたが、その場所にふたたびSB260・261等堅穴住居址が構築されるようになる。また、SD66・67の内にはSB272・273などが構築され続けており、2か所で堅穴住居址を中心とする遺構群が確認できる。建物址主体の遺構群のあり方が、堅穴住居址を含む異質の遺構群に変化したことが想定される。区画溝としてはSD66・67が確認できるだけであり、溝による区画も明確に把握できない。

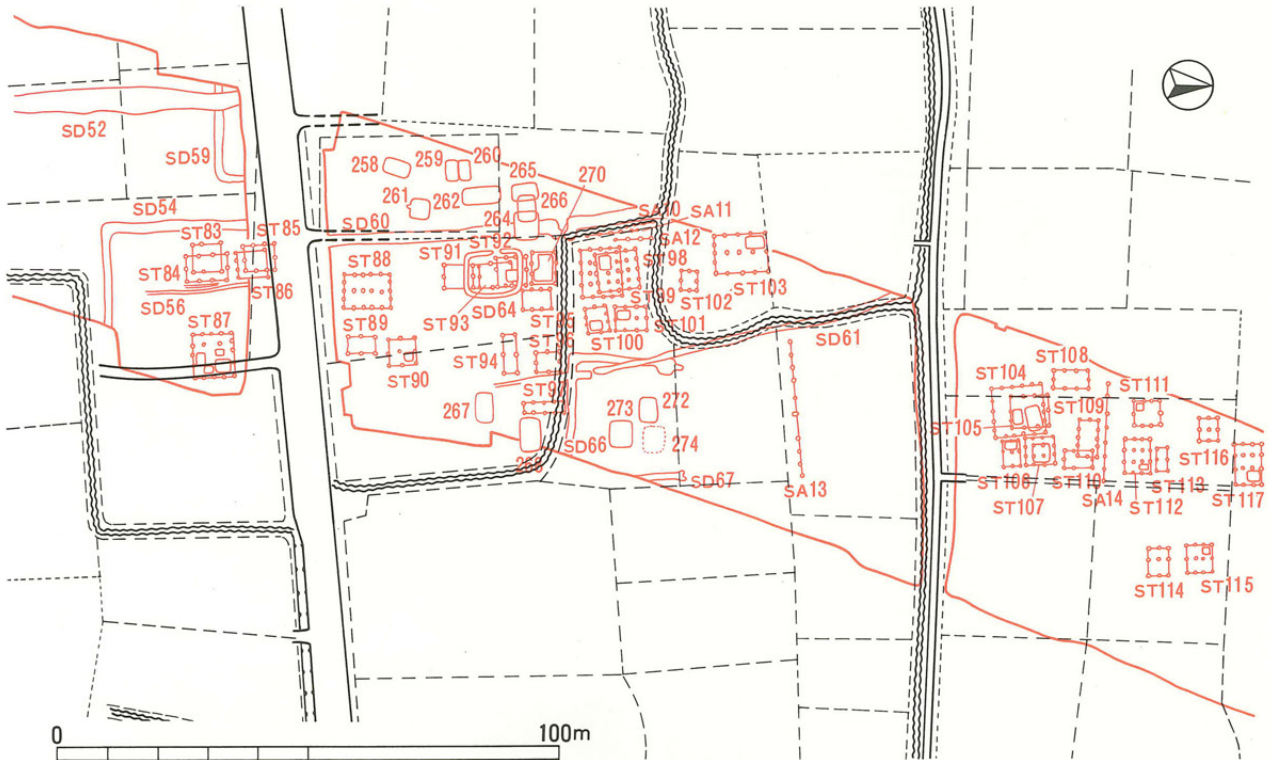
中世2期に入ってほどなく、SD66を切ってSD61が構築される。SD60と比較して溝の幅はかなり狭まるものの、同様に途中に陸橋を持っており、掘立柱建物址の構築される範囲の東を画するように、南北方向に直線的に長く延びる。遺物の状況から、この段階では掘立柱建物址はほとんど存続していないものと思われ、この溝によって区画されていた遺構は一部の堅穴住居址を含む土坑と考えられるが、どのような様相であったのか明確にならない。中世1期3段階ないし4段階の遺構を切る火葬墓などの存在を知ることができ、墓址から遺物の出土は限られるものの、切り合いから当該期では主に建物址より墓坑が分布していたものと思われる。中世に入って掘立柱建物址の構築された居住域がこの段階では数は少ないが、墓址が構築されることを知ることができる。

さらに、SD61を切ってSD62(和沢)が東西方向に流れる。この時期が16世紀ころと判断されるので、中世2期に入ってから溝址等の変化は短期間に何度かなされたものと思われる。この段階あるいはそれ以後において、掘立柱建物址と堅穴住居址が構築された可能性はほとんど考えられず、土坑も明確に構築が認められるものは存在しない。

従って、中世2期は、遺構群の構成内容が大きく変化する時期で、居住域以外の性格を強めている。

最後に、遺構群と現条里的景観の形成過程について触れたい。本章第2節でも水利等に係わって概要が述べられており、部分的には重複するが、範囲を限定し時期を細かく追って変遷をまとめておきたい。

現条里的景観と中世の遺構との関係をみると(第159図)、まず中世の1段階から2段階にかけての堅穴住居址中心の遺構群の構成時では、実際の条里的景観の骨格をなす水田区画をまたいで遺構や遺構群が存在しており、溝址も水田区画と異なる位置に構築されるので、現条里的景観とは直接結び付いていないと考える。2段階の途中で、掘立柱建物址群が区画溝に方区画されて構築されるようになり、13世紀中葉もしくは後葉と思われる時期に新しい遺構群(集落)が登場する。これが中世の第一の画期である。区画溝



第159図 現条里的景観と中世遺構群

は、SD52・60に代表されるように現条里的景観の水田畦畔と一致するものが多く認められ、この時に現条里的景観の方向や基本的地割が確定したことが強く窺われる。しかし、一方で水田区画をまたぐ建物址(ST95・108)の存在や現在の区画と一致しない溝(SD54・61)も認められ、現条里的景観とはかなり異なる部分を残していることも指摘できる。

掘立柱建物址を中心とする遺構群は、方区画されたいくつかの小群で成り立つことはこれまでに繰り返して述べてきたが、小群の区画された範囲が現在の水田の区画と一致し、建物址の移動も水田の区画を越えてなされない点は、該期およびそれこれ以降の土地所有等の問題を考える上でも注目される事実であろう。中世1期から2期にかかる14世紀後半から15世紀前半の時期において、区画溝が消滅し掘立柱建物址主体の遺構群がみられなくなる中世の第二の画期が訪れる。しかし、溝での区画は現在の水田畦畔等に姿を変えて存続し、SD60の北半分とSD61は用水堰として改修されて現代までそのまま存続する。さらに、縦沢の和沢(上沢)が開鑿され、ほぼ現在の条里的景観が成立する。

以上、限定された範囲での変遷であるが、中世の2度の画期を経て現条里的景観が成立してくる状況に触れた。

## 第5節 北栗遺跡における集落の変遷と開発

これまでの事実記載をまとめながら、北栗遺跡全体の動向を開発過程とからめて検討したい。本遺跡の調査結果は、遺跡を細長く横断する調査範囲から得られた情報であり、集落全体からすると限定的な情報量となっている。したがって、個々部分的な内容を繋ぎ合わせることで、北栗遺跡の検討を進めてきた。集落をどう概念規定するかが重大な問題であるが、最後にここでは北栗遺跡全域を通して開発過程を各時期ごとにまとめておきたいと思う(第160図～第163図)。

## 1 古代の開発と集落景観

## (1) 古代1期

1期では、遺跡の南端である堀川の自然堤防上に、竪穴住居址4軒と掘立柱建物址1棟で構成される遺構群が存在するほかは、2期に近接する時期の竪穴住居址2軒が北に遠く距離を置いて存在するだけである。堀川付近の自然堤防上の遺構群は、堤防の方向に沿うように直線的に並んでおり、比較的規模が大きく規模の揃った住居址の集合である。あるいは、すぐ南の小凹地沿いに遺構が構築されているとみることできる。本小凹地では流路の存在は不明であるが、SD1及びNR2が流れていたと捉えられる。堀川を挟んで南側には、南栗遺跡の該期の集落が存在するが、距離が200mほど離れることや2期以降の変遷がまったく異なることから、別々に集落が営まれていたと考えられ、堀川の北側の集落は自然堤防に沿って細長く形成されていたと思われる。なお、この集落は1期中で消滅してしまい、地形の傾斜の方向からしても水の被害を受け易い位置に構築された集落であり、不安定な存在であったことが想定される。北の2軒については2期の状況と合わせて考えることにする。したがって、1期では遺跡全体にかかる開発はなされず、部分的で短時間の営みが認められるだけである。

## (2) 古代2期

1期末から2期にかけて、遺跡のほぼ全域に竪穴住居址と掘立柱建物址で構成される遺構群が構築されていく。しかし、1期に集落が存在していた南端では遺構が確認されない。遺構の構築される場所は、周囲よりやや小高い部分が多く、ほぼ東西方向に形成される微高地を選ぶように占地していく。

遺構群の構成や様相は、遺跡の中央を境として南と北とでかなり異なる。まず南側の遺構群であるが、SB64・ST25・16・19・20で構成される例を典型とするように、建物を一定の方向に合わせ全体を計画的に配置している。同様の構成・様相をもつ遺構群として、SB110・ST43・41・45があり、中央に空間を設けながら整然と配置されている。SD11・13によって南北に画された南側に位置するSB95・ST33・40も、類似の遺構群の一部の可能性が高く、一帯の南北約200mの間は、これら計画的構成の遺構群が全体としても規格性をもって形成されていたととらえられ、おそらくいくつかの遺構群が方形に区画された一定の範囲を占地することでこの付近の集落構成がなされていたと思われる。遺構群の構成も特徴的な内容をもつ。まず、建物の数の上でも規模や配置の上でも、掘立柱建物址が遺構群の主体となる点を指摘できる。竪穴住居址1軒に掘立柱建物址4棟前後の構成比に加え、SB64・95・110などの大形の竪穴住居址を凌ぐ、庇付の大形掘立柱建物址(ST25・41)の存在が認められる。この大形掘立柱建物址を核として、遺構群が構成され建物配置がなされていたと思われる。また、規模の大きな竪穴住居址と掘立柱建物址3～4棟に、2×2間程度の小規模な掘立柱建物址1棟が付属することも、特徴的な在り方といえる。これに対し、中央より北側の遺構群は、竪穴住居址を中心として構成される遺構群が、一定の間隔で構築されている。SB181・182とSB195・197に代表されるように、大小の住居址が2軒一対で小規模な遺構群を構成し、それが小高い部分を選ぶように一定の間隔で配置されていく。SB167・170・169・ST59のように竪穴住居址3軒程に掘立柱建物址が1棟で構成される遺構群もあり、竪穴住居址が主体となる構成である点が共通するものの、遺構群の規模や掘立柱建物址の有無などは多様性があるものと思われる。また、建物の方向や配置にも、南側で認められたような規格性・計画性が指摘できない。さらに、核となる大形の掘立柱建物址が存在しないのをはじめ、建物の規模が全体に小形である点も南側とは対照的である。

つぎに、水利と生産域について概括する。集落への生活用水を含む水の供給は、南側ではのちにNR6として確認されるあたりの小凹地を流れたであろう自然流路がその役目を果たしていたと思われる。北側では、北端でSD15の存在より、旧境沢から南へ導水していたことが断片的に判明したが、そのほかは明

確な水利状況を把握できない。生産域については、遺構群が高みに立地し、その間の低地・凹地が遺構空白域であることから、低地部分を生産域に想定できる。3期以降、それが証明される事例が存在することが根拠である。

このように、2期に入ると遺跡全域に集落が展開し、本格的な開発が開始されていくが、集落の様相は南北で二分されそれぞれが大きく異なる。南側が集落の中心あるいは中心に近い位置に当たり、北側へ寄るにしたがって周辺部を構成していたと観ることができよう。

### (3) 古代3期

2期に展開した集落および遺構群が、同位置で引き続き営まれていく。したがって、各遺構群の配置や地形を考慮した占地場所などは大きく変化しない。しかし、個々の遺構群では、早くも消滅・移動するものが存在するなど、大きく様相を変えていく例も認められる。

まず、2期でそれぞれの遺構群が規格性をもち、全体が方区画を意識して計画的に配置されることが特徴的に認められた南側部分であるが、基本的には掘立柱建物址主体の遺構群の特質は維持される。また、SD11・13がわずかに位置を移したSD12やSB95からSB90への移動などから、方区画も存続していた可能性が高い。しかし、SB61・ST18・17・13で構成される遺構群やSB111・ST42・44・46で構成される遺構群は、構成する建物の数や内容はほとんど変化しないものの、2期までの建物の面を合わせるような整然とした配置ではなくなる。代わって、該期に新たにSB106・108・ST31・32・38・39で構成される遺構群は、規格性のある建物配置が認められる。また、庇付の大形掘立柱建物址がみられなくなり、核的な建物が判然としなくなるとともに建物全体がやや小形化する。

北側部分でも、竪穴住居址を主体とする遺構群が、小高い場所に立地する状況には大きな変化はない。SB121・129・130・ST49の遺構群やSB221・224・214・ST65などで構成される遺構群が把握でき、いずれも竪穴住居址数軒に掘立柱建物址1～2棟の構成で、中央に空白部分(広場・共同作業場所)をもち、その周囲に半円形に建物配置がされる。SB153のような竪穴住居址1軒単独と思われる例もあり、その北側では2期に構築された2棟一対の小さな遺構群が早くも姿を消してしまう。竪穴住居址主体で半円形の遺構配置がされる点は南側と相違するが、竪穴住居址の規模などでは両者の差異が認められなくなってくる。

水利と生産址の状況は、2期と同様な状況が続いていると思われるが、北端近くで検出されている水田址SL1は、その西に展開する遺構群との関係などから、3期から7期までの内に存在したと判断でき、さらに3期から5期の間に帰属する可能性が強い。遺構群の構築される微高地の間の凹地に構築され、後の土砂の一時的堆積によりパックされて残存しており、他の凹地の遺構空白域が生産域として利用されていた可能性を強く示唆している。したがって、遺構群の間の低地を中心に水田等の生産域が広がるという、集落景観の一端が想定できよう。

### (4) 古代4期

引き続き同じ様相の集落が存続していく。3期に新たな遺構群が北端に構築され、4期で南端にも遺構群が構築されて、本遺跡の全域で遺構群が認められるようになる。それとともに、遺構群の構成や建物配置の規格性において、中央を境に南と北で大きく異なっていたものが、差異を認めにくくなっていく。

南側のSB62・ST14などで構成される遺構群や、北端のSB218・222・ST18などで構成される遺構群に共通して認められるように、数棟の建物が空白域を中心に半円形に配置されており、ほとんどの遺構群はこれと類似した内容をもつ。ST31・34・SD103・104の並びなどから、方形の区画や規制は残存していると思われるが、この北側に存在した遺構群が姿を消し両者の境界が無くなるなど、遺構群全体の配置には変化がみられる。これに対して、新たに姿を現わす遺構群は、やや様相を異にする。南端ではNR2が流れる小凹地沿いに形成されるSB11・46・53があるなど、竪穴住居址中心の一群は、建物全体が直線的に

連なって比較的整然としている。北側中央付近に新たに構築される ST57 を中心とする一群は、4 × 3 間の大形掘立柱建物址を核的な建物に、10 棟近くとやや規模の大きな構成をとる。新たに構築される遺構群が、核的な建物を中心に整然と配置され、時期を経るにしたがってそれらの特徴が認められなくなることは、これまでの南側を中心とした遺構群の変遷を追うことで、ある程度明確に指摘できるように思う。

水利や生産址については、南端の遺構群が NR2 に水を依存していることと、中央部から北側にかけて新たに遺構群が構築され建物の数が増加していくが、該期にもこの中央を流れる田中沢の旧流路がほぼ同一場所を東流し、それが生活用水に利用されていた可能性を指摘したい。

4 期は、2 期以来の集落構成が大きく崩れることなく存続し、7 群程度に分かれる各遺構群がしだいに均質化していく過程ととらえられよう。

#### (5) 古代 5 期

5 期も、4 期までの集落の様相が継続されており、特に 4 期とは非常に近似した状況を呈している。4 期に営まれていた 7 群程度の遺構群は、ほとんどその構成を保持しながら存続しており、南部の SB56・58 で構成される遺構群を除いて、新たに構築されたり消滅・移動したりする遺構群が認められず、安定した状態で集落が維持されていることが窺われる。その結果として、本遺跡の時期別の建物数を比較すると、該期に帰属するものが最も多い。

南側の SB105・ST35 などで構成される一群や中央北側の SB162・ST56 などで構成される一群、それに北端の SB220・ST17 などで構成される一群は、占地場所はもちろん遺構群の構成や内容が 4 期に類似しており、個々の遺構の具体的な移動の状況が指摘できる部分が多い。また、個々の遺構群を構成する建物数が全体に増加しており、半円形あるいは同心円状の建物配置がより広い範囲でなされている。遺構群全般が均質化する傾向は引き続き認められるが、南側では SD3・SA2 など方区画を裏付ける構造物が認められ、SB79・ST27 などで構成される遺構群における掘立柱建物址の優位性も指摘できるので、南側部分の 2 期以来の特質が残存していると判断できる。

水利状況および生産址も同様に大きな変化や移動は考えられず、そのことが集落を安定的に維持していく下支えとなっていたと推測できる。NR6 付近の流路に対し、SB99・ST28 が SA3・4 に守られるように流路沿いの川岸に進出していることは、該期における用水と集落、あるいは水と住居の関係の一端を示している。

5 期は、安定した状態で集落が存続しており、集落規模も大きくなるなど集落の隆盛期ととらえられるが、遺構群は均質化し個々の建物も全体的に均質・小形化していく。しかし、集落全体が均質化していたのか、中核となる部分が調査範囲外にあるのかは明確でない。

#### (6) 古代 6 期

6 期に入ると、2 期以来比較的安定した状態で営まれ成長してきた集落が、少しずつ変化し始める。北側部分を中心に遺構群の構成規模が小さくなり、集落内の遺構の密度が薄くなっていく。また、遺構群全体が場所を移動させるなど、遺構群の存在そのものが不安定になる例が多い。

北端の SB234・232・ST70 で構成される遺構群は、3 期に遺構群が構築されて以来の占地場所から北に移動し、それまでの 5 棟以上の規模から小さな構成となる。同様のことは南側の SB76 などで構成される遺構群と SB100 などで構成される遺構群でも指摘でき、移動や縮小の結果、5 期までの方区画や掘立柱建物址の優位性の特質は認められなくなる。両者間の遺構群も、規模が極端に小さくなり単独の竪穴住居址が互いに離れて位置する等、5 期の遺構群のあり方や集落様相とは異質の状況が展開する。

それに対して、南端近くの ST8 を中心とする遺構群は、大形の掘立柱建物址とその東に南北に軒を並べて建ち並ぶ 3 軒の竪穴住居址など、ある程度の規格性と 5 棟以上の建物数という規模の大きさを持ち、

他の遺構群とはかなり内容が異なる。部分的に明らかになっているだけだが、すぐ北に位置する庇付きの大形掘立柱建物址 (ST11) を核とする遺構群も、同様の内容をもつ可能性が高い。特に ST11 の北側には塀等の構造物 (SA1) とそれに並行する道路・側溝 (SD3) が併存しており、これより南に両遺構群が存在することから、この一角が集落の中心的部分であり、したがって他の遺構群と異質な内容を持っているとも考えられる。

水利や生産域も、集落とともに変化していることが想定されるが、具体的に確認できることは限定される。北端では、遺構群の移動に伴って用水路も SD22 の位置へ構築され直している。あるいは、用水路を移さざるを得ない状況が生じて、遺構群も移動を余儀なくされた可能性もある。どちらにしても、用水路が構築され直したことから、5期まで東に広がっていた水田は大きな影響を受けたはずである。6期以降に帰属する竪穴住居址の覆土に、水田址をパックした土と同様の土が堆積しているのが確認されており、洪水性の堆積等が生じた可能性もあるが時期的な限定をできない。しかし、遺構群の変化・移動が生産域と密接に係わっていることは、ある程度明確になったと考える。

6期は、南側の核的な建物 (集落の中心的部分) への集中と、その北側に展開する遺構群の衰退傾向が目立ち始める時期である。安定した集落の景観が変わり始める時でもあり、以後集落景観の変化が激しくなる。

#### (7) 古代7期

7期は6期の状況を受け継いで、南側の核的な建物を伴う部分と周辺の遺構群の差異が目立つとともに、遺構群や個々の遺構の変化が激しい時期である。

6期に核的な掘立柱建物址として存在した ST8 は、該期にも存続しており、東側に建ち並ぶ小規模な竪穴住居址は少なくとも5軒を数え、北側を含めた遺構群全体では10棟程度の数が想定できる。大形建物を中心にさらに整然とした配置をもち、SB25から北側の SB55まで南北50m以上に渡って小形の竪穴住居址が伴う状況は、該期の集落の中心あるいは有力な農民を中心とする集団の姿ととらえたい。6期に存在した ST11 は姿を消すが、遺構群の東側への展開・移動も考えられる。

北側に展開する他の遺構群は、SB70・75・78や SB120・125・127の遺構群にみられるように、3棟前後の小規模な構成が多く、単独の住居址は存在しても5棟以上の構成はない。中央部から北にかけてはほとんど遺構が存在しない等、集落内の遺構分布はさらに稀薄になる。

7期の集落は、集落景観全体としては6期に類似するものの、個々の遺構群や建物は変化や移動が激しく、不安定な要素を持ちつつ存続していく。

#### (8) 古代8期

8期も大きく集落の様相が変化する時期である。遺構群が消滅したり、突然新しい遺構群が構築されたりして、集落全体が統一的に把握できない時期ともいえそうである。

まず、北側部分の中央に、大きな遺構群が新たに現われる。SB168以北 SB209以南が一つの遺構群と捉えられ、さらに西側に中心的な建物などが広がるため、少なくとも竪穴住居址20軒程と掘立柱建物址数棟で構成される、他の遺構群とは質の異なる集団である。SB173から SB176の並びや SB177から SB186の並びは、7期の ST8 の東側の竪穴住居址の配置に類似しており、ST8 を中心とする遺構群のさらに規模の大きいものと考えたい。とすると、西側調査区域外に核的な大形の建物が存在していると思われ、その東に整然と並ぶ竪穴住居址が本遺構群である。それまで遺構群の存在しなかった場所へ一時期に構築されることから、東側の竪穴住居址を主とする遺構も本遺構群に含まれると考える。集落内での移動の結果か、他の場所から新たな開拓として入植した姿かは明確にならないが、南端の ST8 を核とする遺構群が姿を消すのと時を合わせて構築される点は注目される。

他の遺構群としては、7期のST8中心の遺構群の残存と思われるSB51・52などの遺構群と、その北のSB85などで構成される遺構群が認められる程度で、遺跡のほとんどは遺構空白域に近い状況になる。また、7期以降、掘立柱建物址が遺構群を構成しているかどうか判然としなくなる。

水利や生産域も大きく変化したと想定されるが、明確に把握できない。ただし、2期以来ほぼ同一場所を流れ一番安定した状況を保ってきたNR6が流路を大きく変えており、他の用水路などが激しく変化したことは当然考えられる。

8期は激動の時期ともいえるが、基本的には6期以来の核的な部分への集中とそのほかの部分の稀薄化という傾向の延長上にある。その意味で、集落全体は衰退しているように見えるが、核的な部分は最も充実している時期ということもできる。

#### (9) 古代9・10・11期

9期に帰属する遺構は極めて限られており、竪穴住居址はSB196の1軒だけで、8期からの残存であるSB168を加えても、2棟の建物といくつかの土坑が存在するのみである。8期に大きな遺構群が構築された場所に、該期の遺構がわずかに存続していく状況は、それまでの集落景観とはまったく異なる。徐々に核的な部分に遺構が集中する傾向が進み、それが突然姿を消す時期が9期である。突如として起こった集落の消滅あるいは場所の移動の要因は、調査結果から直接説明することはできない。指摘できる点としては、竪穴住居址の廃絶時にカマド石を含む礫の大量投棄例が増加することが、移動の激しくなる6期以降認められることと、覆土や壁・床面の状態などから、洪水など自然災害の直接的な影響があったとは認めにくいことである。

10・11期では帰属する遺構がまったく確認できず、遺跡全体が遺構空白域となる。これが集落の断絶を意味するかどうか、周囲の調査がなされていない現在明確にならないが、12期以降の状況を考えると、集落は近くに存続したのであろうか。現状は不明のままである。

#### (10) 古代12・13期

12期に入り、ふたたび遺構が構築され始める。しかし、9期まで存続した北側とは正反対の南端に近い場所に、竪穴住居址が存在しており、9期以前の遺構や集落が該期の遺構に直接係わるとは考えにくい。竪穴住居址のカマド位置やその方向が、9期までと12期以降ではかなり異なっていることから、新しい集団の入植が開始された可能性を指摘したい。該期は、比較的距離を置いて竪穴住居址と掘立柱建物址が併存しており、全体としては南西から北東方向に並ぶ。13期の遺構配置も考え合わせると、堀川北側の自然堤防上に、あまり規模の大きくない集落が東西方向で形成されていたものと想定され、南端の一角に限っての遺構の構築であることから、大きな再開発が遺跡全体に行なわれた可能性はない。

13期もほぼ同位置に同内容の遺構群が存続している。12期の竪穴住居址と掘立柱建物址で構成される遺構群は、掘立柱建物址の規模が大きくなるものの、建物の数や内容にほとんど違いがなく、個々の遺構の移動の状況もほぼ把握できる。また、全体が南西から北東に並ぶ点も12期の特徴を受け継ぐ。竪穴住居址のプランやカマドの形態、掘立柱建物址の柱穴規模や柱間間隔などは、8期以前と比較すると大きく変化しており、中世1期のものと共通する要素が認められる。

12・13期に堀川沿いで開始された再開発は、安定した状態で継続され、限定された範囲ではあるが集落が営まれ続けていく。

#### (11) 古代14・15期

14期にはふたたび遺跡全体に遺構が構築され集落が展開する。しかし、遺構の分布は稀薄で空白域も多く、4群程度の遺構群が散在しているのが集落景観である。南側のSB72・73・74など8軒の竪穴住居址で構成される遺構群は、比較的整然としており規模も大きい。この遺構群では、竪穴住居址の規模や方

向が揃っており、比較的大形の住居址が多い。それに対して、その他の遺構群は5棟以下の数の竪穴住居址で構成され、小形の住居址が多く建物の方向も一定しない。この状況は、6・7期頃の集落景観と共通する部分が認められ、核的な部分とそれ以外の遺構群ととらえることもできる。

SB72などで構成される遺構群は、中央を東流する縦沢のNR7に水を依存していたと思われ、このNR7は中世以降も存続していくと考えられる。該期に中世につながる用水路が既に成立していた可能性を示すとともに、14期に始まる遺跡全体の再開発の意義とも係わって注目される点である。

15期に帰属する遺構は、竪穴住居址1軒(SB117)だけである。しかし、SB117周辺から南側にかけて、該期に帰属する可能性のある遺物が相当量出土しており、また中世の最初の段階で遺構が構築されるのはこの付近であることを考え合わせると、西側の調査範囲外を含めてSB117以外にも遺構が存在していたものと思われる。このことから、14期に遺跡全体に展開していた集落が、短期間で姿を消していくが、西に隣接する部分などごく近くに移動していたものと考えたい。

14・15期は、2期と同様に遺跡全体の本格的再開発の行なわれた時期であり、不鮮明ながら中世とのつながりをもつ段階といえよう。

## 2 中・近世の開発と集落景観

### (1) 中世1期1段階

中世の最初の時期である1段階は、遺跡中央部を中心に竪穴住居址と掘立柱建物址を主体として構成される集落が存在する。集落の構成内容は古代と共通しており、遺構の構築範囲(集落の占地場所)も古代末の遺構構築場所に近い。しかし、同じ竪穴住居址であっても中世ではカマドが設けられず、平面形もまったく異なるなど同一の性格の遺構かどうか疑問もあり、集落として古代から中世にまたがって存続したかどうかは明確にはできない。

該期の遺構は、ほぼ中央に位置するSB267など竪穴住居址5軒と掘立柱建物址1棟で構成される遺構群と、判然としないが、その南約100mに竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑などで構成されていると思われる遺構群が位置する。北側の遺構群は、方形の周溝(SD64)を伴う規模の大きな掘立柱建物址を細長い竪穴住居址が取り囲んでおり、建物の方向を揃えるなど整然とした配置などは、古代6期から8期にみられた核的な建物を持つ遺構群と類似している。南側でも、同形状の周溝(SD48)の内に不明確ながら掘立柱建物址が構築されていたと思われ、北に隣接する竪穴住居址のいくつかは同時存在した可能性が強い。したがって、それほど規模の大きくない遺構群が一定の距離を置いて存在するのが、1段階の集落あるいはその部分的な姿である。竪穴住居址は、SB267の中央床面に焼土が認められただけで、カマド等の火処は存在せず、細長いプランも古代の竪穴住居址とは大きく異なるが、床面や壁の状態は古代のそれと類似するものが多い。掘立柱建物址では、周溝を持つことが該期だけに認められる特徴であり、柱間隔が揃わず柱筋も通らず柱穴の検出が難しいことなども、古代末から中世初頭の特徴と思われる。

水利の状況や生産域との関係は明確にならないが、東に流れる縦沢のNR7などは集落へ水を供給しており、NR7は古代以来ほぼ同位置で存続していたことが確認されている。

中世1期1段階は、個々の遺構の内容などは古代の遺構と大きく異なるものの、集落の占地場所や遺構群の内容などに古代との共通性を保ちつつ、小規模な集落を営んでいた。

### (2) 中世1期2段階

2段階に入ると、集落の範囲が東に広がりを見せ、構築される遺構の数も多くなる。また、建物を方区画する溝が該期から構築され始め、掘立柱建物址を中心として整然と規格化された遺構配置が認められるなど、1段階の集落景観とはまったく異なった様相を呈するようになる。1段階の竪穴住居址が移動して



構築されたSB264を切って区画溝のSD60が構築されていることから、1段階の周溝を伴う掘立柱建物址を竪穴住居址が取り囲むように構築されていた遺構群が、方区画を主目的とした溝や規格性をもった配置の掘立柱建物址に構築され直されるのが2段階である。

1段階で2か所に分かれていた遺構群は、SD54など区画の溝が両群の間にも構築されることにより、一つの整然としたまとまりの中に組み込まれていく。周溝を伴う掘立柱建物址は認められず、SB252・255・265・264など細長さに特徴をもつ竪穴住居址も徐々に数を少なくしていく。代わってST83からST116まで10棟程の掘立柱建物址が、SD54・60等の区画溝に沿って建物の方向をきちんと合わせて構築されていく。南側はST82の他は明確にならないが、柱痕跡をもつ小土坑の集中する場所の存在から最低2棟の掘立柱建物址が構築された可能性が高く、北側と同様の様相で建物が建てられていたことが想定できる。さらに、ST83とST85、ST98とST100、ST105とST108、ST117とST116の4例に認められるように、大小2棟の建物が組み合わされて小群を形成し、一定の間隔を保って配置されている。このような小群が5群程度確認できる。北側では掘立柱建物址の位置する東側の中央部分、南では竪穴住居址周辺から北側に、墓址を含む大小の土坑が構築されていく。以後同様の状況が続くことから、この部分が墓域として区分され使用されていたと理解したい。

掘立柱建物址は、ST83・85などのように柱配置が不揃いで明確に柱穴が検出できない1段階の様相に近いものと、ST98・105・117等の総柱建物の柱穴が明確に確認できるものがあり、後者には隅に土坑を伴う例が多い。溝はSD54に代表される直角に曲がるものを含め、軸線に方向を正確に合わせて直線的に構築されており、SD60には中途に陸橋が認められるなど、方区画を一義的な目的として構築されている。ただし、滞水またはゆっくりとした流れの痕跡は認められる。

水利は、1段階のNR7などの縦沢中心の状況から、区画溝の構築により横のゆっくりとした流れも合わせて使われていたものと思われる。自然流路(NR7など)は方区画に合わせて、新たに位置を移動させて開鑿されるが、2段階中にそれが行なわれたかどうかは明確にならない。居住域あるいは墓域が明確に区分され始めることから、生産域の再編成も当然なされていくと考えるが、具体的な状況は把握できない。

2段階は、集落にとっての大きな画期であり、古代的な集落景観が払拭され、以後中世の集落として存続していく骨格が形成された時期といえる。

### (3) 中世1期3段階

2段階で新たに構築され直された集落は、3段階ではさらに充実した様相で存続していく。確認できるだけで南北500m程の範囲に区画溝が設けられ、その中は居住域・墓域などに区分され、大小の建物が整然と配置されていく。規格性をもつ中世集落が最も整う段階である。SD54・56・60などの区画溝が存続するとともに、自然流路状の縦沢(NR7など)に代わってSD51が用水堰として整備されるなど、方区画が範囲を広げる。現用水路との関係で明確にならないが、東西方向の堰を中心として軸線に沿っての流れは該期には存在していた可能性が強く、条里的地割とされる現状の方面地割はこの時期にはほぼ出来あがっていたと考える。

集落は、居住域と墓域とが区分され、掘立柱建物址主体の建物が建ち並び、2段階と同様の景観が保持されている。しかし、南部では方区画がされるとともに、建物の数が減少してSB252・254だけになり、やがて墓域に変化していく。大・小2棟の掘立柱建物址で形成される小群は、ST84とST86、ST99とST101、ST104とST110などにみられるように、まったく同内容でほとんど同位置に建て替えられるものが多い。移動するものであっても、一定の範囲を越えて構築される例はない。SD56・SA14等の存在から、方区画はこの小群毎に設定され、その最小の区画の内で建物が建て替えられるなどしており、結果として大きな移動とならないと考えた。また、同方向ながら位置を少しずつずらして構築されるSD54とSD60

が存在するのは、そのような小単位の区画が存在していたからといえよう。また、ST95・96・97で構成される小群は、大小2棟の構成とは様相が異なっており、建物の性格などに差異があるものと考えられる。それらを合わせ、建物の総計は16棟におよび小群は7群程度形成されており、中世では一番数多く建物が構築されている。

2か所の墓域には、竪穴住居址と判断した大きな掘り方を持つものから、明確に墓址と断定できるものまで、種々の形態の掘り込みが存在しており、そのすべてを墓坑としてしまうことは無理がある。しかし帰属時期を含め不明確な内容が多く、ここでは一定の範囲に墓址を含む土坑が構築され続けることを指摘するにとどめたい。

したがって、水利状況は、基本的には現在の用水堰に近いものが遺跡全域にわたって確立していたと思われる。水田を含む生産域の状況もそれに対応していたと考えたいが、具体的に判明したものはない。

3段階は、2段階に形成された中世の集落が、さらにきちんと整理され規模を大きくしながら営まれ続けていく時期といえる。

#### (4) 中世1期4段階

4段階に入ると、同様の集落景観は基本的には維持されるものの、建物の移動が激しくなるなど不安定な要素がみられはじめる。また、建物全体の数が減少するなど、集落としても衰退傾向がうかがわれる。さらに、3段階に広い範囲に設けられた区画溝は、おそらく区画としての意味は変化しなかったと想定されるが、東西方向の縦沢を除いて存続が不明確になってしまい、区画溝に囲まれた整然とした建物の並びという状況からはかなり変化していく時期である。

区画溝はSD60の存続がはっきりしなくなるのを始め、SD54も明確な存在を指摘できない。しかし、ST88・103などの構築位置や、区画が現水田畦畔として位置をほとんど変えることなく認められることから、区画自体は存在し意識されていたと判断できる。掘立柱建物址はST87・88・103等いずれもかなり大きく移動して構築されており、5小群9棟前後が存続していく。掘立柱建物址が総柱建物でなくなるなど、建物の構造にも変化が生じた可能性がある。遺跡南端近くでST81などの遺構が構築され始める。該期に帰属することが明確に判明したのはSB251だけで、やや帰属時期が不明確であり、北側の集落や遺構との関係も明らかにならない。小遺構群が短期間存在したか、集落の一部であり東側に主体になる部分があるかのどちらかであろう。中央部墓域の南に、一辺25m程で方形に区画する溝(SD66・67)が存在する。内側には竪穴住居址(SB273)などが構築されるが、区画の意味や集落内での位置付け等ははっきりしない。墓域はほぼ同位置で存続していく。

水利および生産域の状況も3段階を引き継いでいると思われる。

4段階は、整然と形成されていた集落がその姿をとどめる最後の時期であるとともに、集落の衰退がはっきりしてくる段階でもある。

#### (5) 中世2期

中世2期は、中世1期に形成された集落が姿を消し、墓域としてしばらく使用された後、現景観に近い状況で水田等が広がる生産域へと変遷していく、変化の激しい時期である。中世1期を通じて維持されてきた集落の消滅する中世1期末から2期初頭の時期は、遺跡にとって大きな画期である。

ST87・88は確実に中世2期まで存続しているが、ほかの建物については存続が不明確であり、集落の衰退・消滅の過程における最後の状況と理解できる。区画溝も、SD66・67が存続し内側に竪穴住居址(SB272・274)などが構築されるが、ほどなく陸橋をもつ細い溝(SD61)がこれを切って構築され、さらに東西方向のSD62が新たに開鑿される。短時間のうちにめまぐるしく変化し、集落を区画する溝としての機能は果たさなくなる。さらにその後、SD60の陸橋より北の部分やSD61の北側などは、部分的に用水堰

として利用されていき、溝が埋まり切る前に次の溝が造られていく状況がうかがえる。建物の構築されていた場所にも墓址を含む土坑が構築されるようになるが、SD60・61・66のいずれをも切って構築される墓址が存在することから、これらの溝が消滅した段階で付近全域が墓域に代わったことが想定できる。

墓域から、SD62など現用水堰に近い溝が構築され水田化していくのは16世紀初頭前後が想定されるが、その時期にこの付近は現景観に近い状況となり、当然水利状況も現状に近い姿に整え終ったと思われる。北側の条里坪界線とされる部分でも、SD71・74が現用水堰に極めて近い状況で存在していたと思われることから、本遺跡全域にわたって現状に類似した景観が出現・定着していた可能性が強い。

古代以来、居住域として多少の断絶はありながらも存続してきた本遺跡・集落が、現況に近い生産域に移り変わる変換点として中世2期は位置付く。

#### (6) 近世

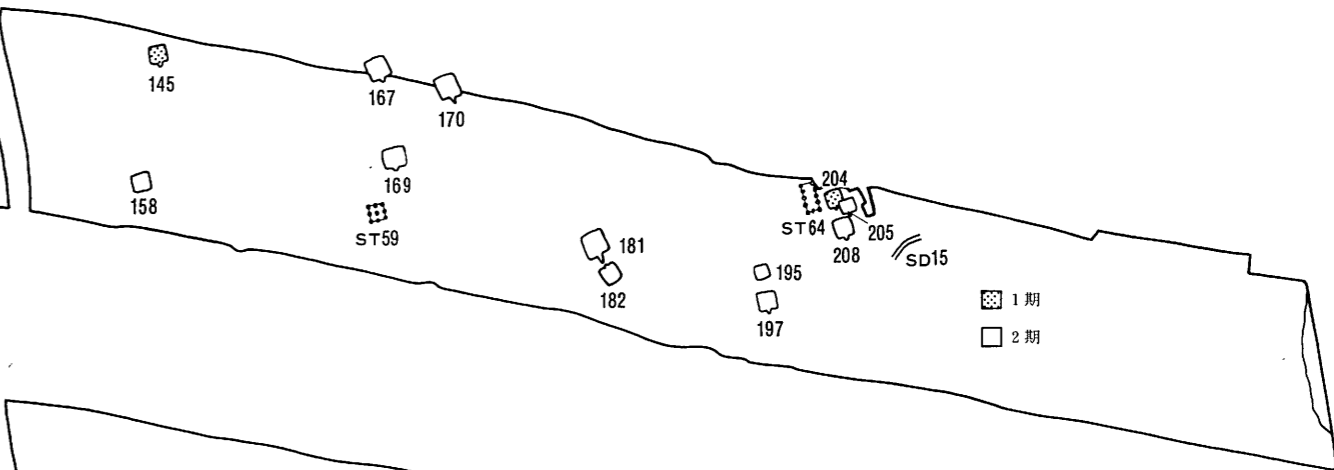
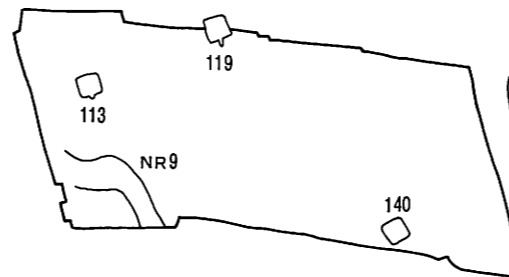
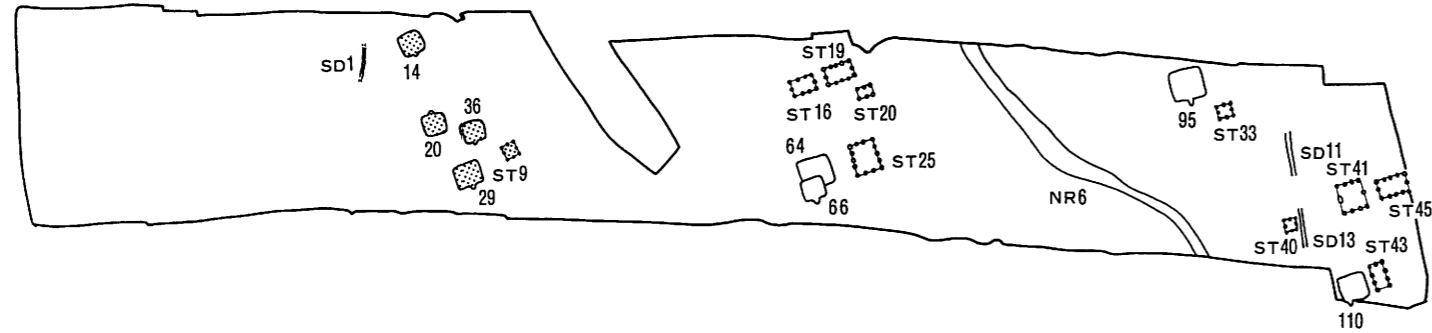
時期の限定がやや不明確であり断片的な把握になるが、生産域に移り変わった本遺跡は、近世を通して基本的にはその状況を保持していく。

北側では、南北方向の坪界とされるSD74を挟んでST118・119・120の掘立柱建物址3棟が存在する。建物の方向の一致や位置関係から同時期に存在したと判断でき、小規模な遺構群が短期間存在したものである。直接建物の時期に結び付く所見などはないが、溝址(SD74)や水田址(SL3)に前後する時期と考えたい。中世の掘立柱建物址と類似する形態ともとらえられるが、遺構数が少なく検出が難しく不完全であったことから、比較検討を十分することはできない。

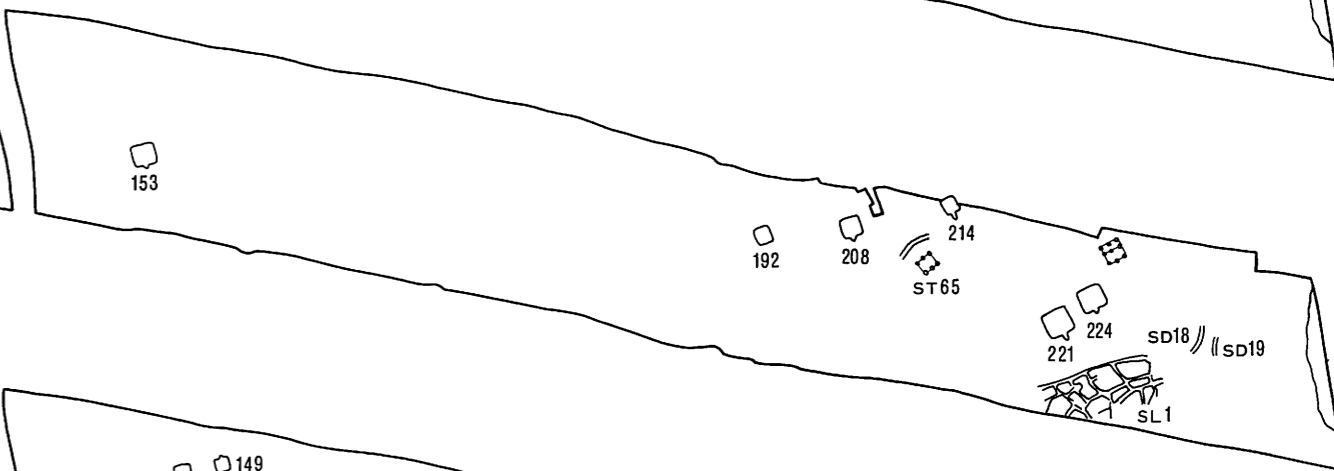
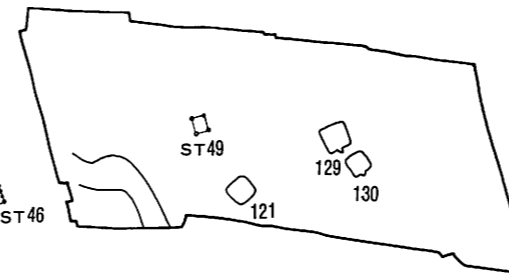
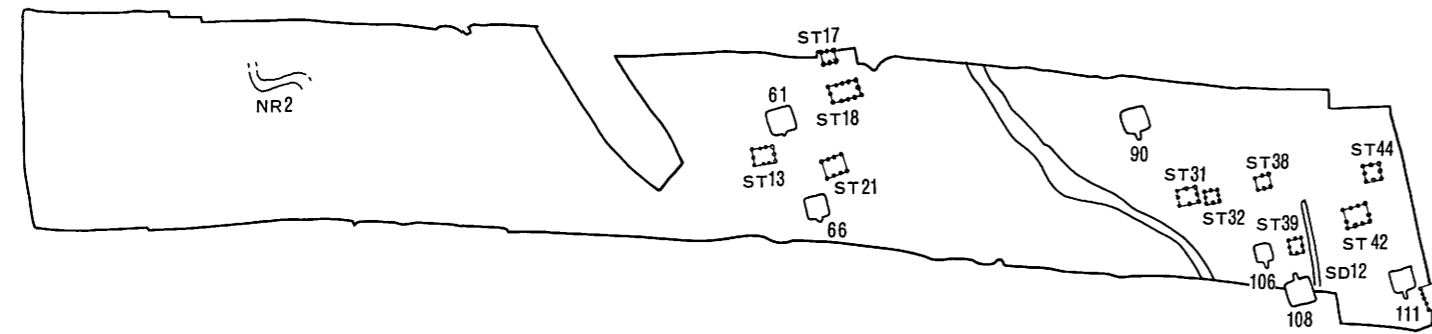
水田址(SL2・3・4)が3か所から確認され、該期の生産址の状態が類推できる。基本的には、現水田畦畔の下には近世の畦畔も存在し、現水田の中を細区画するようにしてさらに畦畔が存在する。したがって、近世における水田は、現水田と同様に方区画された田面が広がるものの、さらに小さく区画された小規模水田の集合体であったことになる。それを支える水利・灌水状況であるが、SD71・72等で示されるように遺跡全域で現在とほとんど違いが認められず、田面が細分されている分だけ細かな配水がなされていたことが判明した。

中世に成立した現条里的景観は、近世も整然とした姿で受け継がれ、現在の景観へとつながる。そのなかで、水田の規模の違いが該期の特徴として指摘される重要な点である。

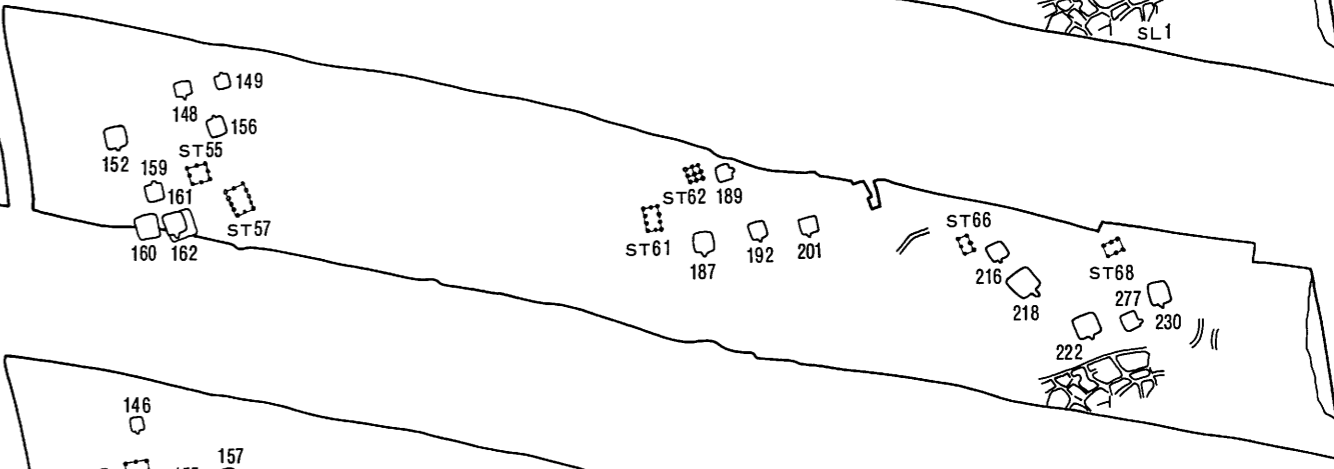
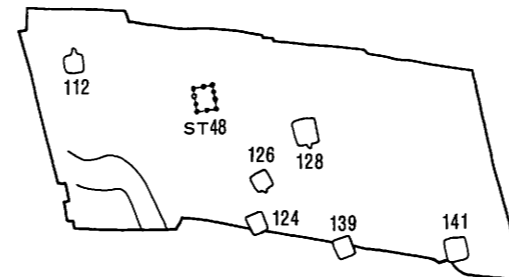
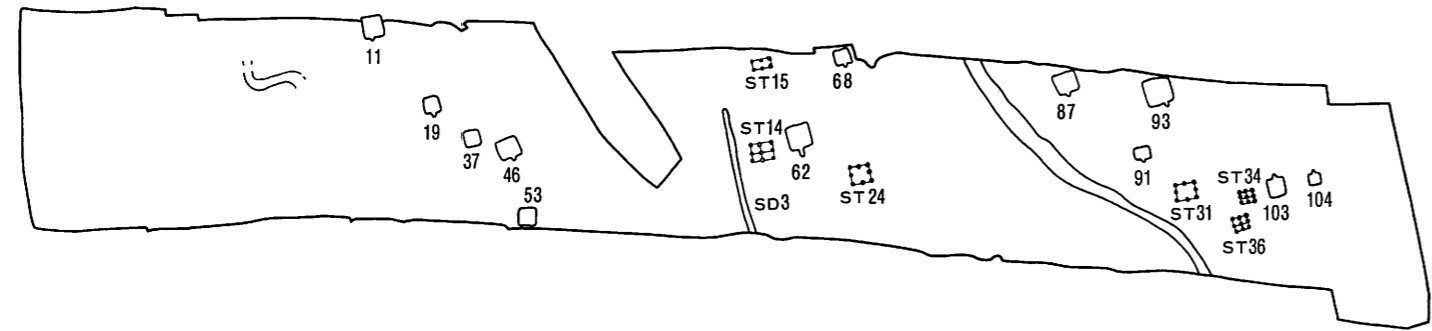
古代1・2期



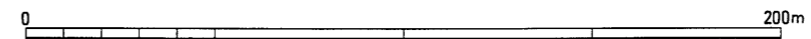
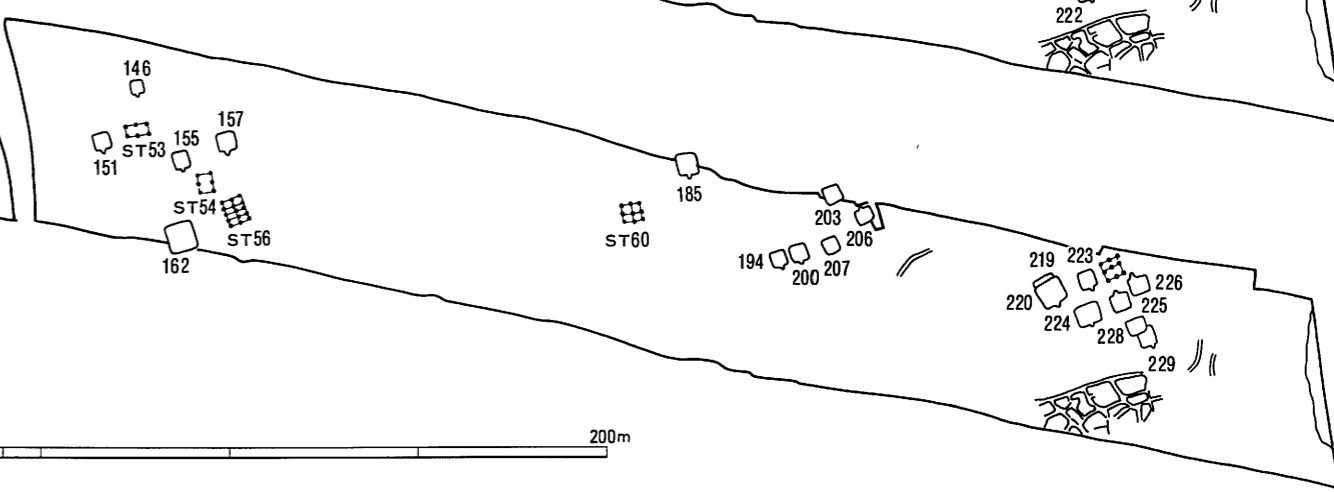
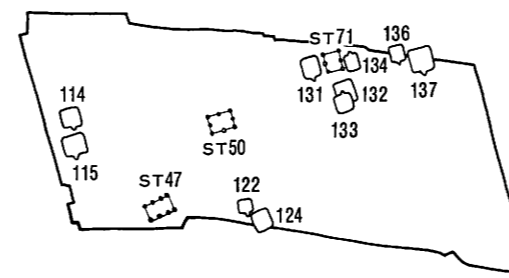
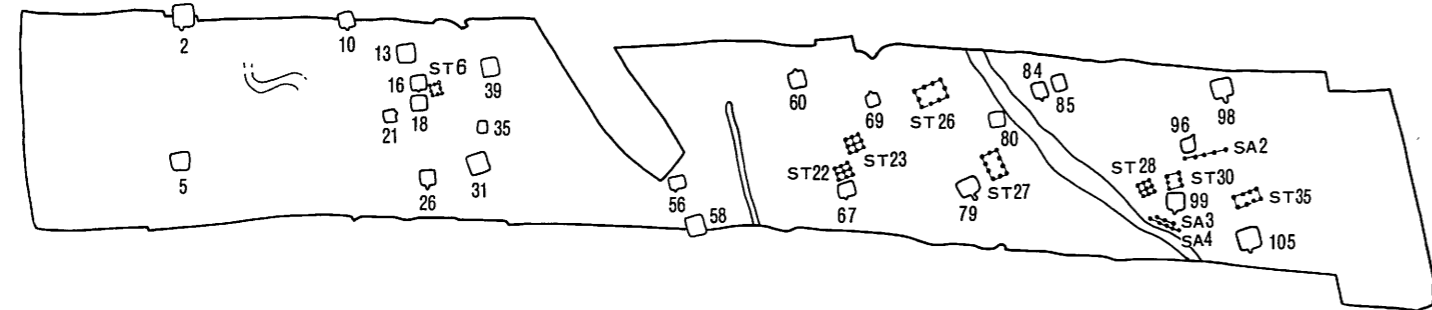
古代3期



古代4期

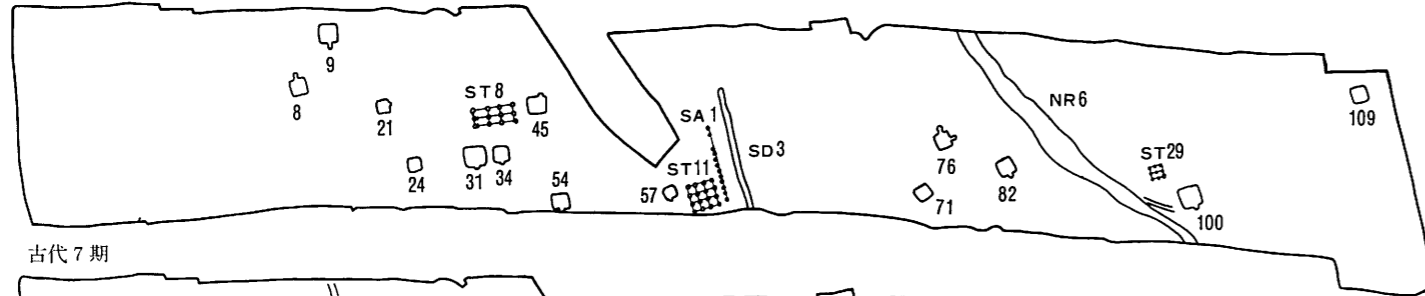


古代5期

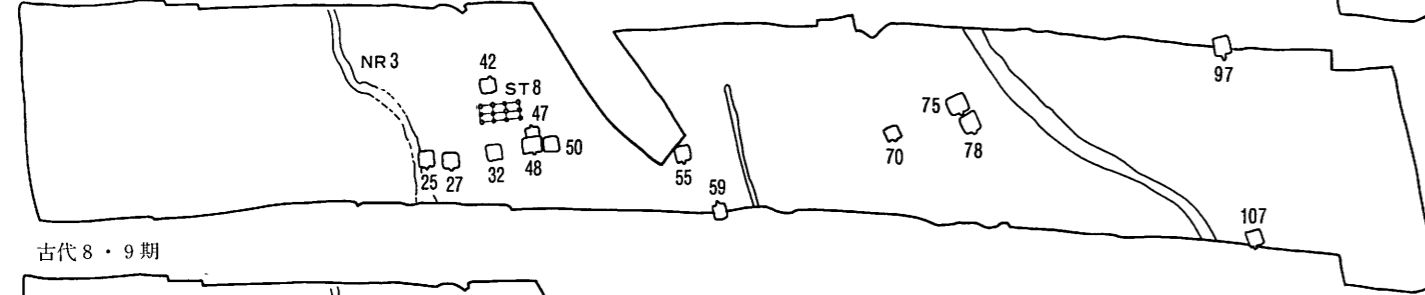


第160图 北栗遺跡集落変遷図(1)

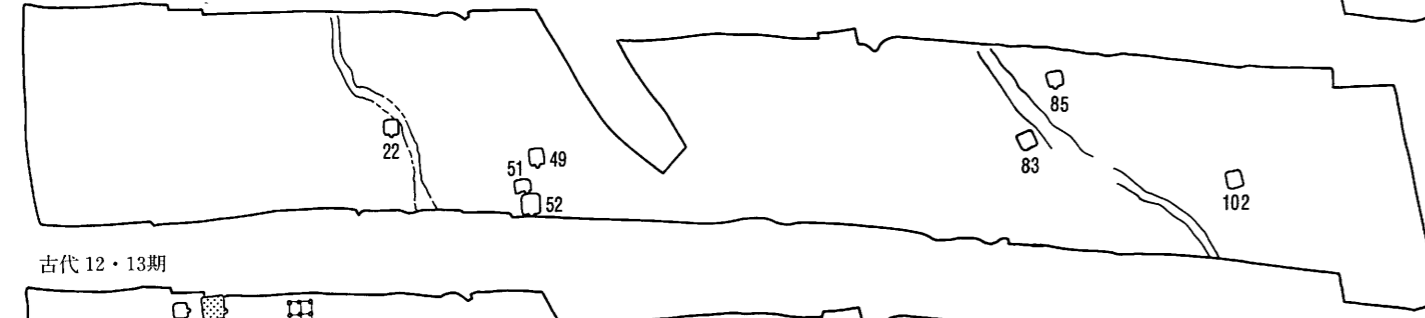
古代6期



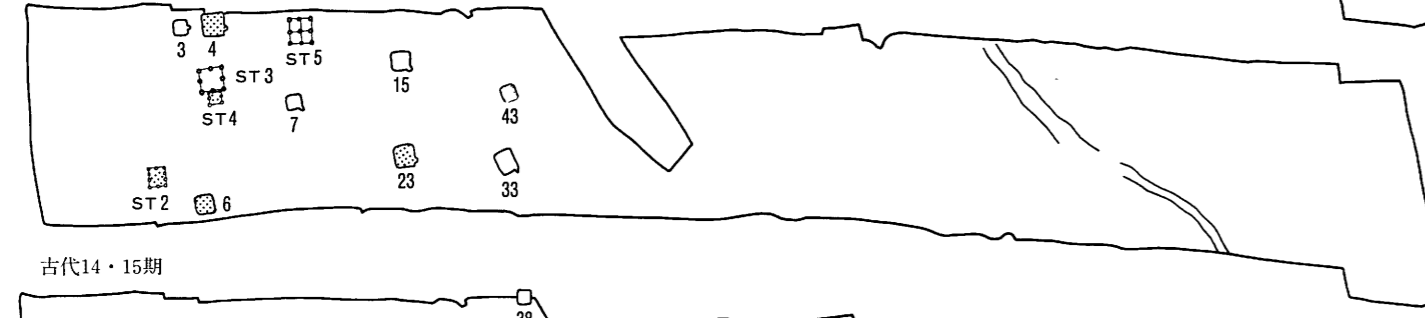
古代7期



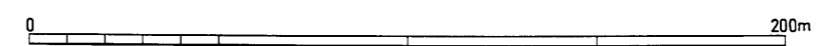
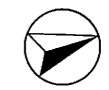
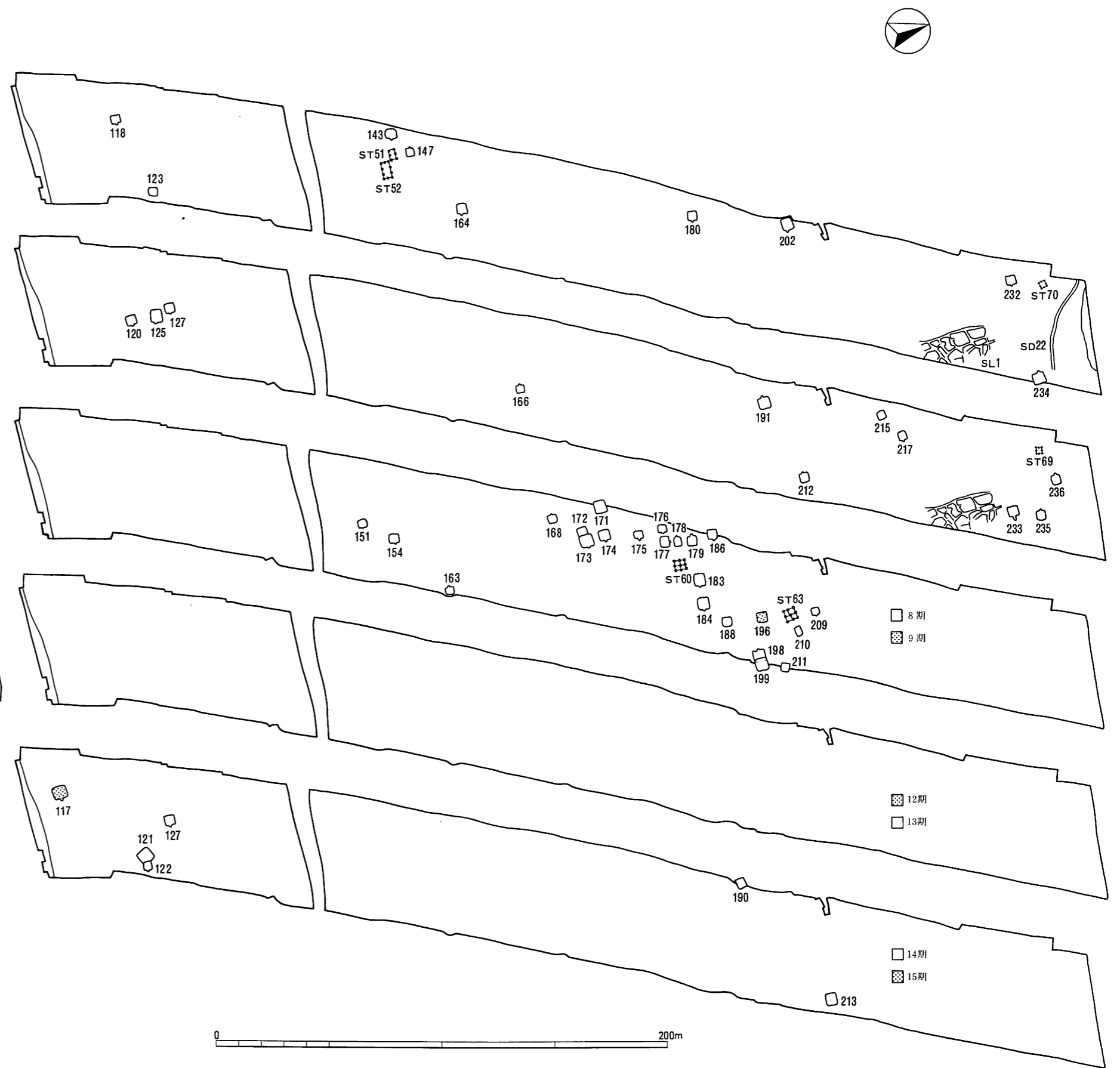
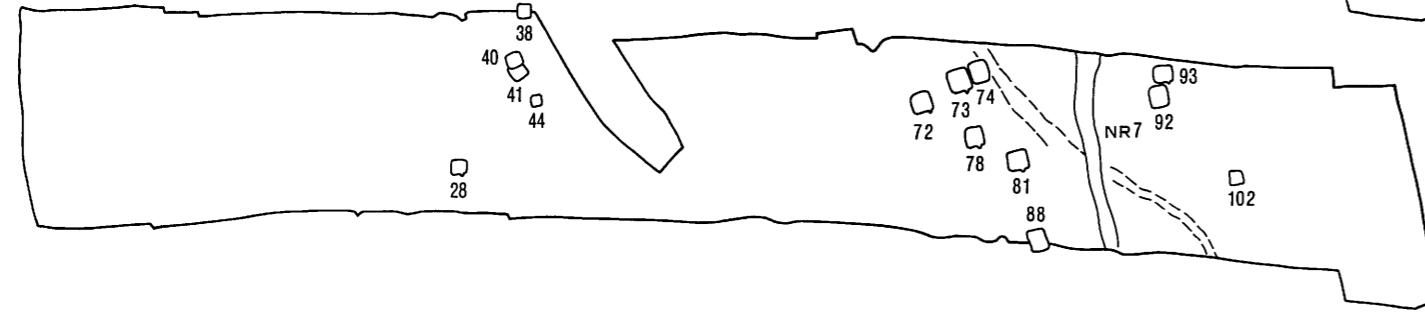
古代8・9期



古代12・13期

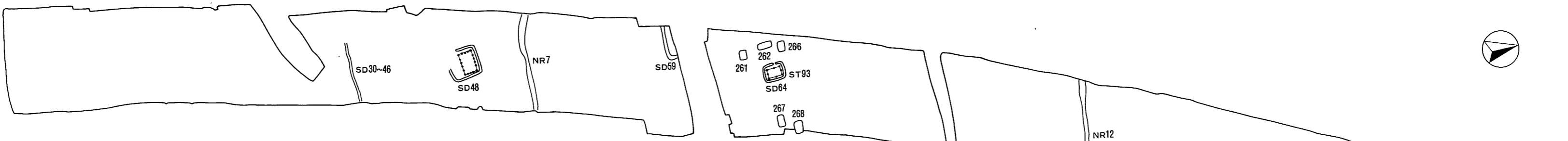


古代14・15期

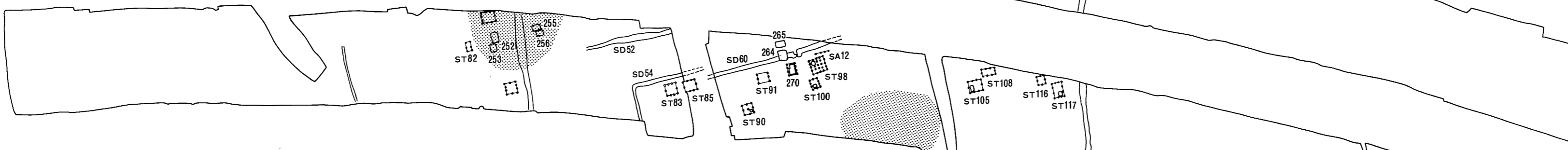


第161図 北栗遺跡集落変遷図(2)

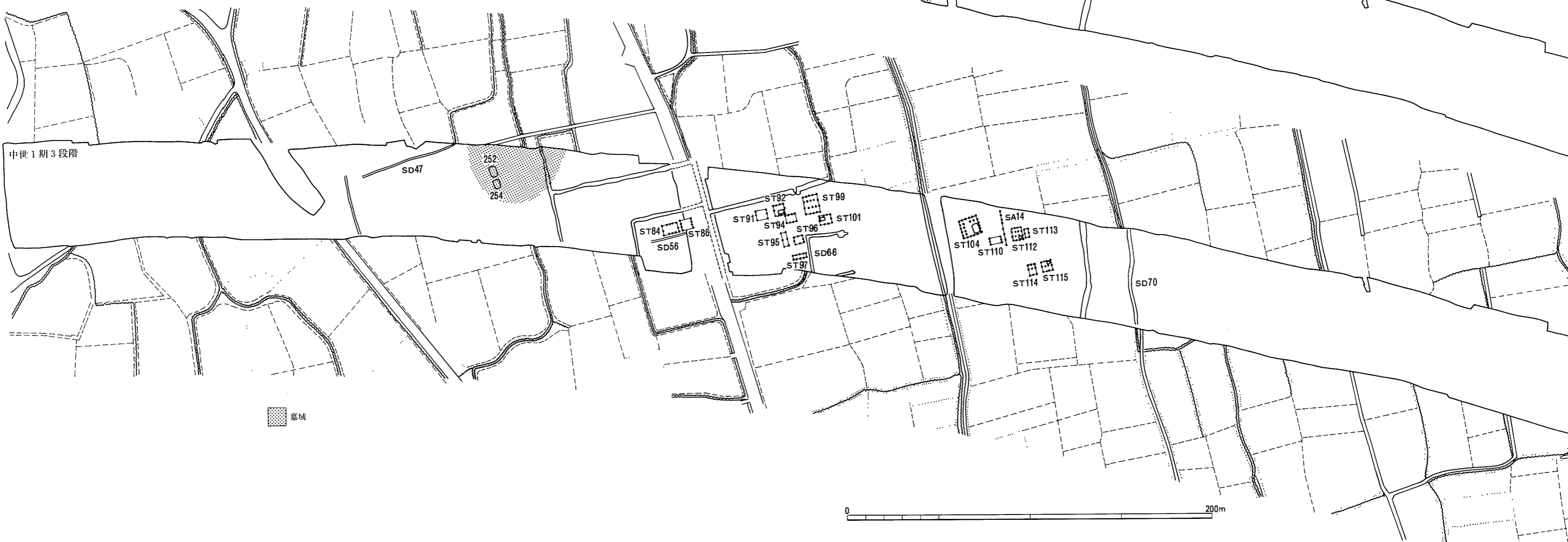
中世1期1段階



中世2期2段階

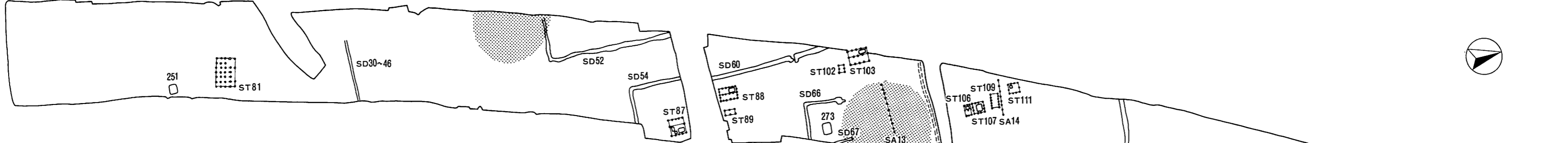


中世1期3段階

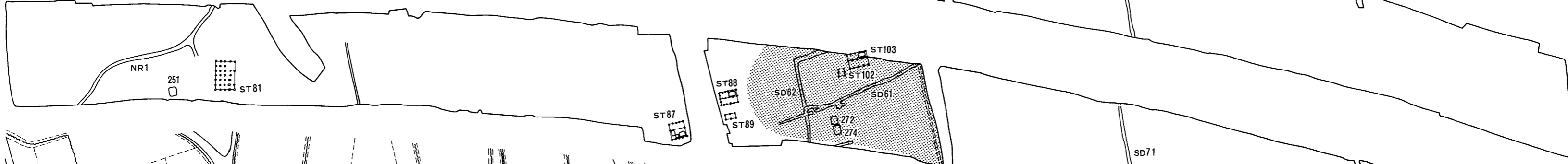


第162図 北栗遺跡集落変遷図(3)

中世1期4段階



中世2期



近世



第163図 北栗遺跡集落変遷図(4)

## 第5章 結語

幅60m、全長850mにわたる本遺跡の発掘調査の結果を提示し、そこから得られた成果と今後の課題について述べてきた。最後に、時代を追いながら本調査の簡単な評価をして結語としたい。

### 縄文・弥生時代

本遺跡における最初の生活の痕跡は、縄文時代中期から後期にかけての、わずかな凹みに焼土を伴う土坑が数基検出された。ごく短期間にこの地で火を使用して生活した跡と考えられる。沖積地に立地する小規模で非定住的な要素が目立つ遺構は、周囲の他遺跡でも認められつつあり、定住的な集落址の周辺やそこでの生産活動等を考えるうえで重要な意味をもつと考える。

弥生時代後期の竪穴住居址が、本遺跡の南端堀川沿いの自然堤防上に検出された。1軒だけであるが、松本平中央部において自然流路沿いに占拠する弥生集落の存在が明確にされたことは、この地域には該期の調査例が少ないだけに、貴重な成果となった。

### 古代

古墳時代にはいって、調査区内では暫く生活の痕跡を知ることはできなかったが、7世紀後半になって竪穴住居址が水源近くに少数ながら出現する。そして遺跡全体に一斉に開発の手が及ぶのは、奈良時代に入る前後の8世紀初頭頃であり、場所を選びきわめて計画的に開発が開始されることが、集落内の遺構配置や旧地形と占拠場所の検討から明らかになった。また、竪穴住居址と掘立柱建物址で構成される数棟の遺構群が、一定の地域を確保して分布しており、各々の集合体が集落の実態として把握できた。また、部分的ではあるが水田址が確認されたことから、遺構群の立地する居住域と水田などの生産域との関係が類推でき、集落を景観として理解できた。島立地区における開発の状況や背景、遺構群の在り方や当時の社会構造との関係や組織を考えていく上で、重要な資料提示となった。

集落は8世紀初頭前後から9世紀代まで、およそ2世紀にわたって各地区で展開し、有機的な関係を保持続けた。10世紀にはいと、遺構は激減し11世紀後半(14期)でやや竪穴住居址数を増すものの、一時的なもので、12世紀前葉まで具体的な姿を明らかにすることはできない。古代を通じてこのような動きは、当時の政治状況や社会情勢と表裏をなしていたことは推測されることであり、本遺跡での在り方を解明することは、律令体制下の開発や初期荘園の実体にアプローチをするための一資料として大きく評価されよう。

### 中・近世

中世の初頭は、古代からどのように継続するかに不明確さがあり課題として残るが、遺構群の構成や個々の遺構の特性には古代と共通する部分が目立つ。この様相が一変するのが、12世紀後半から13世紀初頭にかけての時期である。軸線に方向を正確に合わせた直線的な溝によって方区画され、その内に掘立柱建物址が整然と並ぶ、中世の特徴的な集落が出現する。それまでの、遺構群の集合体としての集落のあり方から、規格性をもって計画的に形成される集落への変化であり、散村から集村への変遷とみることもできよう。このことは、13世紀前後が集落のレベルにおいて中世的特質が確立した時期であり、該期が一つの大きな画期として位置づくことを示している。

また、ここで成立する方区画は、いわゆる島立条里的遺構と呼ばれている現条里的景観の根幹である方区画の地割とほぼ一致することが確認され、現条里的景観の性格と起源を決定的に規定する、きわめて重要な成果の提示となった。すなわち、条里的配置の基本的な設計は13世紀～14世紀頃に見て取ることができ、少なくとも条里的遺構の南限とされる集落付近一帯ではそれに基づいた地割が施行されていたことが想定されるのである。そして、現条里的景観が中世の新たな計画的開発に起因していることも、具体的



に明らかになった。

集落は、15世紀前半頃まで規格性をもって整然と存続する。大小2棟一組の掘立柱建物址が一定の広さの方形の区画を占地し、それが集合して全体を溝で囲む集落が形成されている。このように中世集落の構成が判明し、時期別の変遷が明確になった例は、長野県下では稀少な事例であり全国的にも調査数は限られてくる。やや立ち遅れの目立つ県下の中世遺跡の調査および中世集落の調査を進展させる貴重な調査事例であり、従来の中世村落研究に与える影響も大きなものがある。さらに、総柱建物の一角に土坑が付属する特徴的な掘立柱建物址が、中世前半に出現する典型的な建物として位置付けられたことも、掘立柱建物址の変遷を含む建築史の研究に貴重な手がかりとなった。

集落の周辺に広がる生産址は、中世の帰属するは明確にできなかったが、現水田をそのまま細区画した方形の水田として近世水田址が検出でき、水田への灌水を中心とした水利状況が把握できたことも、重要な成果の一つである。本遺跡で検出された古代の水田址と比較検討し、また周辺遺跡で調査された中世の水田址を考え合わせることで、水田耕作の発展過程や水田経営の実態に迫ることができ、今後の新しい研究分野として本調査結果が活用され深められるであろう。

以上述べてきたように、個別の成果をあげても本遺跡の発掘調査がもつ大きな意味は、種々の時期で多方面にわたって認められる。それにもまして重要かつ貴重な成果は、これまで島立条里的遺構として注目されてきた本遺跡一帯の条里といわれるものの形成過程が明確にされたことはもちろん、古代以来の考古学的状況が連続的に明確にされ、島立・北栗遺跡地区の歴史が考古学の成果を裏付けに厚みをもって解明される可能性が出てきたことである。そうなったとき、すでに破壊されてしまった本遺跡の調査が、幾分なりと意味あるものとして位置付くであろうし、その時期の来ることを切に希望する。まだまだ、それまでに明確にされなければならない問題や、調査結果そのものの再検討が必要な部分も多く、今後の課題としてそれらの解明・追及に努力していきたい。

終わりに、北栗遺跡の発掘調査に対し多大な御協力をいただいた関係諸団体、酷寒や猛暑の中、砂利層中心の困難な発掘に従事していただいた方々、膨大な資料を根気良く整理し報告の準備をしてくださった方々など、多数の皆様御協力・御努力があって本書の刊行にいたった。それに十分応えた報告となったかは甚だ心もとないが、それぞれの立場での精一杯の努力の結果であると確信している。

これまでの関係各位の御協力・御支援に対し、あらためて深く感謝申し上げ、報告を終る。

## 参 考 文 献 一 覧

- 小穴 喜一 1985 「松本市島立・新村両条里的遺構の開発経緯 — 古代・中世の用水路を軸として —」  
『信濃』 37 - 9
- 1987 『土と水から歴史を探る』
- 各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 斎藤 孝正 1981 「猿投・尾北・美濃窯における灰釉陶器の変遷」 『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』
- 1988 「中世猿投窯の研究 — 編年に関する一考察 —」 『名古屋大学文学部研究論集』  
C I 史学 34
- 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」 『長野県考古学会誌』 51
- 自然観察資料集作成委員会編 1983 『松本市盆地のおいたちをさぐる』 松本市教育委員会ほか
- 信濃史学会 1985 『信濃』 37 - 9
- 田口 昭二 1982 「美濃の灰釉陶器と緑釉陶器」 『考古学ジャーナル』 211
- 1983 「美濃窯における白瓷と山茶碗」 『美濃陶磁歴史館報』 II
- 長岡 寿 1985 「松本市島立条里遺構の水利慣行について」 『信濃』 37 - 9
- 長野県教育委員会 1989 『吉田川西遺跡』
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」 『信濃』 III 39 - 4
- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』 第二巻歴史上
- 藤沢 宗平 1939 「立石を掘る」 『早高史学』 2
- 藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」 『東洋陶磁』 第8号
- 1984 「“古瀬戸” 概説」 『美濃陶磁歴史館報』 III
- 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』 V
- 藤原 健蔵 1967 「山形盆地の地形発達」 『地理学評論』 40 - 10
- 藤原 宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) — 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 —」 『考古学と自然科学』 9
- 松原 典明 1983 「古銭一覧表」 『日本考古学小辞典』 (ニュー・サイエンス社)
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 III
- 松本市教育委員会 1985 『松本市島立南栗遺跡・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条里的遺構』
- 1987 『松本市島立北栗遺跡条里的遺構』
- 1988 『松本市島内遺跡群 北方遺跡II・北中遺跡』
- 三土 正則 1974 「低地水田土壌の生成的特徴とその土壌分類への意義」 『農業技術研究所報告』  
B - 25
- 1978 「水田」 『土壌調査法』
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について — 型式分類と編年を中心として —」  
『九州歴史資料館研究論集』 4
- 若尾 正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」 『美濃の古陶』

## 発掘調査及び執筆等の分担一覧 (五十音順)

### 1 発掘調査担当及び発掘調査記録の整理とまとめ

60年度 調査第一部長 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎 第三部長 春原正毅  
調査研究員 井上城典 大竹憲昭 河西克造 小林 上 近藤尚義 春日雅博 斎藤正善  
田中正治郎 中島経夫 西牧尚人 百瀬新治 綿田弘実  
調査員 尾川秀吉

61年度 調査第一・第三部長 樋口昇一 第二部長 丸山徹一郎  
調査研究員 青沼博之 市川隆之 伊藤隆之 井上城典 大竹憲昭 小口 徹 河西克造  
春日雅博 斎藤正善 新海節生 寺内隆夫 寺島俊郎 中島経夫 中浜 徹  
西牧尚人 西山克己 福島厚利 百瀬新治 綿田弘実

62年度 調査部長 宮沢恒之  
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 小口 徹 小平和夫  
小林俊一 小林 上 野村一寿 望月 映 百瀬新治

63年度 調査部長 宮沢恒之  
調査研究員 青沼博之 石上周蔵 市村勝巳 上田典男 大竹憲昭 岡沢秀紀 小平和夫  
野村一寿 望月 映 百瀬新治

元年度 調査課長 青沼博之  
調査研究員 石上周蔵 小平和夫 野村一寿 望月 映

### 2 執筆担当者

市村勝巳 第3章 第3節2  
小口 徹 第1章 第5節  
第2章 第3節8、第5節4  
小平和夫 第3章 第3節1  
野村一寿 第3章 第1節、第2節、第3節3～5、第4節、第5節  
第4章 第3節2～6  
百瀬新治 第1章 第1節～第4節  
第2章 第1節、第2節、第3節1～7・9、第4節、第5節1～3  
第4章 第1節、第2節、第3節1、第4節、第5節  
第5章

### 3 その他

遺物実測 石上周蔵 市村勝巳 大竹憲昭 小平和夫 小林俊一 野村一寿 望月 映  
遺物写真撮影・現像・焼き付け・遺構写真焼き付け 青沼博之 岡沢秀紀 西山克己  
土層総括 小口 徹  
石質鑑定 大竹憲昭 小口 徹 望月 映  
金属製品保存処理 大竹憲昭 小林 上  
編集 百瀬新治 (青沼博之 野村一寿)

付 表



付表1 古代竪穴式住居址一覧表 (1)

住居址	時期	平面形状	主軸方向	規模					カマド							諸施設			図版		
				規模の 種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への 込		煙道			煙道 口の高さ m	その他	柱 穴		柱間 隔m	その他
											形	大きさ	主軸	長さ m	傾き						
1	弥生	—	—	3.75 ×	—	0.20	601,40	中央								埋甕炉	4	1.75 1.80		23	
2	5?	N100°E	—	4.80 ×	—	0.20	601,60	東壁中央	粘土	—	—	N102°E	1.15	5°	0.10		0	—	貼床	24	
3	13方	N 6°E	—	× 3.45	—	0.20	601,55	北壁やや東寄	石組	—	—	0°	0.65	10°	0.10		0	—		24	
4	12長II	N10°E	中II	5.10 × (5.85)	29.67	0.45	601,25	北壁やや東寄	石組	?	僅	—	—	—	—		0	—	貼床 北東隅ビット	24	
5	5方	N 2°E	中I	4.20 × 3.95	16.63	0.15	601,55	北壁?	?	—	—	—	—	—	—		0	—	貼床	25	
6	12・13・14	—	—	2.85 ×	—	0.10	601,50	北東隅	石組	—	—	—	—	—	—		0	—		25	
7	12・13長II	N85°E	小	3.15 × 3.75	11.69	0.30	601,25	北東隅	石組	—	—	N65°E	0.85	5°	0.20		0	—		26	
8	6方	N90°W	中I	3.70 × 3.60	13.39	0.50	600,50	西壁中央	石組	方	½	N93°E	1.35	20°	0.10	煙道先ビット	0	—		26	
9	6方	N96°E	中I	4.30 × 4.00	17.37	0.60	601,20	東壁中央	石組	方	½	N92°E	1.15	15°	0.10	土器貼付	(1)	中央	貼床 南東隅ビット	27	
10	5	—	—	× (3.30)	—	0.40	601,25	東壁中央	—	—	—	—	—	—	—	袖掘り残し	0	—		27	
11	4	N89°E	—	× 4.85	—	0.30	601,45	東壁中央	石組	—	—	N84°E	0.50	25°	0.10		0	—	カマド南にテラス	27	
12	—	—	—	—	—	0.40	601,20	?	?	—	—	—	—	—	—		0	—		29	
13	5	—	—	—	—	0.20	601,45	西壁	?	方	½	—	—	—	—		0	—		29	
14	1方	N75°E	大I	5.70 × 5.80	33.06	0.20	601,15	東壁やや北寄	—	—	—	—	—	—	—		4	2,90	貼床	29	
15	13方	N83°E	中I	4.35 × 4.30	18.75	0.50	600,80	北東隅	石組	—	—	—	—	—	—		0	—	貼床 礎石?台石	29	
16	5方	N91°E	小	3.00 × 3.30	9.89	0.25	601,05	東壁中央	—	方	¼	—	—	—	—	袖掘り残し	0	—		29	
17	—	—	—	—	—	0.20	601,20	?	?	—	—	—	—	—	—		0	—		29	
18	5	—	—	—	—	0.40	600,75	東壁?	?	—	—	—	—	—	—		0	—		29	
19	4方	N82°E	中I	3.70 × 3.75	13.95	0.45	601,00	東壁中央	粘土	方	¼	N83°E	0.65	15°	0.20		0	—	北東・南東にビット	29	
20	1方	N90°W	中II	5.00 × 5.35	26.59	0.20	601,25	西壁中央	粘土	—	—	N90°W	0.40	10°	0.10		2?	—	甕埋設	30	
21	5・6方	N 6°W	小	2.75 × 2.50	6.85	0,05	601,20	北壁西寄	粘土	円	¼	—	—	—	0.10		0	—		28	
22	8	N98°E	—	—	—	0.20	600,85	東壁中央	石組	—	—	—	—	—	—		0	—		28	
23	12方	N 4°E	中II	4.80 × 4.90	23.42	0.10	601,35	北壁東寄	石組	—	—	—	—	—	—		0	—	礎石	28	
24	6・7	N93°E	—	2.50 ×	—	0.20	601,15	東壁中央	粘土	方	—	—	—	—	—		0	—		30	
25	7長I	N93°E	中I	3.35 × 3.75	12.60	0.40	600,95	東壁中央	粘土	円	僅	N95°E	0.60	0°	0.15	左側にビット	0	—		30	
26	5	N94°E	—	× 3.30	—	0.50	601,85	東壁中央	粘土	—	—	N98°E	0.95	15°	0.10		—	—		30	
27	6・7方	N97°E	小	3.40 × 3.50	11.97	0.30	601,15	東壁やや南寄	粘土	円	僅	N97°E	0.65	15°	0.10		0	—	貼床・入口石組	30	
28	14長I	N97°E	小	3.00 × 3.35	10,08	0.30	601,10	東壁北寄	石組	方	¼	—	—	—	—		0	—	貼床	30	
29	1方	N80°E	大I	6.05 × 5.80	35.03	0.20	601,15	東壁中央	粘土	方	¼	—	—	—	—	土器支脚	0	—	東にビット	30	
30	5・6	—	—	4.80 ×	—	0.30	601,05	?	?	—	—	—	—	—	—		4?	—		32	
31	6方	N91°E	中I	4.60 × 4.65	21.44	0.50	600,90	東壁中央	石組	方	½	N89°E	0.65	20°	0.15		4	1.90		32	
32	7方	N87°E	小	3.45 × 3.20	11.01	0.25	601,00	東壁中央	石組	—	—	—	—	—	—		0	—	床下ビット	32	
33	13長II	N72°E	中II	5.70 × 4.35	29.94	0.20	601,10	北東隅	石組	—	—	—	—	—	—		4	3,52	南東隅ビット 台石	32	
34	6方	N96°E	中I	3.55 × 3.70	13.74	0.20	601,00	東壁やや南寄	粘土	—	—	—	—	—	—		0	—	貼床 南東隅ビット	32	

古代竪穴式住居址一覧表 (2)

住居址	時期	平面形状	主軸方向	規模				カマド							諸施設		図版				
				規模の 種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への 達 形 大きさ	煙道			煙道 口の高さ m	その他		柱 穴	柱間 隔 m	その他	
												主軸 長さ m	傾き	その他							
35	5	長I	N98°E	小	2.45 × 2.20	5.37	0.10	601.20	なし	-	-	-	-	-	-	-	0	-		32	
36	1/4	方	N86°E	中II	5.10 × 5.25	26.72	0.10	601.20	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	土器支脚?	4	2.65		32
37	4	方	N80°E	中I	5.55 × 3.70	13.10	0.10	601.15	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-	0	-		32	
38	14	?	N92°E	?	× 3.20	-	0.10	601.40	東壁北寄	粘土	-	-	-	-	-	-	袖掘り残し?	0	-	貼床?	31
39	5	長I	N86°E	中I	4.30 × 3.85	18.58	0.50	601.10	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	2	-	貼床	31	
40	14	方	N70°E	中I	3.80 × 3.75	14.25	-	600.90	東壁やや北寄	石組	-	-	-	-	-	-	0	-		31	
41	14	-	-	-	-	-	-	601.10	西壁	?	-	-	-	-	-	-	0	-		31	
42	7	方	N82°W	小	3.20 × 3.30	10.56	0.15	601.15	東壁南寄	石組	方	1/3	-	-	-	-	袖掘り残し	0	-		31
43	11	方	N95°E	小	3.45 × 3.45	11.90	0.20	601.15	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-	0	-	床下土器埋設	31	
44	14	方	N93°E	小	2.15 × 2.15	4.62	0.15	601.05	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-		33	
45	6	方	N81°E	中I	4.05 × 4.35	17.61	0.15	601.05	西壁北寄	石組	円	僅	-	-	-	-	周辺ピット	0	-		33
46	4	長I	N80°E	中II	4.75 × 5.20	24.80	0.25	601.00	東壁中央	粘土	-	-	?	0.40	20°	0.10	0	-		32	
47	7	方	N86°W	小	3.00 × 3.05	9.12	0.20	601.00	西壁中央	石組	-	-	N90°W	0.30	20°	0.10	0	-		33	
48	6/7	長I	N86°W	中I	4.00 × 4.50	17.99	0.30	600.85	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	4+	3.14		33	
49	8	方	N96°E	中I	3.50 × 3.70	12.88	0.20	601.00	東壁やや南寄	石組	方	1/3	-	0.15	-	0.20	0	-	礎石?	33	
50	7	方	N90°E	小	3.50 × 3.40	11.83	0.20	600.90	東壁やや南寄	?	?	?	?	?	?	?	0	-	南東隅ピット	33	
51	8	方	N90°E	小	3.40 × 3.50	11.97	0.05	601.10	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-	0	-		32	
52	8	長I	N97°E	中II	4.85 × 4.30	20.76	0.35	600.85	東壁中央	石組	-	-	N77°E	0.45	25°	0.15	0	-		34	
53	4	-	-	-	-	-	0.15	601.00	東壁中央	?	?	?	-	-	-	-	-	-		34	
54	6	方	N87°E	中I	3.90 × 3.85	14.98	0.20	600.90	東壁やや南寄	粘土	方	1/3	N92°E	0.30	5°	0.05	0	-		34	
55	7	-	-	-	-	-	?	?	?	?	-	-	-	-	-	-	-	-		35	
56	5	方	N86°E	小?	2.85 × 2.75?	7.84?	0	601.40	東南隅	石組	?	?	-	-	-	-	-	-		35	
57	6	-	N78°E	-	2.55 ×	-	0.10	600.95	東壁南寄	粘土	円	1/2	-	-	-	-	土器支脚?	0	-		35
58	5	-	-	-	-	-	0.20	600.65	東壁?	-	-	-	-	-	-	-	0	-		35	
59	6/7	-	N98°E	-	× 3.00	-	0.15	600.60	西壁南寄	石組	方	1/3	N90°W	0.50	15°	0.15	0	-		35	
60	5	方	N95°E	小	3.40 × 3.50	11.97	0.10	601.00	西壁中央	粘土	方	僅	-	-	-	-	補掘り残し	2?	-		37
61	3	方	N74°E	大I	5.85 × 5.80	33.99	0.25	600.95	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	2?	-	貼床	37	
62	4	方	N81°E	中II	5.35 × 5.40	28.89	0.25	600.60	東壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	0	-	床下ピット	37	
63	4	方	N84°E	大I	6.15 × 6.10	37.70	0.25	600.60	東壁中央	粘土	-	-	N89°E	2.55	5°	0.20	0	-	カマド両側テラス	37	
64	2/3	方	N82°E	超	7.55 × 8.15	61.38	0.30	600.65	東壁?	?	-	-	-	-	-	-	0	-	床下ピット 西壁階段状	38	
65	2/3	-	-	-	7.65 ×	-	0.25	600.60	?	?	-	-	-	-	-	-	0	-		38	
66	2	方	N83°E	中II	5.35 × 5.55	29.69	0.35	600.65	東壁中央	粘土	円	1/4	N84°E	0.70	15°	0.30	0	-	カマド左脇 ピット	38	
67	5	長I	N81°E	小	3.25 × 3.70	12.09	0.20	600.70	東壁やや南寄	粘土	-	-	-	-	-	-	0	-	北東隅ピット	38	
68	4	方	N77°E	中I	4.00 × 3.95	15.92	0.15	601.05	東壁やや南寄	粘土	方	僅	N91°E	0.20	?	0.10	2?	-	南東隅ピット	39	

古代竪穴式住居址一覧表 (3)

住居址	時期	平面形状	主軸方向	規模				カマド							諸施設		図版				
				規模の 種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への の込 大きさ	煙道			煙道 口の 高さ m	その他		柱 間 隔 m	その他		
												主軸	長さ m	傾き							
69	5	方	N96°W	小	2.40 × 2.65	6.33	0.20	600.75	西壁やや南寄	粘土	円	?	N94°E	0.65	水平	0.05		0	-		39
70	7	長I	N75°E	小	2.85 × 3.10	8.89	0.15	600.70	東壁やや南寄	石組	方	1/2	-	-	-	-		0	-		40
71	6/7	方	?	小?	3.20 × 3.20	10.24	0.05	600.75	西壁?	?	-	-	-	-	-	-		0	-		40 42
72	14	方	N80°E	中II	4.45 × 4.80	21.41	0.25	600.85	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-		0	-	貼床・北壁ピット	41
73	14	方	N84°E	中II	5.40 × (5.00)	27.10	0.20	601.05	東壁北寄	石組	円	僅	?	0.35	30°	0.05		0	-		43
74	14	方	N76°E	中II	4.80 × 4.45	21.36	0.25	601.00	北東隅	石組	-	-	-	-	-	-		0	-	南東隅ピット?	43
75	7	方	N81°E	中I	3.90 × 3.90	15.13	0.60	600.55	東壁中央	石組	?	僅	N82°E	0.45	30°	0.15	土器貼付	3?		テラス	41
76	6	長II	N13°W	小	3.10 × 3.60	11.22	0.65	600.35	北壁やや東寄	粘土	-	-	N 6°E	1.45	20°	0.25	煙道先ピット	0	-		42
77	14	長I	N83°E	中II	5.15 × 4.55	23.34	0.15	600.95	北東隅	石組	?	僅	?	0.45	20°	0.15		0	-		42
78	7	長II	N79°E	中II	4.55 × 4.90	22.25	0.40	600.50	東壁中央	粘土	方	1/4	N72°E	1.05	10°	0.25	煙道先ピット	?	-	礎石?	42
79	5	長II	N73°E	中I	3.50 × 4.90	17.25	0.50	600.45	東壁中央	粘土	方	1/2	N75°E	1.55	15°	0.15	煙道先ピット	0	-	5〜7期か	42
80	-	方	N87°E	中I	3.90 × 3.70	14.36	0.30	600.90	北東隅?	?	-	-	-	-	-	-		0	-		43
81	14	方	N86°E	中II	4.80 × 4.50	21.61	0.20	600.90	東壁北寄	石組	?	僅	-	-	-	-		0	-	北西隅ピット	44
82	6	方	N72°E	小	3.30 × 3.55	11.75	0.55	600.50	東壁やや北寄	粘土	方	1/2	N76°E	1.60	?	0.20		0	-		44
83	8	方	N 8°W	小	3.50 × 3.10	10.92	0.40	600.70	北壁やや東寄	?	-	-	-	-	-	-		2?	-		44
84	5	長I	N84°E	小	3.55 × 3.15	11.25	0.40	600.65	東壁中央	粘土	円	1/2	?	0.10	?	0.20		0	-		45
85	8	方	N91°E	中I	3.65 × 3.50	12.74	0.25	600.75	東壁	?	-	-	-	-	-	-		0	-		45
86	5	-	-	-	3.00 ×	-	0.25	600.60	?	?	-	-	-	-	-	-		0	-		45
87	4	長I	N85°E	中II	4.90 × 5.50	26.84	0.15	600.60	東壁中央	粘土	丸	僅	?	0.45	15°	0.05	周辺にピット	0	-	貼床	45
88	14	-	-	-	4.45	-	0.45	600.50	?	?	-	-	-	-	-	-				北・南西隅ピット	44
89	14	方	N95°E	小	3.40 × 3.40	11.49	0.05	600.55	北東隅	粘土	-	-	-	-	-	-	カマド脇ピット	0	-		47
90	3	方	N86°E	大I	5.90 × 5.80	34.45	0.30	600.50	東壁やや南寄	粘土	-	-	N84°E	1.90	5°	0.15	袖掘り残し	4	3.74		47
91	4	長II	N91°E	小	2.80 × 3.50	9.74	0.25	600.35	東壁やや南寄	石組	丸	1/2	-	-	-	-		0	-		46
92	14	長I	N81°E	大I	5.80 × 5.20	30.38	0.40	600.50	北東隅	石組	丸	僅	-	-	-	-	左側にピット	0	-		46
93	14	方	N96°E	中I	3.85 × 4.10	15.79	0.30	600.75	北東隅	石組	丸	僅	-	-	-	-		0	-		46
94	4	方	N85°E	大I	6.25 × 6.60	41.25	0.50	600.50	東壁中央	粘土	-	-	?	0.80	5°	0.30		?			46
95	2	方	N85°E	超	7.50 × 7.60	57.00	0.40	600.50	東壁中央	粘土	-	-	N90°E	2.05	5°	0.10		0		北壁テラス	48
96	5	方	N90°W	小	2.95 × 3.10	9.18	0.40	600.40	北西隅	粘土	丸	僅	-	-	-	-	袖掘り残し	0	-		44
97	6/7	-	-	-	× 3.50	-	0.40	600.50	東壁中央	粘土	方	1/2	N84°E	0.95	10°	0.10	煙道先ピット	0	-	テラス	48
98	5	方	N89°E	中I	4.10 × 4.30	17.54	0.60	599.85	東壁中央	粘土	方	1/2	?	?	?	0.20		4?			48
99	5	方	N103°E	中I	4.05 × 4.05	16.40	0.30	600.45	東壁やや南寄	粘土	-	-	N102°E	0.95	10°	0.15	袖掘り残し	0	-		47
100	6	方	N82°E	中II	5.05 × 4.90	24.80	0.40	600.20	東壁やや北寄	粘土	-	-	N82°E	1.00	15°	0.25	袖掘り残し	0	-	貼床・礫投棄	49
101	4/5	方	N85°E	小	3.10 × 2.80	8.69	0.35	600.40	東壁やや北寄	粘土	?	?	N82°E	1.20	5°	0.15		0	-		49
102	14	長I	N91°E	中I	4.10 × 3.60	14.84	0.10	600.55	北東隅	石組	-	-	N55°E	0.45	5°	0.20		0	-	貼床	49









古代竪穴式住居址一覧表 (7)

住居址	時期	平面形状	主軸方向	規模				カマド							諸施設			図版			
				規模の 種類	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	構築	壁への 掘込み 形 大きさ	煙道			煙道 口の 高さ m	その他	柱 穴		柱間 隔 m	その他	
												主軸	長さ m	傾き							
205	2	方	N85°E	中I	3.95 × 3.80	14.97	0.25	597.95	東壁やや南寄	粘土	方 1/2	N81°E	1.50	5°	0.20		0	-	貼床	79	
206	5	方	N100°E	中I	3.80 × 3.90	14.67	0.25	597.80	西壁中央	粘土	円 僅	?	1.00	5°	0.30	袖掘残し	0	-	貼床	79	
207	5	方	N84°E	小	3.45 × 3.45	11.83	0.35	598.10	東壁中央	石組	-	-	-	-	-		0	-	貼床	79	
208	2/3	方	N87°E	中I	4.60 × 4.40	20.24	0.30	598.05	東壁やや南寄	粘土	方 1/2	-	-	-	-		0	-		79	
209	8	-	N87°E	小	× 2.80	-	0.15	598.25	南東隅	石組	方 ?	-	-	-	-		0	-		79	
210	8	長II	N76°E	小	3.15 × 2.20	6.89	0.20	598.35	-	-	-	-	-	-	-		0	-		78	
211	8	-	N122°E	小	× 2.40	-	0.25	598.25	?	?	-	-	-	-	-		0	-		78	
212	7	方	N84°W	小	3.30 × 3.30	10.89	0.45	598.15	西壁やや南寄	石組	円 僅	-	-	-	-		0	-		78	
213	14	方	N 5°E	中I	3.90 × 4.10	16.07	0.30	598.20	北壁?	?	-	-	-	-	-		0	-	礫投棄	80	
214	3	方	N83°E	小	3.40 × 3.30	11.22	0.30	597.90	東壁中央	粘土	円 僅	N85°E	1.45	5°	0.15	煙道先ピット	0	-	貼床	82	
215	7	方	N 5°W	小	3.25 × 3.10	10.04	0.30	597.80	南西隅	粘土	方 1/2?	-	-	-	-	右側にピット	0	-	貼床	82	
216	4	方	N80°E	中I	3.70 × 3.60	13.39	0.35	597.80	東壁やや南寄	粘土	-	-	-	-	-		0	-	礫投棄	82	
217	7	方	N81°E	小	3.20 × 3.05	9.79	0.30	597.85	東壁やや南寄	粘土	方 1/2	-	-	-	-		0	-		82	
218	4	方	N68°E	大I	5.80 × 5.60	32.48	0.50	597.40	東壁中央	石組	-	-	N60°E	2.20	水平	0.15	煙道先ピット	4	2.80	貼床	83
219	5	-	-	大I	× 6.00	-	0.30	597.60	-	-	-	-	-	-	-		2	3.04		83	
220	5	方	N72°E	大I	6.50 × 6.00	38.88	0.20	597.60	東壁中央	石組	円 1/4	-	-	-	0.35		4	3.02	貼床	83	
221	3	方	N82°E	大I	6.10 × 6.00	36.60	0.25	597.60	東壁中央	石組	円 1/4	N87°E	1.65	水平	0.15	土器貼付	4+	3.04	周溝	83	
222	4	方	N84°E	中II	5.20 × 5.65	29.38	0.15	597.45	東壁中央	石組	-	-	-	-	-		4+	3.16	貼床	86	
223	5	方	N90°E	中I	3.70 × 3.40	12.58	0.40	597.45	東壁やや南壁	石組	-	-	-	-	-		0	-	南東隅ピット	85	
224	3	方	N83°E	大I	5.70 × 6.15	35.06	0.30	597.45	東壁中央	粘土	-	-	N87°E	1.30	水平	0.20		4	3.00	貼床	85
225	5	方	N95°W	中I	4.25 × 4.40	18.66	0.60	597.20	西壁やや南寄	石組	-	-	?	?	0.40	袖掘残し	2?		礎石?貼床	85	
226	5	長I	N91°W	中I	3.90 × 4.45	17.36	0.30	597.55	南西隅	石組	-	-	N89°W	1.25	?	-		0	-	貼床	87
227	4	方	N 0°E	中I	3.65 × 3.40	12.41	0.30	597.40	北東寄り	粘土	-	-	-	-	-	袖掘残し	0	-	貼床	86	
228	5	長I	N84°E	中I	3.50 × 4.10	14.43	0.35	597.35	東壁やや南寄	石組	-	-	-	-	-		0	-	貼床	86	
229	5	長II	N87°E	中I	4.50 × 3.65	16.43	0.50	597.20	東壁やや北寄	石組	-	-	-	-	0.45	袖掘残し	4	2.32	貼床	86	
230	4	長I	N87°E	中II	4.85 × 4.35	21.06	0.25	597.50	東壁やや南寄	石組	-	-	-	-	-	袖掘残し	0	-	貼床	88	
231	-	-	-	中I?	3.20 ×	-	0.20	597.65	?	-	-	-	-	-	-		0	-		88	
232	6	-	-	-	-	-		597.80	東壁	石組	-	-	-	-	-		0	-		88	
233	7	方	N90°E	中I	3.55 × 3.85	13.66	0.40	597.55	東壁やや南寄	石組	円 1/2	N90°E	1.65	5°	0.30	土器貼付	0	-	礫投棄	89	
234	6	方	N89°W	中I	4.45 × 4.50	20.03	0.50	597.20	西壁やや北寄	石組	-	-	-	-	-	袖掘残し	1?	-		89	
235	7	方	N83°W	小	3.55 × 3.25	11.54	0.35	597.40	西壁中央	石組	-	-	N83°W	0.56	25°	0.10		0	-		89
236	7	方	N89°W	小	3.45 × 3.20	11.11	0.30	597.40	西壁中央	石組	-	-	N90°W	0.25	15°	0.30		0	-	貼床	90

付表2 古代掘立柱建物址一覧表 (1)

ST	時期	棟方向	規模				柱間間隔		柱穴		その他	図版
			桁×梁	桁	梁	面積	桁行	梁行	形	規模		
1	5か13	N 1° W	2×2	5.48	4.34	23.78	2.50~2.66	2.08~2.20	円	0.50~0.65		23
2	5か13	N 9° E?	?	-	-	-	1.90?	1.50?	円	0.30~0.40		23
3	13か	N 4° E	2×2	6.00	5.96	35.76	2.94~2.98	2.94~3.00	円	0.30~0.55		24
4	13か	N 1° W	2×2	3.10	3.22	9.98	3.06~3.10	1.52~1.60	両	0.45~0.55		24
5	13か	N 4° E	2×2	4.66	6.42	29.91	2.76~2.90	3.00~3.35	円	0.25~0.50	総柱	26
6	4~5	N 6° W	2×2	2.78	2.66	7.39	1.34~1.40	1.30~1.38	方	0.40~0.75	SB19→ST6	29
7	5か	N 0°E?	×2?	-	1.90	-	-	0.90~1.00	方	0.60~0.70	ST7→SB38	31
8	~7か	N 4° E	3×2	10.44	4.06	42.38	3.18~3.70	1.94~2.10	方	0.65~0.90	SB36→SB37→SB35→ST8	32
9	1か	N 9°W?	?	-	-	-	1.74	2.04	両	0.30~0.75	総柱、ST9→SB46・34	32
10	5~7	N 5°E?	?	-	-	-	1.94	2.06	両	0.70~0.85	ST10→SD5	35
11	5~6か	N 86° E	?×2	-	4.84	-	2.24~2.28	2.30~2.58	方	0.45~0.80	東・南庇、SB58→ST11→SB59	35
12	3~4	N 1° W	2×2	3.70	3.84	14.20	1.58~2.10	1.94~2.00	円	0.40~0.50	ST13→12→14	36
13	3か	N 1° W	2×2	5.48	4.04	22.13	2.32~2.98	1.90~2.38	円	0.60~0.75	総柱、ST13→12→14	36
14	4か	N 0° E	2×2	4.32	3.90	16.84	2.02~2.10	1.84~2.10	円	0.60~0.70	総柱、ST13→12→14	36
15	4か	N 2° W	2×1	4.30	1.80	7.74	2.10~2.20	1.80	円	0.25~0.70		37
16	2~3か	N 13° W	3×2	5.70	3.96	22.57	1.80~2.00	1.90~2.04	円	0.45~0.65		37
17	2~3か	N 5° W	2×1	3.06	2.74	8.38	1.42~1.64	2.66~2.74	方	0.64~0.82		39
18	3か	N 7° W	4×2	7.40	4.08	30.19	1.70~1.94	1.94~2.10	円	0.42~0.80	ST19→18	39
19	2か	N 7° W	4×2	7.44	4.06	30.20	1.78~1.90	1.80~2.24	円	0.38~0.85	ST19→18	39
20	2か	N 4° W	2×1	3.22	2.66	8.56	1.42~1.80	2.66	方	0.64~0.84		39
21	3か	N 14° W	3×1	5.28	4.32	22.80	1.68~1.74	4.28~4.32	方	0.48~0.74	SB64→ST21	38
22	3~5か	N 14° W	2×(2)	3.70	3.38	12.50	1.80~1.88	1.64~3.38	方	0.48~0.68	SB64→ST22	38
23	3~5か	N 14° W	2×2	3.54	3.52	12.46	1.70~1.84	1.70~1.82	方	0.56~0.98	総柱	40
24	4~?	N 1° W	2×2	4.46	4.52	20.15	2.02~2.38	2.10~2.26	円	0.50~0.66		40
25	2か	N 8° W	4×3	6.30	6.24	39.31	2.06~2.26	1.96~2.08	方	0.66~0.82	西庇	40
26	5か	N 13° W	3×2	7.24	4.46	32.29	2.14~2.50	2.16~2.34	方	0.46~0.64	ST26→SB72	41
27	5か	N 74° E	3×2	6.48	3.84	24.88	1.90~2.36	1.88~2.18	両	0.62~0.82		44
28	5か	N 12° W	2×2	3.00	3.02	9.06	1.44~1.58	1.38~1.58	方	0.28~0.48	総柱	47
29	5か	N 5° W	2×2	2.96	3.04	8.99	1.40~1.56	1.48~1.56	両	0.40~0.52	総柱 ST99→ST29	47
30	5か	N 1° W	2×1	3.20	3.48	11.13	3.12~3.20	1.70~1.82	円	0.25~0.30		47
31	3~4か	N 1° E	2×2	5.12	3.86	19.76	2.46~2.60	1.80~2.08	方	0.42~0.62		49
32	3か	N 2° E	2×2	2.76	3.00	8.28	1.32~1.44	1.44~1.56	方	0.48~0.52		49
33	5か	N 3° W	2×2	3.34	3.28	10.88	1.50~1.68	1.42~1.74	両	0.38~0.56		48
34	3~4か	N 3° W	2×2	2.90	2.92	8.46	1.24~1.58	1.24~1.54	円	0.68~0.98	総柱	51
35	5~?	N 9° W	2×1	4.16	2.88	11.98	1.86~2.30	2.88~2.98	円	0.32~0.46	ST36→35	49
36	3~4か	N 7° W	2×2	3.02	3.10	9.36	1.44~1.64	1.46~1.54	方	0.60~0.82	総柱 ST37→36→35	49

古代掘立柱建物址一覧表 (2)

ST	時期	棟方向	規模				柱間隔		柱穴		その他	図版
			桁×梁	桁	梁	面積	桁行	梁行	形	規模		
37	～4か	N 9° E	2×1	2.12	2.04	4.32	0.88～1.26	2.04	円	0.24～0.34	ST 37→36	49
38	3か	N 1° W	2×1	2.92	2.70	7.88	1.22～1.50	2.70	円	0.46～0.60	ST 38→SB 103	50
39	3か	N 5° W	2×2	3.68	3.54	13.02	1.58～2.08	1.32～1.84	両	0.44～0.64	SD 13・ST 40→39	51
40	3か	N 2° W	2×1	3.04	3.02	9.18	2.80～3.04	1.40～1.62	方	0.40～0.54	ST 40→39	51
41	2か	N 5° W	3×3	5.76	6.04	34.79	1.94～2.24	2.80～3.22	両	0.90～1.12	東庇、ST 41→42	52
42	3か	N 6° W	3×3	5.62	4.86	27.31	1.86～2.10	1.36～1.68	円	0.56～0.92	ST 41→42	52
43	2か	N 80° E	3×2	6.08	3.10	18.84	1.94～2.20	1.56～1.80	両	0.50～0.74		53
44	3か	N 1° E	2×2	4.10	3.92	16.07	1.78～2.04	1.84～2.12	両	0.76～0.98		52
45	2～3か	N 2° W	4×2	7.60	5.02	38.15	1.80～2.10	2.46～2.54	両	0.94～1.16		52
46	2～3か	N 82° E	4×	4.64	—	—	1.32～1.70	—	円	0.70～0.80	西庇	54
47	5～7か	N 9° E	3?×2	5.40	3.34	18.03	1.88～?	1.68～1.88	円	0.44～0.60		56
48	～6か	N 5° W	3×2	5.36	3.54	18.97	1.50～2.28	1.48～1.60	円	0.44～0.56	ST 49→48→SB 118	57
49	～5か	N 2° E	1×1	2.34	2.30	5.38	2.28～2.34	2.22～2.30	両	0.52～0.64	ST 49→48→SB 118	57
50	5～7か	N 6° E	×2	—	5.20	—	—	2.56～2.80	円	0.44～0.66		57
51	6か	N 83° E	2×1	4.22	2.42	10.21	1.92～2.10	2.16～2.42	円	0.48～0.76		64
52	6か	N 85° E	3×2	7.06	3.80	19.76	2.06～2.68	1.36～1.44	円	0.44～0.56		64
53	6か	N 3° E	2×1	5.48	2.52	13.80	2.66～2.82	2.52～2.72	両	0.54～0.76		64
54	5か	N 88° E	2×2	4.64	3.34	15.49	1.98～2.68	1.64～1.80	両	0.46～0.70	総柱	65
55	3～4か	N 4° W	2×2	4.86	4.46	21.67	2.18～2.40	2.02～2.42	両	0.44～0.70	総柱	65
56	～5か	N 77° E	5×2	6.98	4.76	33.22	1.60～2.02	2.24～2.52	両	0.40～0.88	総柱、西庇	67
57	3～4か	N 79° E	4×3	6.90	4.88	33.67	1.46～1.90	1.40～2.14	両	0.68～0.96		67
58	～5か	?	×2	—	3.78	—	—	1.76～2.02	両	0.58～0.62		69
59	2か	N 4° W	2×2	3.66	3.34	12.22	1.74～1.90	1.62～1.72	円	0.64～0.74	総柱	69
60	5～8か	N 2° W	2×2	4.46	4.16	18.55	1.98～2.34	1.72～2.18	円	0.30～0.52	総柱	74
61	5か	N 92° E	3×2	5.80	3.82	22.15	1.92～2.04	1.97～2.02	円	0.38～0.58	ST 61→SB 183	74
62	5か	N 15° W	2×2	3.62	3.04	11.00	1.88～2.10	1.50～1.56	円	0.38～0.60	総柱	75
63	8か	N 8° W	2×2	5.30	5.32	28.19	—	2.34～2.52	円	0.50～0.74	総柱	78
64	2か	N 94° E	4×2	6.68	3.36	22.44	1.20～2.08	1.30～2.06	両	0.44～0.84	ST 64→SB 202	79
65	3～4か	N 24° W	2×1	3.46	3.52	12.17	1.66～1.80	3.36～3.52	?	0.50～0.72		81
66	4～7か	N 13° W?	?	—	—	—	1.95～2.05	1.90～2.10	?	0.56～0.76		82
67	5か	N 9° W	2×2	4.70	4.88	22.93	2.24～2.36	2.24～2.40	円	0.64～0.84	ST 68→67	85
68	4か	N 6° W	2×2	3.58	3.24	11.59	1.68～1.90	1.52～1.70	円	0.64～0.78	ST 68→67	85
69	6～7か	N 13° E	2×1	1.94	2.36	4.57	0.94～1.00	2.32～2.40	円	0.28～0.44		87
70	6～7か	N 9° W	2×2	2.12	2.40	5.08	1.00～1.12	1.16～1.66	円	0.26～0.32		87
71	5か	N 1° W	2×2	4.18	4.34	18.14	1.92～2.22	2.16～2.20	円	0.50～0.68		60

付表3 中世竪穴住居址一覧表

住居址	時期	平面形	主軸方向	規模					火処		その他	図版
				類型	主軸×直交軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床標高 m	位置	形状		
251	1	長Ⅰ	N 87° E	中Ⅰ	3.85 × 3.35	12.90	0.35	600.85	?	—	中央部炭層	93
252	1	長Ⅱ	N 89° E	中Ⅰ	5.10 × 3.20	16.32	0.40	600.35	?	—	礫投棄、第2層に焼土	96
253	1	長Ⅱ	N 88° E	小	3.70 × 2.50	9.25	0.60	600.50	—	—	礫投棄、上層に焼土	96
254	1	長Ⅱ	N 90° E	小	3.80 × 2.50	9.50	0.80	600.30	—	—	礫投棄、各層から焼土	96
255	1	長Ⅱ	N 88° E (N 2° W)	小	4.05 × 1.85	7.49	0.45	600.45	—	—	本址の周囲に柱穴?	98・99
256	1	長Ⅱ	N 90° E (N 0° W)	小	3.20 × 2.45	7.84	0.50	600.35	—	—	礫投棄	98・99
257	1?	長Ⅱ	N 88° E	中Ⅰ	7.55 × 2.30	17.37	0.30	599.85	—	—		102
258	?	長Ⅱ	N 96° E (N 6° E)	小	4.55 × 2.40	10.92	0.15	599.85	—	—		105
259	2	長Ⅱ	N 91° E	小	3.55 × 2.35	8.34	0.30	599.60	—	—		107
260	2	長Ⅱ?	—	—	3.35 ×	—	0.25	599.65	—	—		107
261	1	長Ⅱ	N 91° E	中Ⅱ	4.25 × 2.90	12.33	0.15	599.65	—	—	床面上に炭化物層広がる	105
262	1	長Ⅱ	N 91° E (N 1° E)	中Ⅱ	7.50 × 2.70	20.25	0.30	599.40	—	—	炭化物層広がる 床面にピット4基、西壁にもあり	107
263	?	長Ⅱ	N 92° E (N 2° E)	小	5.00? × 2.00	10.00	0.10	599.60	—	—		107
264	1	長Ⅰ	N 90° E	中Ⅱ	5.05 × 4.40	22.22	0.50	599.65	—	—	礫投棄	109
265	1	長Ⅱ	N 89° E (N 1° E)	小	4.20 × 2.55	10.71	0.40	599.75	—	—	礫投棄	109
266	1	?	—	—	3.30 ×	—	0.30	600.00	—	—		109
267	1	長Ⅱ	N 90° E	中Ⅰ	5.90 × 2.85	16.82	0.20	599.75	中央やや西寄り	径50cm	床面焼土集中域に炭化物層広がる	108
268	1	長Ⅱ	N 92° E	中Ⅰ	5.20 × 3.45	17.94	0.30	599.80	中央やや西寄り	—	床面焼土集中域に炭化物層広がる	110
269	?	?	N 92° E	小	2.80 × 2.70	6.56	0.30	599.70	—	—	南壁張り出す	110
270	1	長Ⅱ	N 93° E	中Ⅱ	6.15 × 3.80	23.37	0.40	599.80	—	—	内外に柱穴?	109
271	?	?	?	?	?	?	0.15	600.30	—	—		111
272	1	長Ⅱ	N 95° E	中Ⅰ	4.80 × 2.95	14.16	0.40	599.60	—	—	礫投棄	112
273	?	長Ⅰ	N 92° E	中Ⅰ	4.30 × 3.75	16.13	0.20	599.50	—	—		112
274	?	長Ⅱ	N 93° E	中Ⅰ	4.25 × 3.40	14.45	0.40	599.20	—	—	北壁際床面上に炭化物集中	112
275	?	方	N 92° E	中Ⅰ	4.20 × 4.00	16.80	0.30	599.35	—	—	礫投棄	114
276	2	長Ⅱ	N 91° E	小	3.40 × 2.20	7.48	0.30	599.35	—	—	北東隅に高い部分	116
277	?	方	N 88° E	小	3.10 × 3.00	9.30	0.20	599.15	—	—		116

付表4 中世掘立建物址一覧表

ST	時期	棟方向	規模				柱間間隔		柱穴		その他	図版
			桁×梁	桁	梁	面積	桁行	梁行	形	規模		
81	?	N 102°E	6×4	14.80	9.52	140.89	2.18～2.52	2.14～2.48	円	0.20～0.42		93
82	1か	N 88°E	2?×1	4.22	1.88	7.93	?	1.84～1.88	円	0.16～0.25		95
83	1か	N 4°W	3×3	5.24	5.34	27.98	1.98～2.00	1.30～2.08	円	0.15～0.28		104
84	1～2か	N 1°W	5×3	8.14	5.52	44.93	1.32～1.80	—	円	0.20～0.30		104
85	1か	N 5°W	×2	—	5.12	—	—	2.48～2.62	円	0.18～0.24		104
86	1～2か	N 1°W	2	—	3.88	—	—	1.88～1.98	円	0.20～0.36		104
87	1～2か	N 1°W	5×4	9.42	8.20	75.84	1.80～1.94	1.56～1.88	円	0.24～0.42	土坑付属	104
88	1～?	N 0°W	5×4	8.90	6.44	57.31	1.62～1.82	1.48～1.80	円	0.22～0.44	土坑付属	106
89	1～2?	N 1°W	2×1	5.02	2.56	12.85	2.36～2.66	2.22～2.56	円	0.20～0.28		106
90	1か	N 6°W	2×2	5.00	5.20	26.00	2.28～2.38	2.28～2.90	円	0.18～0.25	土坑付属	106
91	1か	N 1°W	3×2	6.42	5.16	33.12	1.80～2.86	2.20～2.76	円	0.18～0.34	土坑付属	107
92	1か	N 1°W	3×3	5.28	5.06	26.71	1.56～2.00	1.62～1.80	円	0.16～0.35	土坑付属	107
93	1か	N 0°E	3?×2	7.30	4.88	35.62	—	—	円	0.20～0.26	土坑付属	107
94	1か	N 88°E	4×1	7.86	2.20	17.29	—	2.14～2.20	円	0.24～0.40		108
95	1か	N 1°W	3?×1	5.54	4.06	22.49	1.66～2.06	—	円	—		109
96	1か	N 6°W	2×2	4.30	3.68	15.82	2.04～2.20	1.76～1.95	円	0.25～0.30		110
97	1か	N 2°E	4×1	7.86	1.82	14.30	1.60～2.12	1.80～1.82	円	0.22～0.46		110
98	1か	N 5°W	4×4	7.68	7.36	56.52	1.66～2.08	1.76～2.04	円	0.16～0.30	土坑付属	111
99	1か	N 88°E	3×4	9.60	8.02	76.99	2.52～2.72	1.80～2.18	円	0.18～0.42		111
100	1か	N 7°W	2?	—	4.06	—	—	1.94～2.12	円	0.22～0.32	土坑付属	111
101	1か	N 1°W	3?×2	4.60	4.92	20.74	1.28～1.48	1.61～2.10	円	0.20～0.32	土坑付属	111
102	1～2か	N 91°E	2×1	3.86	2.82	10.88	1.90～1.96	2.76～2.82	円	0.22～0.30		113
103	1～2か	N 2°W	6?×4	10.52	6.90	72.58?	—	—	円	0.20～0.36	土坑付属	113
104	1か	N 8°W	5×5	10.06	1.42	94.76	1.92～2.04	1.80～2.10	円	0.24～0.42	土坑付属	119
105	1か	N 3°W?	4?×3	7.32	5.68	41.57	—	—	円	0.28～0.44	土坑付属	119
106	1か	N 87°E	3?×2	5.24	3.22	16.87	—	—	円	0.22～0.30	土坑付属	119
107	1か	N 4°W	3×3	6.02	5.04	30.34	1.70～2.18	1.56～1.84	両	0.20～0.32	土坑付属	121
108	1か	N 1°E	4×2	6.86	3.88	26.61	1.82～1.90	1.78～2.48	円	0.20～0.38		121
109	1か	N 93°E	4×2	7.02	3.80	26.67	—	—	円	0.24～0.30		121
110	1か	N 0°E	4?×2	5.80	4.34	25.17	—	2.02～2.30	円	0.18～0.32		121
111	1か	N 3°E	3×2	5.30	4.64	24.59	1.54～1.96	1.94～2.82	円	0.20～0.35	土坑付属	122
112	1か	N 91°E	3×3	6.42	5.34	34.28	1.56～2.86	1.70～1.98	円	0.15～0.36	土坑付属	122
113	1か	N 92°E	2×1	4.02	1.86	7.47	1.90～2.24	1.76～1.86	円	0.16～0.28		122
114	1か	N 2°E?	2?×2	3.76	4.86	18.27	1.84～1.92	1.86～3.34	方	0.20～0.34		123
115	1か	N 2°W	3×2	5.16	5.00	25.80	1.46～1.84	2.12～2.88	両	0.25～0.36	土坑付属	123
116	1か	N 1°E	2?×2	3.90	4.26	16.61	1.84～2.08	2.00～2.22	円	0.22～0.30		123
117	1か	N 2°W	3×3	7.68	5.16	39.62	2.10～2.92	1.66～1.86	円	0.24～0.44	土坑付属	123



付表5 住居址時期別一覧表

	古代1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	中世1	2
住居址	14	66	22	11	2	8	25	49	196			4	3	28	117	251	259
	20	95	61	19	5	9	32	51				23	15	38		252	260
	29	110	90	37	10	31	42	52				43	33	40		253	276
	36	113	106	46	13	34	47	83						41		254	
	145	119	108	53	16	45	50	85						44		255	
	204	140	111	62	18	54	55	150						72		256	
		158	129	63	26	57	70	154						73		257	
		167	130	68	35	76	75	163						74		261	
		169	142	87	39	82	78	171						77		262	
		170	153	91	56	100	107	172						81		264	
		181	214	94	58	109	120	173						88		265	
		182	221	103	60	118	125	174						89		266	
		195	224	104	67	143	127	175						92		267	
		197		112	69	147	144	176						93		268	
		205		126	79	164	166	177						102		270	
				128	84	180	191	178						190		272	
				139	86	202	212	179						213			
				141	96	232	215	183									
				148	98	234	217	184									
				149	99		233	186									
				152	105		235	188									
				156	114		236	198									
				159	115			199									
				160	122			209									
				161	131			210									
				187	132			211									
				189	133												
				192	134												
				216	136												
				218	137												
			222	151													
			227	155													
			230	157													
				185													
				194													
				200													
				203													
				206													
				207													
				219													
				220													
				223													
				225													
				226													
				228													
				229													
数	6	15	13	33	46	19	22	26	1	—	—	2	3	17	1	16	3
時期不確定の住居址 (2時期の幅で捉えられるもの)		64 65 208	121	124 146	21 30 123 162	24 27 48 59 71 97		168				6 7					258 263 269 271 273 274 275 277
数	—	3	1	2	4	6	—	1	—	—	—	2	—	—	—	8	
そのほか弥生時代1軒、古代不明11軒 合計：弥生時代1軒、古代235軒、中世27軒																	

付表6 古代土器器種構成一覽表 (1)

・数量は、個体識別によって数えた個体数で表わした。( ) は他の期からの混入の可能性が高いと思われる器種である。

遺構番号	食器												煮炊器具						貯蔵具			個体総数
	土師器				黒器 A色				黒器 B色				須恵器			陶灰器釉						
	杯 D・E・F	杯 C	杯 A	鉢 A	鉢 A・耳皿	皿 A B	皿 A	鉢 A	他	杯 D	杯 A・C	杯 B	杯 A・B・D	皿 A・B	鉢 A・B・C	高杯	他	杯 A	陶灰器釉	陶灰器釉	陶灰器釉	
SB 2		(1)								4	2					1	1					
3		6	1		2					(1)							(1)		2			
4		9	2	3	(1)	(1)	(2)			(1)	(1)	(2)						1	2	1		
5					4	3	2															
6																						
7		5			(1)	1			(1)	(1)	(1)								3	1		
8 (1)					1	1	1		2	2												
9	1				5	1	1		12	1	4	1	1									
10					1				1													
11	1				7		11															
12					3	1																
13	1				2																	
14 5	1			2	(1)	6			(1)	(1)	(1)							6	3	1		
15	13	5	1	1	8	3	3	3														
16	1																					
17																						
18	1				5	3	3															
19 (1)					7	2	3															
20					1	2																
21																						
22	2				6	3				3												
23	15			1				1		(6)	(3)	(1)										
24					1	1				2	1											
25					15	2	3			11	4	2										
26																						
27	(1)				13	1	2		2	1												
28	3	1	1		4				6	2												
29 3	(1)				(5)	(4)	(2)	(1)														
30					5	1	2															
31					11																	
32	(1)				13	2	1		20	6	5											
33	4	2			(9)	2			15													
34					4				(9)													
35	1								8	1												
36 1	1				4	1	6		1	1	1	2										
37					5	3	2															
38	4				(1)	2	1															
39	(1)								1	3	2	3	1	1								
40					1																	
41					(1)				2													
									2													















付表7 墨書・刻書土器・転用硯出土一覧表 (1)

図版 番号	出土 番号	時期	遺物 番号	種類	器種	部位	内・外	書き方	文字	層位	遺存状態		備考
											口縁部	底部	
1	SB 5	5	2	須恵器	杯A	体	外	逆位	□	床下	98	100	
2	9	6	3	〃	〃	底	〃		齒	カマド	60	80	「齒」の略
3	25	5		黒色土器A	杯又は碗	体		不明	□	覆	-	-	
4	42	7	1	〃	杯A I	〃	外	正位	𠄎	〃	95	100	「仕」か？
5	50	7	1	〃	杯A II	〃	〃	正位	□	〃	42	100	
6	〃	〃		〃	〃	〃	〃	不明	□	〃	-	-	
7	〃	〃		〃	〃	〃	〃	右横	□	〃	-	-	
8	52	8	11	〃	杯 A	〃	〃	不明	□	カマド	20	50	
9	〃	〃	8	〃	杯A I	〃	〃	〃	□	ピット	14	-	
10	〃	〃		〃	杯 A	〃	〃	正位	□	覆	-	-	
11	〃	〃		〃	〃	〃	〃	不明	□	ピット	-	-	
12	67	5	5	灰釉陶器	碗	底	〃		乙	覆	-	100	混入。遺物は8期
13	72	14	23	〃	〃	〃	〃		□	床	30	90	『罌』か？
14	83	8		黒色土器A	杯A II	体	〃	右横	□	覆	27	-	
15	98	5	6	須恵器	杯 A	底	〃		○	〃	50	90	
16	100	6	1	黒色土器A	杯A II	〃	〃		中	床	50	100	
17	〃	〃	7	須恵器	杯 A	〃	〃		□	ピット	35	55	
18	〃	〃	12	〃	〃	体	〃	左横	□	カマド	23	15	
19	〃	〃		〃	〃	底	〃		□	覆	-	25	
20	105	5	14	〃	〃	〃	〃		□	〃	22	22	『田』か？
21	〃	〃		〃	〃	〃	〃		□	〃	-	18	
22	109	6	4	〃	〃	〃	〃		□	-	30	65	
23	112	5	3	〃	〃	体	〃	正位	□人	覆	99	100	二文字
24	〃	〃	6	〃	〃	底	〃		□	〃	80	100	「人」か？
25	127	7	9	黒色土器A	杯A I		〃		□	床	18	-	
26	132	5	1	須恵器	杯 A		〃		◎	覆	-	60	
27	133	5	2	〃	〃		〃		◎	カマド	15	40	
28	147		4	〃	〃		〃		中	覆	55	100	
29	154	8		黒色土器A	杯又は碗		〃		□	〃	-	-	細片
30	168	8	1	土師器	杯A II		〃		□	〃	25	-	「-」か「1」か？
31	〃	〃		黒色土器A	杯又は碗	体	〃	逆位	□	〃	-	95	
32	173	8		〃	碗 B	底	〃		□	カマド	-	30	
33	〃	〃	13	〃	杯A II	体	〃	正位	□	覆	8	100	主か？18と同じ？

墨書・刻書土器・転用硯出土一覧表 (2)

図版 番号	出土 番号	時期	遺物 番号	種 類	器 種	部位	内・外	書き方	文 字	層 位	遺 存 状 態		備 考
											□縁部	底部	
34	SB174	8	1	土 師 器	杯AⅡ	体	外	右横	□	床	58	95	「乙」か?
35	〃	〃	3	〃	〃	〃	〃	正位	火	覆	8	100	「田人か」?
36	〃	〃		〃	〃	〃	〃	不明	□	〃	-	-	
37	〃	〃		〃	〃	〃	〃	逆位	乙	床	53	20	
38	〃	〃	11	黒色器A	杯AⅡ	〃	〃	左横	勢 福	カマド	84	100	
39	〃	〃	12	〃	〃	〃	〃	不明	□	覆	28	95	
40	〃	〃	17	灰釉陶器	椀	底	内/外		田/田	カマド	7	95	裏に朱付着
41	175	〃		黒色土器A	椀AⅡ	体	外	不明	□	覆	-	40	
42	177	〃	4	〃	椀 B	〃	〃	左横	嬰	〃	12	-	
43	179	〃	1	土 師 器	杯AⅡ	〃	〃	正位	□	〃	10	-	
44	〃	〃		黒色土器A	椀 B	〃	〃	不明	□	〃	3	-	
45	183	〃	1	須 恵 器	杯 A	底	〃		真	〃	40	90	
46	〃	〃	13	灰釉陶器	椀	〃	〃		嬰	床	15	80	裏に朱付着
47	〃	〃	12	〃	〃	〃	〃		嬰	覆	25	35	
48	〃	〃	11	〃	〃	〃	〃		嬰	〃	-	40	
49	〃	〃		〃	〃	〃	〃		嬰	〃	-	25	
50	184	〃	9	黒色土器A	椀 B	体	〃	不明	□	〃	10	60	
51	〃	〃		〃	杯又は椀	〃	〃	〃	□	〃	5	-	
52	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	〃	5	-	「嬰」か?
53	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	〃	-	-	
54	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	□	〃	-	-	
55	〃	〃	13	灰釉陶器	椀	底	〃		□	床	-	100	「力」又は「方」
56	〃	〃	15	〃		〃	〃		□	〃	5	25	「嬰」か?
57	186	〃	185-1	黒色土器A	杯AⅠ	体		正位	□/□	〃	70	100	「真」か?
58	191	7	5	〃	杯AⅡ	〃	外	〃	□	覆	7	-	
59	〃	〃	12	須 恵 器	杯 A	〃	〃	〃	□	床	70	100	
60	〃	〃		〃	〃	〃	〃	逆位	龍	覆	-	-	
61	〃	〃	15	〃	〃	〃	〃	〃	龍	〃	-	30	
62	198	8	10	土 師 器	杯AⅡ	〃	〃	正位	真	〃	58	100	
63	〃	〃	4	〃	〃	〃	〃	不明	□	〃	30	52	
64	〃	〃		〃	〃	〃	〃	逆位	□	〃	11	-	
65	〃	〃		〃	〃	〃	〃	不明	□	〃	15	-	「目」?記号か?
66	〃	〃	15	黒色土器A	杯AⅡ	〃	〃	正位	真	〃	32	100	

墨書・刻書土器・転用硯出土一覧表 (3)

図版 番号	出土 遺構	時期	遺物 番号	種 類	器 種	部位	内・外	書き方	文 字	層 位	遺 存 状 態		備 考
											口縁部	底 部	
67	SB 198	8		黒色土器A	杯AⅡ	体	外	正位	万	床	18	—	「寅」の略か？
68	”	”		”	杯又は碗	”	”	不明	□	覆	8	—	
69	”	”	25	”	”	”	”	逆位	□	”	8	—	「尺」か「人」か？
70	”	”		”	”	”	”	右横	□	”	3	—	「嬰」か？
71	”	”		”	”	”	”	不明	□	”	—	—	
72	”	”		”	”	”	”	”	□	”	3	—	
73	”	”		”	”	”	”	右横	□	”	—	—	
74	”	”		”	”	”	”	不明	□	”	2	—	
75	”	”	30	軟質須恵器	杯 A	”	”	”	□	”	35	100	
76	”	”	33	灰釉陶器	碗	底	”	”	真	”	—	63	
77	”	”	35	”	皿 B	”	”	”	真	”	25	60	
78	202	6	1	黒色土器A	杯AⅡ	”	”	”	点	床	18	100	
79	”	”	2	”	”	”	”	”	劣又は字	カマド	8	30	
80	”	”		”	”	”	”	”	点	覆	—	80	
81	”	”	18	須 恵 器	杯 A	”	”	”	□	”	—	100	
82	207	5	7	”	”	体	”	正位	倉	”	40	60	
83	209	8	2	土 師 器	杯	”	”	左横	仁□	—	14	25	「里」か？
84	”	”	8	黒色土器A	碗	”	”	正位	□	覆	65	80	
85	212	7	1	土 師 器	杯AⅡ	”	”	不明	□	”	13	17	
86	”	”	4	黒色土器A	杯AⅡ	”	”	逆位	宙	—	8	50	
87	”	”	9	須 恵 器	杯 A	”	”	正位	太	覆	65	—	
88	226	5	3	”	”	”	”	不明	□	—	10	—	
89	227	4	3	”	”	底	”	”	得成	覆	—	—	
90	233	7	9	”	”	体	”	左横	□	床	43	100	「法大」か？
91	234	6	11	”	”	”	”	右横	□	”	30	40	
92	”	”	12	”	”	底	”	”	□足	覆	7	75	「以」か？
93	”	”	7	黒色土器A	杯AⅠ	”	”	”	太	”	—	100	
94	ST 67	5	1	須 恵 器	杯 A	”	”	”	□	床	—	10	
95	SD 60	中世		灰釉陶器	碗	”	”	”	□	覆	—	25	混入 遺物は8~15期
96	SK 42	13前後	4	黒色土器A	”	体	”	不明	□	”	55	100	
97	43	8	4	”	杯AⅡ	”	”	正位	旭	床	60	100	重ね書き
98	392	”	1	土 師 器	杯	”	”	左横	嬰	”	35	100	
99	”	”	3	軟質須恵器	杯 A	”	”	不明	□	”	18	95	「嬰」か？ 98と同じ？

墨書・刻書土器・転用硯出土一覧表 (4)

図版 番号	出土 遺構	時期	遺物 番号	種 類	器 種	部 位	内・外	書き方	文 字	層位	遺 存 状 態		備 考
											口縁部	底 部	
100	SK443	7?	1	須恵器	杯 A	体	外	逆位	火	覆	15	1	「田人」か?
101	590	7~8		黒色土器A	椀	〃	〃	正位	□	?	-	100	
102	767	7~8		〃	皿	〃	〃	〃	足	?	63	95	
103	1339	中世		須恵器	杯 A	底	〃		□	-	-	10	SB124 (5~6期) からの混入
104	遺構外	-		土師器	杯 C	〃	〃		小田	-	-	100	遺物は4期あるいは5期
105	〃	-		黒色土器A	杯又は椀	体	〃	不明	□	-	-	-	遺物は5期から8期か
106	〃	-		須恵器	杯 A	底	〃		幸	-	-	100	遺物は5期あるいは6期か

〔刻書土器〕

図版 番号	出土 遺構	時期	遺物 番号	種 類	器 種	部 位	内・外	書き方	文 字	層位	遺 存 状 態		備 考
											口縁部	底 部	
107	SB 52	8		黒色土器A	杯又は椀	体	外	不明		床	-	-	
108	〃	〃	14	〃	椀	底	内		皆	-	-	18	
109	120	7	7	〃	椀	〃	外			床	-	70	「人」か

〔転用硯〕

図版 番号	出土 遺構	時期	遺物 番号	種 類	器 種	部 位	内・外	調整痕	文 字	層位	遺 存 状 態		備 考
											口縁部	底 部	
110	SB 9	6	17	須恵器	壺	底	外	あり	なし		-	100	
111	77	14	10	灰釉陶器	皿B	〃	内・外	なし	〃	覆	90	100	
112	83	8	9	〃	椀	〃	内	あり	〃	覆	-	100	
113	92	14	9	〃	〃	〃	〃	〃	〃		-	40	
114	112	?		〃	〃	〃	〃	〃	〃		-	-	
115	125	7	12	須恵器	蓋	-	〃	なし	〃		19	-	
116	142	3	2	〃	〃	-	〃	〃	〃	床	98	100	
117	168	8	7	灰釉陶器	椀	底	〃	あり	〃		-	100	
118	〃	〃	8	〃	〃	〃	〃	〃	〃		-	100	
119	〃	〃	9	〃	皿B	〃	〃	なし	〃		25	40	内面に朱付着
120	171	〃	7	〃	椀	〃	〃	あり	〃	覆	-	87	
121	〃	〃	5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	-	100	転用硯か?
122	172	〃	6	〃	皿B	〃	外	なし	〃	床	70	100	
123	173	〃	20	〃	椀	〃	内	あり	〃	カマド	-	8	
124	〃	〃		〃	皿B	〃	外	〃	〃	覆	-	53	
125	183	〃	14	〃	椀	〃	内・外	〃	〃		-	60	
126	184	〃	13	〃	〃	〃	内	〃	底外面に 墨書(55)		-	100	
127	NR 4	14		〃	〃	〃	〃	なし	なし		-	18	内面に朱付着

付表8 中世土器・陶磁器 出土一覧表 (1)

遺構	中世出土遺物 (所属時期 ( ) 内は破片数。掲載図版番号)	備考
SB 84	常滑系甕Ⅲ類(1) 図版 222-141	古代の遺構
90	捏鉢Ⅳ類(1)	〃
96	山茶碗(1)、常滑系甕(1)	〃
109	捏鉢(1)、内耳鍋(1)	〃
112	土師器ⅢⅠB 2類(3)、青磁碗13C(1)	〃
117	土師器ⅢⅠB 1類(1) 図版 105-105	〃
118	山茶碗丸石3号窯式(1) 図版 222-126	SB270からの混入か
138	内耳鍋(1)	古代の遺構
142	捏鉢Ⅴ類(1)、常滑系甕(1)	〃
169	山茶碗白土原～明和1号窯式(2)図版222-127	〃
251	捏鉢Ⅵ類(3) 図版 220-70	
252	古瀬戸折縁深皿13C(3) 図版 219-13・四耳壺13C(20)-14、山茶碗窯洞1号窯式(5) おろし碗明和1号窯式(3)、常滑系甕Ⅲ類(145) 219-15・16、捏鉢(16)Ⅳ類219-11 不明-10・12・ほかⅥ類・土師器Ⅲ(32)ⅠA 1類219-8・ⅠA 2類-4～7・ⅠB 1類- 2・3・ⅠB 2類-1、 青磁碗A類・FまたはH類(3)、中国産緑釉陶器盤13C?(1)219-9	
253	青白磁梅瓶(1) 図版 222-151、青磁碗H類(1)	梅瓶：SB 265 と同一
254	捏鉢Ⅳ類・Ⅵ類(4)、山茶碗白土原～明和1号窯式(1)、常滑系甕(3) 土師器ⅢⅠA 3類(9) 図版 219-17・18、青磁碗F類(1) 図版 219-19	
255	捏鉢Ⅵ類(1) 図版 219-21	SB256と接合
256	捏鉢Ⅵ類(4) 図版 219-21、土師器ⅢⅠA 2類(1) 図版 219-20 青磁碗Ⅰ類(2)	捏：SB 255 と接合
259	内耳鍋(24) 図版 219-22	
260	古瀬戸天目茶碗15C中(1) 図版 219-23・捏鉢(1)	
261	常滑系甕(1)、土師器ⅢⅠ類(4)	常：SD 59 と接合
262	捏鉢Ⅲ類(1) 図版 219-30、常滑系甕(1)、青磁碗C類(1) 土師器Ⅲ(23)ⅠA 1類図版 219-28・29・ⅠB 2類-24～27	
264	土師器Ⅲ(170)ⅠA 1類図版 220-47・48・ⅠA 2類-42～46・ⅠB 2類-33～41 ・分類外-49、捏鉢Ⅲ類(4)-50、常滑系甕(1) 青磁碗F類(2)、白磁合子(1)-31、青白磁蓋(1)-32	青白：SB256と、白： SK1279と、捏：SD60・ SB265 と接合
265	古瀬戸瓶(1)13C代、土師器ⅢⅠA 2類(24) 図版 220-51、 常滑系甕(2)、捏鉢(3)Ⅲ類図版 220-50・Ⅵ類図版 220-53・不明-52 青白磁梅瓶(3) 図版 222-149・150・蓋(1) 図版 220-32、 青磁碗H類(3) 図版 222-157	捏：SB264ほかと接合 梅瓶：ST 100 と同一 梅瓶：SB 253 と同一 蓋：SB 264 と同一
266	土師器Ⅲ(26)ⅠA 1類図版 220-60～62・ⅠA 2類-58・59 ⅠB 1類56・57・ⅠB 2類-54・55、 青磁碗F類(1)、白磁碗Ⅸ類(1)、常滑系甕(1)	
267	捏鉢Ⅰ類(2) 図版 220-66・67 土師器Ⅲ(28)ⅠB 1類-64・65・ⅠB 2類-63	
270	古瀬戸四耳壺(1)、捏鉢(1) 常滑系甕(5)、土師器ⅢⅠB 1類(3)、青磁碗F類?(2)	
272	古瀬戸平碗15C(1) 図版 220-68、内耳鍋(10) 図版 220-69	
273	常滑系甕(2)	SK1336と接合
ST 82	青磁碗F類(1) 図版 220-71	
87	古瀬戸天目茶碗15C中(1) 図版 220-72、内耳鍋(2)	
88	捏鉢(2) 図版 220-74、山茶碗窯洞1号窯式(2) 図版 220-73、 常滑系甕(5)、内耳鍋(1)	
92	捏鉢(1)、青磁碗12C中～13初(1)	
100	青白磁梅瓶(1) 図版 222-147	SB 265 と同一
101	山茶碗白土原～明和1号窯式(1)	
104	山茶碗白土原～明和1号窯式(1) 図版 220-76、 常滑系甕(1)、土師器ⅢⅠ類(1)	山：ST112と同じ

中世土器・陶磁器 出土一覧表 (2)

遺構	中世出土遺物 (所属時期 ( ) 内は破片数、掲載図版番号)	備考
ST 112	山茶碗白土原～明和1号窯式(3) 図版220 - 76、 土師器皿I A 2類(1) 図版220 - 77	山: ST 104 と同一
117	青磁碗F類(1) 図版220 - 75	
SD 52	捏鉢(1)、山茶碗VII-2～VIII-1(2)、常滑系甕II～III類(1) 青磁碗H類(1)	
54	土師質播鉢(1)、内耳鍋(1)	
59	常滑系甕I類(4) 図版221 - 81・不明(1)、土師器皿I B 1類(1) - 78 青磁碗C類(1) - 79・皿I - 2類(1) - 80	常滑系甕不明: S B 261 と接合
60	土師器皿I A 2類(16) 図版221 - 83、内耳鍋(3)、常滑系甕(5)、 捏鉢III類(10) 図版220 - 50・図版221 - 84・85、山茶窯VIII-1(2)、 山茶碗皿丸石3号窯式前後?(2)、須恵質播鉢(1) 図版221 - 86、 青磁碗H類?(2) 図版221 - 82、青白磁梅瓶(1) 図版222 - 152	捏: S B 264・265・ と接合
62	山茶碗浅間窯下1号窯式(4)	
64	土師器皿I A 1類(1) 図版221 - 87、古瀬戸瓶?(1)、 捏鉢III類?(4) 図版221 - 90・91、常滑系甕(2)、 山茶碗(3) VIII-1 図版221 - 89・丸石3号窯式 図版221 - 88	
66	古瀬戸天目茶碗(2) 図版221 - 93、平碗(1) - 94・蓋(1) - 95、 大窯期天目茶碗(1) - 92、山茶碗窯洞1号窯式(1) - 96、 三筋壺(1)、青磁碗C類?(1)	
SK 100	捏鉢(1)	古代の遺構
339	青磁碗龍泉窯系(1)	〃
795	捏鉢(1)	
798	土師器皿I B 1類(1) 図版221 - 97、青磁碗HまたはF類(1)	
800	青磁碗H類?(1) 図版222 - 155	
876	捏鉢(1)、常滑系甕(1)	
878	捏鉢VI類(1)	
905	白磁皿IX類(1)	
922	捏鉢(1)	
931	常滑系甕(1)	
970	青磁碗FまたはH類(1)	
975	捏鉢VI類(1) 図版222 - 136	
999	青磁碗FまたはH類(1)	
1002	土師器皿I類(1)、青磁碗F類(1)	
1004	捏鉢IV類(1) 図版222 - 137	
1069	内耳鍋(1)	
1071	内耳鍋(2)	
1072	内耳鍋(1)	
1078	捏鉢(1) 図版222 - 138、常滑系甕(1)	常: S K 1387 と同一か
1081	常滑系甕(1)	
1114	常滑系甕(1)	
1120	捏鉢(1)	
1151	内耳鍋II B類?(3) 図版221 - 116	
1153	古瀬戸平碗15C前(3) 図版222 - 119	
1180	青磁碗A類・B類(2)	
1217	常滑系甕(1)、土師器皿I A 2類(1) 図版221 - 98、 青磁碗F類(1) 図版222 - 156	
1274	土師器皿I類(1)	
1276	常滑系甕(1)	
1278	常滑系甕(1)	
1279	常滑系四耳壺(1)・甕(1)、 青白磁合子(1) 図版222 - 145、白磁合子(1) 図版222 - 31	白磁: S B 264 と接合
1313	捏鉢(1)	混入か?

中世土器・陶磁器 出土一覧表 (3)

遺構	中世出土遺物 (所属時期 ( ) 内は破片数、掲載図版番号)	備考
1330	捏鉢(5)、土師器皿ⅠA3類(2) 図版221 - 99	
1334	土師器皿(8) ⅠA2類 図版221 - 101・ⅠB1類 - 100	
1336	常滑系甕(1)	S B 273 と接合
1349	土師器皿ⅠB2類(1) 図版221 - 102	
1387	常滑系甕(1)	SK1078 と同一か?
1393	土師器皿ⅠB2類(2) 図版221 - 103	
1447	古瀬戸天目茶碗15C? (1)	
1454	青磁碗Ⅰ類(1)	
1486	青磁碗D類(1)	
1495	青白磁梅瓶(1) 図版222 - 146	
1504	古瀬戸香炉14C初(29) 図版222 - 125	
1505	古瀬戸平碗15C前(1) 図版222 - 120・卸皿15C前(1) 折縁深皿15C(1)、常滑系甕(1) 図版222 - 142	
1510	内耳鍋Ⅱ類?(5)	
1535	常滑系甕(4)	
1537	古瀬戸直縁大皿15C(1)	
1541	古瀬戸天目茶碗15C中~(4) 図版222 - 118	
1669	捏鉢(1)	
1671	土師器皿ⅡA類(3) 図版221 - 104	
1690	青磁碗F類?(1)、古瀬戸四耳壺13C?(1)	
SL2	常滑系甕(3)	近世の遺構
3	古瀬戸鉢?(1)、青磁碗13C中?(1)	〃
S L 検出	土師器皿(1)	〃

出土地区	中世出土遺物 (所属時期 ( ) 内は破片数、掲載図版番号)
北部北区	土師器皿ⅡA類(1) 図版221 - 135、内耳鍋(7)
北部南区	内耳鍋(5)、古瀬戸四耳壺?(1)
中部北区 の境付近	山茶碗浅間窯下1号窯式(1) 図版222 - 130・(2) VII - 3? 図版222 - 128・VIII - 129、 青磁碗F類?(1)
中部北区	土師器皿ⅠA1類(32) 図版221 - 111 ~ 114・ⅠB1類(1) 図版221 - 107・Ⅰ類(8) ⅠA2類(14) 図版221 - 109・110 内耳鍋Ⅰ類?(3)・ⅡA類?(3)・不明(8)、土師質片口鉢(1) 図版221 - 117 古瀬戸平碗14C(1) 図版222 - 121・卸皿15C(1) 図版222 - 122 縁釉皿15C(3) 図版222 - 123・折縁深皿15C(1) 図版222 - 124・不明(2) 山茶碗VII - 3(1) 図版222 - 135、丸石3号窯式(3) 図版222 - 131・132・134 捏鉢Ⅱ類(1) 図版222 - 140・Ⅲ類(4) 図版222 - 139・Ⅳ類(2)・不明(5) 常滑系甕Ⅱ類(5)・Ⅳ類(2)・不明(27)・常滑系甕三筋壺(1)、 須恵質播鉢(3) 図版222 - 143・144、 白磁皿Ⅸ類(1)・小壺?13後C~14前?(1) 青白磁梅瓶(2) 図版222 - 148……<SK 277・456 と同一個体> 青白磁梅瓶(1)……<SK 551・978 と同一個体> 青磁碗A類(1) C類(2) 図版222 - 154・H類(1) 図版222 - 159 ・F類(7) 図版 - 158・Ⅰ類(1)・不明(4) 青磁杯Ⅲ - 3(1) 図版222 - 160
中部北区	土師器皿・ⅠB2類(2) 図版221 - 106、内耳鍋(1)、
中部南区 の境付近	捏鉢(1)、常滑系甕(2) 青磁碗13C代~(1)
中部南区	常滑系甕(2)、青磁碗13C代~(1)
南部北部	土師器皿ⅠB1類(1) 図版221 - 108、捏鉢(3)、常滑系甕Ⅲ類(1)、青磁碗13C中(1)
地点不明	捏鉢(1)、山茶碗丸石3号窯式(1) 図版222 - 133、常滑系甕(3) 青磁碗A類(1) 図版222 - 153・不明(1)、白磁皿Ⅸ類(1)

付表9 鉄製品・鉄滓出土一覧表 (1)

※鉄滓は重量(g)、他は個体数で表わす。

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鏃	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	羽口
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
<古代>																			
SB 3	古代13	1?	1			1													
4	12																	不明1	
9	6																	鉄片1	
11	4		1																
14	1																	不明1	
15	13																	○	
18	5																	不明1	
19	4	1?				1												○	
23	12					2												不明1	
24	6~7																	○	
25	7				1														
28	14																	不明1	
30	5~6																	不明1	
31	6									1								不明1・苧引鉄1	
32	7																	○	
33	13																	不明3	
34	6		1		2														
36	1																	不明1	
39	5																	○	
42	7				2												240	腕形鉄滓1	
43	11								1									○	
45	6		1															鉄片1	
46	4		1															不明1	
49	8				1		1		1									苧引鉄1	
50	7		1															不明	
52	8		3			1		3										○	
54	6																	不明1	
60	5																	不明1	
64	2~3																	不明1	
72	14				1?		1								1			鉸具・燧鉄1・苧引鉄1	
74	14																	不明1	
75	7				2			1										鉄片1・不明1	
76	6		1												590			不明1・腕形鉄滓2・球状鉄滓2	
77	14				1														
78	7		1																
80	5	1																	
81	14	1?	1				2												
82	6									1									
83	8		1		1													環状1	
84	5		1																
86	5									1									
87	4																	不明1	



鉄製品・鉄滓出土一覧表 (2)

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鍬	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	羽口
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鋳造	素材	不明			
SB 88	古代14																		
90	3									1							不明1		
92	14	1															鏝1		
93	14									1						100	球状鉄滓6		
94	4		1							1						290	不明2・腕形鉄滓1・球状鉄滓2		
95	2	1	1																
97	6~7		2																
98	5		1						1								鉄?1		
100	6	1?	2																
102	14	1?									1								
105	5	1?									1								
109	6																不明1		
110	2																不明1		
111	3																不明1		
117	15																不明1		
118	6				1												不明1		
120	7																不明1		
124	5~6															30	鉄滓1		
127	7		1		1?														
128	4		1																
129	3																不明2		
134	5															150	鉄滓3		
137	5																不明1		
138	古代																楔1		
143	6									1									
145	1										1								
148	4				1?														
149	4							1											
150	8									2									
154	8					1												○	
157	5									1									
159	4																不明2		
161	4					1													
166	7																不明1		
174	8		2											1			不明2		
177	8															○			
178	8		1		1													○	
179	8															○			
181	2							1											
183	8							1	1										
185	5															85	鉄滓1		
186	8		1							1									
187	4									1						260	不明1・腕形鉄滓1		

鉄製品・鉄滓出土一覧表 (3)

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鏃	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	羽口
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SB 188	古代	8	1	4															
191		7	1															斧 1	
198		8	2		2				1	1						100		塊状 1・鉄滓 5・鋤鏃 1	
199		8	1						1										
202		6																不明 1	
217		7	1																
218		4		3															
220		5		1														塊状 1	
222		4		2														不明 1	
223		5				1													
224		3			1														
225		5		1				2											
227		4														435		不明 1・腕形鉄滓 2・球状鉄滓 2	
236		7		1	1														
ST 41	古代																	不明 1	
SK 50	14																	不明 1	
92	古代															○		不明 1	
338	〃																	不明 1	
387	〃															2270		腕形鉄滓 6	
418	8															1420		腕形鉄滓 3・球状鉄滓 47	
461	古代															1250		球状鉄滓 98	
575	〃			1															
<中世>																			
SB 252	中世	1		1	4											50		球状鉄滓 2	
253		1			1?											○			
254		1							1									筭引鉄 1・不明 2	
256		1			2?											350		球状鉄滓 10	
261		1																不明 1・鏃 1	
262		1																不明 2	
264		1			1														
266		1																不明 1	
267		1														2		鉸具 1・脛当 1	
277	1~2																	不明 1	
ST 88	1				1														
92	1				2													環状 1・不明 1	
100	1				5													不明 3	
104	1								2										
112	1				1													不明 1	
SK 731	中世																	鉄片 1	
740	〃				2														
773	〃																	鉄片 1	

鉄製品・鉄滓出土一覧表 (4)

遺構	時期	鎌	刀子		釘	鎌	金具	紡錘車	棒状				板状				鉄滓	その他・備考	羽口
			普通	大形					方形	円形	長方	不明	鍛造	鑄造	素材	不明			
SK 784	中世				1?														
854	"										2							○	
888	"									1								○	
901	"								1										
905	1								1										
916	中世				3														
922	1														90	球状鉄滓10		○	
923	1?	1?	1		2	1				1					270	鉄片1・不明6・球状鉄滓47		○	
925	中世															不明1			
928	"				1														
933	"									1									
999	1															不明1			
1002	1	1?																	
1014	中世				1?														
1217	1															不明1			
1253	中世				1?													○	
1276	"				2											不明2			
1325	"															不明1			
1326	"				2											不明1			
1334	"				2														
1393	1		1													不明1			
1486	2		1																
1503	中世															不明1			
1543	"															不明1			
1548	"															不明1			
1670	"															不明3			
1671	2				1											不明4			
1690	1				8											不明6			
1705	中世															不明1			
SD 52	1															不明1			
54	2?															不明1			
<近世>																			
ST 118	近世		1																
SL 3	"									1								古代からの混入?	
<遺構外出土一時期不明>																			
			1	2	1					5	2	1			2	610	鉸具1・塊状1・不明19・鉄滓29		
										出土地点・出土遺構不明の鉄滓						3010	62点		

付表 10 鉄製品・鉄滓時期別出土一覧表

器 種	古 代															不 明	中 世		不 明	近 世	不 明	合 計			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		1	2							
鋤・鍬								1																	1
鎌		1		1	2	1	1	1					1	3			2							1	14
刀 子	小 形		1		9	4	5	5	15					1	1		3					1	2	47	
	大 形																3	1					1	5	
斧								1																1	
錐																									
鑿																									
鉋																	1							1	
楔																1								1	
釘				1	1		3	7	5					2			29	1	15					64	
鉄					1																			1	
ピンセット																									
針																									
容 器																									
燧 鉄														1										1	
鍬					2	1			2				2	1			1							9	
脛 当																	1							1	
鉸 具														1			1						1	3	
馬 具																									
蹄 鉄																									
鐸														1										1	
金 具									1															1	
芋 引 鉄							1		1					1			1							4	
紡 錘 車			1		1	2			2					3										9	
棒 状	方 形				1	2	1	1	9			1					4		1				5	25	
	円 形				1	1	1		1					1			1							6	
	長 方	1				2	2		1					1					4	1		2	14		
	不 明																		1			1	2		
板 状	鍛 造																								
	鑄 造																								
	そ の 他					1			1					2			2						2	8	
環 状									1							1							2		
管 状																									
塊 状					1				1														1	3	
鉄 片						2	1	2								1		2						8	
その他・不明	2	1	4	9	3	6	5	3				1	3	2	1	4	26	5	13		19	108			
合 計	3	4	6	25	20	21	21	47				1	3	6	19	1	9	74	7	36	2	35	339		
鉄 滓				8	4	4	1	55						6		105	69					91	343		



付表 13 砥石出土一覧表

遺構	時期	石質	分類	面	形態	備考	図版
< 古 代 >							
SB 31	古代6	頁岩	Ⅱ	1	板状	ホルンフェルス	図版 216 - 7
SB 33	古代13	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 217 - 20
SB 52	古代8	砂岩	I	4	角柱状	断面正方形	図版 217 - 15
SB 52	古代8	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形・凹みあり	図版 217 - 16
SB 52	古代8	凝灰岩	Ⅱ	3	角柱状	断面正方形	図版 216 - 14
SB 52	古代8	凝灰岩	Ⅱ	1	-		-
SB 54	古代6	砂岩	I	3	-		-
SB 66	古代2	砂岩	I	2	不明		図版 216 - 4
SB 74	古代14	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 217 - 19
SB 78	古代7	安山岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 216 - 11
SB 78	古代7	砂岩	I	3	角柱状	断面長方形	図版 216 - 12
SB 81	古代14	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面長方形	図版 217 - 22
SB 112	古代4	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 216 - 6
SB 115	古代5	砂岩	I	1	-		-
SB 117	古代15	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面長方形	図版 217 - 21
SB 118	古代5	凝灰岩	Ⅱ	4	-		-
SB 126	古代4	-	I	1	-		-
SB 126	古代6	砂岩	I	4	-		-
SB 129	古代3	砂岩	I	3	不明		図版 216 - 9
SB 136	古代5	砂岩	I	4	-		-
SB 143	古代6	砂岩	I	3	不明		図版 216 - 8
SB 144	古代7	砂岩	I	4	角柱状	断面長方形	図版 216 - 13
SB 157	古代5	砂岩	I	5	-		-
SB 157	古代5	砂岩	I	3	-		-
SB 161	古代4	砂岩	I	2	-		-
SB 164	古代6	砂岩	I	4	不明		図版 216 - 10
SB 169	古代2	砂岩	I	3	不整形		図版 216 - 5
SB 178	古代8	砂岩	I	4	-		-
SB 179	古代8	砂岩	I	2	角柱状	断面長方形	図版 217 - 17
SB 179	古代8	砂岩	I	4	角柱状	断面長方形	図版 217 - 18
SB 213	古代6	凝灰岩	Ⅱ	4	-		-
I A 12	古代	砂岩	I	3	角柱状	断面長方形	図版 217 - 24
I A 12	古代	砂岩	I	3	不明		図版 217 - 28
I A 1	古代	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面長方形	図版 217 - 27
I H 区	古代	凝灰岩	Ⅱ	-	-		
I H 区	古代	砂岩	I	4	角柱状	断面正方形	図版 217 - 23
I H 区	古代	砂岩	I	2	角柱状	断面長方形	図版 217 - 26
検出	古代	砂岩	I	3	不明		図版 217 - 25
< 中 世 >							
SB 268	中世1	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 224 - 31
ST 112	中世1	凝灰岩	Ⅱ	2	角柱状	断面長方形	図版 224 - 32
SK 862	中世1	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 224 - 29
SK 902	中世1	凝灰岩	Ⅱ	4	角柱状	断面正方形	図版 224 - 30
SD 60	中世1	変成岩	I	2	板状		図版 224 - 35
SD 60	中世1	凝灰岩	Ⅲ	2	板状	ホルフェルス	図版 224 - 34
SD 60	中世1	凝灰岩	Ⅲ	2	板状	ホルフェルス	図版 224 - 33

付表 14 土製品出土一覧表

遺構名	時 期	種 類	最大 径	長さ 高さ	重量	図 版	遺構名	時 期	種 類	最大 径	長さ 高さ	重量	図 版	
SB 42	古代7	羽口			(18.7)		SK 862	中世1	羽口			(23.6)	図版 225 - 24	
SB 43	古代11	埴塙				図版 215 - 45	SK 874	中世	羽口	7.1		(134.5)	図版 225 - 25	
SB 52	古代8	羽口	8.2		(72.5)	図版 218 - 5	SK 874	中世	羽口	7.0		(275.0)	図版 225 - 26	
SB 61	古代3	土錘	2.6	4.4	28.6	図版 218 - 13	SK 874	中世	羽口	図化不能破片総重量 84 g				
SB 76	古代6	羽口			(11.2)		SK 874	中世	粘土塊	植物繊維が混入する				
SB 87	古代4	粘土塊	植物繊維が混入する					SK 876	中世1?	羽口			( 5.5)	
SB 94	古代4	紡錘車	4.4	3.8	(48.2)	図版 218 - 18	SK 888	中世1?	羽口			(23.9)		
SB 97	古代6~7	瓦塔				第128図1	SK 922	中世1?	羽口			(49.0)	図版 225 - 31	
SB 114	古代5	羽口	7.6		(42.4)	図版 218 - 4	SK 923	中世1?	羽口			(29.1)	図版 225 - 34	
SB 146	古代4~5	紡錘車	5.7	3.6	136.3	図版 218 - 21	SK 923	中世1?	羽口	7.4		(244.0)	図版 225 - 27	
SB 154	古代8	羽口			(17.4)		SK 923	中世1?	羽口			(33.6)	図版 225 - 28	
SB 160	古代4	紡錘車	8.5		(97.5)	図版 218 - 17	SK 923	中世1?	羽口			(18.9)	図版 225 - 29	
SB 161	古代4	紡錘車	8.6		(95.2)	図版 218 - 16	SK 923	中世1?	羽口			(34.3)	図版 225 - 30	
SB 178	古代8	羽口			(15.0)		SK 923	中世1?	羽口			(26.1)	図版 225 - 33	
SB 199	古代8	羽口			(10.8)		SK 923	中世1?	羽口	図化不能破片総重量 371.0 g				
SB 212	古代7	羽口?			(69.5)		SK 929	中世1?	粘土塊	植物繊維が混入する				
SB 225	古代5	紡錘車	6.8	2.7	(131.9)	図版 218 - 20	SK 1002	中世1	羽口			(11.3)	図版 218 - 32	
SD 10	古 代	紡錘車	6.5	3.5	(36.4)	図版 218 - 19	I 区	不明	土錘	1.2	4.7	8.3	図版 218 - 15	
SK 419	古代8	羽口	8.6		(39.8)	図版 218 - 6	I G区	古代?	羽口	6.8		(15.0)	図版 218 - 11	
SK 419	古代8	羽口	図化不能 破片総重量 1043.4g					II 区	不明	羽口			(28.9)	
SB 253	中世1	羽口			(21.1)		II 区	不明	羽口			(23.3)	図版 218 - 9	
SB 255	中世1	羽口			(24.3)	図版 225 - 22	II 区	古代?	土錘	2.8	4.5	(36.7)	図版 218 - 14	
ST 104	中世1	土錘	2.1	3.4	12.9	図版 225 - 35	II 区	古代	紡錘車					
ST 104	中世1	土錘	2.0	3.0	8.9	図版 225 - 36	II D区	不明	羽口			(20.2)		
ST 104	中世1	土錘	1.8	(3.5)	( 7.0)	図版 225 - 37	II E区	古代	瓦塔				第128図2	
SD 52	中世2?	泥塔	SB109からの混入?			第128図3	II H区	不明	羽口	5.5	10.1	(309.0)	図版 218 - 7	
SD 60	中世1	土錘	2.3	3.5	18.6	図版 225 - 38	II H区	不明	羽口	7.5		(37.3)	図版 218 - 10	
SD 60	中世1	土錘	2.0	3.2	12.8	図版 225 - 39	II S・T区	不明	羽口			(43.9)		
SD 60	中世1	土錘	2.1	3.2	14.1	図版 225 - 40	II V区	不明	羽口			(13.1)	図版 218 - 12	
SK 854	中 世	羽口			(12.0)	図版 225 - 23	( ) 内の数値は破片資料による現存分量							

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 8

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 8

—松本市内 その5—

北栗遺跡

本文編

発行 平成2年3月31日発行

発行者 日本道路公団名古屋建設局

長野県教育委員会

(財)長野県埋蔵文化財センター

印刷 中信凸版印刷株式会社



